新しき世界で～日本の針路

亡霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新しき世界で～日本の針路

【Ｎコード】
Ｎ７９９２Ｌ

【作者名】
亡霊

【あらすじ】
異世界に日本が転移してから４ヶ月。
様々な困難の中存続の道を求め進む日本に新たな困難がその道を阻む。
その時、日本がとる選択とは？

「新しき世界へ」の続編です。

登場人物（前書き）

第１６話までの登場人物の紹介です。
抜けている人物が居ると思われますが、気付き次第追記していきたいと思います。

また、簡単な紹介なのでその辺りはご了承下さい。

登場人物

日本

鈴木（すずき）　友平（ともひら）
日本国内閣総理大臣として転移後の日本を牽引する。
必要とあらば強引な手法を躊躇いなくとる事から日本国内での反対勢力から「独裁者」と呼ばれる。

阿部（あべ）　忠勝（ただかつ）
日本国経済産業大臣。
鈴木の指示による転移に備えてのエネルギー資源確保、並びに転移後の資源配分などで政権を支える縁の下の力持ち。
あまり表に出てこないが彼の奮闘なくして日本は成り立たないほど。

伊達（だて）　正行（まさゆき）
日本国内閣官房長官であり、鈴木とは長い親交がある。
政界におけるタカ派筆頭とまでいわれるだけあり、かなり過激な言動をするものの、日本に不利益を与える様な真似はしない。
日本の転移に伴う鈴木の苦労と覚悟に自らも共に背負う腹積もりのある古風な人柄を持つ。

橋波（はしば）　秀昭（ひであき）
元日本国外務大臣として鈴木の内閣に名を連ねていたが、非常時における能力不足から外務大臣を更迭された。
平時であるなら事なかれ主義もあり波風立てない穏便な外交が期待できたが、転移と言う状況下では逆に足かせになってしまった。

加藤（かとう）　友道（ともみち）

橋波の後任として日本国外務大臣に就任したばかり。
特別有能ではないが、自らの役割を理解し行動する。

伊庭　亮治（いば　りょうじ）
日本国防衛大臣として鈴木の補佐を努める。
冷静な人物で自衛隊の行動に制約をかけない様に動くことから国内では伊達の同類に見られている。
軍事的衝突が多く起こり易い異世界においては鈴木の強力な軍事的頭脳と言える。

北野　武（きたの　たける）
日本国外務省の職員。
一応大使、総領事を経験した外交畑の猛者。
外交だけでなく内政にも能力を惜しみなく発揮するが、日本の利益の為にはどんな事でも平気でやる冷徹な一面も併せ持つ。
ホードラー、アルトリアの統括行政長官として東奔西走しているが、本人としては後任を育て上げる事が地味な悩みになっている。

高橋　政信（たかはし　まさのぶ）
日本国陸上自衛隊調査派遣隊第1陣としてアルトリアに来たが、戦後日本の自衛隊として異世界初の実戦を行うことになった。
その後、事ある毎に厄介ごとを巻かされている故に、自衛隊内では最も実戦経験豊富な人材となった。

井上　康二（いのうえ　やすし）
日本国陸上自衛隊所属で高橋の同期。
お調子者ではあるが高橋と共に初の実戦、そして各地で多数の実戦を重ねる。

伊藤　重信（いとう　しげのぶ）

日本国陸上自衛隊所属で元レノン方面隊指揮官。
ベサリウス領における難民対策としての活動をしていたものの、部下に多数の死傷者を出したことから更迭された。
もっとも、日本が異世界に転移してからは多数の実績を挙げていることから、復帰の声が根強い。

間宮（まみや）　勇次（ゆうじ）
伊藤の後任として派遣された現レノン方面隊指揮官。
基本的に後方支援を仕事にしてきたが、荒事にも対応できる現場向きの人物。

異世界（日本協力側）

アイン
各地を渡り歩く冒険者だったが、ちょっとした事から日本の協力者となった青年。
剣の腕前は相当なもの。
現在はホードラー地区にて治安警備隊で働いている。

シャイン
アインの幼馴染で魔術師。
深い知識でアインを引っ張っていたが、アイン共々日本の協力者となる。
現在はアルトリアの避難民の子供に勉強を教えている。

ミューリ
アイン、シャインの仲間で情報収集を役割にもつ。

異世界では最大宗教のファマティー教を信仰してないことから異端者として追われた村出身。
その村からの避難民を受け入れてくれた日本に積極的に強力している。
高橋たちと共に行動する機会が多い。

ラーク・カドミック
元ホードラー王国の元子爵。
日本との戦争では先陣を切った将であったが、日本の強力な戦力を前に敗退。続く本体と共に総攻撃にも参加したが結局破れ捕虜になった。
早い段階で日本と協力関係を築く必要性に気付いたものの、王国滅亡と言う憂き目に会う。
それでも日本と敵対は愚かとして日本の協力者になる。

カトレーア・フィン・ホードラー
元ホードラー王国の王女だが、ファマティー教の関係から王位継承権は持たない。
ファマティー教の信者ではあるが過激な異端者弾圧は好んで居なかった。
王国滅亡時、民衆を捨てて避難出来ずにレノンにて日本に全面降伏し、日本の監督下におかれる。
王家の血を引く重要人物だが、日本の法ではそれを理由に区別できない為、一般人として比較的自由で気楽な生活を送れている。
その立場から北野は彼女を無視できない。

アーヴァイン
アルトリアの大森林に住まうエルフ第7氏族の代表。
行き違いから日本と戦争寸前になるが、北野や高橋との話からこれを回避するのに一役買った。

今ではエルフの国を立ち上げる大役を担っている。
日本の良き理解者であり協力者。

異世界（反日本）

ロシュアン
大陸最大宗教であるファマティー教の枢機卿で教団のナンバー2。
謀略と策略を張り巡らし教皇を凌ぐ権力を持つ。
日本と異端の存在がファマティー教の権威を失墜させかねないと考え、日本を打ち倒すための活動を始める。
表向きは慈愛と理解ある聖職者の仮面をかぶるが、内面は権益と異端に対する蔑視が強い。

カーン・クラリアン
ファマティー教の高司祭で王国滅亡後のホードラーにおけるファマティー教最高権力者として暗躍する。
しかし、武装蜂起に失敗し日本に捕らわれる。
現在は裁判を待つ身。

ミラ・カーマイン
ファマティー教司祭でカーンの部下。
表向きは一般の司祭と変わらないが、堕落した教団と、教団に都合の良い聖書解釈に嫌気を持つ。
その事から本来あるべき旧聖書の教えを研究するファマティー教に取って異端者たる人物。
日本の多種多様な宗教観に宗教のあるべき道は何なのか？と思考する。
現在は日本に捕らわれ裁判を待つ身。

その他

アウル・ベサリウス
元ホードラー王国の男爵でベサリウス領の領主。
勇猛にして緻密な知略を持つ文武両道の武人。
王国滅亡後もホードラー王国男爵を名乗り義を立てるが、王国滅亡による王国西方の群雄割拠状態により今後に頭を悩ましている。

ザハン・バジル
元ホードラー王国の子爵で王国滅亡後は独立しバジル王国を建国した野心家。
自領の南にあるベサリウス領侵攻を目論む。

ガリウス・ザッハトール
ザハンの配下でありバジル王国の将軍。
ベサリウス領と日本ホードラー地区レノン市の境にある難民キャンプを襲撃し自衛隊に多数の死傷者を出した張本人。
しかし、伊藤の逆襲にあい無残な最期を迎える。

第0話「序章」（前書き）

やってきました新章。

日本の止まらない歩みは世界に如何なる変化を起こすのか？
日本に立ちふさがる新たな困難とは？

先ずは序章です。
お楽しみください。

第0話「序章」

西暦２０１X年9月１８日

日本が異世界に転移してから4ヶ月が経っていた。
当初の国内の混乱も落ち着き、アルトリア、ホードラー両地区も少しずつだが開発が進み出している。
旧王国のホードラー地区は王国滅亡後、日本が納める中央、東部、北部と西方諸侯が相次いで独立した西方国家群、そして南方の南方貴族連合に別れたままになっていた。
また、アルトリア地域では大森林地帯を領域にエルフが大森林連邦と言う名前で正式に国家として宣言、日本と国交樹立交渉を開始していた。
とはいえ、国家を名乗ったものの主だった体裁だけのものであり実情はなんら今までと変わっていない。
せいぜい大森林との国境（便宜上の設定でしかない）を跨ぐ形で交流の為の都市建設が行われている程度だ。
これには先日、日本で可決した「大陸渡航制限法」により渡航を許可された人々が関わり道の整備や住居、その他インフラ整備を行っている。
また、アルトリア西方の山に飲料水確保と発電を兼ねたダムの建設が始まっていた。

アルトリアの治安を守る日本国自衛隊アルトリア基地は新たに日本国自衛隊ホードラー基地を城塞都市レノンに建設、ホードラー西方に睨みを効かすと同時にホードラー地域の治安維持を行っていた。
その代わりアルトリア基地に駐屯する自衛隊は規模を縮小し、大規模な空港設備、港湾設備は一部を除き民間にそのまま譲渡されてい

る。
これにより新たに渡航してくる日本人や物資の流入が広く行われ出していた。

そして、日本が最大の懸念としていた石油も、比較的深度が浅いところから採掘出来たため、まだ量は極めて少ないが本格的にパイプラインを通ってアルトリアへと運び込まれ出した。
とは言え、パイプラインを使うまでもない量でしかないので本当に微々たるものだ。
これではまだ燃料不足は続くだろう。
そのためアルトリアでは馬を使った移動手段が広まっているぐらいだ。

そう言った状況の変化が多数あったが、実のところ大きな変化もあった。

日本にいた在日外国人の一部勢力が日本からの移住を開始したのだ。
中国、韓国、北朝鮮系を中心にホードラー東部の海岸付近に移住した彼等は日本政府の支援の下に開発を開始しだしていた。
これは、夏の総選挙で圧勝した内閣総理大臣、鈴木友平（すずきともひら）の「日本に住みたくないなら土地を用意する」の発言の下に行われた移住計画の結果だ。
元々権利を主張するだけで何ら日本に寄与しようとしない外国人勢力を厄介払いする目的だったが、多分上手く行かないと言った当初の目論見を外れ意外と多くの人々が集まった。
とは言え燃料の問題もあり大規模な移住を一度に行えはしない。
その為、第一陣３０００名、第ニ陣５０００名と少しずつ増やす形で行われている。
ホードラー東部の海岸付近は人口が極めて少なく、移住しても何ら

軋轢が無かったからだ。
だが、弊害もある。
移住地域は基本的に自治区となるのを良いことに、渡航制限法を迂回する経路になっていたのだ。
一応山岳地帯がわずかばかりだがあったので、移住地域からホードラー東部の他の地域に入り込み道は限られるが、一部マスコミなどが移住地域に入り込みホードラーに侵入しようとしたりと問題が起きていた。

その話を少し痩せた鈴木が聞かされた時、鈴木はこう言った。
「移住地域に行けるのは移住目的の人々だけだ。マスコミが行くならそこに移住しろ」
この苛烈な発言は物議を醸し出したが、マスコミの強引かつ、法を無視した行為に非難が集中したのは当然だったかもしれない。
ちなみに移住地域は元の名前をイースタと言っていたが、特定アジア出身者が多かった事もあり移住者の中では東果（とうは）（東の果て）と言われている。

はっきり言えば将来的な独立を夢見てるかも知れないが、鈴木たちからすれば勝手にどうぞ、と言った具合だ。
ただし、日本の足を引っ張ったり邪魔をする様なら容赦する気はない。

そんな状況の中ではあったが、日本は着実に地盤を固め出していた。

しかし、同じ頃、その日本に不法入国するファマティー教宣教師が問題になりだす。
正式に国交もない国からの流入は基本的に門前払い（西方や南方ホードラーの難民は別）だが、何せ相手は宗教家だ。

何だかんだと理屈をつけて来るのには参っていた。

――日本　内閣総理大臣官邸

この日、鈴木は新しく就任したばかりの外務大臣である加藤友道（かとうともみち）の訪問を受けていた。

「・・・つまり、ファマティー教から正式に会談の要請があったと？」

予想外の事態に鈴木は呆気にとられていた。

まさかファマティー教が日本政府に正式な会談を要請してくるとは思っていなかったのだ。

「恐らく、此方の宗教の自由を逆手に取っての布教目的でしょう」

加藤が大方そんなものだ。と言う分析の元に告げる。

「にしたって・・・なぁ？」

官房長官の伊達正行（だてまさゆき）も正直困惑していた。

散々ホードラーでテロに走ったファマティー教と何を会談するのか？

むしろテロに走ったファマティー教を糾弾する物にしかなり得ない。

ましてや、ファマティー教は異教を認めていない。

そんな宗教はいくら宗教の自由があっても認められないのが本音だ。

「ようやく安定したのにテロの目をいくら布教目的としたって入れられんよ」

伊達の言葉に加藤も同意見だった。

そもそも、手に入れたファマティー教の教典、つまり聖書にはっきりと「異教徒や異端者を神の名の下に罰せよ」と書かれているのだ。

これを彼等がどうにかしない限り入国は不可能と言えた。

しかも最近では日本で布教しても中々広まらない為にキリスト教やイスラム教等がホードラーで布教している。

しかもファマティー教と違い比較的おおらか（イスラム教はそうとも言えないが）な宗教がホードラーやアルトリアに入っているため、

民衆もそちらに走る傾向がある。
今更来ても布教なんぞ無駄になりかねない。
「彼等は現実が見えて無いのかも知れませよ？」
ファマティー教の会談要請に防衛大臣の伊庭亮治（いばりょうじ）が自分の考えを言う。
「現実が見えてない、とは？」
伊庭の発言に興味を持った鈴木は、伊原の考えを詳しく聞きたくなった。
「いえ、言葉通りです。彼等ファマティー教は自分たちの教えを絶対と考え、民衆に説けば直ぐにファマティー教に鞍替えすると思っているのでしょう。現実はファマティー教による王族の統治より今の生活が保証されてるなら気にしないのにね」
そうなのだ。
実際、ファマティー教の下に王族が統治していた時はファマティー教に不満があっても従う他は無かった。
しかし、今では色々な宗教が入り込み、ファマティー教でなくても自分たちの意思で信じる神を選べるのだ。
しかもそれらは異教、異端と言う理由で人を罰しない。
中には日本の八百万神（やおろずのかみ）の内の一神だ。と言い出す人さえいる。
「つまり、ファマティー教の人はファマティー教を民衆が求めていると勘違いしてる事になるな」
思わず笑い出してしまいたくなる。
実際、伊達は豪快に笑い出していた。
「丁度いい、現実を見てもらえば良いじゃないか」
笑いながら伊達が主張したが鈴木と加藤、伊庭の三人は冗談じゃない。と言う表情だ。
「それでまたテロをやられても迷惑ですよ」
とは伊庭だ。
現地人による治安警備隊がようやく軌道に乗りだし、日本の様な警察機構が形を整えて来たのにまたテロなんかされては堪らない。

「そりゃそうだな。だが会談を撥ね付ける訳には行かんから、一応やらねばならんな」
伊達がそう言ったが加藤が苦虫を噛み潰した表情を見せた。
どうやらそれで済まない話らしい。
「・・・会談場所がファマティー教の総本山で総理を名指しでも？」
この一言に伊達の表情は凍り付いた。
冗談ではない。
わざわざそんな所に行くのは自殺行為に他ならない。
「・・・一体なんの冗談だ？」
伊庭は苛立ちを隠せずに吐き捨てた。
「恐らく、日本の統治者がファマティー教を直々に訪ねて膝を屈した。と言う体裁をとりたいのでしょう」
宗教家は面子を大事にしますから。と加藤が繋げる。
そこにドンッ！と言う机を叩く鈍い音が響いた。
「ふざけるな！鈴木を死地に送れと言うのか！」
怒りの為に顔が真っ赤に染まった伊達が怒鳴り散らした。
「伊達、落ち着け。少なくとも私は行く気はない。会談したければシバリアに来いと伝えるつもりだ」
冷静に自身の立場を理解する鈴木はそう言って伊達を宥めるが、伊達は腸（はらわた）が煮え繰り返る思いだった。
「一応、ホードラーの自衛隊は日本から新たに派遣して増強してますから、不埒な真似をしても鎮圧可能です」
伊庭はそう言って伊達に落ち着く様に告げる。
「外務省としても総理に出席されては困りますからね。ここは一つ、シバリアでしかも次官クラスに行って頂きますよ」
加藤の頭の中に北野武（きたのたける）が思い浮かぶ。
彼奴なら上手くやるだろう。
「・・・わかった。たしかに冷静さを失っていたな」
伊達はそう言うと冷めた茶を一気に飲み干した。
「さて、こちらの返答に向こうはどうでるかな？」

鈴木は見ず知らずのファマティー教の人間に挑戦する者の様な心境になっていた。

私はいつでも鬼にでも悪魔にでもなるぞ？

第０話「序章」（後書き）

前作の続きの話になり、ちょっと時間が飛んでましたが如何だったでしょうか？
ご意見ご感想、いつでもお待ちしています。

第1話「それぞれの現在」（前書き）

と言う訳で新章と言うか第2部の始まりですw

とは家大きな変更点もないのでまったり進行ですけどねw

え？更新速度がまったりじゃない？

気のせいですw

第1話「それぞれの現在」

――アルトリア地区　アリスト村

畑へ水を供給する水路が本格的に活動を開始すると同時に、下水道を施設された事はこの村の状態を一変させていた。
いまやプレハブ仮設住居は木材を使った立派な住居になっている。
初期の頃に比べたら格段の進歩だろう。
また、村人たちは日本から派遣されてきた技師などから教育を受け、様々な耕作機械を使える様にまでなっていた。
とは言え、流石に燃料の問題は今なおあるため、あくまでも人力で動かす程度のものではある。
だが、今までの標準的なやり方に比べたら雲泥の差だ。
収穫はまだまだ先だが、収穫時が楽しみなぐらい実りがある。
「日本の技術は凄いなぁ」
これが村人の感想だ。
ここら辺りの気候は比較的温暖であるため作物の実りも良い。
代わりに降雨量が少ないのだが、まだ名前も着いてない西の大山脈から流れてくる川や地下水が豊富な為、水に悩む事はない。
おかげで村は明るい表情で一杯だ。
ただし、一部ではそうでもない。
「暇だ」
アインが原っぱに寝そべり呟いた。
始めは子供たちの相手に駆り出されたが、子供たちが義務教育と言う活動に入った後はやることがなくなっていた。
シャインは子供たちに勉強を教えているし、ミューリはアルトリア基地に行ったり畑仕事を手伝っている。
「またどっか行くかなぁ」
昔から落ち着きがない性分でもあるが、各地を転々と旅をしてきた

以前が懐かしく思えてきた。
「どっか、て何処だよ?」
声のした方を寝そべったまま見るとアルトリア基地の施設科でアリスト村に度々来ていた波多野拓也(はたのたくや)がいた。
波多野は馬が会うのかちょくちょくアインとつるんでいた。
しかもアインが剣士と聞いて波多野は一手お相手を、と頼んで勝負した間柄だ。
その時の勝負を観戦していた人たちから「人間じゃない」呼ばわりされた事は記憶に新しい。
「はたさんか、いや、俺ここじゃする事なくてさ」
アインの呟きに波多野が横に座りながら答える。
「アインは何がしたいんだ?」
唐突に投げ掛けられた問いにアインは答えられなかった。
ただ漠然と旅をしてきたが、そう言えば目的らしい目的がなかった。
「・・・分かんね。考えた事もないや」
日々生きるのに必死だったとも言えるが、何も考えてなかった自分にアインは愕然としていた。
「目標を持てばやることは自然に見付かるぞ?」
たった三年だけの差だが、波多野の言葉はアインに響く。
だが、何を目標にすべきかがわからない。
「もし、良かったらアルトリア基地に来いよ。お前なら歓迎するぜ?」
波多野はそう言って一枚の紙を渡した。
そこに書いてある文字は読めないが、紹介状か何かだと思った。
「漢(おとこ)として生まれたんだから大望ぐらい持った方がいい」
そう言って波多野はその場を離れた。
まだ用水路の水量調節を村人に教えねばならないからだ。
アインは波多野の後ろ姿を見送ると上半身を起こし、波多野から受け取った紙を眺めた。

アインには読めなかったが、そこには日本語で「アストリア（ホードラー含む）防衛軍創設説明会」と書かれていた。

北野はアルトリアとホードラーを行ったり来たりの忙しい日々を送っていた。

「やれやれ、仕事を任せて良い人材育成を進めないと・・・私が潰れそうだ」

最近始めたばかりのアルトリア、ホードラー市民の政治参加の為の教育が早く実を結ぶ事を本気で願っていた。

「彼等が育てば、いずれホードラーに関しては自治区に出来ますからね」

北野の秘書官がそう言ってコーヒーを差し出す。

普段なら秘書官なんぞ不要と思っていたが、流石に全部一人で管理しきれない。

仕方なく、今後北野の代わりになれる人材育成の一貫で秘書官を使うことにした。

「自治区になる前に私が倒れるよ」

まだ軽口を叩くぐらいの余裕はあるが、流石に疲労感があり正直厳しいとも思う。

しかし、本土の外務省にいる人材の多くはチャイナスクール出で日本の国益を理解出来ない阿呆の集まりだ。

本土からの派遣組には期待出来ないのが北野の負担になっている。

とは言え、まさかまともに使える人材を引っ張ったら今度は日本本土での人材が不足する。

これでは意味がない。

「取り敢えず形になった者を中心に現場で教育させるべきですかね」

北野はそう言いながらデスク上の書類の山を見てため息をついた。

――ホードラー地区レノン方面隊基地

昇進して正式にアルトリア基地司令となった森の推薦でレノン方面隊の総指揮を任された伊藤重信（いとうしげのぶ）は新しく作られたばかりのレノン方面基地からホードラー西方に睨みを効かせていた。

とは言った物の、西方諸国（元ホードラー西方諸侯）は縄張り争いに忙しくその地域だけで群雄割拠していた。

毎日の様に起こる争いから西方諸国の住人が難民となりレノンに押し寄せてくる。

伊藤はそれら難民を管理する仕事も請け負っていた。

何せ数百、数千と日増しに増えていくのだ。

中に工作員が紛れ込んで無いとも言えない。

その為、心労の重なる日々を送っていた。

「難民たちが川を渡ろうとしても渡らせるな。無理矢理通ろうとするなら威嚇射撃を行い、それでも駄目なら直接射撃を行ってもいい」

かなり過激な事を言っているのは自覚しているが、万が一にも安定してきたホードラーに破壊工作員などを侵入させる訳には行かない。

結果、川の対岸には難民キャンプが出来上がっていた。

既に難民キャンプは1万に届こうとしている。

正直このままでは遠からずに暴動になりかねない危うさがある。

「アルトリア管理官の北野さんに報告を出しとけよ」

また北野の仕事が増えるがこれも致し方ない。

一自衛官の伊藤に出来るのは難民の一斉渡河を防ぐのと難民の暴動などを鎮圧するしかないのだ。

「仮設浮橋は何時でも撤去出来る様にします」

部下の言葉に今はそれしかない。と伊藤は思う。

「取り敢えず北野さんの判断が降るまでは現状を維持する。その為に取れるあらゆる行動を許可する」

伊藤は苦虫を噛み潰した様な表情で命令した。

ここにも、日本の抱える問題が今まさに起きていたのだ。

ホードラー地区の治安を守る治安警備隊（ホードラーの警察組織）はシバリアに本部を置き、ホードラー各地に展開していた。
ホードラーは幾つかに別れているので北部は人口1万程度の街でアルトリアに一番近い都市テノリスに、東部は人口があまり多くないが海岸付近に新しく移住者の街が作られたばかりなので、境界を越えて来ない様に東部最大の都市サンバールに東部警備隊をそれぞれ配置している。
これにより全ての地域をカバーする見通しになっている。
ただし現在はまだ治安警備隊の総数が少ないため、あまり広範囲に展開しても何も出来ない。
そこで日本の自衛隊や日本の警察から派遣したホードラー警備隊が一時的に足りない分を補っている。
その治安警備隊は主要部を日本人の警察組織から派遣された人員が占めていたが、最高指揮官にラーク・カドミック元子爵がいた。
ラークは開戦間もない頃から日本との戦争は間違っている事に気付き、積極的に日本を学ぼうとしてきた。
それ故にかつての栄光を忘れられないものたちからは「売国奴」やら「権力に尻尾を振る犬」などと言われて来たが、彼自身は自分の選択が間違っていないと思っていた。
現に王国は滅び、だが民衆の生活は良くなっていた。
ラーク自身は所領を取り上げられたが、日頃から良く領地を治めていたために領民の評判もよかった故に金銭的財産は認められていた。
その上、元から軍にいたことから地理に明るく治安維持に才能を見いだされ現在の地位につけたのだ。
それ故に妬みと嫉妬を買ったが、市民からは「何処の人かは関係なく能力により地位を築ける」として尊敬の的にもなっている。
だが、そんなラークも間違いを犯した事がある。

治安警備隊の装備が貧弱過ぎるのが問題だと思ったのだ。
銃が無いのは良いが鎧もなく、武器も剣や槍ではなく長い棒（日本のさすまた）と警棒と呼ばれる短く細い棍棒だけなのだ。
これでは万が一に対処出来ない。
日本は「現代の刀狩り」と言われるホードラーの市民の武装を認めず、そう言った武器は即座に提出しなければ銃刀法という新しい法律に違反し罰せられるとした。
がだ、やはり隠し持つ市民や犯罪組織はあるわけで、それらを相手にするには無理がある。と思っていた。
しかし、技術指導に来ていた安藤泰久（あんどうやすひさ）警視正が簡単に武装した犯罪者を素手で捕らえたのを見た。
「装備云々ではない。己を捨てて公の為に尽くす気構え無くて警察官（本当なら治安警備隊なのだが、警察と言ってしまっていた）が務まるか！」
と叱責された。
その時から装備の質ではなく、職務に当たる者の心構えが問題だと感じていた。
とは言え、安藤もこの話をされると「いや、せめて拳銃でもあれば良いが、実際渡せないなら剣や槍もありじゃないかな？」と言ったのだが、この話は現地では広まってない。
むしろ公僕とは己を捨てて公に尽くす、と言う概念だけが伝わったのだ。
だが、間違いではない。
公に尽くす信念無くして公僕たりえない。
そして志願して入った治安警備隊は公僕なのだ。
当然、この信念無い甘い輩は尽く辞めていった。
下手な軍より厳しい訓練は信念無い、もしくは意志の弱いものを駆逐し強固な組織を作り上げていた。
それはさておき、ラークは自身の執務室で新人の教育計画や今後の

治安警備隊の役割を議論していた。
「・・・である以上、東部移民地域の警備は自衛隊に任せ、我々は治安そのもののみに関わるべきです」
ラークの元配下で治安警備隊の幹部に抜擢された魔術師、アルバート・サムスビーンが発言する。
周りにはアルバートとラーク以外は日本から派遣された警察幹部ばかりだが、皆ラークの部下に当たる。
「・・・ふむ、治安に専念できれば効率は上がりますな」
日本の警察ＯＢである神野信也（かみのしんや）がアルバートの意見に賛同する。
彼は警察ＯＢと言うが、その影響力はかなり高い。
何せ内閣安全保障室長にあった立場だからだ。
しかし、彼自身はホードラー人（地域毎にこう言う言い方をする）の自主性を尊重するだけで異論、反論があってもそれを言わないのだ。
だが、本当に間違ってない限りは基本的に賛同するだけだが、その影響力故に他の意見を封じる役割を演じている。
だからラークは神野がそう言ったと言う事は少なくともアルバートの提案は的を得て無くとも外れてもいない、と判断した。
ラーク自身も現在の治安警備隊の力は理解している。
ならば尚更、反対する理由もなかった。

第1話「それぞれの現在」（後書き）

追加完了。

取りあえず前作で出た人の一部の現在を書いてみました。

まだ出てきてない人もたくさんいますが、それは次話以降になりますね。

では今回はここまでです。

次回でお会いしましょう。

第2話「シバリア市」（前書き）

今回はシバリアの説明が多い話です。
ここらでちょっとやっておくべきかな?と思いましたので・・・。

その分、ストーリーがやや短いかとw

では第2話「シバリア市」お楽しみください。

第2話「シバリア市」

――ホードラー地区シバリア市

ホードラー、アルトリアの行政府があるシバリアは旧王国よりも活気に溢れていた。
元々王城を中心に四方に大通りが町の外まで繋がっている為に商業的発展性が確保されていたからだ。
そのため、今までは大商人や王家や貴族の庇護を受けた商人だけでなく、一般の人々も商売を始める様になってからは商業都市のごとき姿へと変わっていた。
反面、王城は見てくれだけで守りが極めて弱い。
かつての王国歴代の王が権勢を誇る目的でこうした都市開発を行ったからだ。
それが今では商業的価値を高めたのは皮肉だろう。

そしてシバリアに残る旧迎賓館はカトレーアの住居となっている。
その住居も半場身寄りのない子供たちが多く住んでおり孤児院みたいなものだ。
だが、そのかいあってか元王族でありながら元からの人気もありその身柄は保障されていた。
そのカトレーアの邸宅に元宮廷司祭やどうやって入国したのかファマティー教の宣教師等が日本への取り次ぎを仲介させようと良く訪ねて（ほとんど押し掛けだが）きていた。
先程も宣教師が来ていたが、カトレーアは今は王族でも何でもないただの一般人としてお帰り願ったばかりだ。
正直、その影響力はまだまだある身だが身の程を弁えているカトレーアは仲介をする気は無かった。
そもそも、カトレーアはファマティー教徒であったが、それは王族

はそうあるべき、と言う風習に従っていただけで基本的にたしなみ程度でしかない。
しかも元々、異教徒や異端者だからと言って迫害するのにも抵抗があった彼女は根本的にファマティー教に疑問があった。
だから幾ら司祭や宣教師が来ても何もしようとは思わない。
ただ、このままでは要らぬ誤解を日本に持たれないかが心配だ。
そのため、わざわざ北野に手紙を送って相談を持ちかけていた。
「なるほど、どうも貴女を御輿に担ぎたいみたいですね」
シバリア行政府に来ていた北野はカトレーアからの手紙を受け取り、時間を作って来ていた。
北野の前に座るカトレーアは憂いをその表情に浮かべていた。
「私といたしましても、今さら彼等の要求通りに出来る立場にありません。ですが彼等は王権の復興が出来ると口々に言うのです」
下手すれば自身が危うくなるかも知れない発言だが、北野ならそうは見ないとカトレーアは信じていた。
「ふむ、かと言って会わない訳には行かないのですね？」
北野の言葉にカトレーアは頷いた。
これでカトレーアが会わない、として面会すら拒否してはそれこそ民衆に「カトレーア元王女は日本により幽閉されている」と噂されかねない。
そうすれば民衆に良くない噂が広がり日本の統治に疑問を持つだろう。
日本としても不味い事態な上、その日本の庇護を受けているカトレーアにしても不味い事態になる。
「民衆が今の生活に満足してるなら今更滅んだ物を再び甦らせる必要も無いでしょうに・・・」
カトレーアの偽らざる言葉に警護のものたちも頷く。
彼等にしても平和で重荷から解き放たれたカトレーアに義務や責任を再び背負わせるのは本意ではない。
「まあ、我々としましてもそこはご安心くださって大丈夫です。カ

トレーアさんが王家の復興をする気がないのは理解していますから」
そう言って北野は笑顔を向けたものの、内心はマグマの様に煮えたぎっていた。

（静かに暮らそうとする人までも利用するか・・・）

これを見過ごす訳には行かないだろう。
見過ごせば庇護している日本が責任を放棄していることになる。
更に密入国しているファマティー教宣教師やテロ容疑で指名手配されている元宮廷司祭などが一般人を担ぎ出そうとするのは許しがたかった。
北野は元王女と言う立場の彼女が日本との仲介をすれば、王族を無視出来ない日本、そして王家の健在を示す事になる。
それはまたこのシバリアが不安定になる要素を孕んでいた。
「分かりました。こちらで何とかしてみましょう。カトレーアさんはどうか安心して今の生活を続けてください」
カトレーアを安心させると同時にその心労を労ると、ファマティー教に対する本格的な捜査が必要だと感じていた。
「ありがとうございます北野さん。私たちに出来る事ならご協力いたします」
ありがたい申し出だ。
悪辣ではあるがカトレーアの言葉に北野は囮役を思い付いた。
はっきり言って潜伏しているファマティー教司祭などを探すのは今の段階では難しい。
だからこんな手段しか取れない。
「その時には協力願います」
一礼して立ち上がると、まだ仕事がありますので、と言い残し北野はカトレーアの邸宅を後にした。

シバリアでは王国滅亡と同時に他国への交易路が途絶えてしまい、外国との貿易が止まっていた。
それが元で外国製品の高騰化が起こっていた。
生活必需品ではないが、砂糖や香辛料と言った嗜好品は余程の資産家でも無ければ市民の口に届かない。
結果、それらを独占した商人が莫大な利益をあげていた。
しかし、北野はその状況をよしとはしなやかった。
「自由経済を否定しませんが、国内の品物を買い占めての独占商業は認められません」
シバリア行政府でホードラー、アルトリアにおける経済活動の会議で北野は真っ先にそう主張した。
「一応、ホードラー全域に買い占めやそれによる値上げを禁止してますが、法が施行される前にやられたこれらは規制しようがありません」
役人の一人がそう言って法の遡及は出来ないと主張している。
しかし、このまま一部大商人だけに利益があればシバリアのみならずホードラーの産業（アルトリアには農業以外の産業はまだない）は牛耳られてしまう。
そうなれば他の商人や商売をしようとする人々が何も出来なくなる。
「ですので、意図的にホードラーに日本からより安価で高品質な品物を中小零細企業に流しましょう」
北野の恐ろしい発案に役人たちは自由経済に介入するのか？と騒然となった。
「ただし、あくまでも一部大商人を弱らせるのが目的ですので、我々が出来るのは販路の紹介です。そこからはそれぞれの商才に委ねます」
つまり、大商人をそのまま放置しつつも、中小零細となる商人や商売を始めようとする人々には率先して商売のノウハウや交渉窓口を作る。
と言うものだ。

こうする事で買い占めの労力と資金を値上げと言う形で利益に還元しようとする商人は打撃を受け規模を縮小するしかない。
下手したらそのまま倒産もありうる。
「悪質な商売をやる以上はそれなりの覚悟があるはずです」
北野の案は大雑把な方針だけしか示していないが、少なくとも詳細を詰めればそれなりに効果をあげそうだ。
「分かりました。詳細を研究し法案化しましょう。念のため政府にも提出し了解を得ましょう」
役人たちにやる気がみなぎりだす。
自分たちの力でこの地域一帯に自由経済を本格的に根差せようと出来るのだ。
やる気も出ると言うものだ。
役人たちは即座に人員を選出し、準備会を立ち上げるため動き出す。
基本的にホードラーやアルトリアに派遣されてる役人などは日本では有能でも出世街道から外れたり、上司との折り合いが悪かったりした者がほとんどだ。
その為、厄介払いや左遷代わりに派遣されたのだが、北野はホードラーやアルトリアを流刑地にする気はない。
むしろ流刑地と認識している本土の役人たちの目を覚まさせてやるつもりで役人たちを使っていた。
「はてさて、結果が出るのはまだまだ先ですかね」
一人会議室に残った北野は一人そう呟いた。
その上で北野はシバリアに暫く滞在せねばならないと思っていた。

今やこの世界における日本の一大拠点と言うべきシバリアは、先に述べた通り元王城を中心に東西南北に大通りが走っている。
街の郊外との間には城壁が設置されてるが、見栄え重視で作られた為に防御効果は望めない。

そして大通りとぶつかる部分に装飾が施された門が着いている。
以前は夕方に閉まり日の出と共に開いていたが、現在は常に開け放たれている。
その代わり治安警備隊が常時張り付いて人の出入りを監視している。
そして、北大通りは官庁街、西、東大通りは商店が立ち並び、南大通りは倉庫群となっていた。
これは東西ホードラーが食料生産地であると共に西は交易路と繋がっているからだ。
そして北部は未開地であったため脅威らしい脅威がなく、政治に関わる建物や軍設備が中心になった。
南は南ホードラーが山岳地帯で資源が豊富だった為に倉庫が多くなった。
結果、東西南北で役割に合わせて見事な別れた作り方になっている。
最後に生活の場である住宅は城壁の外に建ち、人々はそこからシバリア中心に向かって働きに行くのだ。
こうして見るとシバリアは都市として実に考えられた造りをしている。
また、シバリアから西に進むとレノンへと繋がる川がある。
南の山岳地帯からレノン方面へ流れるこの川からシバリア市内に飲料水として引っ張られていた。
つまりは上水道だ。
下水道こそないものの、シバリアの地下に水脈が無い故の処置だったが、シバリア全人口5万人を賄うに十分なぐらいだ。
ただし、基本的に水は浄水されておらず、シバリア各所にある為水場を共同で使う様になっているため、必ずしも衛生的とはいえ無い。
また、下水道が無いので基本的に毎日汚水を溜めた所（特定の場所）から汲み取り郊外の処理場（穴を掘って埋めるだけ）に持って行かねばならない。
これは各市街の住人に割り当てられ、交代で処理している。

これらの事情もありシバリアは王都として栄えつつも、基本的に市民生活は二の次になっている。

そこで日本はまず手始めに浄水場を建設している。
出来上がりはまだ少しさきだが、これができれば仮に毒物が流されても浄水場がそれらを食い止めてくれる。
その上で上下水道を整備し、インフラを整えればいい。
また、電気も何れは通す予定だが、現状は行政府などの一部に太陽光発電や発電機を設置し限られた範囲でしか使わない様にしている。
これは発電所の建設の全く目処が立たないためだ。

アルトリアではダムを建設して水力発電が出来るが、シバリアは広大な平原にある都市のためダムが使えないからだ。
唯一南ホードラーでは見込みはあるが、現状は南方貴族連合の支配下にある。
そして制圧に向かうだけの余力はない。
と、なれば火力発電所か原子力発電所が必要だ。
これならレノンやその他周辺都市に電力供給が可能になる。
ただし、この際だからと言う話で風力発電、太陽光発電を中心とした新技術を用いた発電システムも想定されていた。
これはまだ人口が少ないためでもあるが、火力発電は今後に悪影響がありえ原子力発電はウランの入手が困難だからだ。
日本でも取れなくはないが質が悪く、生成に手間と費用がかかりすぎる。
これなら輸入したほうが安上がりなのだが、元の世界ならまだしもこの世界でウランが取れる可能性は低い。
だから風力や太陽光発電が計画にあがっているのだ。

それらの計画が本格的に動き出すにはまだまだ時間を必要としており、解決にも時間がかかるがシバリアの抱えてる問題のいくつかは

解決した。

西方との境にある川には交易路として使われていた橋がある。

通称「栄光の橋」と名付けられている橋は大軍を通過させれるように大きく、強固な作りだったので改修がいらない。

西方諸国との交渉で交易路を確保できるときに利用でそうだ。

そして何より橋を確保したことで防衛が楽になり南方にだけ気をつければ問題無くなったのだ。

これにより比較的防御の難しい南方の拠点を増強できた。

後は時機を見て南方と交渉、いや、恐らく武力による平定を行うことになる。

これらから考えるに日本の前途は明るくはないが暗くも無い。

そういう意味ではシバリアは重要な位置にある都市といえた。

第2話「シバリア市」（後書き）

以上で「シバリア市」は終了です。
如何だったでしょうか？

いままで省いてきた説明を多くしたことでシバリア周辺の動向、並びに背景が多少は見えたかと思います。

さて、次回ようやく主役が登場しますw
第3話まで出番なしとは・・・w

まあ、楽しみにしてやってくださいw

では次回でお会いしましょう。

第3話「暗躍する者」（前書き）

順調に見える日本による統治だったが、その水面下ではその統治を受け入れられない者達がうごめいていた。
それに対して日本が取るべき道は限られていたが・・・。

第3話「暗躍する者」お楽しみください。

第3話「暗躍する者」

シバリア市内に密かに存在するファマティー教の地下神殿。
いま、ここにはシバリア市が日本の都市になった頃より、日本とは相容れないものたちの拠点となっていた。
その中に指導者として一人の司祭がいた。
「カーン様、ロシュアン枢機卿より書状が届いております」
指導者のカーン・クラリアンは書状を受けとるとそれを読み出した。
暫く読んでいたカーンは書状を焼き捨てた。
「枢機卿は中々に役者だな」
書状が灰になりその内容はカーンの頭の中にしかない。
「ロシュアン枢機卿は何と？」
神官の一人が尋ねてみた。
ロシュアンと聞けば実質現在のファマティー教の教皇を越える最高と言える権力者だ。
その権力者からの書状となれば興味を持ちたくもなる。
そんな神官にカーンは一言で答える。
「知らなくてよい」
うむを言わさぬ眼光で興味本位に書状の内容を聞いてきた神官を射ぬく。
神官はカーンの迫力に顔を青ざめた。
「如何に枢機卿と言えども我々のやることに干渉させるつもりはない」
そう言うとカーンは今後の計画を再び話し出した。
「我々は予定通り日本を内から破壊する」
計画が書かれた書類とシバリアの地図を前にカーンは地図に示された印を指差す。
「まずはカトレーア王女の確保、後に各地に潜伏する同志を蜂起させる」

印のある箇所は迎賓館（現カトレーア邸宅）とシバリア北部の官庁街だ。
シバリア市内には自衛隊は駐屯していない。
郊外に仮設宿舎などを建てているだけだ。
「後に中央市街とその他を遮断する。それにより日本軍の行動を抑え、その間に日本の主要人物を捕らえるのだ」
要はカーンの計画はカトレーアを確保して大義名分を手に日本の役人を含めた北野たちを捕らえ、人質にして日本に要求を通そうとしているのだ。
典型的なテロリストの思考だが彼等にとって、これは神の御心を示す行為と信じてやまなかった。
ただし、彼等は一つ大きな間違いを犯していた。
日本はテロリストと交渉はしない。
また、北野は装甲が施された車両を使っていたので、簡単に捕らえられる状況にないのだ。
また、カトレーアにしても元とは言え近衛騎士たちがいる。
しかも最近は護衛の為の装備を日本から認められ所持しているのだ。
はっきり言って彼等が信仰を頼りに蜂起しても追従する民はいない。
むしろ逆に日本に協力しようとするだろう。
それだけにかつての王家（一部を除く）や聖職者が行ってきた搾取と高圧的な態度、行動は憎まれているのだ。
それを判断できるだけの多様性を日本は示してきたが故の結果ではある。
ここに来て一般民衆の中に自分たちを一人間として、身分や立場に関わらず平等に見る日本に寄せる信頼感は計り知れない。
カーンや彼等神官はそこを理解出来ずにいたのだ。
「カーン様、日本が要求に応じねば如何なさいますか？」
ミラ・カーマインはカーンの計画は希望的観測の元に作られている様に見え、日本が自分たちの要求に応じなかった場合を考えるべき、と言い出した。

「我らが要求を呑まぬならば、異端者や異教徒どもを皆殺しにするまでだ」
カーンは崇高な使命を果たさんとする自分に酔っていた。
例え敗れても殉教者になれると信じて疑わなかった。
「しかし、信者もいるかと思われますが？」
ミラはこのままでは破滅が待っていることをカーンの様子から理解できていた。
ミラは信仰心厚いが、教会が唱える信仰のあり方には疑問があった。
神がそう言った、とされている訳ではない。
かつての教皇が神託を受けたとして広まった新しい教義なのだ。
故に彼は旧ファマティー教聖書をいまでもよく読んでいた。
「異教徒どもを野放しにしている信者などは背教者だ。何も躊躇する必要はない」
カーンはそう言ってミラの発言を抑えた。
ミラは自分の言葉が届いていない事を知ると最早信仰は信仰としてあるのではなく欲望を叶える手段に成り下がっているのを理解した。

（こんな今のファマティー教を見たら始祖たるファマティー様は何と言われるだろうか？）

嘆きしかもたらさない今のファマティー教にミラは悲しむ事しか許されなかった。

――ホードラー地区シバリア市

ホードラー地域各地を巡回していた高橋政信（たかはしまさのぶ）少尉を隊長とする特殊任務部隊はシバリア自衛隊駐屯地へと帰還していた。
何度も旧王国の残党と言うべき野盗を制圧してきた故に望む望まぬ関係なく今一番実戦経験が豊富な部隊となっていた。

その経緯のため、人員は最小限に止められてはいたが、今では小隊として５０名へと増員していた。
「隊長、各員整列しました」
第一分隊を自ら指揮する高橋は第二分隊を預かる井上康二曹長から報告を受けた。
普段は陽気で砕けた感じの井上だが、流石に場は弁えていた。
「ん、今行く」
高橋は報告を聞いてから立ち上がった。

整列する特殊任務部隊総勢５０名は高橋が姿を現すと一斉に敬礼する。
高橋は答礼しながら隊員たちの正面にたった。
高橋の前には井上率いる第二分隊、第三分隊を率いる佐藤一樹曹長、そして隊員の状態を最良に保つ為の衛生班とその護衛で構成された第四分隊を率いる中田信次大尉と隊員たちがいる。
思えば初めてこの地に来てからたった数ヶ月でここまで来てしまった。
だが、日本と国民を守るべき立場にある自衛官がその両者を守る為に戦えるのだ。
後悔などあるはずがなかった。
「小隊長訓辞！」
井上が声をあげると高橋は隊員に呼び掛ける。
「本日シバリア市に帰還したが、数日後にはまた任務がある。だが、それまではゆっくり休んでくれ。以上」
長々と話す気にならない高橋は短く簡単に挨拶する。
「総員小隊長殿に敬礼！」
再び井上の号令が響き、全員が高橋に敬礼を向けた。
何度やられても慣れないむず痒さに正直辟易としていたが、これも自衛官の給料のうちと思うようにしていた。
「解散！」

井上の号令に全員が漸く気を緩めた。
高橋が硬い人物でないのは救いだが、それでもこうしてキッチリやらねばならない。
ましてや、これが終わるまでは任務が終わらない。
逆を言えばこれが終れば任務も終了なのだ。
「高橋、飲みに行かね？」
ヘルメットを脱いだ井上が高橋の首に太い腕を回しながら言う。
「あのな、お前らは良いだろうが俺はこれから報告書書いて出さないと駄目なんだよ」
高橋は半眼になりながら言った。
隊員たちが休日なら隊長も、と思うだろうが意外にそうでもない。
何より任務後であるので隊員たちが休んでいるときでもやる仕事があるのだ。
だから高橋はここのところ休みがほとんどなく働きづくめだった。
「幾らなんでも働き過ぎだ」
仕事中毒（ワーカーホリック）気味の高橋に井上は呆れたように言った。
高橋は高橋で休みが欲しいとは思ったが、まさか報告書出さないで遊ぶ訳にも行かない。
「晩には顔出すよ」
それだけ言うと高橋はシバリア市自衛隊駐屯地の建物に向かった。

報告書を書いた後、使用した弾薬などの書類と補給の申請を行って仕事から解放された高橋は自衛隊の溜まり場となっている酒場に向かった。
この世界の酒場は現代日本の飲み屋などと違い、一階は酒場や飯処で二階は宿屋となっている。
もっとも、一階が酒場では煩くて寝れない気がしないでもない。
また、この酒場は自衛隊が溜まり場にしてるだけあって自衛隊を目的とした商売が少なからずある。

中には風俗まであったが、これは日本から来てる頭の固い役人による規制によりこの辺りからは撤収していた。
なのでどうしても、と言うなら少し離れた風俗が集中する商業地区裏に行く必要がある。
ちなみに、この世界での娼婦はそれなりに地位が認められており一般的に存在する。
ただし、やはりと言うか裏で犯罪組織と手を組む売春宿もあり中々摘発を難しくしている。
とは言え、流石に自衛隊相手に犯罪行為を行えば物理的に叩き潰されかねないので組織の方も手を出させない様にしている。
以前は娼婦を使って自衛隊から情報を引き出さそうとしたり、持ち物を盗もうとする組織が少なからずあったが、北野の判断で「物理的」に組織を壊滅させていた。
おかげで犯罪組織は自衛隊を触れてはならない存在としている。
ただし、自衛官からもたらされる缶詰めなどの外に漏れても困らない品物は普通に貰えたので、何時でも美味しく食べられる品物としてホードラー以外の国や地域では高級品扱いで取引されていた。

溜まり場まで来た高橋は井上たちを探して店を覗いて歩いていた。
その時、やけに騒がしい酒場を見つけ確信を持って入って行った。
「いよ～う隊長殿～」
目敏く高橋を見付けた井上が声をかける。
すっかり出来上がってる仲間たちを見て苦笑いしながら高橋は仲間たちの席に来た。
「ご機嫌だな」
一体どれだけ飲んだのか分からない有り様だ。
何せ日本の居酒屋と違って空になった食器等を下げてくれるサービスは無いのだ。
結果、テーブルの上には食い散らかした残骸がところ狭しと並んでいた。

一応、料理を運んでくれる人（大抵女性）に頼めば下げてはくれるが、言わない限りは下げてくれない。
これは風習の違いで、頼まれないのに食器を下げたりするのは失礼になるからだ。
「注文は何にしますか～？」
注文を鳥に来た女性にエール酒、と言うと女性は「はいは～い」と言いながら奥に下がっていった。
接客にうるさい人なら怒り出しそうだが、そもそもそこまで細かい概念があった訳ではない。
ましてや飲んで騒げれば何でも良い人間が集まるのだ。
そこら辺は適当にもなるだろう。
「全く、うちの隊長殿は仕事人間すぎるよな～」
飲み過ぎにしか見えない酔っ払いになっている井上に水を渡す。
「ちょっとは酔い醒ましろ。絡み酒には付き合わんぞ」
高橋はそう言うと周りを見た。
基本的に出来上がった自衛官だらけだが、この辺りの商人等も出入りしているらしくチラホラ姿が見えた。
「佐藤も止めろよ」
思わず文句を佐藤にぶつける。
佐藤はこの状況であっても平然としていた。
実は佐藤、この中では一番飲んでいるのだが、基本的にザルなのだ。
普通の人が潰れるぐらいの酒では全く変化しない。
「嫌ですよ。酔っ払いの相手なんかしたくありません」
キッパリハッキリと断る佐藤になら飲みに来なけりゃいいのにと思いながら高橋は運ばれてきたエールをあおった。

ちなみにエール酒とは元の世界にもある。
エールはビールの一種で大麦麦芽を使用し酵母で発酵させホップで味を整えた飲み物だ。

ビールと違い冷やさなくても美味しく飲めるので一般的な酒と言えばエールが流通している。
これが進化、と言うか洗練されてビールになるのだが、それにはまだ時間がかかりそうだ。

「まあ、俺も嫌だがな」
高橋は佐藤の答えににやりとすると空いた皿を片付けて貰った。
「で、次の任務は？」
佐藤は既に内容を知っているであろう高橋に聞いてみる。
とは言っても高橋は直前まで言わないのだが、今回は違った。
「・・・シバリア市内に潜伏する不穏分子を叩く」
こっそり声を潜めて言う高橋の様子から極めて重要な任務であると伺えた。
「それと、任務に伴いあの子に協力を要請したよ」
高橋の言葉に酒でグダグダになっている隊員たちの目が妖しく光った。
「なん・・・だと・・・？」
「・・・この人は・・・」
「また俺達の心を抉るのか・・・？」

あまりの異様な様子に高橋は椅子から立ち上がろうとした。
だが、その肩に何者かの手が置かれ高橋の行動を阻んだ。
「な！？井上！？」
高橋の抗議に井上はとても良い笑顔で一言だけ告げる。
「死・ね」
語尾にハートが付くように言うとそれを合図に隊員たちが高橋に群がった。
「一体・・・何なんだぁ！」
高橋の悲鳴が夜のシバリア市内に響き渡った。

第3話「暗躍する者」（後書き）

お待たせしました。
第3話終了です。

題名とはちょっとズレた気がしないわけでもありませんが・・・。

気にするな。気にしたら負けだｗ

と言う訳で第４話に続きます。
ここから事態は急加速していく・・・予定ですｗ

ではまた次回でお会いしましょう。

第４話「シバリア動乱～前」（前書き）

シバリア市内を暗躍するファマティー教。
対する日本はその暴挙を抑えるために動き出す。
その結果にあるのは何か？

第４話「シバリア動乱～前」お楽しみください。

第４話「シバリア動乱～前」

――ホードラー　シバリア市

カトレーアは自分に与えられた邸宅の庭で子供たちと遊んでいた。
先日に北野にファマティー教の事で相談した結果、護衛についている元近衛騎士で特に信用をおける数人にニューナンブと言われる五発式の拳銃が与えられた。
それと一緒に自衛隊の一部隊が近くの空き家を臨時駐屯地として陰ながら護衛してくれていた。
おかげでファマティー教の司祭や神官はあれ以来カトレーアの邸宅には来ていない。
しかし、漠然とした不安はまだある。
あくまでも警備に着いてくれてる元近衛たちに武器を供与してくれたり自衛隊の護衛がついても、彼等が何かを企んでいるのは事実だ。
もしこの邸宅にいる子供たちに何かあったら、と考えると夜も眠れなくなる。
だが、子供たちの前では顔には出さない。
出せば子供たちに不安を与えてしまうからだ。
だからカトレーアは常に笑顔を絶さなかった。

そんな風景を遠目にしている高橋たち特殊任務部隊は表向きには空き家の一軒を駐屯地にしていた。
この空き家は元は貴族の王都における居住地、日本で分かりやすく例えると江戸の藩邸だった。
ただし、貴族に王が貸し与える形式だったので今は国有地となっていた。
そこを駐屯地代わりにしたのだが、そこには高橋たち第１分隊と中

田たちの第４分隊しかいない。
第２、３分隊は密かに別の位置からカトレーアの邸宅を守備していた。
「今のところ怪しい人物は確認出来ませんね」
部下の橋野茂（はしのしげる）軍曹が外からは見えない様に配置したカメラでカトレーアの邸宅を見ながら言った。
「油断するな。俺達が配置してから姿を現さなくなったと言う事は、連中も邸宅を監視していたと言えるからな」
高橋の言葉は数日間異常が無かったために緩みかけていた緊張感を引き戻すに充分だった。
「つまり、連中も警戒している、と言う事だな」
中田がコーヒーをテーブルに乗せながら言うと、それぞれがそれぞれの担当している監視カメラに集中しだした。
こう言う時に中田が高橋を立ててくれると一層効果がある。
「恐らく、今はテロリスト連中も俺らの規模やそれに類する情報を集めてるはずだ」
中田の淹れてくれたコーヒーを一口飲みながら高橋は自分の推測を述べる。
ファマティー教のテロリスト連中は諦めてはいないはず。
高橋はそう考えていた。
かつての世界で米国が常にテロリストの脅威に晒され、テロリストを完全に駆逐、もしくは抑えれなかった理由は、こちらが対策を立てればテロリストが諦めると考えていた事があげられる。
だが、テロリストはそこまで甘くはない。
やると決めたなら完全に計画が破綻しない限りあの手この手と形を変えてやるからだ。
ましてや、狂信者ともなれば犠牲をいとわずにやる。
故に油断は最大の敵なのだ。
「他の分隊にも注意を促しておけ」
その心配は要らないだろうが高橋は念のために注意を喚起しておく

よう伝える。
相手の規模にもよるが、万が一にもカトレーアに危害を加えさせては不味い。
それだけは阻止しなければならないのだ。

――シバリア市行政区

行政区はシバリアのみならず、日本が確保しているホードラー各地の中心として日々多くの人々が忙しそうに出入りしていた。
今日も今日とてレノン方面から難民に関しての問い合わせがあり、それによる暴動を警戒しての警備、食料、医薬品の手配があり少ない物資を必死にやりくりして何とか纏まった数を送り出すのに大忙しだった。
旧王国時代ではどんぶり勘定で済んでいた様だが、日本の政治体制はそんな生易しい物ではない。
緻密にして詳細に事細かく書類に正確な数字を書き込み幾つもの機関や役人の手に渡り、そしてようやく会議に出て結論を出した更にその後に詰めれるところを詰めて、また何人もの手に渡り漸く事が動く。
誠に複雑かつ面倒で時間がかかる。
だが、それ故に官僚と言う優秀な役人を揃えて国を動かせるのだ。
そして、今のホードラーはその官僚が本当に優秀な為に急速な変化をもたらす割には歪みが小さく、今までは虐げられていた民に自信と希望をもたらしていた。
これは独裁的とも言える北野の強硬な姿勢あればこそだが、おかげで役人たちも真面目に仕事をするので良い形にはなっていた。
いずれは現地の人々を登用し、教育と経験を積ませて自らの手で政治を行わせたいところだ。

その忙しい日々の中でも、一際頭を悩ませるものが北野の手に渡された。
「・・・武力蜂起ですか？」
北野の手には事細かな計画が書かれた手紙があった。
所謂、怪文書的ものだ。
だが、その内容は見過ごせるものではない。
「はい。この投書によれば近日中にこの行政区を制圧、カトレーア元王女を旗印に蜂起する様です」
秘書官の言葉に北野はあきれ返っていた。
「事実だとしたら蜂起しようとしてる連中は現実を見てない、知らないのですかね」
つくづく頭痛薬が欲しくなる。
「あくまでも信憑性があるだけで本当かどうかは分かりません。ですが、万が一のためにもそれなりの対策は必要かと・・・」
北野の様に的確に状況を分析し、対策が必要とした秘書官はこのまま秘書官で終わらすには惜しいと思えた。
「対策は必要でしょう。ただし、市内各地の警備においてです」
北野は如何なる手段を持っても行政区制圧は不可能だと思っていた。
それこそ自衛隊でも難しいと・・・。

それは自惚れや傲慢、油断ではない。
この世界では自衛隊並み、いや、下手するとそれ以上の力を持った警護が行政区にいたからだ。
「アーノルド少佐、と言うわけですが人員の配置を頼みます」
元在日米軍で現日本外人部隊のアーノルド・バスムーア海兵隊少佐は久しぶりの実戦に高揚感を得ていた。
「任せてください。我々外人部隊のお力を彼等に見せてやりますよ」
自信満々に言い放つアーノルドに北野は鈴木総理の手腕に脱帽する思いだった。
在日米軍は日本転移の際、帰るべき祖国を失った。

この世界で日本から離れて存在する事は不可能だった在日米軍は、鈴木との会談で外人部隊、つまり日本専属の傭兵部隊として存在していた。

しかも、鈴木は強力過ぎる米軍に危険な賭けまでしたのだ。

それは「この世界で米国を作るなら協力しますよ?」と言うとんでもないものだ。

しかし、その構成が軍事力に偏り過ぎて補給を日本頼りにしてしまう以上は今更独立した国を新たに立てるのは逆に危険だった。

そこで在日米軍司令官は在日米軍内で選挙をしたのだ。

画期的判断と言えるこの行為は在日米軍の実に9割以上が日本と生きる選択をしていた。

これは愛国心がなかったとかではない。

今でも帰れるならば帰りたいだろう。

だが、何ら生産性を持たない彼等が今後も生き残るには日本と歩むしかない。

その冷静な考えがあったからこそだ。

おかげで日本は在日米軍を日本国専属の外人部隊として雇い入れると同時に、米軍の持つ装備の詳細な情報と技術を得た。

これは補給の観点からも必要な事だったのだが、米軍は米軍で自分たちを売り付ける最高の手だと思っている。

その介あって元米国人は日本でも日本人と同様に選挙にも参加する資格が得られた。

初めは危険視されたが、共に手を取り合わなければならない関係となった以上は某外国人勢力の様な小賢しい事にはならない。

鈴木の賭けはこれだった。

もっとも、一部外国人勢力が「自分たちにも!」と主張したが、日本に何ら寄与しない者にそこまで優遇措置を取るほど鈴木は甘くなかった。

「自衛隊でも十分ですが、ここらで貴方たちにも活躍してもらわな

いと不公平ですからね」
北野の言葉にアーノルドは新たな祖国、日本に力を示せる絶好の機会と考えた。
「なに、奴等の心に我々に牙を剥く愚かさを刻みますよ」
如何なる手段を用いようとも自衛隊の様に優しくない、本当の意味での軍事力が日本にはあることを教育してやる。
アーノルドのこの思いは北野からすればある意味、彼等テロリストに同情をもたらしたかもしれない。

第４話「シバリア動乱～前」（後書き）

第４話終了です。
如何だったでしょうか？

随分前に「後程」と書いときながら放置してしまってた在日米軍を登場させれましたｗ

金食い虫の軍を増強した形になってますので日本の負担は大きく増えてしまいますが、下手にどっか行って脅威にするよりはマシな選択だったと思います。

さて、今回はココまでです。
また次回お会いしましょう。

第5話「シバリア動乱〜中」（前書き）

まさかの短時間二話投稿ｗ

誰も予想していまいｗ

と、言う訳で第5話「シバリア動乱〜中」お楽しみください。

第5話「シバリア動乱～中」

――――シバリア市内某所

ミラは焦っていた。
このままではカーンの暴走のまま蜂起し、そのまま潰されるのが目に見えたからだ。
一時的には目的を達成させれる様には思える。
しかし、一時的にであって継続的ではない。
ましてや、その一時的にも怪しいものだ。
カーンの建てた計画は希望的観測ばかりで現実が見えていない。
直ぐに教皇丁や他国の援軍が来るところや、日本が暢気に交渉してくる等は明らかに現実離れしている。
だが、カーンはそれでも自信に溢れていた。
まるで今まで自分たちファマティー教の聖職者が民の本心から称えられる存在であるかの様だ。
ミラはカーンたちの「ファマティー教の聖職者は日本に殺される」などと言った根拠なき口車に簡単に乗ってしまった自分の軽率な行動を呪いたくなった。

参加するのではなかった。と言う後悔をしていた。
確かに、あの時は日本がファマティー教の大司教たるハーマンを容赦なく殺害（形上は戦死だが）したと聞かされた直後だったのもある。
だが、幾らなんでも相手を良く知りもしないで簡単に思い込み過ぎた。
やはり自分も世間一般的な聖職者の一人に過ぎない。
だからこんな馬鹿をやる羽目に陥った。と思っていた。
「せめて、駄目で元々、あの手紙をちゃんと見てもらえたなら・・・

」

すがる様な思いで、自ら計画の全容を書いた手紙に希望を託す。

自己保身、と罵られてもかまわない。

こんな馬鹿げた事で死ぬぐらいなら、少しでも被害を押さえて死にたい。

自分たちの勝手で民を苦しめるのは止めるべきなのだから。

ミラの切実な思いとは裏腹に、カーンの計画は着々と進んでいた。

高橋は北野から無線電話でファマティー教の蜂起計画があり得ると聞かされた。

流石にこれは無謀ではないか？

とも思えたが、それだけ彼等が追い詰められている証でもある。

北野との会話で高橋たちはそのままカトレーア邸宅を守ると同時に、この辺り一帯におけるテロリスト鎮圧任務が追加される事になった。

そのため、急遽各分隊に補給物資を手配した。

そして各分隊に高橋は無線を通して警戒を呼び掛けた。

「テロリストが実際に行動を開始した場合、我々特殊任務部隊は初の市街戦を行う。各員に注意を呼び掛けろ」

これは如何に銃火器と言う有利な装備も、市街地と言う空間内では有利とはなり得ないからだ。

現代戦で最も難しいのは市街地における戦闘だ。

ハイテク装備を充実させても、旧式装備に遅れを取る。

それがあり得るのが市街戦なのだ。

近距離で戦う事になる上、上下から奇襲もあり得る。

しかも隠れる場所には事欠かない。

そんな市街戦は歩兵の本領を発揮する場であると同時に、多数の損害を要求する戦いになるのだ。

「せめて、犠牲だけは押さえないと・・・」

それだけが気掛かりだ。

高橋は念のために各員に注意を促したが、どれだけ意味があるかは疑問だった。
何せ市街戦の訓練を受けた者が数人しかいない。
しかもそれは各分隊を預かる高橋や井上、佐藤とその他2、3人だ。
後は見様見真似だ。
正直、不安しかない。
元の世界で見た映画の様にはならないだろうが、何処から民兵、テロリストが飛び出て来るか気が気ではないだろう。
「あまり心配してもどうにもならん。ここは出来る事をやるしかないだろう？」
中田に諭され高橋はそうですね。と答えた。
それでも祈らずにはいられないのは高橋が甘いからだろうか？

「少佐、各員配置に着いてます」
部下の報告にアーノルドは行政区の一角に構えた司令室で現状を再確認した。
高い建物にスナイパー、要所に直ぐ封鎖して陣地に出来る用意、そして各地に展開させた各分隊。
中隊規模の戦力で行政区を守るのだ。
その他の区画は他の日本外人部隊や自衛隊の部隊で守る。
これだけの歓迎の用意をしたのだから、ドタキャンだけはするなよ？と不敵な笑みがアーノルドに浮かんでいた。
「少佐。北野行政統括官より『補給は気にするな』との事です」
これを聞いたアーノルドはやりやすくなったと思った。
油断ではないが、やはり補給がしっかり確保されない状況で戦う気にはならない。
補給や治療が受けれる体制作りは戦略の基本であると同時に兵士の士気に関わる。
大事な部下をこんなところで死なせる気はアーノルドにはない。

「よし、後は総員の奮起に期待しよう」
アーノルドは幕僚たちにそう言って熱いコーヒーを飲む。
このコーヒー、エメラルドマウンテンも後何回飲めるか？
大のコーヒー好きのアーノルドはそう思った。
こんな時でもそう思えるのは率いる部隊に絶対の信頼を持っているからだった。

――――シバリア市内　夜

街が寝静まり、暗闇と静寂だけが辺りを支配している中、暗闇に紛れて何人もの人影が一つの邸宅を目指していた。
「やはり、警戒はしても甘い」
黒装束に身を包んだ者たちは足音も最小限に止めながらカトレーアの邸宅に近寄る。
正面と裏は確実に警備が厳しくなっているだろうが、まさか迎賓館の隣を使って侵入するとは思っていないはず。
黒装束の男はそう判断していた。
だが、それは甘い考えであることを痛感することになる。

「隊長、６番カメラを！」
駐屯地代わりの空き家の一室でカメラを確認していた隊員が高橋に警告を発する。
即座にカメラを確認するとあからさまに怪しい人影が複数人確認された。
「・・・第３分隊に連絡。招かれざる客が来訪せり」
高橋の言葉をそのまま第３分隊に伝える。
第３分隊ではそれを合図に即座に動き出す。
「客はどちらから？」
佐藤の質問に監視カメラを確認している第１分隊から即座に連絡が

きた。
「客は隣の柿を狙っている」
これだけで東側の建物から来ていると判断できた佐藤は手の合図で邸宅東側に向かう。
実は第3分隊は、カトレーアの邸宅内部にいたのだ。
「フクロウより連絡。直ちに親鳥と雛を巣箱へ向かわせろ」
佐藤の動きにあわせて高橋はカトレーア邸宅の警護につく元近衛に連絡した。
この為にわざわざ第1分隊から橋野を送り込んでいた。
「さて、第2分隊には周辺警戒をさせろ。第1分隊は第4分隊とここを死守する」
高橋の指示に部隊が明かりも着けずに暗視ゴーグルのみで行動を開始した。

「いくぞ・・・王女以外は殺せ！」
黒装束の男はそう言うと窓の一つに手を伸ばした。
その黒装束の頭を一発の銃弾が貫いた。
「！？」
一瞬にして絶命した指揮官に色めき立つが、即座に武器を手に邸宅内部に侵入を開始した。
だが、そこは佐藤の第3分隊の一部が既にいたのだ。
「此方は日本国陸上自衛隊だ！無駄な抵抗は止めろ！」
一気に明かりを照らされその姿を晒された黒装束の一団は流石に慌てふためいた。
無理もない。完全に待ち伏せされていたのだ。
慌てるな、と言う方が無理だろう。
「武器を捨てろ！」
黒装束の一団が内部の第3分隊と相対した直ぐ後に側面を突く形で佐藤他二名が姿を現す。
「くっ！構わん！殺れ！」

黒装束たちはナイフや短い剣を片手に飛びかかる。
だが、照明に照らされた状態では隠れようもない。
抵抗をやめないと判断した佐藤は制圧を命じた。

タタタ！と言う断続的な破裂音が夜の街に響く。
物の数分で黒装束の一団は物言わぬ躯（むくろ）となった。
「此方狩人。制圧確認」
佐藤の冷静な報告が高橋にもたらされる。
だが、それを否定する様に第２分隊から連絡がきた。
「かなりの人数が邸宅に向かっている。馬車付きだ」
井上の報告に高橋はカメラで方向を確認すると、佐藤たち第３分隊とは逆の西側から来るのが見えた。
「フクロウより鷹へ、狩りの時間だ」
攻撃を許可された井上の第２分隊は邸宅南の建物から邸宅前に来た馬車を伴った一団に照明を照らしつける。
「此方は日本国陸上自衛隊だ！抵抗したけりゃすれ！叩き潰してやる！」
拡声器から井上の怒声が辺りに喧しく響き渡る。
驚いた一団は弓矢を構えたが、その行動が実行に至る事はなかった。
第２分隊の一斉射撃が馬車を伴った一団を襲ったのだ。
あまりにも圧倒的な攻撃に散り散りに逃げようとするが、佐藤たち第３分隊が道を塞いだため逃げるに逃げられない。
「武器を捨てて両手を上げろ！」
降伏を呼び掛けるととても敵わないと判断した者たちが武器を捨て出す。
それを見た指揮官が手にした剣を振り上げるが、井上がＭ２４でその頭を吹き飛ばした。
「・・・死にてぇなら一人で死にな」
井上の呟きは彼等に届かないが、僅か１０分足らずでカトレーアの邸宅を襲撃に来た一団は壊滅した。

「総員、周辺を完全制圧せよ！行政区で大規模な蜂起が確認された！ここの安全を完全に確保してから援護に向かう」
高橋は自らの第1分隊を率いて制圧任務に出た。

第5話「シバリア動乱～中」（後書き）

第五話終了です。

しかし、ここで残念なお知らせが・・・。

うん、このままじゃ次で終わらないかもｗ
なので次回は長くなりますｗ

では、次回でお会いしましょう。

第6話「シバリア動乱～後」（前書き）

ついに起きたファマティー教による一斉蜂起。
しかし準備万端で迎え撃つ日本の前にカトレーア邸襲撃は逢えなく潰えた。
しかし、同じ頃、行政区では意外な事になっていた。

第6話「シバリア動乱～後」お楽しみください。

第6話「シバリア動乱～後」

――シバリア市内行政区

夜半過ぎだった。
北野は万が一にそなえ職員たちにはしばらく行政庁舎にて寝泊まりする事にしていた。
そして、この日は何時もの様に現在の開発状況の報告を受けると疲れきった体を休めるために寝ようとしていた。
だが、微睡みの中で唐突にカトレーアの邸宅が襲撃を受けた報告が飛び込んできた。
北野は即座に目を覚ますと服装を整え、詳細を聞くために執務室へと向かっていた。
その時だ。
庁舎の中で突然騒ぎがおこる。
ついで巻き起こる銃声に来るべき物が来た。と感じていた。
「何が起きています？」
此方に向かってくる米兵に現在の状況を尋ねる。
「テロリストがトンネルを掘って庁舎一階に出現、現在一階はテロリストと我が軍とが交戦中です」
米兵の答えに一階に職員を寝泊まりさせなくてよかったと北野は思った。
アーノルドの進言で一階はテロリストの襲撃を受けた場合は危険地帯になりえる。
と言われたので三階以上に寝泊まりを指示していたのだ。
ただし、この時は知るよしも無かったが、警備に着いていた米兵に差し入れを待って行った職員一名と米兵二名が奇襲で命を落としていた。

他にも一階に行っていた職員もいたが、米兵の奮戦に辛うじて二階へと逃げていた。
「二階に防衛ラインを敷設、現在は一階に残る我が将兵がこれ以上の侵入を阻止すると共に二階へ進むテロリストを迎撃中です」
米軍の軍曹の答えに北野は頷き、アーノルドへの伝言をたのんだ。
「遠慮は要りません。徹底的にやりなさい」
平穏を得たシバリア市民の為にも、ファマティー教やそれに与するものたちの身勝手を許す訳にはいかない。
今のシバリア市民は日本の統治の中で明るい明日を得ようとしている。
それを一部の狂信者の我が世の春よもう一度、など許してはならないのだ。
「各部署に連絡、迎撃は米軍に任せ我々は邪魔にならないようにせよ」
北野の指示に職員の何人かが走り出す。
そこに新たな報告が来た。
カトレーア邸を襲撃したテロリストは壊滅、現在は周辺の確保へと向かっている事、そして付近でも一斉に蜂起が起き、各地な自衛隊や米軍が鎮圧に乗り出した事、そして・・・職員一名の死亡が確認された事だった。
その報告を聞いた北野は自身の考えが甘かった事を痛感していた。
まさか、非戦闘員に犠牲を出させてしまうとは・・・。
悔しさと怒りに握り込んだ拳に爪が食い込み血が流れ出す。
部下があわてて治療を始めたが、この痛みは忘れられない。
「前言撤回します」
能面の様に表情が消えた北野に歴然の米軍兵士が恐怖を覚えた。
不幸にも彼等は日本人の本気の怒りを目の辺りにすることになった。
本気で怒りを纏った日本人は表情が消える。
日本人が本気で怒った時、表情が消える。
例え口元が笑みを浮かべていても表情がない空虚な笑みである。

これを見た米軍兵士ははっきり言って日本人を舐めていた考えを改めた。

「必要な物があれば何であれ使いなさい。奴等の身勝手に対する血の対価を支払わせてやりなさい」
口は丁寧だが、内容はかなり物騒だった。

行政区の庁舎やその外では何処から集めたのか数千に近いテロリストが一斉に現れた暴れていた。
米軍兵士は各所に簡易のバリケードや即席の陣地を素早く構築すると弓矢や剣、槍で武装するテロリストに容赦ない銃撃を加えていく。
だが、何処から来るか分からないテロリストの行動に正直後手に回っていた。
中には背にした建物から現れたりするので油断できない。
「少佐、我が軍は優勢なれど敵に先手を取られたままです」
酷く矛盾した状況にさしものアーノルドも苦しい表情だ。
実際の力量で言えば圧倒的だが、地の利と言うか神出鬼没な動きに有効な手立てがない。
まさかここら辺一帯を焼け野原にするわけにはいかない。
「イラクでのテロリスト相手の方がまだマシだな」
率直な意見に幕僚も神妙な表情になる。
だが、いつまでもテロリスト相手に後手に回るつもりはない。
「建物を一つ一つ確保して行くぞ。危険は増すがそれしかない」
テロリストの出没地点を一つずつ潰す方法を選択すると即座に動き出す。
この世界にはない無線と言う手段がバラバラに存在する部隊をまとめ、一つの生き物の様に動かす。
単なる武器の優劣だけではない。
こう言った連絡手段の優劣が戦局を大きく変える証明だ。

シバリア市内各所で起きた蜂起は行政区を中心に一時広まりを見せたが、事前に対策していたこともあり早期に鎮圧されて行った。
だが、行政区はテロリストとされたファマティー教の戦力が集中し、優勢とは言え未だに争乱の中にある。

路地から飛び出して来た数人のテロリストが一瞬で斬り倒される。
アインは得意の剣術を久しぶりに振るった。
長い休息の期間があったが、腕は錆び付いておらず生半可な腕前では太刀打ちできない。
しかもアインはここに来る前に波多野から貰った日本刀を持っていた。
元から才能があったアインは、使い方の難しい日本刀の扱いを波多野から教えてもらい短期間で会得していた。
「シャイン！周りに注意しろよ！」
アインの怒鳴り声にシャインもまた短く怒鳴り返す。
「分かってる！」
二人は行政区と市街地へと続く道にいた。
テロリストが最初に確保しようとするのはここだからだ。
ここを遮断されては日本の援軍が行政区に向かうのに障害になるからだ。
警護の兵士もいたが、ここは米軍も自衛隊もまだ配置されていなかった。
治安警備隊でも腕に覚えがある者が配置されていたが、最初の襲撃で半数近くが殺られてしまい、今も善戦していたがジリジリと押されつつあった。
『火よ、我が意に応たえ我が敵を討て！』
シャインが火の魔法を飛ばし弓を持つテロリストを火だるまにする。
だが、魔法は強力な力だが使うには疲労を伴う。

しかも短時間にこれだけ使うのはシャインも初めてだ。
そこを路地からまた飛び出してきたテロリストが狙うが、首にナイフが突き刺さり苦痛に倒れる。
「シャイン！無理しないで！」
ミューリがシャインを守る様にテロリストに立ちはだかる。
「あ、ありがとう！」
感謝の言葉を口にしつつもまた弓を持ったテロリストをシャインは打ち倒す。
「ミューリ！シャインを頼む！」
二人を横目に見ながらアインは吼えた。
昔から付き合いが長いシャインにはよく分かっていた。
アインがああ言ったと言うことはアインは敵を討つ事に全身全霊を向けると言うことなのだ。
普段はシャインやミューリを守るため攻撃よりも敵の注意を自分に向けたり、二人に向かう攻撃を止める動きをするのだが、アインがミューリにシャインを任せると言うのは、アインの持つ能面の全てを敵に向ける事になる。
冒険者としてだけではなく、下手な騎士など全く及ばない剣術を持つアインはこうなればまず負けはない。
そう、アインはこれでもホードラーのみならず、大国と呼ばれる国においても並ぶものが限られる程の実力者なのだ。

アインは正面からブロードソードを振りかざした男の脇を地を這うように駆け抜ける。
その際に日本刀を撫でる様に男の脇に当てる。
これだけで良いのだ。
単純な強度は剣に及ばないが、こと斬るとなれば話は変わる。
強靭かつしなやかな刃を持つ日本刀ははっきり言って下手な剣など棒きれに等しくしてしまう。
相手の剣と打ち合わなければ間合い、重量、切れ味のどれもが絶妙

なバランスを極めて高い水準でなし得た奇跡の武器なのだ。

注）元々日本刀は打ち合う物ではない。

その奇跡の刃は撫でただけで男の着込んでいたチェインメイルをあっさり切り裂き、男に致命傷を与えた。

槍を持った二人が姿勢を低くしたままのアインを両脇から突き刺さそうと槍を繰り出すが、アインは槍の突き込みに転がる様に避けると全身をばねの様に縮め、そのばねを解き放った。

避けられた、と思いそのままアインに槍を叩きつけようとした男は一瞬で目の前に飛び込んで来たアインに驚愕の目を向けた。

そしてその表情のまま首と胴が泣き別れになる。

あまりの早業にもう一人が呆気に取られるが、戦いの最中にそれは致命的だった。

気付いた時にはアインが彼の目の前に、アインの間合いの中に既にいたのだ。

こうなればアインの振るう日本刀の前に槍や鎧は紙の様なものだ。

実際、鍛造技術が未熟な上、基本的に量産品は鋳造が基本だ。

そんな量産品である槍や鎧が鍛造技術の極みにある日本刀を防げる通りはない。受け止め様とした槍とチェインメイルもろとも男はアインに袈裟斬りにされ絶命した。

だが、幾らアインが獅子奮迅の戦いをしても体勢は変えられなかった。

それでも、そのアインたちの戦いは決して無駄ではない。

それどころか貴重な時間を稼いだとして大きなものだった。

「敵正面！治安警備隊に当てるなよ！」

高橋の怒鳴り声に高機動車上部から身を乗り出した井上が答えた。

「何年ダチやってんだ！俺に任せとけ！」

自信に溢れた井上は手にしたＭ２４狙撃銃のスコープを覗き込む。
Ｍ２４はアメリカの銃器メーカーであるレミントン・アームズがスポーツ射撃用に開発したボルトアクション小銃、Ｍ７００を元に軍用狙撃銃として改良された物だ。
元がスポーツ射撃用であっただけに精度は折紙付きで優秀な性能を持っている。
だが、ボルトアクション故に連続射撃に向かない上に射程が不十分ともされている。
だが、弾が７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾である事やボルトアクション故の薬室密閉度の高さで威力があり、この世界の鎧など易々と貫いてしまう。
そして、そのＭ２４を構えた井上は射撃技術で自衛隊内でも優秀な分類に入る。
当然、と言う訳ではないが、その高い水準にある射撃技術で動く車両の上から的確にテロリストを撃ち抜いて行った。
そして、そのまま行政区と市街地を分ける門に到達するとテロリストを阻む様に高機動車を止め、中にいた数人が飛び出してきた。
「日本国陸上自衛隊だ！治安警備隊下がれ！」
井上の命令にアインが素早く反応し走り出す。
追いすがろうとするテロリストに井上が狙撃でその足を止める。
一旦距離を取られてしまえばテロリストたちに太刀打ちする術はなくなった。
「制圧！」
味方との距離が出来たところに高橋たちは銃撃を加える。
鮮血を吹きながら倒れていくテロリストたちは、なおも高橋たちに向かうが、８９式小銃や井上のＭ２４の前に次々と倒れていく。
そうこうする内にやや遅れて７３式中型トラックが到着し、中から特殊任務部隊の第１、２分隊が飛び出してきた。
こうなればテロリスト集団が如何に数がいようと最早勝負にもならない。

アインたちとの戦いで隠れていた連中が軒並み外に出ていたのもあり、門の制圧に来ていたテロリストをそのまま殲滅した。
「高橋さん！」
ミューリが明るい声を高橋に向けた。
高橋はまだ戦闘中なので頷くだけで答えたがミューリには十分だった。
「後続到着まで現状を維持する！治安警備隊の負傷者の手当てを急げ！第２分隊は周辺警戒！かかれ！」
第１分隊は怪我をした治安警備隊の面々に出来るだけの処置を始める。
第４分隊が遅れているが、それも間もなく到着する。
その間に応急措置を施せば助かる者も少なくなあはずだ。
「アイン、無事か？」
井上が全身を真っ赤に染めたアインを心配したが、アインは手傷すらない。
どうやら返り血のようだ。
シャインも魔法の連続使用による疲労だけだ。
ミューリに至ってはすばやい身のこなしがある。
「助かりました」
シャインの言葉にアインが、流石に危なかった。と続いた。
「無事で何よりだ」
まさか自分が呼び寄せた為にこんな危険に巻き込んでしまうとは思ってなかった高橋は安堵していた。
これで誰か一人にでも何かあれば後悔してもしきれないからだ。
「しばらく休んでてくれ。状況次第ではまだやらなければならないからな」
そう言った高橋は三人を車の中に入れ休ませた。

「カーン様、カトレーア王女の身柄拘束に失敗しました」

「門の確保に失敗、部隊は全滅です」
「行政区、未だに確保ならず。むしろ押されています」
「市内各所で行動した各部隊、鎮圧されました」
「カーン様、如何すれば？」
「カーン様・・・」
「カーン様・・・」
「カーン様・・・」

次々に入る報告にカーンは茫然自失だった。
計画は完璧だった。
なのにこの有り様、なぜだ？

だが、カーンのその問いに答えるものはいない。
むしろこのあとどうするのか？と言う問いかけが向けられるのみだ。
「・・・民衆は？民衆は動かないのか？」
藁にもすがろうと言うのだろうか？
カーンは民衆が立ち上がればこの様な状況を一変出来ると思っていた。
しかし、入った報告はカーンに新たな絶望をもたらす。
「民衆、動きません」
最早、どうにも出来ないと言う諦めの表情の神官にカーンは何故こうなったのか分からなくなった。
「何故だ？何故民衆は我等と共に立たぬ！」
最後には絶叫の様に叫ぶカーン。
しかし、その問いに答えられるものはいない。
いや、言葉にはしなかったが、一人だけその場にいた。
（現実から目を背けていたからだ）
心の中で冷笑と共にカーンに嘲りの言葉を送る。
ミラだった。
やはりなるようになったこの結果を驚きはしない。

密かに日本に手紙を出したのも理由だろう。
だが、根本的に民衆が自分たちの味方だと信じてやまないその幻想が自らの首を締めたのだ。
（我々が民衆に敬意を持たれていたのは過去の話なのだよ）
冷静に、そして客観的に分析すれば簡単に辿り着くであろう。
だが、カーンには出来なかった。
それは宗教と言う権力の座に座り、見下ろす立場だったからだ。
「ど、どうすればいい？どうすれば・・・」
最早思考も纏まらなくなりただ呟くだけになったカーンに、神官たちが一旦引いて体勢を整えましょう。と言うがカーンの耳には届いていない。
今のカーンの頭の中ではロシュアン枢機卿の書状通りに大人しくしているべきだった。と言う後悔の念のみだ。
「・・・カーン様には判断できる状況にない」
ここでミラは初めて意見を述べた。
その心中は終わったのだ。と言う思いだけだ。
「で、では、どうすれば良いのですか？」
神官の一人がミラが何かしらの策があるのでは？と期待の目でミラを見る。
だが、ミラにあるのは逆転などの策ではない。
「この地より脱出するか降伏しかあるまい」
あっさりいい放ったミラに周りがざわめき出す。
「これ以上戦いを続けても勝ち目はない。むしろ皆殺しにされるだけだ」
今回の蜂起に参加した兵員の大半が既に壊滅し、現状まだ戦っている部隊もじり貧になっていた。
最初の蜂起で王女や日本の役人を確保出来なかったこと、そして日本の援軍を止めるための門の確保が出来なかった時点で勝敗は明らかだった。
「そ、そんな・・・」

絶望する神官にミラは冷たい視線を向けるのみだ。
この事態は彼等自身が招いた事態だ。
もちろん、止めれなかったミラ自身にも責はあろう。
しかし、だからと言ってこれ以上無闇に戦っては民衆にも犠牲がでる。
だからここで止めるべきなのだ。
「私は殺されるかも知れないが降伏する。諸君も好きにするべきだろう」
そう言ってミラは地下神殿を後にする。
恐らく、カーンは自決するだろう。
枢機卿の指示を無視した事は知るよしもないが、それでも想像はできる。
カーンは我が身の為に枢機卿の指示を無視した。
これで教会に戻れなくなった上に、日本に反逆した首謀者だ。
日本に降伏もできない。
戦い続けても結果は日の目を見るより明らかだ。
だが、カーンに同情は出来ない。
むしろミラ自身も危険だからだ。
それでも、まだ教会の指示を無視したカーンの配下として教会に帰るよりはマシな選択だと思った。

第6話「シバリア動乱～後」（後書き）

追加完了。
そして第6話終了です。

シバリア動乱もこれで終わりです。
次回は後始末的なものになりますね。

さて、今回はいまいち空気（w）だったアイン君を活躍させて見ましたが如何だったでしょうか？
書き込んだ後で見るとまだまだ描写が甘いかな？
と思いますね。

まあ、今後に期待と言う事でw

では、次回でまたお会いしましょう。

第7話「動乱の結末」（前書き）

ファマティー教の一斉蜂起は失敗した。
そしてその結果はファマティー教側に取って最悪の事態へと繋がる。

第7話「動乱の結末」お楽しみください。

第7話「動乱の結末」

――シバリア市行政区未明

シバリア市内各所で夜半過ぎから発生していたファマティー教による一斉テロ攻撃は沈静化へと向かっていた。
既に奇襲をかけたはずのテロ側は地の利を生かしたものの、圧倒的な力の差に目的を果たすことなく制圧されていった。
ただし、ファマティー教徒側の主力を投じた行政区は未だに戦いは終わっていない。
暗闇にまぎれ、影に隠れて強襲と繰り返す。
だが、日本側の赤外線、サーマルゴーグルなどの装備により次々とその姿が晒されてしまいろくな抵抗も出来なくなっていった。
「少佐。大部分を撃退しました」
その報告を聞きアーノルドはようやくか、と言う思いだった。
だが、大部分であり全てではない。
ここで気を緩める訳に行かない。
「各隊を掃討戦へ移行させろ。ミスターキタノの言う通り徹底的にだ」
その言葉は直ぐに命令として伝達される。
米軍の各部隊は建物を一つずつ検索しながら残敵掃討に移った。

この時点で態勢は決したと言える。
既にファマティー教徒側は組織的抵抗力を喪失し、自身が生き延びるためにシバリア市外へと落ち延びなければならなくなっていた。
だが、彼等は大きな過ちを犯していた。
降伏であれば助かる道もあった。
しかし、逃亡を選択した以上は野盗になられても困る上、また牙を剥く可能性を考えれば殲滅するしかない。

そしてシバリア市上空には何機ものヘリが飛行して監視体制に入っていたのだ。
夜も明けだした今となっての逃亡は自殺行為に他ならなかった。
そこを理解している者は再び潜伏するのだろうが、今度はテロリスト捜索が執拗に行われるだろう。
そうなればやはり発見されてしまう。
どちらの選択も余程運に恵まれてない限りは極めて絶望的だ。

だが、彼等は降伏できない。
降伏は異教徒にファマティー教が屈するのと同義だからだ。
それでもまだ良識があったミラやその他の一部は早期に降伏しその身の安全は保証された。

どちらが正しかったのかは当人たちにはわからない。
ただ、生き残ったと言うだけで間違いではなかっただろう。

北野は昨夜の蜂起における報告を各所の責任者から聞いていた。
人的損失は行政区の職員１名、市街戦での米軍兵士の損失は３名、自衛隊は２名だった。
米軍兵士の損失はやはり最大の攻撃目標だった事と、最初の庁舎への奇襲によるものだった。
だが、北野を更に怒らせた事柄があった。

シバリア市民の損害だ。
此方に対する陽動でもあった市内各所の蜂起に巻き込まれた市民に死傷者が出ていた。
その数、約３００名。
中には地下トンネルの出口にされていた住宅などの住人も含まれている。
非武装無抵抗の死傷者に流石にこの世界の価値観が全く違うとして

も許せなかった。
「・・・市民に出来る限りの支援を行いなさい。それとアーノルド少佐と高橋少尉を呼んでください」
努めて無表情に言う北野に職員たちも触らぬ神に祟りなし、と言った感じだ。
「日本外人部隊、海兵隊所属のアーノルド・バストムーア少佐であります」
「日本国陸上自衛隊特殊任務部隊の高橋政信（たかはしまさのぶ）少尉です」
いつもと違い公式の会議の場なため、二人は形式通りの挨拶を行った。
「良く来てくれました」
笑顔を見せる北野だったが、やはりその表情は無表情に近い。
無理矢理笑顔を作った、と言える表情だ。
「市内の治安維持と警戒は自衛隊に任せるとして、貴殿方二人に頼みがあります」
北野からの話に二人は直立不動のまま聞く。
「今だ潜伏するテロリストを炙り出し、これを殲滅しなさい」
厳しい口振りに高橋は余程頭にきたのだろうと簡単に予想できた。
何より、現地に派遣されてる職員や自衛隊、そして外人部隊は命を落とす可能性は低くないだろう。
しかし、本来ファマティー教側でも守らなければならない対象たる民間人に対する所業は見過ごせないのだ。
最早、日本政府も北野たちシバリア行政庁もファマティー教を宗教だとは思っていない。
単なる宗教を騙るテロリストとしてしか見ていない。
「市民の中からもファマティー教に対する怒りの声が上がりだしました。向こうから正式かつ公式に謝罪が無いならばファマティー教そのものは認められないでしょう」
北野の話に二人はここに来る途中を思い出した。
元は市民もファマティー教徒であったが、繰り返されるファマティ

ー教の暴走にシバリア市民はファマティー教そのものを見限っていた。
それどころか言論、思想、宗教の自由が認められたばかりでまだそれほど浸透していないにも関わらず民衆は市内の自衛隊駐屯地や行政区前に集まりデモの様な真似をしていた。
デモをするのは良いが、無許可集会になるので取り締まらねばならなくなる。
だが、まだ法が施行されてから短いのもあり、浸透してない為に群衆は自然と無許可デモ行為を行ってしまっていた。
そしてその数は増える一方なのだ。
治安警備隊では取り締まれる規模ではない。
「市民を納得させる為にも彼等テロリストはこの地から根絶せねばなりません」
北野の言葉には群衆がこのまま暴動になられては今までの苦労が水の泡になりかねない。
その危険性を防ぐ意志が感じられた。
「分かりました。こうなれば市民の協力もあるでしょう。早速行動します」
高橋は北野に敬礼して答えた。
アーノルドは高橋たちと違い規模が大きい部隊だ。
その為に実戦部隊と情報収集部隊とに分ける事を告げた。
勿論、その情報は北野の下にもたらされ、全員で共有する事になるだろう。
「今回ばかりは信仰の自由云々など言ってられません。何せ現状ではテロリストですからね。手心は不要です」
北野はそう言うと二人に退室を命じた。
まだ会議で話さねばならない事がありすぎる。
北野がここから出るのはずっと先になるだろうと、誰もが簡単に予想できた。

「さて、テロリスト掃討か・・・厄介だな」
会議室を出たアーノルドは開口一番でそう言った。
高橋は頷きながらもそこまで厄介にはならないかも知れないと思った。
アーノルドはかつてのアフガニスタンやイラクでテロリスト相手に戦った経験から言っていたのだが、今回は現地の人がテロリストを匿ったり協力する訳でもない。
むしろ完全にファマティー教を敵視している。
つまりテロリストは民衆の協力が得られず、一定の場所から動けないからだ。
民衆の協力があればある程度は動けたが、協力がなく逆に敵となられたらまず身動き出来ない。
そこを高橋は考えたのだ。
「少佐。まずはテロリストの協力者を炙り出しましょう。その為にも情報が必要です」
高橋の提案にアーノルドは確かに、とうなずくと先ずどう情報を集めるかを考えた。
「ただの民間人に成り済まされたら探すのは困難だぞ?」
テロリストの一番恐ろしいところは民間人に紛れ込むことだ。
故に民間人とテロリストの区別がつけられない。
だが、高橋は先程の考えを説明した。
テロリストは最早市民に取っても敵になっている、と・・・。
「なるほど、つまり、市民から情報を募れば良いのか」
かつての王国の時はファマティー教は一般的に存在し、そのファマティー教に献身的な者は少なくない。
そして王国が失われた今でもファマティー教を信望している人を探せば良いのだ。
後は情報を精査し、その人物がファマティー教の協力者かどうかを調べればいい。
その際は誤認でテロリスト扱いしない様に細心の注意が必要だ。

「しかし、それはうちの部隊では難しいな」
長年テロリストの脅威に曝されてきた米国故にテロリストに対する拒否感が半端ではないのだ。
どう言って聞かせても「やり過ぎ」になりかねい。
「なら、情報を集めて下さい。私たちが疑わしい人物に直接接触し見極めます。此方には強力な助っ人もいますからね」
高橋は頭の中に例の三人が思い浮かんでいた。
その様子にアーノルドは殲滅は此方の役目だな。と感じていた。

第7話「動乱の結末」（後書き）

珍しく「三部作」をやって疲れた作者ですｗ

いや、疲れるほどの長さは無いのですが、色々考えることが多すぎて・・・。

正直言って、この選択と判断、対処が本当にいいのか？
と悩んでます。
しかし、書いた以上は予定通り「このまま暴走」しますｗ

では、今回はココまでです。
次回でお会いしましょう。

第8話「会談」（前書き）

ファマティー教側から布教の許可を求めての使者が着く。
だが、動乱の為に彼等の計画は大きく変更せねばならない事態へとなっていた。

日付が変わったので書き込みましたw

第8話「会談」お楽しみください。

第8話「会談」

――シバリア市行政区

シバリア市を震撼させたファマティー教徒の蜂起事件は一応の終息を迎えた。
日本シバリア行政庁は集まったシバリア市民に対し「テロリストとして処理する」として今回のテロ行為に対し断固たる対応を発表した。
これによりシバリア市民は日本に更なる信頼と協力を寄せるが、日本としてはシバリア市民に暴動など起こされては堪った物ではないからであり、何も市民の為だけの理由ではなかった。
とは言え、市民がそれで納得するならそれで良い。
むしろ、日本が常に正しい訳でもないので、市民に変な先入観を持たれても困る、と言いたいぐらいだ。
何せ一応は「信仰の自由」を掲げているので宗教弾圧は避けたい。
だが、現実には完全に日本はファマティー教を敵視している。
何せ何度も暴動を起こさせたり、今回の様なテロに走られたのだ。
敵視するなと言う方が無理だろう。

そんな状況下でありながらファマティー教の総本山から会談の使者がホードラー地区に入ってきた。
一応、正式な使者であるため、レノン市を経由してシバリアへと通したが、使者の護衛の傲慢さには道中の護衛に参加した自衛官の眉をしかめさせた。
一応使者としてきたハウル・タウンゼン司教は使者としての態度は崩さなかったものの、その護衛に就いていた聖堂騎士たちはあからさまに自衛官を侮辱する態度をとっていた。

その話を聞いた北野はファマティー教側が本気で交渉する気があるのか疑っていた。
ともあれ、動乱の影響収まらぬ中での会談は始まる。

会談場所は旧王国の貴族屋敷を使った。
迎賓館は手頃な建物としてカトレーアの邸宅にしてしまっていたからだ。
そして、会談はファマティー教からの日本国内（ホードラー、アルトリアを含む）での布教の要求からだった。
「・・・と言う訳で信仰の自由を認めた日本国内での我等の布教を認めて頂きたい」
ハウルは丁寧かつ、礼儀を尽くして要求を伝えた。
しかし、ハウルの目にはどうも芳しくない感じに見受けられた。
「・・・布教、と申しましたが現状では無理としか言えません」
北野の言葉にハウルは目を剥いた。
当初の話では拒否されない、もしくは出来ないとなっていたからだ。
もちろん、日本側もテロの国内侵入を警戒していたが、下手したら拒否は不味い事になるのでは？と考えてはいた。
しかし、ここに来て先日の蜂起事件だ。
断る絶好の理由を得たとも言える。
「何故ですか？信仰の自由は嘘なのですか？」
内心慌てても外事交渉を任されてきたハウルは表情を崩さない。
しかし、返ってきた答えは十二分にハウルを絶句させる。
「つい先日、ファマティー教司祭カーン・クラリアンによるテロがあったばかりですからね」
北野は内心同様に冷たくいい放つ。
カーン・クラリアンは戦死したハーマン大司教の次席としてこの地にいた司祭だ。
その司祭が蜂起し、民間人を含む多数の死傷者を生んだ事実を突きつけられハウルは目眩を覚えた。

「如何に信仰の自由を認めていてもテロ行為を行う恐れがある以上は宗教として認められませんな」
テロ、と言われても何を指す言葉か分からないハウルはテロについての説明を受けた。
その上で印象は最初の頃より最悪になっている事に気付いた。
「それはカーン司祭一人の独断で・・・」
額に汗を浮かべながら弁明するが、北野たち日本の外交官は表情を見せない。
「独断かどうか等ではありません。テロ行為が起きたのは事実であり、我が日本はファマティー教がテロを行わない確固たる証明がない限りはファマティー教を宗教として認めず、布教の為の入国を拒否します」
はっきりとした北野の言葉にハウルは血の気が引いた。
これでは布教により政治中枢を教化する話ではなくなってしまう。
「すべてのファマティー教がテロとか言うものを起こす訳ではありません」
ある意味、正論ではあるが、ある意味では詭弁でもある。
実際に何度も暴動を扇動したりテロを行います犠牲者が多数出ている状況で、ハウルの回答では説得力に欠ける。
「たしかにそうでしょう。ですが、我々はファマティー教がテロを行うところしか知りません。故にファマティー教はテロを行う可能性がある。ならば治安維持や市民の生活のために入国拒否しても問題はありませんよ」
かなりの強弁ではあるが、今は有効に使える。
北野は元から許可する気がないのもあり、正当な理由としてファマティー教の責任ある立場の人たちが起こした暴動やテロなどを事細かに伝えた。
これにはハウルだけでなく追従していた司祭や神官も驚愕していた。
「お分かりですか？我々は貴殿方を信用出来ないのです」
内心、北野は信用など元からないがな。と思ったのは秘密だ。

「・・・それらの恥知らずには破門するしかありませんね」
ハウルは布教を約束させねばロシュアンが納得しないのを知っていたので、何とか布教の手立てを作ろうと必死になっていた。
「破門は当然でしょうね。聖職者にあるまじき行為ですから。が、それとこれは別問題です」
無表情かつ冷たい北野にこのままでは布教なんて不可能な事をハウルは知った。
こうなった最大の要因であるカーンを呪うしかない。
何の為のロシュアンからの書状だったのか？
ハウルはカーンが何を考えてロシュアンの足を引っ張るのかが分からなかった。
「・・・どうすれば宜しいのでしょうか？」
布教への糸口を掴まんとハウルは北野に問いかける。
「私たちに聞いてどうするのですか？貴殿方が考えてやるべき問題でしょう？その上で恥も外聞も名誉も捨てれるならばお答え致しますが？」
明らかに挑発だ。
しかし、北野自身に挑発のつもりはない。
要は拒否の姿勢を崩さない態度の現れでしかなかった。
「・・・ごもっともな話です」
ここまで言われては思い付く方法はただ一つ。
教会の最高責任者たる教皇の謝罪と再発防止の確約しかない。
北野たちは暗にそれを求めていると判断した。
だが、現実的に不可能な話だ。
教会の権威を失墜させる事になり、ファマティー教の下で大陸の平和の均衡を破壊してしまう。
そうなればファマティー教は今までの押さえつけの反動を受けてしまう。
最悪、複数に分裂しかねない。
それは避けねばならない。

「分かりました。今回の事も含め、教会に持ち帰り再度の交渉を求めるしかありませんね」
ハウルは今回の交渉では絶対に布教は認められないと判断した。
このまま交渉を続けても「認めて！」「だが断る」の堂々巡りにしかならないのは目に見えていたからだ。
「一応、事前に通達し許可を求めて頂ければ使者の入国は認めます。ただし、あくまでも交渉の為の入国でありそれ以外の活動は禁止します」
立ち上がった北野はそう言って手元の資料を集め議場を後にしようとした。
「もし、これが守れないならば最悪、貴国との交渉は一切不可能になりかねませんよ」
北野の警告にハウルは冷や水を浴びせさせられた様になっていた。
「・・・必ず伝えます」
それだけ絞り出すとハウルは椅子に崩れ落ちた。

北野との交渉が不発に終わり、ハウルはロシュアンへの報告をどうすべきか?と馬車の中で考えていた。
その時、シバリア市民の目を見た。
誰もがハウル一行を敵を見る目で見ている。
「これは・・・不味い事態になってしまった」
一人の無能によりファマティー教は予定を大きく変えねばならなくなってしまった。
ハウルは、これはファマティー教側に取っても致命的な問題になる。
それを把握して再度の交渉を行う事になると考えていた。

第8話「会談」（後書き）

またまた悩みつつも投稿。

うーん、ちょっと強硬すぎるかなぁ・・・。
でも、最悪の行動を取られてきたならこうもなるよなぁ・・・。
と思いながらです。

まあ、ここまで来たら変に修正しないで「暴走」するしかないのですがねｗ

では今回はここまでです。
次回でお会いしましょう。

第９話「西方諸国」（前書き）

シバリア市内での騒動は一端幕をおろしたが、そのほかの都市でも問題は存在した。
そして、そんな中、西方に動きがあった・・・。

第９話「西方諸国」おたのしみください。

第9話「西方諸国」

――レノン市レノン市庁舎

難民問題に直面しシバリア行政区並みに忙しいレノン市の行政を司る市庁舎では、北野の後輩である田辺麻里（たなべまり）市長が四苦八苦していた。まだ27なのだが、その交渉力や現状把握に定評があり、北野も「いずれは私の後任にしたい」と言うほどの女性だ。

ただし、性格がややきつめな為、嫁の貰い手がいないと言う悲しい現実を突きつけられている。

もっとも、彼女は嫁にいく気がさらさらなく、親泣かせではあった。

「田辺市長、難民キャンプでまた小競り合いです」

連日の様に起きる食料などを巡っての争いに彼女はため息をついた。

「十分食べて行ける量は出しているのに・・・」

そうは言ってもこのまま暴発されては堪らない。

即座に鎮圧を命じた。

疲れた様子の田辺に秘書がお茶を出す。

「恐らく、ストレスが溜まっているのでしょう」

秘書の言葉に田辺はよくわかると感じた。

何せ長い者だと1ヶ月以上キャンプで寝泊まりしてるのだ。

これだけ長い間悪条件の中で生活していれば心身ともに疲労してしまうだろう。

「だからと言って即座に入国はさせれないし・・・何か良い案はないかしら？」

頬杖をつきながら考えるが、抱えている様々な問題から早期入国は無理がある。

ファマティー教や旧王国の残党などを警戒しなければならないからだ。

しかし、川の対岸側には西方諸国が群雄割拠中であり、難民の数は

増えている。
このままでは不味いのだが、明確で確実な方法がなければ入国は難しい。
現状では難民一人一人を調べてようやく入国、と言う手順を踏むしかない。
「ところで、西方諸国の情報は集まったのかしら？北野さんからもせっつかれてるのよね」
田辺の様子に秘書は苦笑いを浮かべて報告書を出した。
日本外人部隊、治安警備隊から選出された諜報員からの連絡だった。

報告書によると、西方の貴族たちはそれぞれが西方の王にならんとして建国した様だ。
それ自体は以前から情報として入って来ている。
問題はその後だ。
何がどう変化してるかをはっきりと把握しなければ日本としても打つ手がない。
まさか見ず知らずの土地に交渉に出掛けても危険しかないからだ。
そして田辺が手にする報告書には、集められた情報がまとめられて書かれている。
これ一つで、とは行かないが大まかな状況は掴めるのだ。

そして、それは書かれていた。

「西方諸国の更に西の国が侵攻？」
西方もホードラー王国の一部だった時は隣国であったタラスク王国が西方諸国を制しに侵攻を開始したと書かれていた。
タラスク王国は商業が主流で交易で成り立つ国である。
その性質からかなり協力な傭兵団を抱えており、単純な数だけならホードラーを上回る。
ただし、傭兵と言う物はいつ裏切るか分からない存在でもあるため、

無闇に戦争はしないはず、だったのだが、これには日本の影響が大きく関わっていた。
タラスク王国は北西部にアルトリアとタラスク王国を分ける山脈があり、直接アルトリアには入れなかったが、西方ホードラーとは平原続きだ。
かつては何度か戦争もしたが、基本的に西方諸侯の力で牽制できていたのだが、日本によりホードラーが滅び西方諸侯はそれにより分裂、各小国になってしまっていた。
結果、協力して牽制出来ていた形が崩れ、タラスク王国はそこを突いて西方を自国領土にしようと動いたのだ。
ある意味で日本の取った行動でタラスクは押さえられていた野心を揺さぶられ、領土拡大の機会として動く理由を与えていたのだ。
そのタラスク王国により、西方諸国の3分の1は既に飲み込まれている。
「これは・・・由々しき問題ね」
田辺の言うとおり、タラスクが日本と友好的ならばともかく、そうでないならば直接国境を接するのは危険だった。
何せ日本はアルトリアやホードラーの開発に忙しい。
他国と新たに戦争したりなどする余裕はない。
だが、このままではいずれ西方諸国は併合され日本と直接対面する事になる。
「自衛隊も南を押さえるのに忙しいでしょうから、この地域にまで手が廻るかはちょっと怪しいわね」
田辺の言葉に秘書は大変ですね。と言うしかない。
だが、仮にも北野に認められるだけの能力を持つ田辺は、大変ですます訳には行かない。
時間を稼ぐ、とは言わないがタラスク王国の動きをどうにかせねばならなかった。

――シバリア市行政区

北野に無線電話がかかって来たのは遅い昼食を取ったすぐ後だった。
市内に今も潜伏するテロリスト対策は本職に任せ、開発などの問題に取りかかっていた北野は無線電話が日本からかかって来たものと考えていた。
しかし、電話の主は北野の後輩でありレノン市長になっている田辺からだった。
「君から連絡とは珍しいですね」
いつもなら北野の方から連絡するのだが、今回は田辺からだったのには驚いた。
と同時に新しい問題でも起きたか?と思っていた。
「シバリアは大変そうですね北野さん」
明るい感じの声が無線電話から聞こえてきたが、こう言う時は厄介な事を言おうとしている。
北野は田辺のいつもの癖からそう考えていた。
「で、何がありましたか?」
嫌な予感を持ちながらも聞かない訳にも行かない北野は渋々ながら田辺に尋ねてみた。
「実は・・・」

田辺の話を一通り聞いた北野は、やはりとんでもなく優秀だ。と田辺の能力を評価した。
「緩衝地帯ですか、なるほど、たしかにいい案です」
北野は田辺から聞いた西方諸国の状況を聞いてたしかに必要だとは思った。
だが、事はそんな簡単ではない。
まず、緩衝地帯となるべき国が日本をどう見ているか?
また、緩衝地帯となるべき国がどの程度の国力があるか?
日本に対し敵対の意志があれば日本と手を組む事はありえない。

そして国力が低すぎるならば今度は緩衝地帯として持たない。
タラスクと言う国がどの程度の力を持つのかはまだ情報が足りず判断難しいが、西方を併呑しようと軍を繰り出せるならば西方諸国をまとめたのと同程度の国力はあると言える。
「田辺君、良い案だが緩衝地帯になれるかは微妙なところだ」
電話の向こうで田辺は落胆していた。
緩衝地帯と言う考え方そのものは間違いではない。
だが、北野からそれをやるための情報が少なすぎると指摘されては実行は難しい。
そんな田辺に北野は語りかけた。
「要は隣国の情報を集めてからでなければ難しいでしょう。それと時期が悪い」
北野の時期が悪いと言う言葉に田辺は気付いた。
「隣国は我々と手を組む必要がまだない、と？」
田辺が問題に気付いた事で北野は自分の事の様に喜んだ。
「ええ、その手の話を相手にするには、もっともっと追い詰められて貰わないと有り難みが薄れますからね」
楽しそうに言ってはいるが、その内容は極めて、そしてかなり悪どい。
つまり北野は西方諸国がタラスクにもっと制圧されて、自分の首にタラスクの手がかかりかけたと認識させてからでなければ日本から話を持っていく意味がない。と言っているのだ。
「まあ、緩衝地帯になりえるか？と言う問題は解決策がありますしね」
久し振りに北野は疲れた表情ではなく、生き生きとした表情になっていた。
そう言う意味ではかなりいい性格をしていると言える。
田辺はそんな北野を想像して、北野の敵でなくて本当によかった。
と思っていた。
「とりあえず、情報をもっと集めてください。それと集めた情報は

随時こちらに渡す様に。ではまた今度・・・」
そう言って受話器を下ろした北野は、シバリアが片付き次第、田辺の案の検討に入る必要があると考えていた。
まだ、ファマティー教のテロリスト掃討に入ったばかりなのだ。
下手に大風呂敷を広げずにまずは地盤を固め、そこからゆっくりと手を出して行けばいい。
いきなりやればどっかこっかに隙を作る上、日本には一辺に事を行う余力はない。
アルトリアの油田も軌道に乗りつつあるが、まだ産油量は国内分を賄う程でもない。
そう言う意味では現状のまま出来る事から一つずつ進めるしかないのだ。

第9話「西方諸国」（後書き）

ちょっと短いですが、ご勘弁を・・・。

次回からは西方に目を向けることになります。

ではこの辺で・・・。

次回でお会いしましょう。

第１０話「掃討」（前書き）

シバリアしないのテロリストの拠点を潰しにかかる日本。
そしてそれが進むに連れファマティー教の姿が見えてくる・・・。

第１０話「掃討」お楽しみください。

第１０話「掃討」

――――シバリア市内商業区

深夜遅くに数人の人影が、ある大商人の店舗にむかっていた。
その人影は顔を何かで黒く塗っているため、目だけが目立つ異様な雰囲気をかもしだしている。
その人影たちは手で何かの合図をすると店のドアを蹴り開けた。
と同時に円筒形の物体を放り込みドアの脇に隠れる。
直後、凄まじい光と耳をつんざく爆音がなり響いた。
「Ｇｏ！Ｇｏ！Ｇｏ！」
初めて人影たちが声を発する。
彼等は日本外人部隊の米軍だった。
この日、行われているのはファマティー教の隠れ蓑になっていた場所を制圧するための強襲だった。
店内にいた数人の傭兵が武器を手にするが、手にしたところで米軍部隊の銃撃を受けて地面に転がる。
「クリア！」
店舗に入った所にある売り場は即座に確保され多数ある部屋を次々にクリアリングしていく。
クリアリングとは、その場所の安全を確認、確保する事で脅威を発見、捕捉した場合は即座に制圧する事だ。
そのクリアリングを行いつつ米軍部隊は地下を目指した。
ちなみに建物上部は既に他の部隊が隣の建物から侵入し制圧している。
そして地下室前に武器を持って待ち構えていたテロリストを排除すると、最初にやった様にドアを開けてフラッシュグレネードを放り込んだ。

「アーノルド少佐、目標の完全制圧を完了。我が軍は目標を支配下に置いています」
部下からの報告に被害が無かった事もアーノルドの機嫌を良くしていた。
「うむ、よくやった。捕虜は？」
別に潜伏するテロリストの場所を探す上でも情報は必要だ。
そう言う意味では捕虜は重要な情報源になりうる。
「は！６名確保、他に２０名ほどおりますが、事情を知らない民間人かと思われます」
それを聞きながら、軽々しく民間人と断定出来ないアーノルドはしばらくは拘束する様に告げると無線電話を手にした。

――――シバリア市行政区

情報収集の結果を聞いた高橋はテロリストの拠点を一つ潰せた事に安堵していた。
「これで五つ目だな」
井上は広げた地図を前に赤字でバツを付ける。
今までに潰した拠点は五つ、その内、四つが商業区で一つが倉庫区だ。
「意外です。隠れるなら南の倉庫区の方が隠れるのに向いてるでしょうに」
佐藤は今回もまた商業区にあった事を疑問に思っていた。
「おいおい、隠れるに向いてるだろうが同時に一番警戒されるだろう？」
井上はそい言って笑い出す。
佐藤はそうかな？と言った表情だ。
今のファマティー教テロリストはシバリア脱出を優先している。
それなら倉庫区の方が脱出にも隠れるのにも向いてると思えた。
「相手は俺らが倉庫区が怪しいと思う事を考えたんだろうな。ただ、

今の彼等に味方はいない。おかげで商業区に隠れていたのを見付けられたんだから」
そう言って椅子に深く腰かけた高橋は地図にかかれている怪しいとされる場所を見た。
「次は西の商業区か・・・」
シバリア市の商業区は東西にあり、今回は東だった。
西はやはり脱出の為に警戒しているのもあるが、その分ファマティー教テロリストも用心しているのか、見付かった拠点は一つだけだった。
「多分この西側辺りが一番居そうだな」
高橋の言葉に誰もが同じ様に考えていた。
「とは言え、捕虜にしたカーンでしたっけ？よく仲間を売りましたよね」
ファマティー教の人間は狂信者と言う印象があった佐藤は、責任者だったカーンが拠点をペラペラ喋った事を不思議に思っていた。
「俺もだ。拷問されても喋らないと思ってたぜ」
佐藤と同じく井上もそう思っていた。
だが、現実には簡単に仲間を信者の潜伏先を話していた。
おかげで捜索が楽になったが、あまりに簡単に話すのでかなり疑わしいのも事実だ。
「降伏してきた神官さんも情報提供してくれましたが、カーンて人は何か・・・」
何と表現して良いか佐藤にはわからない。
降伏してきた神官、ミラも協力的ではあったが毅然としており、また無駄に被害が出ないように頼んだりしてきていた。
だが、カーンの場合は此方の顔を伺う様に率先して情報提供していた。
誰も聞いてない事まで話すのだ。
尋問に当たった高橋と北野、アーノルドはそのカーンの様子に呆れたぐらいだ。

北野なんかは「私が会う必要もありませんよ」と言って早々に退散した程だった。

おかげで高橋が尋問をしたのだが聞いてない事まで勝手に喋ってくれる。

結果、拠点と思われる場所を幾つか特定することができ、掃討開始5日で拠点を4つ潰す事に繋がった。

残す拠点は3つにまでになっていた。

ただし、この3つまではカーンとミラの情報が食い違い、正確な場所を特定するのに時間がかかると予想された。

だが、市民からの情報が元になり、今こうして五つ目を制圧し、残る拠点は2つになった。

そう言う意味では如何に日本や北野が市民の協力を得るために苦心したのかが理解できると言える。

アーノルドら米軍ではこうは行かなかっただろう。

「まあ、彼には彼なりの考えがあるのだろう。好感は持てんがな」

興味ないとばかりの高橋に井上と佐藤の二人が顔を見合わせた。

「・・・お前は何とも思わないのか？」

井上の言葉に高橋はまるで、つまらない事を聞くな。と言わんばかりの態度だった。

「一々あんなのに構ってられる訳ないだろう。どうせテロを首謀したとして死刑だしな」

そう言って高橋は集められた情報をまとめた書類を手に残りの拠点は何処か？を考え出した。

「・・・高橋さんもああ言った人は嫌いなんですね」

小声で井上に耳打ちする佐藤の言葉に井上は頷いた。

当たり前と言えばその通りなのだが、日本人は特にカーンの様な我が身の為に仲間を売る。と言った感覚が理解できない。

むしろ憎悪の対象ですらあるだろう。

もちろん日本にもそう言った似た人はいるが、基本的にやはり好まれない。
だから高橋の態度にもうなずけるのだ。
「そんなどうでも良い事より、ミューリたちからの裏付けはまだか？」
高橋は書類を読みながら情報の裏付けに奔走する三人の事を聞いた。
真っ先にミューリの名前が出てくるあたり高橋も満更でもないのかな？と佐藤は思った。
「いや、まだ無いな」
短く答える井上に高橋はそうか・・・と言って書類に意識を向けた。

しばらく一人で書類と戦っていた高橋は一息ついていた。
井上も佐藤も他の面々も新しい情報は無いか確固で動いている。
命令しなくても率先して動けるだけの仲間に高橋は比較的楽ができていた。
もっとも、高橋自身要らぬ苦労を買ってしまう性格なので、楽になっていると言ってもその分苦労を背負いこんでしまうから仕事の総量は変わらない。
だが、高橋はふと考えていた。

（俺のせいで皆に苦労をかけてしまうな。また休暇を取れる様にしてやらないと・・・）

実際問題、一番休暇を取らなければならないのは高橋自身なのだが、彼はそこに意識が向かない。
「この掃討が終わったら申請してみよう」
高橋はそう言うと休暇の申請書類を机から取り出し書き始めた。
そんな高橋を井上が見たらこう言うだろう
「ワーカーホリックめ」
と・・・。

第１０話「掃討」（後書き）

書き足し完了！

短くはなりましたが第１０話終了です。
気付けばあっという間に１０話・・・。
この調子では話数の予定をオーバーしてしまいそうｗ

まあ、そん時はそん時と言う事でｗ

では次回でまたお会いしましょう。

第１１話「ベサリウス領」（前書き）

さて、ここらでそろそろ西方に目を向けねば・・・と言う事で対岸からですｗ

第１１話「ベサリウス領」お楽しみください。

第11話「ベサリウス領」

――ホードラー　レノン対岸

戦乱に焼け出されたり戦乱から逃れて来た難民のいる集落を遠目に騎兵が見ていた。
「ベサリウス卿。あれは放置して構わないのですか？」
ベサリウスと呼ばれた若い騎士風の男は後ろに従う騎兵（従者）に振り替える。
「君は私に彼等をどうしろと言うのだね？」
アウル・ベサリウス元男爵はそう言って従者の目を見る。
血気にはやる従者は領内の不穏分子として叩くべき、と考えたが、ベサリウスの落ち着いた穏やかな表情を前に言えなくなっていた。
「我が領内の民ではない。だが、だからと言って彼等に危害を加えようとは思わないな」
そう言って再びベサリウスは難民たちを見た。
本来なら彼自身がどうにかしてやりたいが、残念ながらある程度の広さがあっても領内に余裕がない。
領民を飢えさせない様にする分しかないのだ。
まして、周辺の元貴族たちは勝手に王を名乗り狭い土地の奪い合いをしている。
ベサリウス自身、王国が滅びたのは天命と思っているが、だからと言って元貴族たちの身勝手さを認める気にならない。
だが、残念ながらベサリウスの領地は広さがあっても土地が痩せており収入が低い。
そのために見向きされていなかったのだが、目の前に日本と言う国が迫っている。
このままでは何れ呑み込まれるのは時間の問題だと思っていた。

それでもベサリウスは構わない。
日本は寛容で民衆に優しいと言う噂だ。
ならば呑み込まれても領民は助かるだろう。
ベサリウスに取って領民の行く末が良ければ他はどうでもよかった。
「しかし、何故彼等は橋を渡らないのですかね？」
別の従者がベサリウスに声をかける。
「恐らく、工作者の侵入を警戒してるのだろう」
少しずつではあるが、日本が自国内に難民を入れてる事から簡単に分かる。
「彼等にしてもそれは怖いのでしょうな」
ベサリウスの答えに側近が笑う。
だが、ベサリウスは笑い事ではないと考えていた。
あれだけ強力な軍勢を持った日本が、力を頼りにせずに事細かな事柄に意識を向けているのだ。
それは国としての基盤を固め、将来への統治をやりやすくすることになる。
つまり、日本は軍事力も経済力も国力も並び立つ者がいないほどしっかりしている恐ろしい国、と言えるのだ。
「まあ、我々が感知すべき事ではない。他の強欲な連中に比べれば話はできるだろうがな」
ベサリウスの関心は日本には向いていたが、それよりも周辺の強欲な元貴族たちの方に向いていた。
略奪目的だけで領内に侵入してくるのだ。
一応自衛の為に戦力は整えているが、このままでは秋の収穫が望めないほどに住人が離散してしまっている。
早い内に手を打つ必要がベサリウスにはあった。

対岸の難民キャンプから少し離れた丘に姿を見せていた騎兵が何もせず姿を消した事に伊藤は安堵していた。
万が一難民キャンプを襲撃するならそれを止めなくてはならない。

でなければ混乱した難民が一斉にこちらに来るだろう。
それが一番厄介な懸念事項だった。
「偵察、ですかね？」
部下の言葉に単なる様子見だけにしてもらいたい気分だ。
「偵察なら次は軍勢か？流石に相手に出来んよ」
負ける事はあり得ないが、今後を考えればそんな真似は出来ない。
レノンは城壁が邪魔で発展が困難なのだ。
シバリアの様に城壁の外に都市を新たに形成したいが、城壁内の住人がそれをやるとは思えない。
だから難民を住まわせて農耕に従事させていたぐらいだ。
安全な城壁に囲まれた生活に慣れたレノン市民が今さら城壁の外に出て暮らすのはまだ無理があった。
「この難民キャンプがどうにかならないと我々の気苦労は絶えないな」
伊藤の苦労は市長の田辺も同様に感じているだろう。
しかし、難民キャンプの難民はまだまだ多く、解決には程遠かった。

――――レノン対岸ベサリウス領北部

ベサリウス領の北にある山に囲まれたザハン・バジル子爵領はその地形から鉄鉱や木材、そして量は少ないが銀が産出される。
そのため金銭的には裕福な土地なのだが、反面食料があまりとれない。
だから食料は他の領から輸入していたのだが、この度の分離独立により唯一の交易路が成り立たなくなってしまった。
自業自得と言えばその通りだが、ザハンはそれを補う為に自領南にあるベサリウス領に度々略奪を仕掛けていた。
そしてこの日も略奪に赴こうとしていた。
だが、先日略奪したばかりなので、今度は東に向かい川沿いを目指

すことにしていた。
「ガリウス様、部隊が揃いました」
ザハンの配下でありバジル王国（自称）将軍になったガリウス・ザッハトールは髭を撫でながら部下の言葉に頷いた。
集めた戦力は５００程だが、ガリウスはベサリウスの軍勢は分散配置されているのでそれほど心配していない。
「では、今日も演習に向かうとしよう」
まるで略奪を楽しむかの様なガリウスにならず者を集めた軍勢は歓喜の声をあげた。
彼等に取って略奪は生きる為の行為以上に「人間狩り」を楽しめる訓練に過ぎない。
略奪は「ついで」なのだ。
そのガリウス率いる５００の軍勢はベサリウス領に侵入すると東に進路を向けた。

そこにはレノンの対岸で難民キャンプがあるだけだと言うのに・・・。

ベサリウスはバジル王配下のガリウス将軍が領内に侵入したと聞き、即座に迎撃準備を整えた。
配下たちも慌てふためいて準備をしたが、その進路が東であると聞いた配下たちは一様に安堵した。
「いや、東にはあの流れ者たちの集落があるだけ、助かりましたな」
気楽に言っている配下にベサリウスは怒りの声をあげた。
「馬鹿者！その流れ者たちを見殺しにするつもりか！」
普段の領主としての温厚なベサリウスと打って変わって、将軍としての表情に変わっていた。
彼は例え難民でも領内にいるならば守る義務が領主にはあると考えていた。

「しかし、日本の連中が何とかするのでは？」
暢気な配下の様子にベサリウスは苛立ちが溜まる。
そんな他人任せで領内を守れるものではない。
そもそも、好き勝手に領内に侵入し好き勝手に行動されては領民がたまったものではない。
「集められる兵は？」
ベサリウスの配下の騎士が５０騎ほど、と答えるとベサリウスをそれを率いて出撃を宣言した。
配下のものたちにベサリウス領の中心であるコンスタンティを守備する様に命じ、即座にコンスタンティを後にした。

ガリウスはベサリウスがコンスタンティを立った事をまだ知らないが、ベサリウスの軍勢が来る頃には略奪は終了していると考えていた。
「なんだ？難民の群れか・・・」
つまらん、と呟いたが、難民ならベサリウスも文句は言うまいと考え軍勢を整列させた。
そしてその様子は対岸の日本国レノン駐屯陸上自衛隊からも見えていた。

「やらせるな！迎撃しろ！」
伊藤の指示で自衛隊が素早く迎撃体勢を敷く。
とは言え防衛に出られる部隊は限られ、難民キャンプに最も近い部隊は僅かに４０人。
これで少なくとも１５分は稼がねばならない。
「良いか、撃破を考えるな。攻撃を断念させればいい！」
伊藤の命令に難民の川を使った流入を警戒していた部隊が即座に臨時編成され対岸に上陸した。
その彼等は日頃からボートで警戒していたのだ。
「臨時守備部隊は難民キャンプ前に到達！」

これで相手が諦めれば・・・。と言う淡い期待があったが、期待は当然ながら裏切られた。

ガリウス将軍率いる軍勢は一直線に難民キャンプを目指し突撃してきた。

以前、高橋が押さえた時と違い平地で隠れる場所もない。

しかもガリウスは横陣を取っており正面きっての戦いになるのは明白だった。

第１１話「ベサリウス領」（後書き）

第１１話、如何だったでしょうか？

実は今回登場したベサリウスにはモデルがいます。

名前も似てますよ。

さて、誰でしょう？ｗ

では次回でまたお会いしましょう。

第１２話「難民を守れ！」（前書き）

難民に迫るガリウスの軍勢に自衛隊が防衛を開始した。
しかし、予想外の攻撃に準備不足の自衛隊に犠牲者が出てしまう。

第１２話「難民を守れ！」お楽しみください。

第１２話「難民を守れ！」

――レノン対岸難民キャンプ

難民キャンプに向けて槍を持った歩兵隊が走ってくる。
それに対して掛井義一（かけいよしかず）少尉率いる４０名の小隊は８９式小銃で応戦を開始した。
「近づけさせるな！撃ちまくれ！」
掛井は耳をつんざく騒音の中で喚く。
背後には戦う力のない難民たちがいる。
ここで食い止めねばならないのだ。
だが、旧王国の時と違い彼等は一向に怯まなかった。
目に見えない攻撃を前にしても混乱せずにただ前へと向かってくる。
「バカな！？」
掛井はそう言いながらも弾の切れた弾倉を交換し射撃を再開する。
掛井は知らなかったが、ガリウスの兵たちは奴隷や下層民に特別な魔法の込められた薬物が与えられている。
それにより身体能力は勿論のこと精神、思考能力を抑制されている上、痛覚を含めた感覚が麻痺しているのだ。
言わば指示、命令を実行する知能を持ったゾンビに近い。
そのため銃撃により自身の身体を撃ち抜かれても衝撃に身じろぎしても意に介さず進み続けていく。
とは言え、不死身ではない。
生命活動を続けられなくなる程のダメージ（脳の損傷、大量出血などによる生命維持が出来なくなる程度）を与えれば倒れて動かなくなる。
しかし、そんなことは掛井たちに分るはずも無い。
そんな生きる屍たるガリウス隊に対し掛井の小隊は小銃などの基本

的な装備しかない。
しかも携行弾薬も限られている。
射撃開始から２０分程で手持ちの弾薬を使い果たした。
一方、伊藤が送り込んだ増援は混乱する難民に阻まれ未だに辿り着けていない。
「掛井少尉！小銃の弾が・・・！？」
あちこちから弾薬欠乏が報告されてくるがどうにも出来ない。
「９ｍｍ拳銃で応戦！それも尽きたら・・・後退するしかない・・・」
後ろにいる難民のことは気になるものの、部下の安全も考えねばならない。
はっきり言って銃剣で甲冑を着込んだ兵士に対抗出来るとは思えなかったからだ。
たとえ出来ても戦力差がありすぎる。
だが、掛井は見た目の重厚さからガリウスの歩兵隊を見誤っていた。
情報が無いのだから仕方ないのだが、これが彼と彼の部下の運命を決定付けた。
掛井たちが９ｍｍ拳銃を手に応戦を始めた時、ガリウスの歩兵隊は見た目の重厚さとは裏腹に常人離れした速度で持って一気に突撃してきたのだ。
思わず撤退を叫んだ掛井だったが、時既に遅かった。

「なんと言うことだ！？」
ガリウスは歩兵隊の損害に信じられない物をみた。
歩兵隊３００が難民を守る４０人を前に半数以上も損害を出したのだ。
銃撃だけで直接の被害が８０人、その後、銃撃の負傷により更に１００人以上が死亡したのだ。

つまり掛井たち４０人の前に１８０人が打ち倒されたのだ。
残った歩兵隊も負傷者が多く、戦力としては壊滅状態だ。
「奴等の力はこれ程までに強力だというのか？」
ガリウスは日本が防衛に来たのも意外だったが、たった４０人なら簡単に潰せると踏んでいた。
しかし、実際には全員を討ち取りはしたものの、その損害は軽視出来ないレベルになっている。
「日本め・・・侮れんな」
冷静になって考えたガリウスは、日本の兵士の装備品を集めて持ってこいと指示した。
これを解析し参考にすれば日本に対抗できるばかりか一大軍事勢力になれると踏んだからだ。
しかし、その望みに立ちはだかる障害が現れる事になる。

丘の上に辿り着いたベサリウスは眼下の様子に自らの動きが遅かった事を認識した。
難民キャンプはなんとか無事の様だが、ガリウスの軍勢はその手前で動きを止めてなにやらやっているのが見える。
「奴等、難民を守った日本の兵士をなぶっているのか！？」
ベサリウスは激昂した。
難民キャンプを守った日本の兵士たちの遺体から衣服から何から何までを強奪していたのだ。
例え戦いに敗れても敗者の躯は丁重に扱うべきだ。
しかし、ガリウスはそうはせずに好きに暴れていた。
「ベサリウス様！」
着いてきた従士もその無惨な光景に怒りを燃やした。
騎士たるものがやるべき事ではないからだ。
ガリウスも元は騎士であるならそこは考えて然るべきであった。
「全騎続け！滅びたが我等はホードラーの騎士！あのような無道を

許すな！」
戦力差があると言えどガリウスの兵士は日本の兵士の遺体を漁るのに忙しい。
ならばその虚を突く！
ベサリウスの号令一下、騎兵５０騎丘を駆け降りガリウスの軍勢に迫った。

「ふむ、これ等を持ち帰れば王も喜ばれるだろう」
一ヶ所に集められた掛井たちの遺品を前にガリウスは満足そうに笑みを浮かべた。
だが、その笑みが一瞬にして凍りついた。
丘から駆け降りてくるベサリウス率いる５０騎の騎兵を見たのだ。
ベサリウスは爵位こそ男爵どまりだが、その天才的な騎兵戦術、そしてベサリウス自身が鍛えた騎兵隊の勇猛さは知れ渡っている。
そのベサリウスと騎兵が一直線に自分たちに向かってくる様にガリウスは血の気が引いていくのを感じた。
「て、敵だぁ！」
他の兵士も気付き周囲は慌てふためく。
「お、落ち着け！全軍、密集陣形（ファランクス）！騎兵の突撃を防げ！」
ガリウスは対騎兵戦術でベサリウスの騎兵の動きに対抗しようとした。
だが、槍と盾を全面に押し出した密集陣形は最初の一撃で脆くも砕け散る。
ガリウスの部隊が弱かった訳ではない。
だが、掛井たちの必死の応戦の前に戦力が大きく低下しているのもあったが、何よりもベサリウス騎兵隊の衝力は半端ではなかったのだ。
騎兵それぞれが脆く、隙間があるところを探しそこに飛び込む。

密集陣形の隙間を突かれたガリウス軍は一気に突き崩された。
「生かして帰すな！」
ベサリウスが自ら率先して剣を振るう。
騎兵隊はベサリウスと共に剣を振るいガリウスの部隊を分断した。
「くっ！やりおるなベサリウス！」
ガリウスも自ら剣を取り自分に迫るベサリウスの攻撃をいなそうとするが、歩兵中心で残りは弓兵と徒歩騎士ばかりなため騎兵の相手が厳しい。
機動力に翻弄され騎兵の衝力に吹き飛ばされ頭上から鋭い一撃が見舞われる。
如何に魔法薬により強化されていたとしても、とてもではないがガリウスの部隊ではどうにも抑えきれない。
なによりも、独自の判断力が失われているために咄嗟の対応に遅れがでてしまう。
つまりガリウスの歩兵隊は単純な状況による攻勢に置いては極めて強力ではあったものの、咄嗟の判断が必要な状況では後手に回らざるえないのだ。
だが、数の差がそのベサリウスの勢いを止めてしまう。
なまじ密集陣形に突入したので人の壁に囲まれてしまったのだ。
だが、ベサリウス騎兵隊はそんな事では討ち取れはしない。
ベサリウスの背後に常に付き従う旗を持つ騎兵を目指して集結し、密集陣形の包囲の中から飛び出した。
「反転！このまま後背を突く！」
先頭のベサリウスが反時計回りにガリウス軍の周囲を駆け出す。
ガリウスが慌てていたのもあるが、瞬時の判断が出来ないガリウスの軍はその動きに素早く対応出来ずに弓兵ばかりの脆弱な後背を突かれた。
「おのれ！」
忌々しいと言わんばかりのガリウスだったが、このままでは勝ち目はない。

戦利品を失いたくなかったガリウスは撤退を考えた。
「弓兵は諦めろ！全軍撤退！」
そう言って自分と護衛の数騎で戦利品を片手に逃亡を開始した。
「逃がさんぞガリウス！」
ベサリウスはそう叫んだが目の前の敵を片付けなければならない。
このままガリウスを逃がしてしまうか？と思われたその時、ガリウスの前方の地面が吹き飛んだ。
「うわぁ！？」
急に立ち止まった乗馬から思わず落馬してしまう。
「な、なにが・・・？」
全身に響く痛みをこらえ前を向くと金属で出来た馬のいない馬車があった。

「逃がすな。殲滅せよ」
伊藤は感情を押し殺し、ただ目の前の外道を逃がさない事だけを考えた。
伊藤は難民の混乱で増援に行けなかった場合を考え、別の場所に急遽橋を作ってここに来たのだ。
使わないと思った９２式浮橋がこんな形で役立った。
だが、掛井率いる小隊の最後は遠目からでも見えていた。
そしてその後の扱いも・・・。
「仲間の仇を取れ！全隊攻撃開始！」
８９式装甲戦闘車の３５ｍｍ機関砲がガリウスの周囲に激しい土煙をあげる。
「ヒィィ！」
情けない悲鳴をあげつつ膝を丸めてガリウスは身を守った。
しかし、そんなので身を守れるはずもない。
次の瞬間にはガリウスは肉片と化していた。

第１２話「難民を守れ！」（後書き）

第１２話終了です。

遂に出た被害に自衛隊は、日本はどうするのでしょうか？

この続きは次回でｗ

では次回でお会いしましょう。

第１３話「理解」（前書き）

犠牲者を出日本、そして、義を持ってガリウスを討ったベサリウス。
二人の出会いが日本に新たな針路を示す。

第１３話「理解」お楽しみください。

第１３話「理解」

ガリウスが死に、残った兵士たちは混乱の中でベサリウスに討たれていく。
流石に怒りのまま混戦の中に入り込めなかった伊藤は状況を見守るしかない。
だが、最終的にガリウスの部隊は殲滅され、生き残りはいなくなる。
本来なら降伏を進めるのだが、ガリウスの軍勢は薬物により意思がない。
命令が無ければ降伏もしない。
故にどの道、殲滅する以外無いのだ。

基本的にバジル王国は鉱山による収入が主になる。
その性質からどうしても荒くれ者やならず者が集まる。
そうなれば犯罪も増え治安が悪化するのだが、バジル王国ではどんな軽い犯罪を犯したにしても刑罰は単純だ。
薬物により意思を奪われた生きた屍にされ奴隷か囚人兵となる。
薬物を使うことで反抗心を奪い、命令に忠実な人形と化すのだ。

ガリウスの部隊が殲滅された時、自衛隊とベサリウス騎兵隊は互いに睨みあっていた。
ベサリウスにすれば自領に無許可で入り込まれているし、自衛隊からすれば元ホードラー王国の貴族相手だ。
互いに油断できない。
しかし、ベサリウスはこれ以上不毛な睨み合いをする気もない。
ならば、せめて日本の兵士の遺体と遺品を返還したいと思った。
「ベサリウス様！危険です！」
王国を滅ぼした日本に危機感を持った部下が注進するが、少なくと

も難民を守ろうとしたのだ。
ベサリウス自身、義を知るものとして日本もまた義を知るものだと思っていた。
義を知るならば話ぐらいはしても危険はない、そう判断したのだ。
「大丈夫だ。彼等が無闇に攻撃するならば、ガリウス軍と一緒に討たれている」
そう言って一人で自衛隊の鉄の車に向かっていく。
その様子を見ていた伊藤は８９式装甲戦闘車から降りてベサリウスに向かって歩きだす。

両者は顔が見える位置で止まる。
ベサリウスは馬から降りると伊藤に向かって声をあげた。
「私はベサリウス、この地を統治する者だ」
恐れるものは何もない様な威風堂々とした名乗りに伊藤も応えた。
「私は日本国陸上自衛隊レノン駐屯地指揮官、伊藤重信（いとうしげのぶ）少佐です」
ベサリウスは奇妙な出で立ちの伊藤に興味があった。が、まずは難民を守り散った日本の兵士の遺体や遺品を返還する事を告げる。
その申し出に伊藤は感謝の言葉と勝手に領内に侵入した事を詫びた。
二人は互いに話が通じる相手だとすぐに理解するが、双方がここでいきなり会談する訳には行かない。
ベサリウスは領内の意思をまとめてからで無ければ出来ない。
伊藤に至ってはその権限がない。
「貴君らの勇敢さと崇高な行為に敬意を払う。また会おう」
ベサリウスはそう言って馬に乗り部下の下に向かっていく。
伊藤はその後ろ姿に敬礼で答えると、掛井たちの遺体と遺品を残さず集める様に指示を出した。

野は難民キャンプに起きた襲撃をその日の内に耳にした。
田辺から無線電話で報告されたのだ。

その上で犠牲者が４０人でたこともだ。
これだけ纏まった形で犠牲者が出た事は転移後初だろう。
それまで自衛隊の犠牲者はエルフとの誤解により一名、そして一連のファマティー教のテロで八名、合計九名であった。
しかし、ここに来て４０名が難民キャンプを守るために命を落としてしまった。
これは問題になる。
北野は即座にそう考えた。
その為、田辺との話を一端切って日本政府に連絡を行った。
後日、詳しい経緯はまとめて報告する事になったが、この話に鈴木たちは狼狽えた。

「・・・４０名、決して少なくない人数です」
伊庭は苦しそうに言った。
彼とて政治家だとしても、自衛隊に対して責任を持った立場にある。
この事態には彼自身、難民を刺激しないように配慮するよう通達を出していたのだ。
それがこの結果ならば、責任を持たなければならない。
「確かに少なくない。だが、今回の事態は不測の物だ」
伊達はそう言いながら伊庭の考えを読み取る。
伊庭の責任感を把握してた伊達はそう言って責任追及の話にならないようにした。
誰が悪い訳でもないのだ。
しかし、誰かが責任を負わねばならない。
まさか現場の人間に責任を押し付ける訳には行かない。
だが、鈴木も伊達も、こんな状況下で伊庭に辞められても困るのだ。
伊庭は冷静に場を分析し、今までの防衛大臣と違い明確に自衛隊に何が出来何が出来ないのかを把握している。
その上で政治家でありながら戦略家でもある伊庭は得難き人材だった。

何故彼が政治家になり、自衛隊に行かなかったのかが不思議な程だ。
「現場の指揮官は伊藤とか言ってたな」
鈴木は確認するように伊庭に聞いた。
その言葉に伊庭がまさか、と言った表情を見せる。
「総理！現場の人間を人柱にする気ですか！？」
絶対に承服しかねると言った雰囲気で伊庭は鈴木に詰め寄った。
しかし、鈴木とて分かっていた。
それがどれだけ卑怯な事で許されざる事かぐらいは・・・。
だが、ここで防衛省のトップを替える事など出来ない。
この状況下で伊庭以外に防衛省を任せられる人材もいない。
ならば伊庭が責任を取って辞めなくていい様にしなければならない。
「伊庭、今お前以外に誰が防衛省をまとめられる？」
正直、鈴木とてこんな判断を下したくない。
だが、今は有事なのだ。
日本が転移し、存続の危機があるなかなのだ。
「すべては私の判断であり決定と明記しなさい。全責任は私が負う」
はっきりと告げる鈴木に伊庭は何と言って良いのか分からなかった。
鈴木は恨みも何もかも自分一人に集める気なのだ。
それは伊達も付き合うと言うぐらい一人で背負い込むには重すぎる物だ。
しかし、鈴木はやるだろう。
そうして各方面がやり易い様にしている。
例えそれが自身が不名誉な汚辱にまみれるとしてもだ。

「伊藤重信少佐。現時点を持ってその任を解く。速やかに日本に帰国せよ」
苦々しい思いで北野は直接レノンに出向き伊藤に告げた。
田辺が抗議の声を上げようとしたが、それよりも早く伊藤は了解しました。と言って敬礼した。

「・・・すまない」
北野にしては珍しく北野は苦しそうだった。
そんな北野に伊藤は笑顔を見せる。
「お気に為さらずに、私一人の身で問題を沈静化出来るなら安いものです」
そんな伊藤に田辺は泣きそうになっている。
北野はせめて何か出来ないか？と聞くが伊藤は頭を横に振った。
「４０名もの隊員を犠牲にしてしまったのは私自身の指揮に問題があった。それは事実です。それに・・・」
一端言葉を切る伊藤は何か遠くを見ている様だった。
「これまでに出た犠牲者の遺族に詫びにいかねばなりませんから」
そう言う伊藤の顔を見ながら北野は決意を新たにする。
「総理からは現場の人間の名前は出さずに蹴りを着けると言われています。しばらく日本でゆっくりしてください」
伊藤は俯きながら被ってた帽子をさわる。
その表情は帽子に隠れ伺うことはできない。
「伊藤さん、帰国は一時的なものです。貴方にはまだまだ仕事を任せたいのですから」
北野は絶対に伊藤をこのまま終わらせる気などなかった。
何故なら伊藤は今まで的確に行動し、今回以外の事態でも常に功績をあげてきた。
それだけ状況判断ができ、尚且つ人望もあった。
だからこそこの地に欠かせない人材なのだ。
「感謝します。それとお願いがあります」
北野の善意に乗っかる形で悪いとは思ったが、伊藤はこの機会をおいて他に頼む事はないと判断していた。
「程度によります、としか言えませんが・・・」
はっきり言ってホードラーとアルトリアの両方に責任を持つ北野は必ず出来るとは言えない。
「それで構いません。ただ、対岸のベサリウス領の事です」

伊藤は難民キャンプに襲撃をしようとした勢力を相手に戦った勇士の話をする。
伊藤は彼なら日本に取って有益な存在になると判断しての事だ。
彼がもし、日本と正面から向き合ってくれるなら、日本に新しい友人が作れる。
そう願ったのだ。
「わかりました。早期に私自ら動いてみます」
北野の言葉に伊藤は直立不動の敬礼を持って応えた。

第１３話「理解」（後書き）

更新遅れて申し訳ない。
１日ずれてしまいました。
何せ帰って来たのが夜中で疲れてまして・・・と、言い訳しても仕方ありませんね。

さて、第１３話如何でしたでしょうか？
賛否分かれる処置だとは思います。

では、また次回でお会いしましょう。

第１４話「活動再開」（前書き）

犠牲者を出したものの襲撃を押し返した日本は新たな方針を打ち出す。
それはこの世界に積極的に干渉することになるのだが・・・。

第１４話「活動再開」お楽しみください。

第１４話「活動再開」

――――レノン市対岸難民キャンプ

最早誰も居なくなった難民キャンプは自衛官たちが資材の撤去のために作業をしていた。
先の襲撃により４０人が犠牲となったあの戦いより難民は日本側へと移動させたのだ。
ただし、受け入れた訳ではないので新たに難民キャンプを設置している。
とは言え、今までのキャンプに比べれば雲泥の差だろう。
プレハブとは言え簡易住居に川から引いた水を浄水器にかけた水道。
そして簡易トイレ。
これらの他に赤外線等の警報が柵に張り巡らされ、勝手にこのキャンプから出ないようにされている。
しかし、劣悪な環境では無くなっているので難民たちに不満はない。
むしろかなり良くなっていると言えた。
また、これにより対岸からの新たな難民の受け入れは出来なくしている。
「間宮さん、伊藤さんの後任ですがよろしくお願いしますね」
田辺からの申し出に間宮勇次（まみやゆうじ）少佐は敬礼で応じた。
はっきり言って伊藤が失策を犯した訳でもないのに伊藤の代わりに、しかも昇進付きなのは気が引けた。
しかし、誰かがやらねばならないのは事実である以上は間宮は引き受ける気だった。
田辺に頼まれてから一週間経つが、今のところ特に問題はない。
集まった難民の安全も確保して、後は少しずつでも今いる難民を日本の領域に踏み入れさせる。
これを１ヶ月もやればここは誰も居なくなるだろう。

後は橋に敷いた防衛拠点と合わせて難民キャンプを自衛隊の駐屯施設へ作り変えれば無駄もなく使える。

「第０３、０４小隊は引き続き旧キャンプの撤去。第２中隊は周辺の警戒を第３中隊と交代だ」

基本的に事務屋だった間宮に実戦指揮は無理だ。

やって出来なくないだろうが、伊藤の補佐として事務関連を引き受けていたので自身は訓練の時以外は銃を持ったこともない。

しかし、伊藤の信頼も厚かった間宮は最大限の労力を惜しまなかった。

「間宮大隊長。橋の陣地化は一段落ついた模様です」

今まで自分が伊藤にやってきた様に部下の安西四郎（あんざいしろう）が報告してきた。

「では第０３、０４の手伝いに第１中隊全体で当たらせろ。日暮れまでには終わらせるんだ」

そう言うと日本本土からの増援を確認する。

明らかにオーバースペックな代物が送られて来たのには間宮自身驚いた。

鉄道の施設も急がれていたが、まだアルトリア内に留まっている。

なのに鉄道を使わずに送られて来たこれらを見る限り日本の燃料事情はかなり良くなっているのだろう。

「もう旧式だが、ここでは遥か未来の代物だろうな」

間宮の手にした資料には「７４式戦車」の文字が書かれていた。

７４式戦車・・・日本が開発した第二世代主力戦車だ。

９０式戦車は高性能だったがコストの問題もあり少数が配備されているだけで、１０式が出るまでは実質の主力だった代物だ。

とは言え、１０式戦車も配備されだして間もない戦車なので数的には未だ主力の地位にある。

恐らく今回アルトリアに回されたのは１０式配備に伴い退役する予定の物が送られて来たのだろう。

また、７４式戦車以外にもこれまた旧式も旧式だが、６０式自走１０６ｍｍ無反動砲や７４式自走１０５ｍｍ榴弾砲まである。

既に鉄屑に変えられているとばかり思ったが、それなりの数は確保してあったらしい。
「しかし、我々からすれば親父の代の代物なんだが、ここではこれでもオーバースペックなんだよな」
日本から送られて来たこれらの装備を見る限り日本はこの大陸で事を構える事態になると判断しているのだろう。
「もしくは先の襲撃が精神的なダメージとなった・・・かな？」
政治の事は間宮には分からないし、その中に首を突っ込む気もない。
しかし、日本が未だこの世界では孤立している以上は無いとは言えない。
日本はエルフの国と国交を正式に樹立し、アルトリアとの国境沿いの都市建設が加速しているが、やはりそれ止まりだ。
他に国交を持った国が無ければ持つための交渉すら始まっていない。
これは南ホードラーが対立姿勢を持ったままなのと、西ホードラーが戦国時代化しているために日本がこれ以上先に進めないのが原因だ。
また、ファマティー教のテロ活動によりホードラーの開発が遅れたのも一因と言える。
とは言え、まだ足りない物ばかりだが着実に足場は固めて来た。
動くならそろそろか？
間宮はそう思うと伊藤が信頼を寄せていた北野がどうでるか、と考え出していた。

――シバリア市行政区

シバリア市内のテロの拠点を全て制圧する事が出来た高橋たちはようやく3日の休暇を与えられた。
しかし、この休暇が新たな任務の前に与えられる物だと知っているのは高橋だけだ。

次の任務はベサリウス領に特使の護衛として向かうことになる。
それが無事達成出来れば今度は北、バジル王国への攻撃だ。
今回はバジル王国をベサリウス領に組み込ませる為の戦いになる。
バジル王国はベサリウス領としか繋がっていないので、北野の目論見としてはバジル王国を日本が、ではなくベサリウス領に確保してもらい相互貿易をしたいと考えていた。
ベサリウス領には農耕技術を含めた技術を輸出、そしてベサリウス領からはバジル王国の鉱山からの資源の輸出。
これら相互貿易が条約として締結出来れば日本の産業が一部でも蘇る。
それを目しているのだ。
最初はバジル王国を日本領にしてしまえ、と言う主張があったが、飛び地になるので統治が難しい。
また、新たな領土を得てそこも開発、となると正直他の地域の開発が疎かになる。
いくら北野でも飛び地を含めた全域をカバーしきれる物ではないのだ。
だからバジル王国はベサリウス領に任せる他無い。
問題は、ベサリウス領を支配しているベサリウス元男爵が素直に受け入れるか？と言うのがある。
何せかなり義理難い人物らしい。
ちょっとやそっとで独立するとは思えない。
それでも北野には勝算がある様だが、高橋には思い付かない。
「結局、蓋を開けるまでは分からない、か・・・」
北野ほど視野を拡げれない自身には実際に事に接しない限りは分からない。
そう考えると高橋はシバリア市内仮駐屯地となったカトレーア邸近くの貴族の屋敷の窓を開けた。
貴族の屋敷は広く、小隊だけで使うには広すぎた。
なのでテントやプレハブ住まいの他の部隊もここに来ている。

おかげで庭は車両置場兼整備場と化していた。
しかも、付近の住人が物珍しさに見物までしている。
関係者以外立ち入り禁止にしているが、時折行商が入り込んで商売する有り様だ。
「営門は何をやってんだ?」
賑やかな駐屯地入り口付近を見た高橋は頭がいたくなった。
見知った連中が行商の相手をしてるからだ。
「あのバカ・・・」
遠くから井上のはしゃぐ姿に高橋は頭痛薬がほしくなった。

第１４話「活動再開」（後書き）

最近空気な主人公がまた活躍しだしますｗ

さて、あっと言う間に１４話まで来てしまいました。
色々すっ飛ばしてるようにも思いますが、ダラダラやってる場合でもありませんしね。
後で補足でもしようかな？
と思っています。

多分やらないけどｗ

では、また次回でお会いしましょう。

第１５話「旅路」（前書き）

比較的話が通じると思われるベサリウスとの交渉の為に動き出す日本。
果たして、交渉の行方は・・・？

第１５話「旅路」お楽しみください。

第１５話「旅路」

――――レノン市　市庁舎

ベサリウス領に特使として向かうことになった田辺は、北野が推薦した特殊任務部隊と初めて対面した。
噂には聞いていたが、イメージしていたのとは違い若い自衛官で構成されているのに田辺は驚いていた。
田辺は鍛えぬかれた歴戦の勇士を想像していたのだ。
しかし、例え見た目は予想外であっても一番実戦を経験してきたのは伊達ではなさそうだ。

彼等の表情に自信が溢れている。

これだけでもどれだけ困難な任務を乗り越えて来たのかが伺えると言うものだ。
「はじめまして、今回特使として出向く田辺麻里（たなべまり）です」
キャリアウーマンと言う言葉がぴったりの田辺の挨拶に高橋たちも敬礼で答えた。
「今回護衛に付きます特殊任務部隊の高橋重信（たかはししげのぶ）少尉です」
互いに挨拶を済ませると高橋は道中の案内役として１人の少女を紹介した。
本来ならアインを連れて行きたかったのだが、田辺が女性と言うのもありミューリを連れてきていた。
「ミューリと申しましゅ」
ミューリはガチガチに固くなっていたのかちょっとばかり噛みながら挨拶した。
後ろでは井上たちが笑いを堪えながらも直立不動を保つ。
表情は変わらなくとも体が僅かに震えているのを見たらミューリは

泣き出すかもしれない。
「そう固くならなくても良いですよ。よろしくね？」
柔らかい笑顔で田辺がミューリに笑みを浮かべる。
ミューリは自分では雲の上の人の様な立場にあり、しかもかなりの美人な田辺に圧倒されていたが、思いの外、優しい人であると理解すると漸く緊張が少し解れた。
「彼女は度々我々を助けてくれました。今までは彼女の村への支援の恩返しとしてくれましたが、今回を機会に正式な報酬と言うのを出してください」
高橋の言葉にミューリは目を丸くする。
たしかに恩返しもあったが、それはこれからもずっと続けようとしていたし、何よりも高橋たちと一緒に居られるからだ。
報酬は有難いが、そうしてしまうと高橋たちと一緒に居られる機会が無くなるように感じる。
それはミューリに取って有り難くない申し出と言えるだろう。
そんなミューリの悲しそうな表情に気付いた田辺は溜め息を洩らした。
（なるほど、北野さんの言う通り生真面目なのね）
とは言えこのままでは可哀想に思った田辺は一つだけ良い方法を考えだした。
「分かりました。報酬は与えましょう」
田辺はそう言うと書類を書き出す。
どんな物だ？と高橋は疑問に思うが、書き終わった田辺が高橋に渡した書類にはミューリを特殊任務部隊専属の情報収集員とする旨が書かれていた。
「ちょ、ちょっと待ってください！これ報酬ですか！？」
ありえん、と思いながら田辺に詰め寄るが田辺はバッサリと切り捨てる。
「彼女にとっては報酬です」
有無を言わさぬ田辺にたじたじになりながら高橋は更に食い下がる。

「いや、しかし、勝手にそう言われましても・・・人事権の問題が・・・」
高橋は人事権の問題を口にしようとしたが田辺はそれに先手を打った。
「北野さんに了解を取れば問題ありません。即座に『その様に』手続きをとってくれますよ。なんなら今取りましょうか？」
北野なら承認しかねない。そしてやりかねない。
高橋は自分に退路がないことに気付いた。
「・・・了解しました」
諦めにも似た高橋にミューリは何が起きているか理解出来なかった。

軽装甲機動車3台と74式中型トラック2台、そして87式偵察警戒車1台、合計6台の自衛隊車両は87式偵察警戒車を先頭にベサリウス領内を進んでいった。
目指すはベサリウス領の首都（正確には首都ではないが）コンスタンティだ。
本来なら事前に連絡を、と考えたが、この世界における連絡手段があまりにも原始的かつ、日本では到底無理（鳩とか早馬、もしくは魔法通信と言われても日本では実用の範疇にない）があったため、最低限の護衛と共に直接乗り込むしかなかったのだ。
後々、問題になりそうではあるものの、連絡手段も無い為に白旗（一応特使であるとの証明になるらしい）を挙げたまま進むしかなかったのだ。
それ故に特使たる田辺を乗せた軽装甲機動車を守る形で全周囲警戒がとられている。
「コンスタンティは治安がいい」
とミューリは言っていたが、この世界にとって日本は異分子となっている。
如何に話が通じる相手と言われても、今までが今までなので警戒し

ないわけにはいかない。
ましてや、ファマティー教によるテロもあったが故、なおの事警戒せずにはいられなかった。
「一応、ベサリウス卿は武人であると同時に温和な人柄を持つ御仁なので、だまし討ちはしないと思います」
車内で田辺が交渉に必要な情報を少しでも必要としたため、ミューリはコンスタンティへの道すがら田辺に自身の知る限りの情報を教えていた。
冒険者として以前、コンスタンティに行った事もあるミューリの情報は、今まで彼女が知りえることの出来た貴重な経験でもある。
この世界ではそう言うのは秘匿されがちだが、だからこそミューリのように生きてきた、また生きてるものにとっては収入へと繋がる。
そのため、ある程度のお金をだせば情報を買えるのだ。
しかし、現在日本が保有するアルトリアは当然ながら、ホードラー地区では情報が集め難い。
何故ならば、ホードラー王国滅亡の混乱でそう言ったギルド（盗賊ギルドなる闇組織や犯罪組織）はその力を大きく失っていた。
と、言うのも、日本の情報を得るためにかなりの労力を向けたものの、ハイテク機器による警戒態勢の前では鍛えられた技が殆ど通用しなかったのだ。
結果、捕らえられ処罰されるものが続出し、その活動力を予期せぬ形で喪失してしまったのだ。

「その話通りであるなら、友好的に付き合えるかしら?」
一通り話を聞いた田辺は、内心とは裏腹な質問をミューリにしていた。
その問いの真意には気付かなかったものの、ミューリは首を横に振り否定を表した。
「いえ、ベサリウス卿は義に厚い人物です。王家を崇拝、とまでは言いませんが忠誠心は未だあるでしょう。それであればそう簡単に

は行きません」
愚直な武人であるが故に王国を滅ぼした日本と仲良く、は直ぐには無理だろう。
だが、同様に領民への責任感も持ち合わせている。
その利害を突く、それが鍵になると田辺は踏んだ。
「なるほどね。如何に先のバジルによって引き起こされた事件の事を差し引いても簡単には行かない・・・か・・・」
だが、そう言っているが思考の奥底ではベサリウスは唯の愚直な人物ではなく、それと同時に優秀な政治家でもあると考えていた。
「ま、出たとこ勝負かしら？」
努めて明るく言った田辺だが、少なくともそれなりの結果を出せると言う自信にあふれているようにも見えた。

第１５話「旅路」（後書き）

大変遅くなりましたが、ようやく更新できました。

取りあえず短いですがこれで第１５話は終了です。

ではまたお会いしましょう。

第１６話「苦悩」（前書き）

ちょっと用事で遅れそうなので途中ですが先に投稿します。

第16話「苦悩」

ーベサリウス領コンスタンティ

ベサリウスは自身の領内における内政に携わる為にコンスタンティの邸宅で執務を行っていた。
彼の前には幾つも羊皮紙を抱えた文官たちが幾人も並び、担当する仕事の結果、途中経過の報告などを行っていた。
先日の日本との接触後、日本に対する警戒は怠っていないが、目立った行動を取っていないために警戒するレベルは必然的に下がっていく。
逆にバジル王国からは再三に渡りベサリウスの領内に侵入、不法行為を繰り返していた。
そのため、内政に関わる仕事がかなり溜まり込んでおり、放置できない状況になっていた。
一応、バジル王国への睨みは現地に残してきた戦力で出来るが、こう言った内政に関わる職務においてはベサリウスの決済が不可欠なのだ。
そんな忙しい中、日本が来た、という報告はベサリウスを驚愕させるに十分だった。
「馬鹿な・・・何ら動きは報告されていないぞ?」
ベサリウスの疑問も分らなくないが、実は対岸のレノンを監視していた密偵は、早馬にて連絡しようとしたのだが、何せ日本は車両で移動しているのだ。
しかも密偵は日本側に気取られぬようやや迂回してコンスタンティに向かったのに対し、日本側はミューリの案内を受けつつも真直ぐにコンスタンティを目指していた。
そのため、密偵を追い越して日本が先にコンスタンティに辿り着くと言う奇妙な現象が発生したのだ。

「彼らは領主様に対する特使と言っておりますが、どういたしましょうか？」
コンスタンティの警備を任された警備隊長がベサリウスに判断を求める。
これがベサリウス不在であればお引き取り、もしくはしばしの逗留を願うだけの話だ。
しかし、特別な指示を受けてない現状ではベサリウス本人がいるならば、確認を取るのが仕事だ。
「う・・・むぅ・・・」
しばし考え込んだベサリウスではあったが、特使として来ているならば無下には出来ない。
と考え、「日が悪いので後日お会いしよう。それまでコンスタンティに逗留されよ」と言う書状をもたせた。

ベサリウスからの書状を受け取ったものの、さすがにこの世界の文字の読み書きにはまだなれていない。
アルトリア領域やホードラー地区であるなら日本語が使われたりしているのだが、流石にそれ以外では使っていない。
そのため、ミューリが代わりに読むと言う不思議な光景を作り出した。
「なるほど、向こうは何ら準備が出来ていないようね」
想定外の理由ではあったが、ベサリウス側にとって思わぬ不意打ちになってしまった事態を理解した田辺は、嫌な顔せずにベサリウスの提案に従った。
ただし、コンスタンティ内に滞在するとなると、双方にとって不要なトラブルの元と判断し、田辺はベサリウスにコンスタンティ郊外での野営を提案する。
ベサリウスにとっても本来なら特使にその様な失礼をしたくなかったが、ある意味で未知なる存在と言える日本を懐に易々と入れるの

は領民に不安を与えかねないと判断し田辺の提案を受け入れた。
代わりに、警護としてその周囲を兵で固める事を認めてもらっている。
これは警護と言う名目の監視、牽制とも取れるが断る理由も無いので日本側は受け入れていた。

田辺とベサリウスの合意により高橋たちはコンスタンティ郊外にて野営の準備を始め、車両の中で最も安全と思われる87式偵察警戒車を中心に円陣を組み、万が一に備えた。
もし、相手にその気があれば攻撃を受けかねないからだ。
事前情報でベサリウスはそう言った真似をしないとは分っていても、部下もそうだとはいえない。
とはいえ、ベサリウスの配下にも血気にはやるものが居ないわけではないが、主の意に反した行動派とらないので考えすぎということになる。
だが、こういった常に最悪の事態を考えるということは、徐々にではあるが高橋に指揮官としての自覚が芽生えつつあるとも言えた。

その日はそのまま日も暮れ、何事も無く翌朝を迎えた一行は、ベサリウスからの招待を待ってコンスタンティの領主の館へと足を運んだ。
そして、更迭された伊藤以外で初めてベサリウスと対面した。
「私がこのベサリウス領の領主、アウル・ベサリウス男爵です」
「日本国レノン行政代行官にして今回特使として派遣されました田辺麻里(なべまり)です」
互いに挨拶を交わすと席につくと、早速会談が始まった。
とは言え、ベサリウス側は本人以外にも数人がついていたが、日本側は田辺だけだった。
これは本来、外務省出身の田辺の部下から何人か派遣するはずだっ

たのだが、当人たちが嫌がったためだった。
付いて来ようとしたものも居たことは居たのだが、そう言った人物に限って一時的にレノンを離れる田辺の代わりにレノンの行政を仕切らねばならなかったりで連れて来れなかった。
つまり、今の日本はアルトリアやホードラーを得たことにより唯でさえ少ない人材が更に不足している状態なのだ。
しかし、田辺は逆にこの状況に燃えていた。
「では、早速ですが、日本は貴国・・・と言うのは失礼とは存じますが、貴国と争うつもりはありません」
まずは日本の立場を表明し、相手の反応を伺う事から始めることになる。
互いに手の内は伏せたままでだ。
「争うつもりがない、とは言うが日本はホードラー王国を併呑したではないか？」
ベサリウスは内心、田辺と同様に争うつもりがないとは言え、いきなり賛同して手の内を晒す愚を犯すわけには行かない。
ひとまずは同調せずにいた。
「その指摘につきましては我々日本側に非はありません」
むしろ、日本に突きつけられた理不尽な勧告により始まった戦争だと告げる。
その内容は今は無き王宮から聞いてはいたが、ベサリウスは初めて知った内容の様に装った。
「はて？私はそのように聞いてはいないがね？」
ベサリウスの様子に知っていてとぼけている、と判断できない田辺は別角度から攻めることにした。
「ベサリウス卿が知らぬならばこの話をしても無駄でしょうね」
田辺の敢えて引く対応に、さしものベサリウスも少なからず驚いた。
強硬に自己主張、もしくは事詳しく説明でもするのかと思っていたのだ。
そこでベサリウスはこの件から少しでも日本がどれだけの手札を用

意してるのかを探ってみる事にした。
「まあ、何かしら証明でもあればいいのですがね」
流石に今直ぐ証明は出来ないと踏んでいたのだが、これは少々うかつだったと後悔することになる。
「あら?証明すればいいのですね?」
田辺はそう言うと用意していた資料から、当時ホードラー側から伝えられた勧告文をベサリウスに手渡した。
これにはベサリウスも舌を巻く。

（まさか、こうなると既に想定していたのか?）

間違いなくフーリエ・ホードラー4世国王（今では元国王）と、今は何処かへと落ち延びたバルト・カストゥーア伯爵、そして既に戦死しているハーマン大司教の署名が書かれていた。
しかもその筆跡は間違いなく3人のものだ。
何度も見たことのあるものである以上間違いようがない。
「・・・なるほど、これは貴国の仰るとおりですね」
まさか重要とも言える文書を簡単に差し出すあたり、日本は相当な手札を用意していると判断できたベサリウスは、下手な言動は出来ないことを悟った。
もっとも、この文章は、それらしい羊皮紙にレーザープリンターでカラーコピーしたものだったのだが、流石にそれを見抜け、と言うのは酷な話でしかない。
「その上で貴国は我が方に何を望まれますかな?」
腹の探り合いが終わったわけではないが、事前の情報収集も出来ていないベサリウスにとって会談を引き延ばしながら日本の意図を探るのは難しいことだ。
むしろ早い段階で日本の求めてくる内容を把握せねば、対応を誤ると判断していた。
「そうですね、率直にいきましょうか」

田辺はもう少し粘るかと考えたものの、ベサリウスがあっさり引いた上で直球を投げてきたことにその真意を測りかねていた。
とは言え問われた以上は答えねばならない。
このとき田辺はベサリウスを誤解していた。
日本で政治家と言えば腹に一物も二物持った議員連中と言う認識だ。
しかし、ベサリウスは将であり政治家でもあるが謀略家ではない。
この世界での政治家とは内政に秀でたものであって、日本のそれとは少々異なるのだ。
「我が日本国としては貴国と友好、国交を持ちたいと考えています」
田辺のこの一言から両者は熾烈なせめぎ合いを始めることになる。

第17話「双方の思惑」

田辺たちがベサリウス領で会談を始めたのと同時期、バジル王国では大規模な軍勢がベサリウス領に向けて動き出していた。
これは、先の戦いでガリウスが帰らずにいたために戦死、もしくは捕虜となっていると予測されることから、これを理由にベサリウス領を制圧してしまおうと画策したのだ。
既にこの時、ガリウスは日本の自衛隊によって戦死していたのだが、誰一人として帰還しなかったことから情報として何も届いていなかったためだ。
そのためバジル王国のザハン・バジル王は、ガリウスが負けたのは間違いないとしつつも、少なくともベサリウスの戦力は大きく低下してるものと考えたのだ。
「陛下、では吉報をお待ち下さい」
謁見の間にて玉座に座るザハンに対して膝をついての礼をするのはヘルマン・カノープス将軍だ。
元はバジルの配下の平貴族だったが、バジル領の軍事に携わっていた実績から独立と共に将軍に列せられていた。
「うむ、どんな手段を用いても構わん。必ず彼奴の首を持って帰れ」
ザハンの言葉にヘルマンは恭しく礼を取ると、豪華な意匠を凝らした真紅のマントを靡かせて謁見の間を出て行った。
「陛下、よろしかったので？」
ヘルマンが去った後でバジル王国の内政責任者たる地位にいるレオナルド・フリーマン内務卿が今回の出兵についてザハンに尋ねてきた。
「貴公は何かと反対してきたが、この期に及んでまだ言うのか？」
些かも不機嫌さを隠そうともせずにザハンはレオナルドを睨み付ける。
元はバジル領の財務を仕切っていた故の人事であったが、少々小う

るさいと感じていた。
「されど、今回の出兵のために国内から根こそぎ動員しています。そのために国内の鉱山を筆頭に各種産業が停滞しております」
レオナルドは出兵にかかった費用、食料、兵員をかき集めた為に民の生活が困窮していることを理解していた。
とは言え、王（成り上がりでも）の命である以上はこれを実行しなければならない。
お陰で治安を維持すべき戦力まで引っ張り出しているのだ。
治安悪化も懸念される。
当然、国内の食料事情は逼迫し、民はその日の食事にも事欠き、働き盛りの男手が殆ど持っていかれてしまえばバジル王国における最大の収入になるはずの鉱山は機能を停止する。
また、唯でさえ食料の自給さえままならない状態だったのに対し、その生産力は著しく低下していた。
金銭などの費用はまだある程度蓄え（元々税金をかなり取っていたため）があるが、人はお金を食べて生きているわけではない。
それらは、元々ある程度の形として問題があり、今まではそれでも何とかなっていたが、出兵により問題は大きく拡大している。
この状況で内政など打てる手は少ない。
よしんば打てたとしてもザハンが認めるとは思えなかったが・・・。
「ベサリウス領は広くはない。だが、それでも食料はかなりの生産量が見込める」
つまらない事を気にするな、といわんばかりのザハンにレオナルドは目の前が暗くなった。

（これで反乱等が起きたら事だろうに）

レオナルドはそう思いながらも、王の決定には逆らえなかった。
「見ておれ、この時代に西方を統一し、我が名を歴史に刻んでみせるわ！」

自信に満ちた言葉であったものの、元々の主であるホードラー王国を滅ぼしたニホンと言う得たいの知れない存在と直に領土を接する事の危険性を無視しているでは？とレオナルドは感じていた。

ーベサリウス領コンスタンティ

田辺とベサリウスの会談は2日たった今日も行われていた。
途中何度か休憩を挟みつつ行われた会談は未だ合意に至らず、互いの主張とそれに併せての議論が続いていた。
「友好関係については異存ありませんね。ですが、国交ということは私に独立を求めていると言う事になります。私は例え国が滅んでもホードラー王国の一家臣です」
ベサリウスの変わらぬ言葉に辟易としながらも田辺は説得を続ける。
ここでベサリウスが立たねば日本は自力で広大な領域を守らなければならなくなる。
如何にこの異世界の軍事力を圧倒出来ても、それは局地的なものに過ぎない。
他国と面する広大な領域すべてを守れる訳ではない。
日本外人部隊となった在日米軍を併せても流石に数が足りない。
「ですが、いつまでもその姿勢では限界があるのではありませんか？必要とあれば我が日本国政府はあなた方の要請次第で支援、援助する用意もあります」
肥沃と言うほど肥沃でもない土地だが、手を加えれば幾らでも生産力が向上するのだ。
それを聞いてもベサリウスは動かない。
「それでもだ。それに、この領内を守るだけなら何ら問題はない」
おそらくベサリウスは自分の領地を守ることに力を注いできたのだろう。

それを伺わせるに足る自信が見て取れた。
「しかし、先の難民襲撃でも分るように、この地を狙うものは一人や二人ではありません。このままでは何れこの地は踏み荒らされる事になります」
田辺の言葉にベサリウスも思うことがあったのだろう。
少しばかり表情が曇った。
「この状況を作ったのは我が国かもしれません。しかし、時代が動いているのもまた事実です」
田辺の言葉を聞きながらベサリウスは考え込んだ。
確かに、日本が現れ、ホードラーが滅び、そして西方がこうまで乱れて居るのは時代が動いたからだろう。
しかも北のバジル王国はベサリウス領を常に狙っている。
そして、隣国であったタラスク王国が乱立した西方諸国を飲み込み始めている。
既に西方半ばまできているのだ。
ハッキリ言って悠長に議論していられる状況にはない。
しかし、ベサリウスには決断しかねた。
長く王家に仕え、それを誇りとしてきたのだ。
時代がそうなったからと言って簡単に捨て去るのは簡単ではない。
「・・・一旦休憩にしましょう」
ベサリウスは考える時間がほしかった。
正直に言えばそれが最善であり最良な判断だろう。
頭では最初から分っている。
しかし、気持ちの整理が付かないのだ。
「・・・分りました。続きは明日にしましょう」
既に日も暮れ、夜の帳が下りてきているのに田辺も今更ながらに気付いた。
「ですが、今一度考えてください。既に残された時間はあまり多くはありません」
暗にベサリウス領を取り巻く状況が切迫している事を揶揄するため

に言った田辺だったが、まさかこれが本当になるなど露ほどに思っていなかった。

ベサリウスの予想以上な頑固さに田辺は辟易としていた。
これなら北野が言う尻に火が付いた状況を待てば良かったと思う。
しかし、その状況が実際に着てからでは遅すぎる。
ならべく日本が関わらずに済ませれるならそれに越したことはない。
そのために北野に無理を言って今回の会談を行ったのだが、少々稚拙だったのか？
と考えてしまう。
しかし、あの北野が何ら確証もなく会談を認めるわけがない。
恐らく、北野は何らかの確信があって会談を認めたのだ。
いや、この場合、北野が持っていて自分が持っていない切り札というべきか？
それが何かは分らないが、少なくともタイミング的には問題ないはずだ。
田辺は野営地に帰る途中でそう考えていた。

「田辺さんと北野さんの違いですか？」
野営地で北野と最も接してきたであろう高橋に田辺は思い切って聞いてみた。
会談の内容は明かせないが、北野と自分の違いを感じた限りでよいので教えてほしいと言われた高橋は、内心で交渉がうまく言ってないのを感じた。
「なんでも良いから気付いたことを教えてもらえないかしら？」
田辺にそう言われはしたが、流石に高橋にも思いつかない。
そもそも担っている役割が違うのだ。
少し考えた高橋は思いつくことをそのまま言ってみる。
「男性と女性ですかね？」

「そんなのは言われるまでもないわね」
「役職と権限？」
「それも言われるまでもないわよ？」
「じゃあ、抱える仕事の量？」
「じゃあ、て・・・それは役職と権限が違えば変わるから同じくよ・・・まじめに考えてる？」
じと目で睨む田辺に高橋は冷や汗を流した。
「これでもまじめなんですが・・・」
佐藤ならおちゃらけた感じで言うだろうが、高橋にそれが出来るわけがない。
「本当に何でも良いのよ」
田辺はそう言って高橋の顔を見上げる。
二人は田辺の方が年上だが、背は高橋の方が頭一つ分程高い。
そのためどうしても田辺は見上げる形になる。
「何でもいい・・・と言われましても・・・あ」
ふと思いついた様な高橋の様子に田辺は興味津々で言葉を待つ。
「持ってる手札の量」
高橋は今度こそ、と言う思いで言ったのだが、田辺はあきれた様子だった。
「あのねぇ、そりゃ私と北野さんでは年季も違うし当然、交渉の手札は全く違うわよ」
ため息混じりに言う田辺の様子に高橋は慌てていた。
「で、ですが、北野さんは自分の下に元ホードラーの人も抱えてますし・・・」
高橋はどう取り繕うか迷っていた。
そんな高橋に田辺は聞いた自分が馬鹿みたいじゃない、と言う雰囲気を出している。
しかし、この時田辺は気付いた。
抱える人材。

たしかに北野は多くの人材を抱えている。
その中には元ホードラー王国の人も少なくない。
それら多くの人材を抱えれたのには理由があるはずだった。
「例えば、どんな人かしら?」
田辺は北野がそう言った人材をどう抱えたのかは高橋にも分らないとは思ったが、だが、どんな人が居るのかぐらいはわかるだろうと思い聞いてみた。
「そうですねぇ、ラーク治安警備局長やシュタイナー補佐官」
二人とも元ホードラー王国の将で、しかも日本との戦いに参加していた。
当然、日本の力を目のあたりにしての鞍替えかもしれないが、話に聞く限りではかなり優秀で人望もあるらしい。
そして次の言葉が田辺を驚愕させた。
「それと、カトレーア元王女とその護衛たちですかね?」
それは田辺も予期せぬことだった。
「はぁ?カトレーア元王女は今や一民間人でしょう?」
カトレーアは今では王家の人間ではなくただの一市民だ。
少なくとも行政にはかかわっていない。
にも関わらず出てきた名前に入っているのはどう考えてもおかしかった。
「ですが、彼女を粗略に扱わずに遇している事で人心を集め、纏めているなら立派な手札だと思いますがね」
高橋は思ったことを口にしているのだが、田辺は逆に高橋に興味を持った。

(ただの脳筋、じゃないようね。ちゃんと見るべきところはおさえているのかしら?それとも単なる偶然?)

そんな田辺の考える様子に高橋はまたやってしまったか?と言う様

な渋い表情になる。
しかし、今回の回答はどうやら田辺にとって満足いく答えだったようだ。
「手間をとらせたわね。ありがとう」
田辺はそれだけを言うと足早に自室代わりの天幕に向かった。
礼を言われた高橋は一体なんだったんだ?と言う感じではあったが、ようやく開放されたことに安堵していた。

第１８話「急転直下」

田辺は自分に用意された天幕に急いで戻ると資料を漁り自分の手札を確認しだした。
今の田辺に欠けているもの、それを確認するためだ。
高橋から聞いた北野と自分との差、それは単純な能力ではなく抱えてる手札にある。
何よりも権威と言う手札を持っているのだ。
そして、権威とは忠誠心に厚く頭の肩い人物には多大な影響力を発揮できる。
この場合はベサリウスがそれに当たる。
いかに利害を説いても今のベサリウスは王家に対する忠誠心から、反逆とも取れる独立などしないだろう。
例えそれが亡国の道としても受け入れられるはずがない。
（そうよね、いかに話が通じるとは言っても私たちの価値観とは違う価値観を持っているのだから）
時間は深夜を回った頃にそれに思い至った。
しかし、尚も問題がある。
問題点を発見できてもそれをどう解決するか？だ。
北野は権威を手札として抱えていても、今の田辺にはそれがない。
よしんば、その権威を傘に着て交渉しようにも手元にそれがあるわけでもない。
かと言って、帰還して手はずを整えている時間があるかも疑問だ。
何せここホードラー西方は今や群雄割拠の戦国時代だ。
しかも更に西方の外敵タラスクの侵攻も著しい。
既に何カ国かは戦う前に降伏していたりもする。
また、ベサリウス領北部に位置するバジルの動向もある。
はっきり言ってわずかな時間も惜しいのだ。
（こうなれば、北野さんには悪いけど持ってる手札を借りるしかな

いわね・・・）

一か八かの博打と言える手段ではあるが、現状それ以上の妙手がないと考えた田辺は翌日の交渉に全てをぶつけるしかなかった。

これで駄目なら日本は最悪の想定を現実とせねばならなくなる。

ー翌日　コンスタンティ

一晩考えたベサリウスだったが、やはり決心はつかなかった。

優柔不断と誹られてもしかたないが、王家に弓引く機にはならなかったのだ。

例え王国が滅び、王家が離散しようとも一度誓った忠誠を簡単に覆す事など出来ない。

その葛藤がベサリウスに手詰まり感を、焦燥を感じさせていた。

（何か、何か手はないのか？このまま日本と争うのは避けたい。だが忠誠を無かったことにはできない・・・）

田辺もそうだったが、ベサリウスもまた状況を打開する一手を欲していた。

その時、執務室のドアをノックする音が耳に入った。

「入れ」

ベサリウスの一言に初老の男性が執務室にはいってきた。

初老の男性はポール・カーチェスといい、ベサリウスを内政面で補助する代官だ。

「旦那様、田辺殿が到着されました」

ポールの言葉に交渉の時間が来ていたのに気づき、急いで身支度を整えだした。

「やれやれ、考えを纏める暇がほしいものだ」

半場、愚痴の様につぶやくベサリウスにポールが暗い表情を見せた。

そのポールの表情にベサリウスは目ざとく気づくと何事か？と声を

かける。
ポールは言うか言うまいか躊躇いながらも、自身の思いを主たるベサリウスにぶつけて見た。
「旦那様、お悩みになるのは重々承知しております。なれど・・・」
真剣な表情、いや、決死の表情とも言えるポールに、ベサリウスは黙って耳を傾けるしかなかった。
「なれど、このままではベサリウス領は滅びまする！」
知らず知らずの内にポールの口調は興奮したようになっていく。
ベサリウス本人も意図しない内に、周りの者達ににも焦燥感を与えていたのだ。
「つい先ほど入った知らせによれば・・・カールソン侯爵がタラスクに降伏したそうです」
カールソン侯爵の降伏、寝耳に水と言うべき衝撃がベサリウスにもたらされた。
「・・・降伏？西方諸侯の中でも最大の領地を持った侯爵が、か？」
カールソン侯爵は領地の広さもそうだが、西方諸侯の中では一番力を持っていた。
ポールは驚愕を隠せないままのベサリウスに更に追加の報告をしていく。
「カールソン侯爵以外にも降伏したものは数多くおります。そして、それによりタラスクは更に領域を此方に近づけております。もはや、最早一刻の猶予も惜しまれる状況にございます」
ポールから伝えられた話にベサリウスは一瞬ではあるが頭の中が真っ白になった。
それだけ衝撃があったのだ。

（早すぎる・・・）

それがベサリウスの思いだった。
どんなに軍勢を差し向けてきてもタラスクの国力から考えても、そ

こまで切迫した状況になるには来春以降と考えていたからだ。
たしかにホードラー王国が滅び、西方は戦国の有様になってはいても、タラスクとて周りを大国に囲まれている。
そこまで急速な拡大をするだけの戦力は割けないはずだったのだ。
その間にベサリウスは領内を固めて備えるつもりだったのだが、その前提が崩れた。
「・・・確かに一刻の猶予も無い・・・な・・・」
状況が切迫しているのを認識したベサリウスは最早形振りかまっていられなくなっていた。
だが、それでも此方から何かしらの動きを見せるわけにはいかない。
諸侯としての矜持も、王家に対しての忠誠もある。
だが、何よりも下手に弱みを見せるのは交渉の場ではしてはならない事だからだ。
「旦那様・・・」
ポールの目には、未だかつてない程に焦るベサリウスの姿が映っていた。

そんな苦境に晒されているベサリウスの下に更なる凶報が届いたのは田辺との会談直前だった。
北のバジル王国がベサリウス領へ侵攻を開始したのだ。
その数、約１１０００。
バジル王国の保有戦力の約半数に及ぶ軍勢である。
対するベサリウスの戦力は３００の騎兵と１６００の歩兵、５００の弓兵、全軍あわせて２４００程度だ。
バジル王国軍の奴隷兵や民兵を中心としたものとは違い、訓練に訓練を重ね選び抜かれた精鋭ではあるもののほぼ5倍の戦力さは如何ともし難い。
「このようなときに・・・」
完全にベサリウスは進退窮まっていた。
（これまで決断を遅らせていたツケが着たか・・・）

ここに至っては是非もなし、ではあるものの、バジル王国のザハンは非道な人物であるのは知っている。
ここでベラリウス領を渡してしまえば領民は悲惨なことになるのは明白である。
「閣下・・・」
ベサリウスの様子にポールはそれ以上の言葉が出なかった。
「・・・如何ともしがたい。この上はニホンの手を借りねばなるまい」
苦渋の決断ではある。あるが、このままでは対等な立場にはなりえないだろう。
やはりせめて何かしらの対等足りえる物を得なければならない。
「軍を召集しろ。最悪、交渉が決裂しても座して討たれるわけには行かない」
ベサリウスはついに動くことになった。
いや、事態が彼を歴史の表舞台に引き上げた瞬間だった。

第１９話「同盟締結」

これで駄目なら交渉は一旦打ち切らざるを得ない思いで田辺は今日の交渉に臨むつもりだった。
しかし、昨日とは打って変わって今日のベサリウスには余裕が感じられない。
具体的に何があったのかまでは流石に分らないが、どうも問題が発生しているのは確かなようだった。
（と、なれば時間はかけられないわねぇ・・・北野さんからも了解を得てるけど・・・タイミングが難しいわね）
昨夜の内に北野と連絡を取り合った田辺は、北野から切り札の使用許可を貰っていた。
ただし、北野はその使い道に関して注意していたことがある。
「貴方に任せてますから良いですが、使わない方向を考えた方がいいですよ？」
それを聞いて田辺は、使ってはいけないのではないか？と考えてしまった。
交渉を有利に進めるには使うべきではないだろうか？
確かにニホンの自由と平等の精神には反するかもしれないが、切り札たるカトレーア元王女にとっても悪くない話になるはずだ。
田辺はそう考えていた。
もっとも、この場に北野が居れば全く何をやっているのか？と怒っていただろう。
とは言え、一任した北野にも責任があるのでそれ以上のことは言わないだろうが・・・。
（さて、どんな会談になるかしらね・・・）
ベサリウスの身に何が起きてるのか把握出来ないまま最後の会談が始まった。

会談は始まったが、先日とは打って変わり前向きな形で進んでいた。
今までは田辺が提案し、それをベサリウスが何かと理由をつけて拒否、となっていたのだが、このときばかりはそうではなかった。
今まで提案してきた内容をまとめ、ベサリウスは1歩も2歩も踏み込んで修正案を出してきたのだ。
これにはかりは田辺も予想していなかったが、一つ一つを見る内に漸くベサリウスが重い腰を上げたことが読み取れた。
（つまり、対等な立場を確保しようと言うことね）
ベサリウスからの提案は、要約するとその一点につきるといえた。
「私としても義理を通したい。しかし、それがわが領民と引き換えにすべきものか？と問われればそうではないからな」
気持ち悪いぐらいに方向転換したベサリウスに田辺は何を狙っているのかが分らなかった。
一応話は進歩しているのだが、今までが今までである。
何がそうさせているのかを見極めねばならない。
「なるほど、漸く決断していただけた様ですね」
率直な感想を伝えたが、その言葉にはベサリウスは眉間に皺をよせた。
ベサリウスとて受けたいわけではないからだ。
そうしなければならぬ状況になったからの決断で、自分の意思でそうしようとしているわけではない。
しかし、今後を考えるならばこの程度のことは些細な事柄と言える。
故に眉間に皺を寄せたのは一瞬だった。
「まあ、我々もこのまま、と言うわけには行きませんからな」
努めて平静を保ちながら、ベサリウスは頷いて見せた。
その上で田辺にタラスク王国の進出状況を教えた。
この件には日本も危機感を持っていたからだ。
「・・・なるほど・・・。由々しき事態、と言えますわね・・・」

田辺はこの話を聞いたとき、タラスクの脅威がベサリウスを動かした、と判断した。
しかし、それは後に間違いであったことを指摘され、してやられたと憤慨することになる。

この会談で決まった基本的なことは以下のようになっていた。
・両国は互いに独立した国家であることを認める。
・両国は互いの国境をレノン大河（レノン市近くの川の正式な名称）とする。
・両国は交易協定を結ぶ。
・両国は互いの安全を保障する相互不可侵条約を結ぶ。
・両国は互いの国に大使、並びに領事を派遣し自国民の権利を保障する。
・両国は不測の事態に対し、交渉を行った上で適切な対応を取る。

両者は、今回の会談で正式な調印は後日としながらも、概ね合意に達した事に胸をなでおろしていた。
田辺はホードラーと西方諸国との間に緩衝地帯を作れたことに、そしてベサリウスは日本を巻き込むことが出来たことに・・・。

第２０話「異変」

漸く交渉が合意に達していた頃、田辺を屋敷の外で待っていた高橋たちは兵があわただしく動いているのに気が付いていた。
その様子から、緊急事態、もしくは不測の事態が起きているのは容易に想像できる。
「・・・総員に武器のチェック、並びに郊外の仮設駐留地に警戒態勢を取らせろ」
万が一に備え指示した高橋は、交渉決裂によるベサリウスの襲撃を想定した。
しかし、違和感を感じた佐藤が高橋に疑問を呈してみた。
「彼等、何かおかしくありませんか？」
そう言われた高橋は、怪訝な表情のまま注意深くあわただしく動く兵士たちを観察してみる。

・・・剣や槍、弓矢を集めている。
その上で兵士と思われる武装した人々が部隊ごとに集まっていき、その後ろでは荷車に物資を積み込んでいく・・・。
自分たちのとは大きく違うだろうが、軍としての動きに不審は無いように見えた。
だが、何かがおかしいと佐藤は言っていた。
何がおかしいのか？

そんなことを考えていた高橋の前で荷車に積まれている物資の一つが零れ落ち、その中身を露出させる。
どうやら、積み込まれている物資は食料のようだ。
干し肉と思われる物が地面に散乱している。

それに気付いた兵士が慌てて拾い集めている。

その様子を見ていた高橋は漸く気付いて声を上げた。

「そうか！そういうことか！」

突然、高橋が声をあげたのに井上が驚いた表情を見せた。

「なにがそうなんだ？」

井上の問い掛けに高橋は佐藤の感じた違和感について答える。

その答えはその場にいた仲間を一気に緊張させた。

「彼等は外敵に向かうつもりなんだ」

外敵、と言われても井上には自分たちの事ではないのだろうかと感じられた。

しかし、高橋の説明はそうではないことを示していた。

「俺もこっちに来るかと思ったが、だったら俺たちの前で集結する必要はない。なおかつ、食料などを荷車に積んで運ぶ必要だってない」

そう言われた井上は零れた干し肉を拾い集める兵士の姿を見てみた。

「要は、俺たち以外の何かが外敵としてこの地に来て、それを迎え撃ちに行くんだろう。だから食料を集めているんだ。こっちを殲滅したり篭城する気なら荷車は必要ないしな」

高橋の言葉に漸く合点の言った井上は、それはそれで拙い事態に陥っている事に気付いた。

何時までもここにとどまっていれば、最悪戦闘に巻き込まれかねないのだ。

「・・・こっちはの装備は護衛任務だから軍勢相手を想定してないぞ・・・こりゃやべぇかもな」

井上の言うとおり、武装はしているがあくまでも護衛を主眼に置いた軽装備だった。

装甲車両の８７式偵察警戒車とそれに装備されてる２５ｍｍ機関砲はある。

確かにこの世界においてはこれだけでも過剰な攻撃力をもつものの、高々１両である。
それ以外は軽装甲機動車３台と７４式中型トラック２台、そして護衛としてきていた２０名あまり・・・。
とてもでは無いが戦力として考えられる状態ではない。
単純に逃げながら応戦する分には十分すぎる装備でも、大きな戦いになれば何も出来ないだろう。
「交渉打ち切りも視野に入れて撤収準備だ。仮設駐留地にも連絡して何時でも引き上げられるようにしてくれ」
佐藤は高橋の指示に即座に反応し、田辺の移動に使っていた軽装甲機動車の無線で駐留地を呼び出していた。
井上は車体上面ハッチを開き、ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃をセットする。
高橋は田辺が出て来次第即座に乗車できるようにし、あたりを注意深く観察を続けた。
万が一にもここの連中が高橋たちを徴発しようとした場合に備えてだ。
もっとも、これは取り越し苦労に終るのだが・・・。

一方、屋内で交渉していた為に仕方ないとは言え、事態の変化に未だ気付かぬ田辺は交渉を纏めた結果を日本に持ち帰るために屋敷から出てきた。
その表情は明るいのだが、ベサリウスたちに見送られる形で出てきた田辺は、高橋たちの緊張した面持ちに息を呑んでしまった。
（なにが・・・起きているの・・・？）
その様子に急に不安感に襲われた田辺は迂闊にも表情を強張らせてしまっていたが、高橋はそんな田辺に平静を装って足早に近づくと敬礼した。
「ご苦労様です・・・これは一体・・・？」

漸く声を出した田辺に高橋は表情を変える事無く対応した。
「いえ、特に何も・・・」
明らかな嘘ではあるが未だ憶測の範疇であるのもあり、口にすることはしなかった。
しかし、田辺の安全を考慮して動かねばならない。
その為、本来なら口出しすべきではないが、田辺に交渉の状況を尋ねた。
「成果の方はいかほどで？」
仕方ないとは言え、これには田辺の気分を害してしまう。
自衛官が外交の成果を聞く等、自衛官の領分を越えている。
そのため田辺の眼に怒りが浮ぶが高橋は構ってられない。
「申し訳ありませんが、これ以上はここに留まれないと判断します」
そう言って高橋は田辺に小声で耳打ちする。
（周辺の状況に異変があります。身の安全のため迅速な行動を願います）
有無を言わさぬ高橋の様子に田辺は周辺を見渡した。
その眼に飛び込んできた光景は兵士たちが集まる異様な光景だった。
呆然とした田辺の手を引いて軽装甲機動車に乗せた高橋は、笑顔を見せるベサリウスに敬礼をすると即座に自分も乗り込み、移動を指示した。

「気取られたか・・・が、交渉は纏まっている。大勢に影響はあるまい」
高橋たちが走り去っていく姿をみながらベサリウスは笑みを浮かべていた。
「旦那様・・・大丈夫でしょうか？」
背後に控えるポールが不安を口にする。
「ん？ニホンが約束を守るかどうかか？なら大丈夫だ」

自信有り気なベサリウスはそう言って振り返る。
「ポッと出のニホンが他国と交した正式な約束を守らないのであれば、ニホンは信用できない国と言う事を自ら喧伝することになる。そうなればあの国に取って困った事になるのだからな」
否が応でも守らねばなるまいよ・・・。と続けたベサリウスはポールに大使としてニホンに向かうことを命じた。
「彼等の後を追うような形で悪いが、バジル王国の侵攻を食い止める協力を要請してくれ・・・彼らとて我々には滅んでほしくあるまいて」
そう言うとベサリウスは書状などを用意するために執務室へと歩き出した。
ベサリウスにとってこの判断は賭けに等しいが、決して分が悪い賭けではないと確信していた。

第２１話「侵攻軍」

ベサリウスの屋敷を後にした高橋たちは状況から何らかの争い、もしくはそれに類する何かが発生していると田辺に説明していた。
そのため交渉の結果がどうあれ、これ以上はとどまれないこと、そして即座にホードラー地区への退避を行う旨を伝えた。
そんな高橋たちに田辺は交渉は成立したことを告げ、そこまで慌てる必要は無いと言った。
それは事務を主な仕事とする田辺と、現場で直に問題とぶつかる実働部隊たる高橋たちとの温度差を如実にあらわしていた。
「とにかく、現状の我々では最小限の護衛に過ぎません。危険が考えられるのであれば田辺さんの安全を優先させていただきます」
高橋の断固たる意思を前にしても田辺は収まりが付かなかった。
「だからといってあれでは此方に余裕が無いように思われるじゃない！今後の付き合い方にも影響がでるわ！」
全く引く気の無い田辺に井上も呆れるしかなかった。
たしかに、あれは余裕が無さ過ぎたかもしれないが、それでも彼等にしてみれば事が置きてからでは遅いのだ。
事が起きる前に退避しなければ万が一が起こりえる。
そして、万が一が起きればそれこそ今後に響くのだ。
何せ今回の交渉内容は田辺しか知らない。
だからこそ田辺の安全が最優先されるのだ。
「此方も任務として護衛をしている以上は安全を優先させてもらいます」
高橋は憤慨する田辺を前に、冷静に冷たく言い放つ。
「冗談じゃないわ！帰ったら覚悟しなさい！」
腸煮えくり返る思いの田辺は思ってもいないことを口にしてしまうが、このときはそれに気付いていなかった。
「どうぞご自由に、此方は任務を優先したまでのことですから」

正直、危機意識が足りないと高橋は感じていたが、何時までも口論している場合ではない。
この世界は、全くその通り当てはまる訳ではないとは言え、元の世界の中世レベルの文明である。
そのため、情報の伝達速度は現代とは雲泥の差がある。
それを考えるとベサリウスの屋敷で見た兵士達が動き出していると言う事はコンスタンティに外敵と思われる何かがかなり接近していることになる。
即座に戦闘、と言うことは無いだろうが、機を逃せば退避も難しくなるのだ。
「井上、そこから周辺を警戒しててくれ」
井上は高橋からの指示で軽装甲機動車の車体上部ハッチから身を乗り出し、双眼鏡を片手に辺りを警戒する。
「こちらエスコート1、ホームの状況知らせ」
警戒指示を出した高橋は憤慨している田辺を横目に無線で仮設駐留地を呼び出す。
まだ、向こうも状況が伝わってないため、緊迫感こそ無いが即座に無線の応答が返ってきた。
『こちらホーム、帰宅準備はほぼ完了、何があったか説明願えますか？』
本国勤務から特殊任務部隊に配置換えを受け、今回の護衛に付いて来ていた多田昭彦（ただあきひこ）上等兵の声だ。
志願しての配置換えだったが、まだ此方での活動期間は短い。
高橋と行動したのは、以前エルフとの偶発的交戦における話し合いの時（第１部第１８話参照）以来だ。
その時も彼は高橋の元で護衛任務を行っていた。
「断定は出来ないがきな臭くなってきた。万が一に備え即応態勢をとれ」
即応態勢は自衛的反撃のことをさす。
つまりは戦闘配置だ。

流石に実戦を経験していない多田は実際に戦闘配置を命じられて、は?と言う間抜けた声を出す。
「繰り返す。即時即応態勢を取れ」
もう一度繰り貸す高橋の声に多田はやや躊躇いながらも了解と答えた。
一応、多田は87式偵察警戒車で無線を受けているはずなので、近くに何人かいるだろう。
その何人かの内の誰かが横で無線を聞き既に動いているはずだ。
「こちらが合流次第、ホードラーに向けて移動する。オワリ」
高橋はそれだけ言うと無線を切った。
(後の問題は相手の動きだな・・・どこからだ?西か?北か?)
西のタラスクからなら東に向かう高橋たちとの接敵はないだろう。
しかし、北のバジルからなら難民キャンプ襲撃のこともある。
十分に接敵し得る。
更に、北からなら唯一のホードラーとの繋がりのあるレノンの橋への進路を塞がれかねない。
そうなれば敵中突破を図ることになる。
それだけは避けねばならない。
そう思うとなおさら急がねばならないと高橋は感じていた。

ーバジル王国ベサリウス侵攻軍
ヘルマン・カノープス将軍は足の遅い輜重隊(補給部隊)を少数に止めた為に軍の移動がかなりスムーズに行っていることに満足していた。
正直、不安はあったものの、足りない分は現地調達、つまり略奪すればいい。
そのため、途中の村などの幾つかを略奪しながら南下を続けていた。
だが、その甲斐あって物資に余裕がある。

後はコンスタンティにいるベサリウスとそのコンスタンティを制圧すれば済む。
いくら戦上手で名の知れているベサリウスであってもこれだけの戦力差があればたちどころに打ち破れるだろう。
そう考えてヘルマンはかなり楽観的になっていた。
「将軍、コンスタンティが見えてきました」
配下の騎士の報告にヘルマンは馬上から若い騎士を見る。
彫りの深い、無骨な顔、口元を隠すほどの豊かな髭、そして妙にギラついた眼。
そんな近寄り難いヘルマンに見据えられた若い騎士は生きた心地がしなかった。
「では、ここらで斥候を放ち野営するとしよう」
それだけを告げるとヘルマンは若い騎士を下げさせた。
その彼の横に並ぶように馬を寄せた小柄な騎士がいた。
その鎧姿からではわかり難いが、その小柄な騎士は女性だった。
短く切り込んだ赤い髪、鋭い目付き・・・。
バジル王国でも屈指の剣術を誇るフェイ・アーデルハイトである。
「将軍、近くに林もありますれば、念のため防護柵を設置するのは如何でしょうか？」
フェイの進言に髭を撫でながらヘルマンは一考する。
短く、ふむ、と呟くと周辺を見る。
南東の小さな林以外はかなり開けた平地だ。
かなり見通しがいい。
ともなれば奇襲はありえない。
しかし、夜襲されるのは面白くない。
それだけを考えるとヘルマンはフェイの進言を受け入れた。
「そうだな、万一に備えるのは必要だろう。何せ相手はベサリウスだからな」
そう言ってコンスタンティを遠目に見る。
恐らく、既に此方を認識しているはずだ。

だが、兵力差がある以上は如何にベサリウスと言えど正面から仕掛けはしない。
やるとすれば進軍の疲れが溜まっている侵攻軍に対しての夜襲だろう。
それを考えると防護柵の有る無しは戦に影響がある。
「・・・ベサリウス卿ですか、一度手合わせしたいと思っていました」
自身の剣の腕に自信があったフェイは腰にぶら下げた先祖伝来の宝剣を掴む。
その様子からかなり以前から気にかけている様だった。
「血が滾るか？だが、それは明日まで取っておけ」
ヘルマンはそう言うと斥候に向かう１組１０騎で構成された騎兵が散っていくのを見た。
バジル王国は山岳地帯にあるため、騎兵はそれほど多くない。
しかも訓練できる土地が狭いので、機動戦力としての運用経験も無い。
そのため、騎兵は斥候、つまり偵察に使われたり、短弓を用いての射撃部隊として扱われる。
足はそれ程速くない馬を使っているものの、体力はある。
万が一、敵と遭遇しても短弓で威嚇しながら逃げれば十分振り切れるだろう。
そう言った計算が出来る辺り、ヘルマンは堅実な将と言えた。

もっとも、この時放った斥候の一部は帰還することは無かったのだが・・・。
それはヘルマンのミスと言うよりは、想定していない、想定できない存在によるものだった。

ーベサリウス領コンスタンティ近郊

高橋たちが仮設駐留地に着いた頃には撤収準備は完全に完了し、周囲を警戒しているところだった。
そこに多田が駆け寄ると敬礼し状況の報告をする。
「護衛部隊、撤収準備完了し即時移動が可能です」
初の実戦になるかもしれないとあって多田は若干青くなっていた。
だが、同様にいよいよ訓練の成果を出せると相まって興奮気味でもある。
「よし、多田は田辺女史とミューリを連れて共に87式に乗車しろ」
そんな様子の多田に危ういものを感じた高橋は装甲に守られた87式偵察警戒車へ配置した。
それに少しばかり不満があった多田だが、やはり怖いと言う思いが強かったのか大人しくしたがった。
「いいのか？何れやるかやられるかの修羅場に出されるだろう？」
井上はその時に使い物にならないと危ない、と言う心配があった。
だが、いきなり実戦の方が危ない気がした高橋は自分の判断を優先した。
「今回は実戦の空気に触れるだけでいい。俺達と違って訳も分らず実戦、と言うわけじゃない。それに・・・」
何かを言いかけた高橋に井上は言いたいことがあるなら早く言え、とばかりに視線で促す。
苦笑しながら高橋はため息をつくと答えた。
「あいつはいきなり実戦をやらかした俺達の話を聞いて、ある種の憧れみたいなものを持っている。それがある内はそれこそ危なくて使えんよ」
流石に様々な経験を積んだ、積まされただけあって高橋は部下の状態を把握していた。
「あー、何となく分るわそれ・・・」
腕を組み、頷きながら妙に納得言った感じの井上に高橋は、撤収するぞ、と言って田辺が居なくなった後の軽装甲機動車に乗り込んだ。
それに井上も続いて乗り込む。

「エスコート2は先頭、次にエスコートホーム、ベース1，2と続いてエスコート3の順番でホードラーに向かえ!殿はエスコート1が持つ!移動開始!」
高橋は大声を上げて号令を下した。
エスコート1、2、3は軽装甲機動車、そしてベース1、2は74式中型トラック、エスコートホームは87式偵察警戒車をそれぞれ指す。
そしてそれらは、先程高橋の指示の通りの順番で仮設駐留地を後にしていった。
その様子を見ながら、高橋たちエスコート1は最後尾を守る形で仮設駐留地だった場所を離れていった。

第２２話「遭遇戦」

それは偶然だった。
ヘルマン将軍から命じられ、斥候として部下を引き連れ林を抜けた先に見知らぬものを見つけたのは・・・。
それは馬を用いずに動く馬車の様なものだった。
斥候に来ていた誰もが、それが何なのかはわからなかったが、その異様な光景からホードラーを滅ぼしたニホンが関わっていると予想は出来た。
何せ、尾ひれが付いているのは確かだが、ニホンと言う国の軍勢は常識では考えられないものを扱うと聞く。
それを見た時、斥候としてきていたルイ・マティルドはニホンがなぜここに来ているのかを知るべきだと考えた。
見たところ兵士らしき者はいるが、武器らしい武器は見えない。
もちろん、ニホンの兵士は遠くから攻撃してくるとは聞いていたので用心すべきだ。
しかし、この世界の常識から考えても飛び道具と言えば手投げ用のナイフや斧、または槍だ。
それ以外の飛び道具は弓や弩（いしゆみ）（ボウガンやクロスボウの事）ぐらいだ。
後は大型のバリスタ（弩を巨大化させた攻城兵器）や投石器だろう。
しかし、見たところそう言ったものは見当たらない。
ルイはその事からも軽武装の商隊や交易隊ではないか？と考えた。

（ならば取り押えて将軍の下に連れて行こう）

ルイの目には馬なき馬車の集団を制圧するのにそれほど手間は掛からなく見えていた。
実際、ルイたち斥候は剣も持っているが基本は短弓を使っての射撃

戦が仕事だ。
例え武装していても遠巻きに弓で射掛ければ反撃もままなるまい。
そう考えたのも無理なかったかもしれない。
しかし、もしルイがもう少し慎重ならばこの後に起こる事態は防げたであろう。
「奴らの頭を抑えるぞ！」
部下に声をかけると馬の腹を蹴り一気に速度を上げて突き進む。
一方のニホンの集団は此方の存在に気付いた様だが、ただ速度を上げ逃げようとしている様だった。
「む？しかし、逃さん！」
己を鼓舞する様に気合を入れると車列の頭を押さえに掛かる。
だが、車列はそのまま突き進んでくる。
流石に重量のある馬に乗っているとはいえ、正面からぶつかられては堪らない。
機敏に集団の突撃を回避すると、すばやく追撃に移った。
突然、林から姿を現した武装集団に気付いたエスコート2から高橋に無線が入る。
『左9時の方向に騎馬集団確認！此方に急速接近中！』
無線から飛び込んできた報告に井上が林の方を見る。
１０騎程度ではあるが、その動きから訓練された集団であるのは明白だった。
「弓で武装している！頭を抑える気だぞ！」
井上はそう叫んで５．５６ｍｍ機関銃ＭＩＮＩＭＩを向ける。
その間に高橋は無線で各車両に指示を出す。
「各車増速！止まるな！突き進め！」
頭を押さえに来ている動き、弓の射程内であることから止まったら危険と判断した。
その指示に速度を上げ、車列は土煙を巻き上げながら真直ぐ進んだ。

結果、車両の勢いもあり、止まることなく突破は出来た。
しかし即座に追撃に移る辺り相手の錬度は高いようだ。
「足はこっちの方が速いので振り切れるでしょうが、あっちが諦めるまで追いかけられますね」
軽装甲機動車のハンドルを握る佐藤は視線をバックミラー越しに背後の騎馬集団に向ける。
「無理に交戦しなくてもいいが、この悪路と揺れだ。田辺さんが持たないかな？」
急に高橋は８７式偵察警戒車に乗っている田辺の事が心配になった。
元々、田辺と同乗しているミューリはサスペンションもない馬車と悪路で揺れにはなれている。
自衛隊の各員も、こう言った揺れには訓練で何度も経験がある。
しかし、事務屋の田辺はそうではない。
来る時は速度を抑えて揺れを最小にしてきたが、速度を上げて走らせると激しい振動と揺れが襲ってくる。
それは何の訓練も受けてない田辺に取っては拷問だろう。
「制圧するか？」
井上の提案に高橋は迷った。
何処の軍勢か分らない内は此方から手を出すべきではない。
とは言え、今頃大変な思いをしているであろう田辺のことを考えるとその方がいいかもしれない。
実際、唯でさえ悪印象をもたれてしまっているのに、これ以上敵視されては今後に響くだろう。
「・・・仕方ない、エスコート１よりエスコートホーム、これよりエスコート１は武装集団制圧にかかる」
高橋が部隊に命令を送ると車両後部ハッチを開く。
「井上！制圧射撃開始！」
車両の音にかき消されないように叫ぶ高橋の声に井上は、待ってました！と言わんばかりにＭＩＮＩＭＩの引き金を引いた。
と、同時に高橋も車両から振り落とされないように身体を固定して

89式5.56mm小銃の引き金を引く。
井上はトリガーコントロールしながら、高橋は3点バーストでの射撃が開始された。
断続的な炸裂音と、弾丸を撃ち終えたばかりの空薬莢が甲高い金属音を響かせながら車内に転がっていく。
その音は一種の音楽のように錯覚してしまうほどだ。
だが、流石に訓練を受けているとは言え、実はこの二人、車上射撃の経験はほとんどない。
お陰で車両の揺れもあり意外と当たらない。
「この下手糞！」
井上が誰に言うまでも無く毒吐く。
高橋は高橋で射撃が当たらない事に少しばかりイラついていた。
「何で当たらないんだよ！」

一方の侵攻軍斥候のルイは、最後尾の馬車がにぎやかな炸裂音を響かせているのを見て、何をしているのかが分らなかった。
何かの攻撃か？と思ったが、周りでピュンピュンと音が鳴るばかりで特に変わった事はおきない。
「こけおどしか・・・全騎、弓で仕留めろ！」
ルイの命令に全員が手に持った短弓に矢をつがえる。
流石に訓練しているだけあってその腕前は申し分ない。
と、言っても弓の命中率はあまりいいものではない。
熟練者が使えば確かに遠くの的も射抜くが、それは自身が静止状態で的に集中し、的も動かなければの話だ。
お互いが移動しながら撃つのでは流石にそう簡単には当たらない。
元々、弓騎兵は数で命中率の低さを補うのだが、斥候として動いている以上はそんな数を連れているわけではない。
しかも馬が無くても動く車相手では足も止めようが無い。
時間にして数分だったが、お互い撃ち合って当たらない奇妙な状況

を作り出していた。
しかし、断続的に炸裂音を響かせている集団がいきなり途切れなく轟く炸裂音を放ちだしたときに異変は起きた。
騎兵の一人が何かを胸に受け、馬の首にもたれ掛かる様にして崩れ落ちたのだ。
そしてその一人は馬からズレ落ち、脱落していった。
「な！？なんだと！？」
ルイはこの時になって初めて集団が行っていた事がこちらに対する攻撃だと認識した。
「全騎、回避行動を取りながら攻撃を続けろ！」
予想もしなかった事態に頭に血が上っていくのを感じる。
だが、一人がやられた事によりニホンの集団は見えない攻撃を断続的にではなく、連続的なものに変えていた。
これにより次々と仲間が脱落し、気付けば自分を含め４騎になっていた。
「くぅ・・・これまでか・・・退避するぞ！」
ルイはそう言って馬の足を止めその場で方向転換を開始した。
その行動が彼らの運命を決定付けた。

「ええい！くそ！」
井上は当たらない事に業を煮やし、トリガーコントロールを止めてフルオートでＭＩＮＩＭＩを撃つ。
それが功を有したのか、それともまぐれ当たりか、騎兵のうち１騎に命中し、馬上からずり落ちて言った。
「お？当たったぁ！」
漸くの命中弾に井上は大声を上げると更に撃ち込む。
負けじと高橋も３個目の弾倉を８９式小銃に叩き込むとフルオートで射撃しだした。

狙っても当たらないなら、下手な鉄砲数撃ちゃ当たる、である。
と、相手もややバラけながら馬を左右に振り、回避を織り交ぜ始めたが、最早ばら撒くと言った高橋たちのフルオート射撃を前に命中弾が次々と起こった。
流石に根負けしたのか諦めたのか、どちらにせよ半数以上を撃退されたところで騎兵は踵を返したが、それが悪かった。
止まらずに進路を変えれば良かったのだが、その場で止まっての方向転換だ。
そうなればわずかな時間でも動かない的に過ぎなくなる。
しかも正面では小さい的でも、方向転換の際に側面を向ければ的は大きくなり、命中率は大きく変化し当て易くなるのだ。
騎兵達は踵を返した瞬間、ばら撒かれる弾丸のシャワーをその身に受けてしまう。
「射撃止め！」
最後の一人も崩れ落ちたのを見た高橋は射撃の中止を叫んだ。
井上も即座に射撃を停止させる。
二人とも、思わぬ苦戦に背中が汗でびっしょりと濡れていた。
しばしそのまま遠ざかる騎兵達の躯を見ていたが、危機が去った事に漸く一息ついた。
「各車速度落とせ、脅威は排除された」
高橋は無線を手にすると、それだけを告げる。
それと同時に来たときと同じぐらいの速度で巡航を始めた。
「・・・こりゃ、帰ったら訓練だな」
何度も実戦を繰り返してきた井上は、今回のことで自分達の意外な弱点に気付いた。
もちろんそれは高橋も気付いた事なのだが、正直ある程度は何とかなると楽観視していたことが衝撃だった。
確かに今回も何とかなったが、もし、運が悪ければ自分達の誰かが身を持って証明する事になったであろう。
それを考えると、高橋は自分の認識の甘さに唾を吐き掛けたい思い

だった。
「・・・ああ、これ以外にもまだ経験してない事があるはずだ。帰ったら検証して訓練しないとな」
向かってくる脅威を被害無く排除して、任務を無事遂行したと言うのに二人の気持ちは沈んでいた。

だが、数分後、田辺が限界という事で車列は一旦停止する羽目になる。
その時に高橋は沈んだ気持ちのまま田辺に罵声を浴びせられ、心身ともに疲労困憊となってしまう事になった。

第２３話「支援要請」

ーホードラー地区シバリア市

田辺たちがベサリウス領に交渉に赴いている間に、北野は日本政府承認の元にホードラー、アルトリア両地区を分離させていた。
と、言うのもホードラーだけでもそれなりの領域があるのにアルトリアまでは面倒を見るのが難しいからだ。
幸いにしてアルトリアは元々未開の地であったために人口は少なく、資源開発や都市開発が行われているだけだ。
お陰で日本から能力的に並みであっても派遣されてきた別の官僚により、ある意味日本の直轄地となっての運営が可能だった。
そのため、ホードラー地区の運営に専念できる。
とは言ったものの、西に西方諸国、南に南部貴族連合、東に東果（帰化を拒んだ在日外国人自治区）と隣接しているので、そう負担は減らない。
だが、暗い話ばかりではなく、本格的な開発がホードラー、アルトリア地区で進みだしている。
そのかいあって、アルトリア地区では原油を始めとした資源（金属類）が採掘が進み日本の資源不足がかなり緩和されていた。
だが、まだまだ本来の形に戻るまでは到底足りてない。
そう言う意味では今より一層の開発が必要なのだ。
そして、食料だが、転移により多少の気候の変化があったものの、かつての気象と大きく変化しなかったのもあり、自給できる分野の食糧は何とかなりそうだった。
出来ない分野としては輸入に頼っていた小麦などは、肥沃で広大なホードラー地区からの輸送で賄えることがハッキリした。
しかもホードラー王国や貴族が溜め込んでいた分がかなりあったので、ホードラー地区の住人を植えさせる事も無い。

更に日本の技術導入により、農作物の収穫は来年以降から増大する見込みまである。
ただし、このまま順調に推移すればのはなしだ。
何せ西では西方諸国が戦国時代の有様な上、タラスク王国の侵攻が止まらず、その脅威はホードラーを圧迫している。
また、南部貴族連合と日本国陸上自衛隊が数度の衝突を起こしていた。
そしてここに来て、ベサリウス領が交渉の甲斐あって漸く動きだしたのだが、田辺たちの帰還直後に支援要請してきたのた。

帰還した田辺はレノン市には留まらず、即座にシバリアへとヘリで向かった。
そして報告書を何時の間にか行政区に移設されていた行政庁舎の北野に渡すと、数日ゆっくりとシバリア市内で疲れを癒していた。
そこに交渉について口頭で伝えたい事がある。と呼び出しを受ける事になった。
そのため、田辺は執務室の北野の元に来ていた。

執務室で交渉内容を纏めた書類を手に北野は沈黙を保っている。
その様子に正直田辺は生きた心地がしなかった。
交渉は纏めてきた。
切り札としてカトレーア女史を神輿にさせる事も無く終わった。
では、何が拙かったのか？
それが田辺には分らなかった。
そんな田辺を前に北野は読み終わったのか書類を机に置いた。
「・・・」
読み終わったあとも沈黙を続ける北野に、田辺はいきが詰まりそうだった。

しばらくそのままの姿勢でじっと待つと、北野が漸く口を開いた。
「・・・ま、こんなところですかね」
その言葉の真意を測りかねていた田辺は何がでしょうか？と尋ねてしまった。
そんな田辺を北野はじろりと睨む様にして見る。
田辺は思わず悲鳴が出そうなのを必死に堪えるしかない。
「私の希望とは違いますが、政府から出ていた要項は満たしています」
合格点といって貰えたのに等しい言葉を貰った事に田辺は漸く安堵できた。
と、思っていた。
「・・・が、それだけです」
まさに天国から地獄に突き落とされた感覚に陥る言葉だ。
「どうも、交渉に時間が掛かっていた。そこに急に向こうから歩み寄りをみせた。と言う感じだったのではありませんか？」
その場に居たように交渉の状態を言い当てた北野は続けて言い放つ。
「ですが、それで浮かれて内容を詰めるのが甘くなった感じですね」
机の上の書類に眼を向けながら北野は立ち上がった。
「この最後の『両国は不測の事態に対し、交渉を行った上で適切な対応を取る』ですが、貴方はどう考えましたか？」
田辺は北野が何を言いたいのかが理解できないでいた。
不測の事態とは両国間で起こりえる問題についてではないのか？
そしてそれの何が問題だったのか？
そう自問自答していた。
「不測の事態とは、両国間に限らず、どちらか一方が危機に瀕した状況でもあります。そして、交渉の変化からベサリウスは他国の脅威に晒されていると推測できます。つまり・・・」
ここまで言われて漸く田辺は自分のミスに気が付かされた。
「既に不測の事態に陥っているのですよ。ベサリウスは・・・」
北野の言葉に田辺は眩暈を覚えた。

この事から、ベサリウスから支援を要請された場合、双方交渉の場を持つ事になる。
交渉だけならいい。
もし、折角交渉を纏めたのにベサリウスが持ち堪えられないとなれば、早急な軍事支援を行う必要になるのだ。
もちろん、要請を蹴ってもいいのだが、だが、少なくともまともに対話でき国交を持てる様な別の国は今現在ない上に、ここまできて支援要請を蹴るとなると日本の信用に関わる。
そうなれば、今後まともに付き合ってくれる国が居なくなるだろう。
最悪、日本が世界を統一するか、長い年月の間一人ぼっちになってしまう。
そしてそのどちらも日本には取り得ない話だ。
世界統一など、如何に軍事力が抜きん出ていても日本単独では不可能な話であり、孤立は鎖国と思えば良いが、いまさらそんな真似は同じくできないだろう。
なにより日本国民が良しとしない。
それが現在の日本の常識なのだ。
「・・・南部もきな臭くなっているので、政府に直接お伺いを立てる必要があるかもしれませんね」
そういって歩き出した北野の背中に田辺が疑問をぶつける。
「・・・どう言った・・・他にどう言った手段があったのですか？」
半場やけくそ気味だ。
折角纏めた交渉にダメ出しされた田辺は睨むようにして立っていた。
その気持ちも北野には理解できる。が、納得はしない。
「同じ軍事力を行使するにしても、より労力を小さくする方向で交渉を進めるべきでしたね」
その方向とは何なのか？
その答えを待つ田辺に北野は想像していたよりも恐ろしい事を口にした。
「あえて交渉を纏めずに放置して、ベサリウスとその脅威とをぶつ

かり合わせればいい。そうすれば少なからず消耗したどちらか一方を恫喝するなり滅ぼしてしまえば労力は最小でしょう?」
それが日本の国益になるなら、無理に纏めなくてもよかったのですよ。
北野はそう言って執務室をでた。
その場に残された田辺は思わずへたり込んでいた。
北野は緩衝地帯が出来れば儲け物、程度にしか考えていなかったのだ。
それが無理なら双方を争わせ弱ったところを叩き、漁夫の利を得よう、といっている。
恐らく、その後にでも傀儡に近い国を現地民に作らせる。
まるで戦前の満州国を打ち立てた石原莞爾(いしわらかんじ)の様だ。
「あ、あの人には・・・」
田辺は呆然と呟く。
北野は日本を繁栄させるために人道主義など投げ捨てるのも厭わない。
それは知っていた。
しかし、普通の人間にそこまで徹底する事が出来るものなのだろうか?
そう考えていた。
「・・・心がないの?」
田辺の呟きは空しくその場に消えていった。

「お待たせしました」
北野は昨日来訪したベサリウスからの支援要請を伝えに来たポール特使と会談していた。
「いえ、此方はそれほどは・・・で、結論はでましたか?」
ポールはそういいながら北野の表情を読む。
が、ハッキリ言ってその表情からは何も読み取る事が出来ない。

日本人から見れば能面のようだ、と言われるぐらい無表情だ。
「検討したのですが、我々だけでの判断は難しいといわざるえませんね」
予想と違う北野の答えに内心やはり無理か、とポールは感じていた。
「戦力を支援としてだすのは構いませんが、一応自国領域防衛以外に出す場合は本国政府の承認が必要なのです」
北野の支援が無理ではない、と示唆する言葉にポールは未だ希望はあると思った。
「では、本国政府、でしたかな?そちらの承認は何時えられるでしょうか?」
今も数倍のバジル軍相手に戦っているであろう主君、ベサリウスを思うとハッキリ言ってもどかしい。
しかし、そこで焦ってもいい答えが得られるわけではない。
ぐっ、と自分の焦りを押し止めるとポールは具体的な時期を求めた。
「今政府はほぼ独裁状態ですので・・・早ければ明日にも答えがでると思います」
どこに彼らの国があるかは正確にはわかっていないポールだが、そんなに近くに国があったとは思わなかった。
思わず、近いのですか?と聞いたのだが、予想外の答えが帰ってきた。
「いえ?徒歩なら数週間かかりますよ?でも、我々にはそれを補う方法がある、と言う事です」
涼しげに答える北野に、正直言ってポールは唖然とするしかない。
そんな事が可能などと、様々な事象を生み出し行使する魔法でも無理である。
それは一体・・・と聞いたのだが北野は笑顔をみせるだけだった。
「お急ぎなのは存じてますが、明日までお待ち下さい。それを過ぎても結論が出ないようならば此方への一時退避も考えてほしいと伝えてください」
まあ、大丈夫でしょうがね。

と付け加えながら北野は目の前に置かれているコーヒーを口に運んだ。
ポールも狐に包まれた表情でコーヒーを口にした。
（苦い・・・が旨いな・・・）
そう思いながら、明日まで待つ事を考えていた。

翌日、日本政府より必要な処置を許可する旨が来たのとポールの元に届く事になる。

第２４話「新たな問題」

ー日本　総理官邸

鈴平は疲れきった思いで椅子に腰を下ろす。
ここ数日、国内で大陸渡航制限法について緩和要求デモが立て続けに起き、国会でも大きく取り上げられているからだ。
更に帰化を拒んだ外国籍の為に用意した自治区に対する支援要求が日本国内に残る多くの外国人によってなされている。
はっきり言って、日本にそんな余裕は無いのにである。
「要求は日増しに強くなっているな」
正直に言えば要求にはこたえられない。
大陸渡航制限を緩和すれば多くの日本人が入植するだろう。
それにより開発も爆発的に進むと思われた。
しかし、同時に未探査地域があり過ぎるため、入植者の安全を確保、保障できる状態には無い。
制限緩和を要求するものの多くは「自己責任」を主張するが、万が一の時は確実に政府に対処を求めるだろう。
それで解決すれば当たり前、だが、被害が出たら政府や対処に当たる事になるであろう自衛隊へ批判が向かう。
鈴平は政府に批判が向かうのは何時もの事であるので構いはしないのだが、流石に未曾有の国難に際し最前線で苦労している自衛隊にまで批判を向けさせるわけにはいかなかった。
「連中は何時も口先だけだ。いざ事になれば自分達で何もしないで誰が悪い、彼が悪いと騒ぎ出す」
鈴平の愚痴を聞いた伊達が書類に目を通しながら答える。
「それは仕方ない。戦後教育とそれらを放置してきた歴代の政府の責任だ」
半場自嘲気味に言った鈴平はそう言ってため息をついた。

このままでは来年を目処に成立したばかりの大陸渡航制限法を見直す必要が出てくる。
それは構わないのだが、万難を排することは現状不可能だ。
それにどう対処するか？というのが未だに定まっていない。
「渡航制限はまだいいさ、自治区に対する支援要求のほうが問題だ」
伊達は書類を鈴平に手渡す。
そこには多くの市民団体、外国人団体からの要求が事細かく書かれていた。
ある意味厄介払いした後ろめたさはあるので、多少なら何とか融通もやむをえない。
しかし、日本の状況はそれを許すわけにはいかないのが現状だ。
食料はホードラー、資源はアルトリアから入ってくるようになり、元通りには程遠いが大分活気を取り戻しつつある。
それでも他所にそれらを回すだけの余裕が無いのだ。
「いっそ、強制的に自治区に押し込んで黙殺するか？」
過激な案だが確実な手段を伊達は提案した。
しかし、鈴平はそれに対し首を横に振る。
「反発がありすぎる。将来に禍根を残すぞ」
流石に次世代に問題を先送りするわけには行かなかった。
その上、強行すれば国内で暴動も起こりかねない。
そうなれば維持できてる治安が崩壊するのは眼に見えていた。
「今は少しづつ移民させながら国内状況の安定をはかるしかない」
あくまでも時間稼ぎではある。
将来的に独立しようが何をしようが、日本国内から自治区に移民してくれていれば幾らでも対応しようがある。
その上でリスクを減らす、そう言う計画なのだ。
むしろ、問題は市民団体のほうだ。
日本人が数多くいるので弾圧もできない。
「本当に無責任かつ、現実を無視する奴らだな。あれだけ騒げる元気があるなら配給減らしてもいいんじゃないか？」

官邸前に集まってシュプレヒコールを挙げてる市民団体がそこから見えていた。
手にしたプラカードや横断幕には「政府の横暴に断固抗議する！」「在日外国人を差別するな！」「大陸渡航制限法反対！」などなど、様々な文言が書かれている。
もっとも、その文言は多岐に渡っていても内容に変化はない。
「むしろ、資源の無駄をするなと言いたいね」
プラカードや横断幕も貴重な資源を使っているのだ。
そんな事に使うぐらいならその分を自治区へ回したいぐらいだった。
「野党も具体的な案を出さずに要求ばかり、どちらも現実が見えないのか見ないのか・・・」
最早阿部は手の付けようが無い、と言った感じだった。
「まだ不足してる資源は多いが少しづつ状況も良くなっている。それに協力する気にはならないのかねぇ」
伊達はそう呟くと窓の外に見える集団から目を離した。
何時までも見てると怒鳴り込みたくなるからだ。
「愚痴を言っても始まらない。取り合えず仕事だ」
そう言って阿部より渡されていた取るに足らない書類を脇に置いた。
「閣僚を集めてくれ。状況を整理したい」
鈴平はそう伊達に言うと、伊達は即座に閣僚を集めに行った。

約３０分後、総理官邸の会議室でそれぞれの分野の閣僚より、現在の状況の報告が始まった。
大半は大きな変化が見られなかったが、それでも徐々に日本の問題が良くなっているのが数字で表されている。
特に危ぶまれていた原油などのエネルギー資源や、自給がほとんど望めなかった食料分野では大きく前進しているといえる。
しかし、それ以外の資源、例えば電子技術に使われるレアメタルや、食用の肉が圧倒的に不足していた。

一応、ホードラー地区で牧畜を広めようとしているのだが、農業が基盤であり畜産物は一部の特権階級向けの以外は発展してなかったのでしばらくは解決しそうにない。
もちろん、ホードラーが健在の時でも市民は肉類を口にしていただろう。
しかし、その頻度は限りなく低く、口にするにしても労働力としての牛が労働力にならなくなったものを流用すると言った形で、食用としての畜産は殆ど行っていなかった。
極一部でわずかにしてはいたようだが、数も質も圧倒的に劣っている。
これは食文化や技術の発展がなかったり、程度が低かったわけではなく、単に文化そのものの違いの結果だ。
日本人は昔から食に関しての向上心は半端ではないから発展しているのであって、この世界の一般市民の常識から言えば食えればいい、程度の認識しかない。
そこに味や流通の向上が入る余地はないのだ。
何より、現代の日本と違い特権階級がその他大勢を統治する世界である以上、この意識の差は如何ともし難いといえた。
もっとも、日本とて、そう言った時代がなかったわけではないが、それでもあくなき探究心で進歩させてきたのだから恐れ入る。

結局、食肉の生産は農業の様には行かないことから、価格は上昇するのは避けられないが国内自給で賄う事になった。
もっとも、元々国産が大勢を占めていたので特別問題視する必要はない。
ここで問題点となったのは食を提供する飲食サービスや、加工食品を作る生産業に大打撃を与える事になるからだ。
流石にそれは今後を考えると拙い事態だ。
なので、取り合えず保障を与えつつ、ホードラー、アルトリア地区での牧畜拡大を目指す事になった。

次の問題は資源だ。
エネルギー資源は原油の採掘が上手く行き、生産量はかなり良くなりエネルギー問題はほぼ解決しつつある。
ただし、原子力発電に必要なウランなどは未だ採掘されるに至っていないので、早急な解決が必要だった。
国内備蓄でかなり持たせられるが、やはり安定供給を目指す必要がある。
また、産業に必要な銅や錫、ポーキサイド、鉛や鉄等といった基本的金属資源も大分アルトリアで採掘されるようになったので、これも大きく改善された。
だが、希少金属を中心として、一部金属資源が不足気味である。
特に希少金属は電子技術に使われるのだが、これがアルトリアではまだ発見にいたっていない。
また、もっとも不足しているのがゴムだ。
ゴムは生活には欠かせない製品であると同時に、ありとあらゆる工業機械、製品、衣服など多岐に渡って使用されている。
だが、それが全くないのだ。
ホードラー南部に原料たるラテックスが採取できるゴムの木に酷似した植物が自生しているのだが、生憎そこは南部貴族連合の支配地域だ。
一応、日本の支配領域内にもあるにはあるが、数は少なく、しかも南部と接している地域なので危なくて調査もできない状況だった。
「・・・ゴムか・・・ゴムは、正直言って備蓄対象にいれてなかったな」
鈴平にとって移転直前、直後通しての痛恨のミスだった。
「いや、原油や金属資源、食料は確かに重要度が高かった。だが逆にありふれ過ぎてそこまでは考えてなかったな」
日ごろからその恩恵を受けていると、その価値は分らないものだ。
それが今になってその有難さが分るのは皮肉としか言いようがない。

「現状、国内備蓄は底を漬きかけています。早急に対策を行わないと・・・」

経済産業大臣の阿部が深刻であると言った雰囲気で言う。

当の本人も見落としていた事案だったのだ。

経済界からの要望意見として先日の会合で知らされて初めて知ったぐらいだった。

「一応、原油を原料とした合成ゴムもありますが、エネルギーに回してますので不足気味です」

他の石油製品も不足しがちな中で更に追加されてもどうにもならない。

「これは・・・石油の採掘を拡大すべきかな?」

伊達はそう言ったが、流石に事故があっては元も子もない。

アルトリアでも現在一箇所でしか採掘されていない原油を急に拡大生産しろ、と言うのはリスクがありすぎる。

「天然ゴムは意外とかなり幅広く使われます。衣類はもちろん工業製品にも・・・。それに原油の生産が追いついていない以上は天然ゴムに頼らざる得ないのですが・・・」

全くの盲点が浮き彫りになり、閣僚も浮き足立つ。

しかし、ここで議論してばかりも居られない。

議論して解決するなら何時までだって議論するが、行動しなければ解決しないのが現実だ。

しばらく考える様子を見せた鈴平は驚くべき事を口にした。

「・・・伊庭君、ホードラーとアルトリアの自衛隊の状態は?」

意を決した表情の鈴平に、誰もが何をしようとしているのかが分ってしまった。

それは転移前の備蓄拡大政策、アルトリア進出、ホードラーとの戦争を決断したときの表情だった。

「アルトリアはホードラーへの増強に伴い、戦力的に不足しています。また、ホードラーも先日のベサリウス国支援、並びに南部防衛のためその動きは制限されます」

伊庭は躊躇うことなく現状を告げる。
選択肢は他にない。
互いに敵視しあっている上、元の世界のように民間での経済交流などと言った考えがないこの世界で確保など望めない。
ならどうするか？
ある所から持ってくるしかない。
つまりは、南部領域の確保だ。
「この世界は、無いものを得るための侵略は常識だ。かつての世界の過去の様にな・・・」
辺りが沈黙する中、鈴平は決断を下した。
「ならば日本の為に、敢えてその常識にのっとり、やってやろうではないか」
その言葉を聴いた伊達は即座に日本国内の自衛隊をホードラーに派遣し南部攻略に当たらせることを提案した。
それには難色示す閣僚もいたが、具体的方策がない以上は決行するしかない。
幸い、法務大臣の渡瀬（わたせ）　徹（とおる）が、南部貴族連合は国家ではなく、テロ集団だと発言した事により動揺は最小限に抑えられた。
しかし、ホードラーのときと違いなし崩し的な戦闘ではなく、意図的な戦闘は初めてである。
しばらくは眠れないかもしれないな。
と、鈴平は考えていた。

なお、今回の会議により不足している物が他にはないか、各方面と綿密に、そして徹底的に洗い出す事になったのは言うまでも無い。

第２５話「威力偵察」

ーベサリウス領コンスタンティ近郊

「こりゃ・・・すげぇ・・・」

軍事支援として派遣されたベサリウス救援隊の偵察部隊の面々は、目の前に繰り広げられている壮絶な光景に思わず言葉を失っていた。

バジル軍との交戦が始まってから６日に渡る攻防で、ベサリウス軍はその戦力の大半を喪失しつつも、未だに健在でありコンスタンティを死守していた。

コンスタンティに城壁は無いのだが、外周の建物を打ち壊して即席のバリケードを作り、遅滞行動を取りながらバジル軍に出血を強いるという戦法に出たのだ。

しかも、騎兵を使ったバジル軍の後背を脅かすゲリラ戦術も使っていた。

だが、数に差がある上、まともな防御陣地さえない状況では大勢は既に決まっているといえる。

それでもベサリウスは諦めずに戦線を縮小しながら良く守っていた。

「後方の本隊に連絡、『目標未だ健在なれど状況は極めて危険、早期行動の必要性あり』とな」

波多野は漸く実戦に出れる事がうれしかった。

ホードラーとの戦いには参加できず、その後も戦うべき相手のいないアルトリアに残されていたからだ。

せいぜいできた事といえば野盗に身を落としたホードラーの兵隊崩れ程度で、まともな実戦はこれが初だった。

「波多野曹長、本隊より『可能であれば敵に対し威力偵察を敢行せよ』だそうです」

部下の報告に林の中に偽装してある８７式偵察警戒車１両、及び８９式装甲戦闘車４両を見た。

偵察任務として先行しているため、機動力優先の装備だ。
本来なら87式偵察警戒車だけでよかったのだが、89式装甲戦闘車も連れて行けと言われたのはこれが理由だった。
「それなら取り合えず降車戦闘はしなくていいな・・・」
流石に87式偵察警戒車は乗員5名のみだが、89式装甲戦闘車には乗員3名の他に7名の普通科を乗せる事が出来る。
その89式が4両、合計28名が来ている。
幾ら何でもこれで降車戦闘は出来ないし、したくはない。
「よし、取り合えず降車せずに連中の前に出る、その後は距離をとりつつ車両より攻撃」
波多野の指示に総員が偽装を外し、それぞれの車両に搭乗していく。
87式偵察警戒車の武装はは25mm機関砲と同軸に配置された74式7.62mm機関銃各1門。
対して89式装甲戦闘車は35mm機関砲と同軸に配置された87式と同じ7.62mm機関銃各1門、そして使う機会は無いだろうが79式対舟艇対戦車誘導弾発射機を2基装備している。
また、側面には中に居ながら小銃射撃が出来る銃眼が片側3つ、左右あわせて6つ配置され、背後にも1つ配置されている。
ある意味歩兵の火力も車両の火力として使えるのだ。
ただ、この89式には問題もある。
元の世界の区分では歩兵戦闘車の分類に入るのだが、歩兵戦闘車にしては値段が高いのだ。
その為、数は100両もなく、日本唯一の機甲師団である第7師団の2個中隊、及び富士教導団1個中隊とその他教育隊にわずかに配備されているだけだ。
故にこの89式はわざわざ北海道の第7師団より回してもらっている。
その89式装甲戦闘車はホードラーとの戦争にも参加していたのだが、帰らず残っていたのをそのままこちらに回したのだ。
「いいか、連中に此方の装甲を抜く装備はない！安心して撃て！」

安心して、というのも変な話ではあるが、何せ剣や槍、後は弓矢程度で貫ける装甲ではない。
また、油断できないのは攻城兵器の類だが、それさえも至近距離から撃たれても問題ない。
つまり、彼らはよほどの事が無い限り被害なく一方的に攻撃できるのだ。
もっとも、飛び道具が主体の現代兵器が接近する必要はないのだ。
わざわざ危険を冒すことも無い。
「突入！」
波多野の号令が無線を介して全車に伝わると、自衛隊の装甲車両５両はコンスタンティに攻撃を仕掛けるバジル軍に向かって林を突破し土煙と共に驀進していった。

ヘルマンは林から飛び出してきた謎の存在がいる、と報告を受けた時に、まだ伏兵がいたのか？と考えていた。
しかし、一撃離脱を繰り返すベサリウスの騎兵部隊は既に消耗しきっており、今は後退しているはず。
では何が現れたのか？と確認に向かった。
そしてヘルマンが見たそれは薄汚い色をした金属の動く箱であった。
「何なのだあれは？」
そばに居たフェイに思わずたずねるが、フェイとて初めて見る物だ。分るはずが無い。
「分りません、あんなものは見た事も聞いた事がありません」
自分の考えを包み隠さず言うフェイの言葉にヘルマンもどう対応しようか悩んでしまう。
しかし、こちらに向かっている以上は敵と判断して対応するしかない。
「陣を組みなおせ！槍を前面に押し出し動きを止めよ！」
幾ら金属に包まれていてもあの速度で突っ込んでこれば唯では済む

まい、と考えての判断だったが、それが何か分らない以上はそれぐらいしかできない。
ありえない話だが、もし目の前に向かってくる物が何であるかを知っていれば、恥も外聞も投げ捨てて撤退を指示したであろう。
しかし、現実に分らないのだ。
ならば常道に則り対応するのが軍人だ。
ヘルマンの命令に重装歩兵が5つの動く金属の物体に槍を向ける。
その背後に歩兵が第2陣として待ち構える。
勿論、陣に到達するまでただ待つ気は無い。
陣に到達するまでに弓兵が矢を射掛ける。
が、当たり前の話ではあるが、通じるわけが無い。
射掛けられた矢は表面で跳ね返され、傷らしい傷さえもつかない。
すると、矢を射掛けられたその物体は突然腹に響く重い咆哮をあげて更に速度を上げた。
しかし、それが咆哮ではないと誰もが即座に気付いた。
重装歩兵の戦列が引き裂かれていったからだ。
それは目に見えない竜のブレスではないか、と錯覚してしまうほど強力な一撃だった。
「なんと!?」
思わず唸るヘルマンの目の前で兵士達が次々になぎ払われていく。
まるで木の葉の様にちぎれ、吹き飛び、血と臓物と肉と骨を大地へと降らせる。
しかもそれはバジル軍自慢の奴隷を使った重装歩兵が、だ。
死を恐れないようにされ、己の意思さえも持たない人形の様な重装歩兵がまるで案山子のように吹き飛ばされていく。
その光景は未だかつて無い、何か恐ろしい存在であるかの様にさえ見えた。
「接近しろ!組み付けばどうにかなる!」
自信はないがそれしかやりようが無い。
見るところ謎の物体の上部にある筒状のものから何かがでている。

逆に考えれば接近すれば攻撃されない。
そう考えたのも無理ないことではあるが、その接近が容易ではない。
見えない攻撃をするそれは陣より１００歩手前で停止、後は徐々に後退して接近を許そうとしない。
「弓騎兵！背後を断て！」
フェイが弓騎兵の機動力で回り込めば動きを封じられると考えた。
即座に弓騎兵は左右に分かれて大きく陣を迂回しながら物体の背後へと向かう。
ある程度の距離まで来ると短弓を射掛けるが、やはり効果はない。
当たってもカン、カンという金属同士がぶつかり合う軽い音と共はじかれてしまう。
それでも動きを封じるために背後に回ったのはいいのだが、今度は物体の側面から軽い炸裂音が響きだす。
その音が発せられる度に弓騎兵が馬ごとひっくり返っていく。
「何と言う事だ・・・」
弓騎兵さえ蹴散らされ、ほうほうの呈で逃げ帰ってくる様子にヘルマンは唸るしか出来ない。
「将軍、一旦軍を後退させ陣形の立て直しをしませんと・・・」
そばに控えるフェイが苦々しい表情で進言する。
既に前列の重装歩兵は戦列を維持できる状態に無い。
それだけ犠牲が出ているのだ。
「・・・止むを得ん。後退せよ」
落ち着きを取り戻しつつヘルマンは進言を受け入れ、陣形を整えるために後退を開始させた。
流石にそれを追って来はしなかったが、それはしばらくその場に留まって此方の動向を見守っていた。
「魔術長を呼んでくれ」
一方的な戦場より遠ざかるとヘルマンは重装歩兵の維持の為に付いて来ていた魔術長テレサ・カニンガムを呼び出すよう指示していた。

波多野の率いる強行偵察隊は此方に気付いて陣形を変えるバジル軍の様子を車内から観察していた。
「陣形の変更が早いな。訓練が行き届いている」
バジル軍の動きは大勢の軍を一まとめに動かしているわりにはすばやかった。
これで側面を強襲、と言うわけには行かなくなったが、それはそれで良いと考えた。
「各車、機関砲射撃用意」
８９式装甲戦闘車の操縦士の背後に搭乗する波多野は眼前に広がるバジル軍の動きを逃さぬように見つめながら攻撃を準備させる。
後は相手の動きにあわせるだけだが、そこに車体を叩く何かが周囲に飛んできた。
「班長、攻撃を受けています」
弓矢での攻撃に元から心配していない操縦士、田中（たなか）　武敏（たけとし）は非常に落ち着いた声で報告する。
「攻撃？弓矢か？」
波多野の問い掛けに田中は、そうです、と簡潔に答えた。
流石に効果はないと分っていても攻撃されるのは気分がよくない。
「よし、応射開始」
波多野のその指示を待ってましたと言わんばかりに８７式偵察警戒車の２５ｍｍが、８９式装甲戦闘車の３５ｍｍ機関砲が火を噴いた。
８７式偵察警戒車の２５ｍｍ機関砲は毎分６２０発からなる連射速度を持つ。
対する８９式装甲戦闘車の３５ｍｍ機関砲は威力こそ２５ｍｍを上回るが、軽量化の結果連射速度が大きく低下しており、本来毎分５５０発のはずが２００発となっている。
だが、やはりその威力は絶大で、人体を紙の様に引き裂いていった。
本来、元の世界においては双方共に対人ではなく対軽装甲用であり、国際法でも人体への使用には制限が科せられている。

しかし、この世界に国際法はない。
それがバジル軍の不幸だったかもしれない。
とは言え、搭載弾数は多くは無いので、景気良く撃つわけには行かない。
機関砲は機関銃、つまりマシンガンと違って弾をばら撒くものではない。
あくまでも連射が出来る「砲」なので、随時的確に狙って撃つものだ。
幸い、目標は固まっているので狙わなくても当たる。
しかも、命中した後もその勢いを止めることなく、その背後に居るであろう兵士達も容赦なく粉砕していった。
「・・・流石にこれは・・・」
一方的になるのは分っていた。
分っていたがここまでになるとは波多野も想像できなかった。
ゲームで主人公が悪人をばったばったとなぎ倒す様は予想した。
しかし、ゲームでもミス一つで主人公がやられゲームオーバーになる。
だが、現在の波多野たちの状況は常時無敵状態で圧倒的攻撃力を持ってラスボスをいたぶる様な状況だ。
「傍から見なくても虐殺と言われますね」
田中はこんなときでも冷静だった。
「そうだな、向こうが引くなら無理に追撃はしなくていいだろう」
と、答えつつ、今後は兵装の使いどころを良く考える必要があると感じていた。
勢いで機関砲を使ったはいいが、流石に弾と予算の無駄遣いになりかねない。
『目標、騎兵が背後に迂回しています』
87式偵察警戒車からの報告が波多野の耳に入る。
波多野の位置からは他の車両が邪魔になり、よくは見えないが動いているのはたしかだろう。

「各搭乗員は銃眼より射撃開始、目標の行動を阻め」
その命令が発せられると日ごろの訓練の賜物か、普通科の搭乗員はそれぞれの座席に割り当てられている銃眼に付いて射撃を開始する。
流石に車上訓練を受けた面々であると同時に、車体は停止状態だ。しっかり狙って撃て、しかも良く当てていた。
それぞれの目に騎兵が次々に地に沈む様子が映るが、どんなに怖かろうと気分が良くなかろうと攻撃の手は緩めなかった。
初の実戦による興奮もあるだろうが、あまりにも現実離れした光景に感覚が追いついていないのだ。
例え追い付いていても、そのための訓練をしてきている。
吐くなりするのは戦闘が終わった後で十分に出来る。
それぞれはそれぞれの思いと共に胃からこみ上げて来るものを必死に押さえ戦闘を継続した。
やがて、バジル軍は太刀打ちできないと悟ったのか後退を開始した。
それに伴い波多野は攻撃を停止させた。
「各車状況報告」
波多野の声に全車から損害なし、と報告が返ってくる。
その報告に安堵しながらも、後退するバジル軍を油断せずに見つめていた。
「目標が十分に離れたら此方も本隊と合流する」
そう言いながら、波多野は自分の初の実戦が終わった事を実感していた。

第２６話「支援到着」

ーベサリウス国コンスタンティ

ベサリウスは目の前で行われた戦闘に恐怖を覚えていた。
以前、難民の集落で起きた戦いではニホンの兵士は皆殺しにされていたのだ。
それ故に従来の兵より強力であるのは確かであるものの、決して勝てない相手ではないと思っていたからだ。
今回と同じく、馬なしで動くもの（車両と田辺から聞いている）も見てはいるが、不意を突いての攻撃だったのでその能力までは知らなかった。
しかし、眼前で行われた物は最早戦闘とは呼べない。
武装した大人に幼児が素手で掴み掛かるのと同じ行為に等しい。
それだけの力の差を見せ付けられたといえる。
「・・・は、ははは・・・これは・・・」
思わず笑いが込み上げてくる。
あのままバジル軍が侵攻してこなければ、タラスクの脅威が増さなければ、恐らくベサリウスはニホンから差し伸べられた手を振り払っていたであろう。
それは、そのままあの力が自分に向く事になりかねなかったのだ。
運がいい。

そうとしか表現のしようが無い。
状況の変化、そして自分に手を差し向けてくれたニホン、そして己の決断・・・。
どれもが天により定められた運命の様にも思える。
「あれが、敵に回らなくてよかったな・・・」

バジル軍の攻撃を意図もたやすく跳ね返したニホン。
手勢ともいえる少数でそれなのに、本腰を入れてきたならどうなるのだろうか？
そう思うと身震いさえ覚える。
そして、自分達の戦いの常識が崩壊した事実が突き付けられている。
新しい時代が、新しい世界の在りかたが示されているとさえ錯覚してしまっていた。

昼前に起きた戦闘が終わり、夕刻が迫る中、日本国陸上自衛隊がコンスタンティに到着していた。
「初めて御意を得ます。自分は日本国陸上自衛隊所属特設旅団司令坂上浩一郎少将です」
日本からの支援部隊を率いる坂上がベサリウスに敬礼を捧げる。
如何に力の差があろうと、ベサリウスは今や一国の王とも言うべき立場だ。
故に力関係など無視して礼儀を尽くすのは自衛官として当然である。
坂上の敬礼にベサリウスは感謝の言葉を述べた。
「早速ではありますが今後の事を含め対策を練ろうと思います。宜しければ情報交換を兼ねて会議を行いたいのですが？」
休むまもなく次の行動に出ようとする坂上の態度に規律正しい日本の軍人の姿を見た。
「結構ですな。では、屋敷に案内しましょう」
そういってベサリウスは坂上を含む幕僚を屋敷まで案内した。

ベサリウスの屋敷の庭には負傷者が所狭しと並んでいた。
それを横目に坂上はどれだけ厳しい戦況であるかが手に取る様に分っていた。

（如何に防衛戦とは言え、兵力差を跳ね返し続けた代償は少なくない・・・か）

そう思いながらも、坂上は敢えて黙っていた。

と、言うのも、坂上は此方からアレコレと言ってはベサリウスの面目を潰しかねないと思ったからだ。

必要があるなら、ベサリウスの側から具体的支援を提示してもらわねばならない。

もちろん、事態がより深刻であれば此方からの提言もありだろう。

会議室に到着するとそれぞれが向かい合うような形で着席し、現在までの状況などが交換された。

ベサリウスの戦力は当初の半数以下にまで低下しており戦闘に参加できるものは１０００人程度しかいない。

元もとの戦力が２４００程度だったのを考えれば壊滅的損害だ。

現代の常識から考えれば戦闘能力を完全に喪失しているとみなされる。

それに対しバジル軍の損害は３０００以上はある見込みだ。

此方も約3割の損害を与えており、現代の常識に照らし合わせれば全滅となり、戦闘能力喪失状態になる。

だが、ここは現代ではない。

戦力が低下しようと戦闘可能な兵がいる限り損害の度合いで戦闘可能かどうかを判定する事はしないのだ。

いかなる損害を受けようと戦闘継続の意思がある限り負けではないのだ。

そう言う意味では制圧は容易くは無いだろう。

何せ殲滅、文字通り戦える兵を０にしない限り終わらないのだ。

ハッキリ言って相手したくない手合いだ。

それに対し日本は思い切ってホードラー、アルトリア内の戦力の大半を動員した旅団規模での支援だ。

総人数約３５００名。

これでアルトリアに残る戦力は１０００名も居ない上、ホードラー南部や警備に残った戦力は２０００人いるかいないかだ。
日本本土からの派遣拡大が行われる予定だが、それまでは現有戦力で凌ぐ必要がある。
また、旅団規模での派遣は状況に対するに各部隊を統合し対応する必要があるからになる。
と言うのも、連隊や大隊規模ではそれぞれの兵科を細かく混成することになり、事態の変化に対応できない可能性が合ったからだ。
それに対し旅団規模ならば、元から混成を前提に組まれる編成になる。
一つの作戦を行う最小単位は師団だが、今回のような場合は旅団でも行えるという判断もあったが、要は師団を派遣できるだけの余力が無く、かつ一つの作戦行動する能力を有する編成となると旅団しかないのだ。
もっとも、その旅団規模でもバジル軍侵攻前のベサリウスの総兵力を上回っているのだが・・・。

そして支援旅団は幾つかの兵科が指揮下にある。
旅団本部、つまり司令部とそれに付随する普通科連隊。
そして、それとは別に４個普通科連隊、戦車中隊、２個野戦特化部隊（砲兵大隊）、施設中隊、通信中隊、偵察隊、飛行隊（ヘリ航空隊）そして後方支援隊（２個整備中隊、補給中隊、輸送隊、衛生隊）である。
これだけ見ると相当な規模に見えるが、この場にいない部隊もある、それは戦車中隊と輸送隊とその護衛に着いている１個普通科中隊だ。
戦車中隊は早急な支援を必要な今回に限っては置いてきている。
一応後から遅れて合流の予定である。
普通科中隊は司令部付き以外の各普通科より１個小隊づつ抽出して編成されている。
これは、道中の安全の確保できる見通しが立たない事と、空港が無

いため空輸も困難であり、陸路しか手段がなかったためだ。
また、本来は1個野戦特化部隊は高射特化中隊だったのだが、現状空中の脅威が確認されないために野戦特化が増強されている。
一応、補給については許可を得られ次第に施設中隊の一部が簡易でも作る予定ではあるが、大規模輸送を行う必要が出た場合は大型機の離着陸が可能なものを設置するにはやや時間がかかる。
また、空中に脅威が確認された場合は別途用意した地対空誘導弾ならびに地対空砲で対応することになっている。

ベサリウスにはその兵科がどういった物かは分らないが、日本でも中々見られない大規模派遣と判断していた。
実際、それは間違いではない。
現在まではだが・・・。
「３５００名全員が戦闘員ではありませんが、単純に戦闘を行うとするならば約３０００名が従事できます」
坂上の説明に、ベサリウスはそれだけでもかなりの戦力だと思った。
それと同時に、いざとなれば此方に刃を向けられかねないのを実感した。
ひとたび刃を向けられれば抗う術は無いだろう。
力量差もあるが、兵力差もある。
とは言うものの、その心配をしても始まらない。
取り合えずは彼等を信じた上で防衛に専念せねばならない。
だが、その考えに坂上は逆に攻めるべきときだ。と主張した。
これには歴戦のベサリウスも驚いた。
たしかにその力は圧倒的かもしれない。
しかし、攻められているのは自分たちなのだ。
逆ではないのか?とさえ考えてしまう。
「いえ、同じ防衛でも主導権を握るか握らないかで状況は変わります」
坂上はそう言って作戦を説明した。

基本的に日本が今まで蓄積、研究してきた戦い方は過去の先例に従っているにすぎない。
それはベサリウスも同じだが、蓄積してきた年月が違う。
この世界では戦い方はそれぞれの経験を生かす程度で、それ以前の戦術などはあまり研究されていない。
今まで劇的な変化が無かった故なのだが、日本は違う。
古代より伝わる戦術や戦略という物の蓄積と研究が、机上のものであっても経験として生きているのだ。
それはどちらが優れているかの優劣ではなく、その必要があったかどうか？の差でしかない。
もしも、この世界でも劇的変化をもたらす事案があったとするならば、今がその始まりなのだろう。
「・・・と、言うわけで、我々が行う戦争の形の一つである火力戦をお見せしようと思います」
ベサリウスには坂上の自信の笑みが、獰猛な猛獣の獲物を前にしての舌なめずりに見えた。

ーバジル王国ベサリウス領侵攻軍野戦陣

自分の天幕で損害報告を聞きヘルマンは酒でも飲んで寝てしまいたい気分だった。
数的な損害はまだ軽微といえたが、重装歩兵以外の兵士に恐怖が蔓延しつつあったからだ。
正直、士気の低下が著しい。
目の前で、横で仲間が前列にいた重装歩兵ごと吹き飛ばされる様を見せ付けられては仕方ないかもしれない。
しかし、だからといってここで撤退は難しい。

ベサリウスの軍は消耗が激しいはずな上、あの存在が援軍であるなら数的にはそれ程でもない。
更にまだ実利を得ていないのだ。
このまま撤退、帰還でもしようものならザハン王に処刑されてしまうだろう。
それだけは避けねばならない。
「何かいい方法はないものかな？」
ヘルマンが天幕内で独り言を呟いたとき、人影が天幕に入り込んできた。
重装歩兵の維持に来ていたテレサだ。
重装歩兵は基本的に奴隷を使っている。
その奴隷を魔法の力のこもった薬物で精神を破壊し、肉体を増強して運用される。
そのためには定期的な薬物投与が必要で、それを怠ると発狂して無闇やたらと暴れるのだ。
ある種の麻薬と言えるのだが、麻薬と違い特別な調合を施された解除薬を投与しない限り治ることは無い。
また、一度投与すれば微量を与える限りでいい。
麻薬ならば徐々に投薬量を増やさねばならなくなるがそれがないのだ。
実に経済的な薬物である。
もっとも、フェイなどはそのやり方を大いに嫌っているが、ヘルマンはそこまでは嫌っていない。
役に立つなら何でもいいのだ。
「いい方法がございますわ」
天幕に入ってきたテレサは妖艶な笑みを浮かべていた。
ゆったりとしたフードのない赤いローブに身を包み、その豊満な身体を覆い隠している。
だが、その美しいと言わざる得ない妖艶な雰囲気はまるで誘惑しているようだ。

「来たか。いい方法とは士気を回復させてアレに対抗できるようにする事が出来るということかね？」
現在抱える問題をそのままテレサにぶつける。
そのために呼び出したのだ。
「問題ありませんわ将軍。幸いにも私のお人形達の数が減っておりますので・・・」
自身の管理する兵を人形と呼び捨てる姿は、その見た目と裏腹に残酷な素顔を如実に表していた。
「ふむ、聞かせてもらおうか？」
状況を打開できるならどんな手段でも構わない。
ヘルマンのその考えは、この世界における一般的な特権階級の意識そのものだ。
腕を組みながらテレサの提案を聞きに入るヘルマンは、にやりと笑みを浮かべた。
「なるほど、恐怖が無ければ士気の低下も無いし、相手への接近も可能か・・・」
頷きながらこれならいける。と考えていた。
相手は接近されないよう原理こそ分らないが見えない攻撃をしているのだろう。
つまりは飛び道具だ。
逆に考えれば接近されたが最後という事になる。
「今回は野戦でしたので接近も容易ではなかったでしょう。ですが次は攻城戦です。否応無く接近戦ですわ」
それならば兵士の恐怖を押さえ込んでしまえばいい。
と、テレサは言ったのだ。
そして、その方法に魔法薬を使うのだ、と・・・。
「幸いにもお人形が半減しましたので薬は余っております。兵士の食事に混ぜれば恐怖心だけを取り除けます」
増強の魔法薬の方は混ぜると変質して効果が失われてしまう。
だから今回は諦めねばならなかった。

だが、テレサはこれが上手くいけば増強の魔法薬の改良を考えていた。
最悪、短時間で投薬された者が壊れようといい。
より多数に効果のある魔法薬の研究をしたかったのだ。
そのためにも勝てばいい、それ以外ではダメだ。
と考えていた。
「よかろう。今夜の食事と、明日の食事に混ぜればいいはずだ。やってくれ」
何のためらいも無く指示を出すヘルマンに、食事係が抵抗したらどうするのか？とテレサが聞いた。
「抵抗するならばその者にも飲ませてやれ。そうすれば言う事を聞くのだろう？」
満足いく答えを聞いたテレサは恭しく頭を下げて礼を取ると、天幕を退出し魔法薬の元に向かっていった。
（これで更なる研究ができるわね）
自分の研究が成功すれば更に予算がもらえる。
予算があれば政治的にも権限を獲得しやすい。
彼女の頭にはそれで占められていた。
勝てるかどうかの結果さえ出ていないうちから・・・。

第27話「決戦前夜」

ーベサリウス国コンスタンティ

ベサリウスは懐疑的であった。

日本の提案する火力戦、強力な飛び道具で相手を圧殺するものであるらしい。

しかし、古来より飛び道具で戦の決着が着いた試しはない。

それを考えると本当に可能なのか？と考えてしまう。

もう一度詳しく説明を聞こうと思ったが、坂上は先程ベサリウスから行われた要請で負傷者の手当てや、領民への食事の手配で席を外している。

また、日本が展開するといった火力戦において、ベサリウスの手勢も巻き添えを食いかねないとして断られたのも気に掛かる。

坂上は非常に言い難そうにしていたが、ハッキリ言えば邪魔といってるに等しい。

しかし、火力戦について懐疑的になっても、自然と坂上の共同戦拒否の姿勢には腹が立たない。

人柄もあるのだろうが、今の今まで戦い続けたベサリウス軍の招聘を労わったからだと分るからだ。

「いや、彼等を信じよう」

自分の中に芽生えた従来の戦の方法などは既に過去のものだと頭を振る。

たしかに実際に目にするまでは懐疑心があるだろう。

だが、既に彼らはその片鱗を自分に見せているではないか。

そう考えて自身の中に芽生えたものを押し込んだ。

外で領民に炊き出しや、負傷者への手当てをしてくれている自衛隊の姿は騎士に似たものを感じる。

ある意味、自衛隊一人一人が騎士なのであろう。

ベサリウスはその姿に敬意を持っていた。
そのときだった。
部屋のドアがノックされる音に、ベサリウスは自問自答をやめ、振り返った。
「入れ」
短くドアに向けて声をかけると、そこに坂上が来ていた。
「少々お願いに上がりました」
日本からのお願いに警戒心が生まれるがそれを振り払った。
「なんでしょう?」
その内容を聞かない内に警戒など必要ない。
むしろ今のベサリウスにとって警戒するだけ無駄だ。
いつから自分はこんなに疑い深くなったのか、と自嘲さえ浮ぶ。
「実は、食料医薬品を含めた武器などの補給の件で参りました」
どれも戦に重要なものの補給、そのことについてといわれれば内容如何に限らず聞かねばなるまい。
なにせ直接死活問題につながる話だ。
「構いません、どうぞ仰ってください」
ベサリウスは先程の心中になっていた自分への戒めと、日本に対する侘びを込め何でも言ってほしい気持ちだった。
「では・・・現在補給は陸路で輸送してますが、迅速かつ大量に、となりますと現在の陸路のみでは不安があります」
と、言って地図を出した。
その地図を見てベサリウスは驚いた。
恐ろしく精巧に作られているからだ。
文字は読めないが、これがコンスタンティ周辺を示したものだとすると、彼らは来て直ぐに作った事になる。
「これは・・・何時作られたので?」
本来地図は軍事機密に匹敵する重要な代物だ。
何時、どこで、どうやって作ったのかなど、色々な疑問が浮ぶ。
「ああ、これは人工衛星のＧＰＳを・・・と言われましても難しい

ですね」
坂上は普通に現代日本で通用する言葉を使おうとして、それでは説明が分らないだろうと気付いた。
「えぇ、空より高いところに宇宙と呼ばれる空間がありまして・・・」
かなり噛み砕いて、なおかつ分りやすく説明しようと坂上は苦労していた。
まさか幼児に教えるように伝えるのも失礼だ。
だが、一般常識レベルの話もこの世界においては非常識なのだ。
そこは日本が今後も苦労するところになる。
「・・・という訳で、そこまで行って作った代物です」
これで伝わるかはハッキリ行って疑問だった。
約３０分欠けて行われた説明も、彼らの想像力の限界を超えたならばまず伝わらない。
これで理解できるなら相当なものだ。
だが、ベサリウスはその坂上の予想を超えていた。
「・・・詳しくは分らないが、つまり、相当高いところから見た様子を描いたものか？」
彼は半分以上理解したのだ。
勿論、理解できていない部分はある。
だが、概略だけでも理解して見せたのにはハッキリ言って驚き以外の何物でもない。
それもそうだろう。
受けてきた教育や環境が違うだけで人間としての能力に優劣があるわけではない。
自分達が特別優れた存在で、この世界の住人が劣った存在、と言うことはありえないのだ。
坂上の知識とて、古来より現代と言う歴史により積み重ねられた知識の集合体でしかないのだ。
肉体的にも知性的にもお互いに遜色あるわけではない。

とは言っても、やはりその世界の人間の想像力を超えたものは理解しようにも理解するのが難しい。
そこを考えるとベサリウスは傑物であると言えた。
「そう思っていただいて間違いありません。もっとも、まともな測量をしなければ正確な地図は作れませんがね」
坂上はそう言って肩を竦めた。
幾ら時代が進んでも、衛星高度から地上を見下ろしても、やはり正確な地図を作るとなると地上での測量がなければ駄目なのだ。
以前の世界では、ある国が衛星写真だけで自国の地図を作ったものの、形はともかく距離、高低差と言ったデータが不十分であったために、全く地図としては役に立たないものが出来上がってしまっている。
それを考えると測量と言う技術は時代遅れでもなんでもないのだ。
技術の誕生が古いから使えないのではない。
その技術の使い方を知らないから使えないと錯覚しているのだ。
その用途、必要性、そして他の技術との組み合わせをしっかりやれば、下手な電子技術のそれよりも優れた代物はたくさんある。
地図の作成もそう言った技術の一つなのだ。
「なるほど・・・測量か・・・また学ぶべき言葉がでてきたな」
思わず笑い出すベサリウス。
その姿に同盟相手でよかったかもしれないと坂上は思っていた。

その後、坂上から空路での輸送のため、空港設備を必要とする旨を伝えられたベサリウスは、以外にあっさりと許可してくれた。
と言うのはベサリウス自身、日本の技術を導入すれば国を富ませるのに最短距離を走れるとふんだからだ。
勝敗の如何に限らず、バジル王国との戦争が終われば今度はタラスクに備えねばならない。
なら、全くの異文化であろうと積極的に受け入れ、国を富ませ備えを作らねば滅びるしかないのだ。

空路での輸送路が確立すれば、今後日本との交易や交流は一層深まるだろう。
その為を思えば現状をかんがみても拒否する理由など無い。
むしろ逆に坂上の方がベサリウスの思考の柔軟性、先見性が驚嘆に値するほどだ。
「この戦いが終わったら一度日本を見てみたいものですな」
ベサリウスは優れた技術、文化、知識を持つ日本を見てみたいと思っていた。
無論、最低でもタラスクの脅威をどうにかした後になるだろうが・・・。

「そのときは日本をご案内しますよ」
坂上はそういって退出した。
先程貰った許可を実行するためにだ。
一人残されたベサリウスは、初めの頃の懐疑心や警戒心が吹き飛んでいるのに気付いた。
「・・・なんだ、話せば面白い連中ではないか」
悲観的になりすぎていた自分を思うと、また笑いがこみ上げてきた。
かつての王家を滅ぼした日本がついているのだ。
地方の一領主にすぎなかったバジル相手に後れを取るなどないだろう。
ベサリウスはそう思えていた。

自衛隊はコンスタンティに一部の部隊を残したまま夜のうちに出撃した。
バジル軍の夜襲はもとより警戒していない。
例えされても赤外線暗視装置などの夜間装備で即座に察知できるからだ。
ただ、陣地構築と、支援を行っている最中の非戦闘員などを戦闘に巻き込まない様に配慮したに過ぎない。

坂上は監視に当たらせている偵察隊からの報告に、動くのは翌朝以降と判断した。
「そうですね、如何に手痛い打撃を受けたとは言え向こうが有利なのですから」
幕僚も同意見だった。
唯一気になるのは以前、難民キャンプを襲った連中が、小銃で撃たれても意に介さなかったことだ。
どう言った手段かは分らないが、ベサリウスからの情報で同じ軍の連中であると聞いている以上は油断できない。
それに対する対抗手段が『火力戦』であった。
圧倒的火力を持って接近される前に粉砕する。
それが犠牲を減らすことにつながる。
たとえ虐殺になっても、犠牲をだすよりは遥かにいい。
「戦車は明日になりませんと着きません。今回のには間に合いませんな」
幕僚の話に坂上が頷く。
と、なれば野戦特化部隊が主力になる。
幸いにも野戦特化部隊は高射特化中隊を外した代わりに2部隊を引き連れている。
野戦特化部隊の装備は退役が進んでいた７５式自走１５５ｍｍ榴弾砲や１５５ｍｍ榴弾砲ＦＨ７０で構成されている。
本来はロケット砲も用意するのだが、補給の問題から省かれている。
その代わり、７５式自走１５５ｍｍ榴弾砲と１５５ｍｍ榴弾砲が多数配備されていた。
ただし、７５式自走１５５ｍｍ榴弾砲は１９ｋｍ、１５５ｍｍ榴弾砲の方は２５ｋｍと射程に違いがあるので、運用には多少の問題があるかもしれない。
その為に支援旅団隷下の野戦特化部隊の一つを７５式、もう一つを１５５ｍｍと振り分け、後方にて前後を離しての配置となった。
また、各普通科連隊に配備されているＬ１６　８１ｍｍ迫撃砲や１

２０ｍｍ迫撃砲も火力戦に参加する。
意外と知られていないが、連隊規模にもなると普通科にも迫撃砲を使う射撃部隊が存在する。
なにも小銃だけで戦うわけではないのだ。
勿論、車両も存在する。
特に１２０ｍｍ迫撃砲は重いので人力輸送も可能だが、基本的に車両で牽引する。
それはさておき、それらをかいくぐって来たならばその時は飛行隊所有のＵＨ－１Ｊイロコイによる攻撃が行われる。
流石にそこまで抜かれるとは思いたくは無いが、万が一にも抜かれたなら最後に残された普通科連隊の射撃になる。
言わば何重にも配置した火力を持って接近を阻むのが今回の火力戦だ。
反面、相手の出方にもよるが、相当の弾薬を消耗しかねない。
今後の動向に対して、ここで弾薬を消費してよいものか、と疑問は残るが、逆を言えばここで出し惜しみして失敗すれば後が無い。
それらを考えると、補給が大変でも使って被害を抑えたほうが良いのだ。
「ここまでやって負けたら腹を切らねばならんな」
冗談交じりに坂上が言うが誰も笑わない。
何せ彼らは初めて相対するのだ。
幾ら準備しても不安は残る。
「諸君、不安は分るが自身を持て。今まで訓練に訓練を重ねてきたのは何のためか？」
不安げな幕僚達を前に坂上は厳しい表情で望む。
「今この時のためではないか！諸君が今まで積み重ねてきた事に自信を持て！」
坂上の喝に幕僚も気を引き締める。
自分達がやってきた事は無駄ではない事の証明ができるのだ。
それこそ本望ともいえる。

「それでいい。では解散」
最後にそう締めると坂上はふう、とため息をついた。
初めての実戦を前に坂上もまた不安だったのだ。
しかし、指揮官としてそんな姿は見せられない。
だからこそ、あの喝は自分に向けられたものだった。

第２８話「火力戦〜前編」

ーベサリウス領コンスタンティ北東

バジル王国ベサリウス侵攻軍は本陣を引き払い、一路コンスタンティ目指し南下を開始していた。
本陣を引き払ったのは、この一戦で駄目ならば一度後退せねばならないからだ。
戦力的にも、物資的にもこの一戦が限界なのだ。
その為にヘルマンはテレサの提案した味方を捨て駒にする策を実行していた。
精神を壊す魔法薬を騎兵以外の兵に使ったのだ。
量的に完全に壊す事は適わないが、その分幾らか柔軟に動かす事が出来る。
恐怖心、そして痛覚を麻痺させる事で死兵と化す事が出来た。
もっとも、この一戦が終われば この魔法薬を使った兵は処分しなければならないが・・・。
それでも勝てば良い。
勝てば後は如何様にもできる。
「コンスタンティ到着は昼ごろになりますね」
複雑な心中を押し隠してフェイがヘルマンに進軍状況を報告した。
正直言って今回の策にはフェイは反対だった。
その為に考え直してもらおうと何度も意見具申した。
しかし、ヘルマンの強固な意志とテレサによる代案を出すようにとの横槍に最後まで考え直してはもらえなかったのだ。
フェイとて武人だ。
始まってしまえば自らの責務を果たす事に躊躇いはない。
しかし、兵を無闇に捨て駒にしてしまうやり方は戦術的に下策も下策だ。

一度失えば後が続かなくなるからだが、その後とはタラスクのことである。
西方のタラスク王国がすでに西方諸侯の大半を飲み込んでいる。
ベサリウスを討った後はそれに備えねばならないのに、ここで兵を消耗すれば備えるのも難しくなる。
フェイは先を見てそう考えているのだ。
「うむ、戦闘が始まればお前は残存する弓騎兵を率いて側面に回れ」
事前に決められた作戦を今またここで告げる。
フェイの度重なる意見具申に疎ましく感じていたのだ。
また、側面に回り陽動とする事でベサリウス軍の戦力を分散させる必要もある。
しかも極めて少数だが、此方の攻撃を意にも介さぬ謎の軍勢への牽制にもなる。
「はっ、その上で奴らがまた現れたなら背後より強襲ですね?」
何度も聞かされたことを再び確認するように答えた。
この辺りはフェイは己の立場をわきまえているのがわかる。
もっとも、分って居なかろうと既に後戻りは出来ないのだが・・・。
そのときだった。

「将軍!ま、前を!」
騎兵の一人が前方を指差しながらヘルマンに報告する。
何事か?と思い前を見るヘルマンの目に見知らぬ軍勢が姿を見せていた。
「ば、馬鹿な・・・!?」
ベサリウスの軍勢ではない。
別の軍勢による援軍にしか見えない。
しかし、ベサリウスに援軍を送る余裕のある国など聞いた事が無い。
「・・・数は2、３０００居るか居ないか・・・こちらは約８０００、倍以上の兵力ですわ」
馬を横付けしてテレサがヘルマンに告げる。

倍の戦力であるなら負けるはずが無い。
テレサは魔法薬も使っている以上、自分達の戦力の方が圧倒していると考えていた。
その考え自体は間違いではないが、何時の間に援軍が何所からとも無く現れ、そして布陣しているのをもう少し用心すべきであった。
「・・・たしかに、こちらが負ける要素は無い！しかも野戦ともなれば数の多いこちらが圧倒できる！進めぇい！」
ヘルマンの号令に空ろな目の兵が前進を開始する。
「騎兵はいかがいたしますか？」
フェイは、当初の予定とは違う事態であるためヘルマンに指示を乞う。
ヘルマンは横目で見ながら待機、と告げた。
まだ騎兵を動かす必要は無い。
当初の予定とは違うが、平野での野戦であるならば相手も大した小細工も出来ないと判断したからだ。
「はっ・・・」
素直に従うフェイは前方に展開する謎の軍勢に、言い知れぬ不安を感じながらも武人として将たるヘルマンの指示に黙って従うしかなかった。

「前方１２時の方向、距離１５、目標なおも前進！交戦態勢の模様！」
遠目に見えるバジル軍の軍勢を自衛隊はかなり前からその動きを察知していた。
平野であるのもあるが、各種観測機器（砲撃用無人観測機含む）があったからだ。
「十分に射程内ですな」
前線より後方約２ｋｍ離れた旅団司令部にて幕僚が坂上に報告する。
しかし、坂上はまだ攻撃は早いと感じていた。

地図を見ながら距離を測る坂上。
地図は紙ではなく各種観測機器により観測された情報を元に映し出されている大型のディスプレイのものだ。
観測機器のお陰で相手の動きが映像でもリアルタイムで映されている。
その様子からこちらに気付いたようだが、進軍を止める気配はない。
「まだ撃つな。もっと引き付けろ」
火力戦を展開する事が前提になってはいたが、あまり距離があるうちに撃ち始めると逃げられる恐れがある。
そして逃げた兵がゲリラ化するのは避けたいのだ。
「では、どの辺りで撃ち方開始しますか？」
幕僚が地図上に表示された距離マーカーを見ながら坂上の判断を聞く。
坂上はしばし考えた後、一点を示した。
そこには９０００ｍと書かれていた。
「距離９にて砲撃開始、現在いる距離１５以上への攻撃は不要だ」
それ以上に逃げ切れるとは思えなかったからだ。
「距離９・・・近すぎませんか？そのまま突撃してきた場合を考えますと砲撃は然程できませんが？」
あまり近づきすぎると味方スレスレを撃たねばならなくなる。
時と場合によっては味方を誤射しかねないのだ。
「距離６以内になったら第２陣にて攻撃、距離３以内で第３陣だ。距離１以内になったら最終ラインの攻撃に移る」
坂上が個と細かく指示を飛ばす。
最後の最終ラインは普通科による攻撃だが、距離１、つまり１００ｍでは流石に攻撃は届かない。
だが、普通科だけでなく、偵察隊の攻撃は可能なのでそれを意図しているのは幕僚にも分った。
「了解です。各部署に連絡、準備かかれ！」
坂上の判断を幕僚が無線員に告げると、無線員は各部隊に指示を飛

ばしていく。
坂上は腕を組みながらじっと画面に映し出されたバジル軍を見ていた。
昔ながらの甲冑に身を包み、槍を前面に押し出して進軍してくる姿は映画か何かのように思えてくる。
だが、これからそれを完膚無きまでに叩き潰そうとしている自分達は何なのだろうか？
何故日本が故郷の世界よりこの世界に来てしまったのか？
この世界で何をするために日本は転移したのだろうか？
それを考えずにはいられなかった。

やがて、攻撃予定地点にバジル軍が差し掛かる。
幕僚からの報告に、即座に答えない坂上。
ただじっと画面を見ながら険しい表情の坂上に司令部の誰もが目を向けていた。
やがて、静かに坂上は命令を下した。
「撃ち方・・・始め」
その命令は即座に野戦特化部隊に告げられ、野戦特化部隊の７５式自走１５５ｍｍ榴弾砲と、１５５ｍｍ榴弾砲がそれぞれ１発づつに爆音を響かせた。
腹に響く重い音が辺りに響く。
訓練された自衛官たちは轟音が静まる前に次弾装填を開始している。
たった２発撃っただけだが、これは観測射撃といい、ちゃんと命中範囲に届いているかを把握するための射撃だ。
そして、しばらくして旅団司令部より連絡が届く。
『目標に着弾、効力射に移れ』
効力射、つまり効力射撃だ。
要はこれが本格的な砲撃の合図となる。
一度撃った各榴弾砲は既に再装填を完了している。

そして、配置された７５式、１５５ｍｍ榴弾砲全砲門が一斉に轟音を轟かした。

密集横陣を組みながら前方に展開する謎の軍勢を殲滅せんと進み続ける。

そのバジル軍を観測するラジコンヘリの存在に気付かないままだ。

やがて、その頭上にヒュルヒュルと妙な音が接近してきた。

「何の音だ？」

誰もがそう口にしながら、聞こえてくる頭上を見上げる。

しかし、特に何も見えない。

段々と接近してくる音の正体をヘルマンを含め、正気のもの全員が探す。

そこに、１５５ｍｍ榴弾が２つ着弾した。

すさまじい爆発と、それによって生じた轟音、そして破片が爆発に巻き込まれた兵を、爆発から免れたはずの兵をバラバラに引き裂いてしまう。

しかも爆風に煽られ、離れていたはずの兵も吹き飛び地に伏せる。

あまりの轟音に訓練された軍馬さえも恐慌をきたして暴れまわる。

そして馬に乗っていたもの全員が馬から落馬したり、抑えようと必死になってしまう。

その混乱は正気の者だけに限ったものではあるが、これが魔法薬なしだったら兵は四散していたであろう。

「な、何がおきたのだ！」

ヘルマンが訳が分らぬとばかりに怒号を上げる。

だが、それに答えられるものなど居ない。

様々な魔法を会得しているはずのテレサでさえ見た事のない魔法だ。

そう、彼らには魔法だとしか認識できていない。

しかし、魔法とは違う威力にそれが何なのかがわからないのだ。

そんな彼らの頭上に、再びあのヒュルヒュルと言う奇妙な音が近づいてきていた。
今度は1つや2つなんてものではない。
無数に聞こえてくる。
その事実にヘルマンはここにいては危険だと考え全軍に突撃を命じた。
「行け！ここに留まればあれによりやられるぞ！進むんだ！」
またあの死の暴風が巻き起こる前に接近しなければならない。
しかし、まだ距離がありすぎる。
今から突撃では到達した頃には兵は身動きできなくなるだろう。
それでも、その指示に魔法薬を投与された兵たちは反応し、指示通り突撃を開始していた。
「将軍！はや・・・」
落馬していたフェイがヘルマンに駆け寄ろうとしたその時、再びあの暴風が、今度は当たり構わずに降り注いできた。
フェイもヘルマンもその爆風の中にその姿が見えなくなった。

「ひ、ひぃぃぃ！」
テレサは最初の爆風で既に恐慌を来たし逃げに掛かっていた。
しかし、乗馬が言う事を聞かずに爆風の降り注ぐ中を右に左にと振り回されている。
最早、戦の勝敗や自分の研究、そう言ったものなど頭にない。
ただこの異様な地獄から生き延びようと必死だ。
「なによ！何なのよこれは！」
そう叫んだ瞬間、馬に爆発により生じた破片が当たる。
それは小さな、本当に小さな物だったのだが、テレサの目の前で馬の首を引き千切っていた。
「ぎ、ぎゃあああああ！」
とてもその美しい容姿からは想像も出来ない絶叫をあげながら地面

に投げ出される。
受身など取れるだけの訓練など積んだ事もないテレサは、全身を地面に打ちつけて倒れこんだ。
「あ・・・ああ・・・・」
声にならない呻きをあげながら、全身をバラバラにされた様な痛みに表情を歪ませる。
ハッキリ言って生きてるだけでも運が良いと言える。
いや、この場合は運が悪いのか・・・。
とにかく、生きている事は事実だ。
這いずる様に手を伸ばすが、誰も彼女を助けようとはしない。
正気の者にはそんな余裕は無く、正気にない兵たちは彼女に見向きもせず与えられた命令に従い走っていく。
最早テレサは一人爆風の中に取り残された状況だ。
とにかく逃げねば、と言う本能か何かが自分に命じる。
必死に起き上がろうとするが、何故か立ち上がれない。
思わず目を足にむけると、両足は膝から下が無かった。
榴弾砲の破片は馬の首だけに当たっていたわけではなかったのだ。
「あ、わ、私の・・・足・・・どこ・・・？」
現実的ではない光景にその精神はズタズタにされていく。
必死に足を探し回るテレサは、やがて意識を失った。

第２９話「火力戦～後編」

バジル軍の正気であった主だったものは壊滅しつつある中、与えられた命令に従い突撃を続ける兵たちは砲撃の中を着実に支援旅団戦線へとその牙を向けて進んできている。
そしてついに６０００ｍを突破、それと同時に８１ｍｍ、１２０ｍｍ迫撃砲が砲撃を始める。
迫撃砲は榴弾砲とは違う武器だ。
共に曲射、つまり放射線を描いて頭上より攻撃するのは一緒だが、榴弾砲がより遠距離への攻撃を意図されたものに対して、比較的近距離への攻撃を意図されている。
また、榴弾砲は弾を込めるときは後装式（後ろから弾を込める）なのに対し、迫撃砲は前装式（前から弾を込める）である。
これは攻撃可能になるまでの展開が迫撃砲のほうが速く、その上かなりの連続射撃が出来るようになっているからだ。
その迫撃砲の雨のような砲撃にバジル軍の兵は次々に手足を引きちぎられ、赤い鮮血と臓物と、肉片を撒き散らす。
しかしそんな状況でも顔色一つ変えることなく前進してくる不気味なバジル軍の兵。
まるでホラー映画やゲームに出てくるゾンビだ。
「な、何なんだよあいつらは・・・」
ありえない光景に自衛官の中には恐怖心を始めとした困惑が広がっていく。
彼らの多くは今回が初の実戦と言うのもあるが、この世界を劣った文明による劣った存在と認識しているものが多かったからだ。
ある種の「自分達は特別」と言う意識が少なからずあったのは否めない。
しかし、今目の前にいる存在は自分達の優れた力が通じない、いや、通じているのだが意にも介さない。

その異様な様子に恐怖するのは致し方なかったのかもしれない。
殆どは一方的な戦闘だった、と実戦参加者から聞いていたのも影響しているだろう。
「司令、各隊から皆動揺していると・・・」
無線員からの報告に坂上は恐れていた事が起きつつあると苦虫を噛み潰した表情になる。
（やはり・・・こうなったか・・・）
実戦の機会の無かったものを中心として編成されていたことに不安があったのも確かだが、それ以上に異様な存在に見えるバジル軍の不気味な動きに不安が重なっていたのだ。
このままでは危険、と判断するもどうすればいいのか・・・。
その判断は坂上にゆだねられていた。
「無線を貸せ」
坂上は無線員から無線を受け取ると、全隊に通信回線を開かせた。
「総員聞け、目標は以前前進を止めぬが恐れるな。こちらに到達させねばこちらの勝ちなのだ。ひたすら打ちまくって殲滅せよ」
自分を落ち着かせるようにしつつ、その冷静さで全体の動揺を押さえ込もうとする。
なおも坂上は続ける。
「なに問題はない。日ごろの訓練をそのままにやればよい。中国の人海戦術を相手にするのと同じだ」
実際は全く違うが、元の世界において冷戦後は対ロシアよりも対中国の人海戦術を想定した訓練は行われてきた。
それをやれば勝てると言ったのだ。
それでも完全には動揺は鎮まらない。
だが、多少は落ち着きを取り戻した全隊は訓練どおりに動き出す。
些か、無茶な話をしたと思うが、それで多少でも何とかなればいい。
と坂上は思った。
「動揺は幾らか抑えられたかもしれません。しかし、アレは・・・」
幕僚も流石に困った表情だ。

確かに困るだろう。
何せ味方がやられてもただひたすら前に進むだけなのだから。
相手に思考があれば幾らでも手の打ち様があるが、相手が何も考えずに進んでくるだけではどうすればいいのか分らない。
「・・・最悪、降伏や撤退がないと考えて殲滅するしかないな」
ある種、もっともやりたくない事を選択する。
たしかに、ゲリラ化されるのを防ぐ意味で壊滅させる気だったが、よもや一人も生かして帰さない殲滅という方に選択せざる得ないとは思っても見なかった。
「だが、こちらに犠牲は出せないならやるしかあるまい」
坂上はそういってリアルタイムに映し出される映像に目を向けた。
既に戦場では大きくその数を減らしたバジル軍が尚も前進を続け第２陣を突破しつつあった。
まもなく飛行隊のＵＨ－１の攻撃だが、ここで坂上は方針転換を行った。
「このまま当初の予定通りは危険と判断、持てる全装備を持って全力攻撃に移る」
作戦を放棄すると言う決定に幕僚も色めき立つが、そうも言ってられない。
このままでは戦線に到達されてしまう。
まさか、現代日本の自衛官に白兵戦闘を命じるわけにもいかない。
勿論その訓練はしているし、現代でも戦線を突破するために銃剣突撃は有効であるとされている。
しかし、元から白兵戦に特化したこの世界の軍を相手にしようとは思わない。
ならば、まだ距離がある今のうちに全火力を全力でぶつけるしかない。
「全隊に命令、全力射撃に移れ。弾薬は浪費するが構わないと伝えろ」

坂上の判断をそのまま各隊に連絡する。
するとほんのひと時だが、支援旅団からの攻撃が一旦止んだ。

数分後・・・照準を再度設定し直した支援旅団は、その全火力を一斉にバジル軍目掛けて打ちかけた。
未だ距離は３０００ｍほどあるため、撃てるものは砲撃ぐらいだが、それでもその火力はすさまじいの一言だ。
一瞬にしてバジル軍の戦列が爆炎のなかにその姿を消す。
ある意味、狂気の沙汰ともいえる砲撃は所持弾薬をほぼ使い切るまで行われた。

ファイが意識を取り戻すとそこはあたり一面焼け焦げた大地と躯(むくろ)が折り重なる地獄と化していた。
五体満足な者は見た限り殆どいない。
いたとしても気が触れていたり、茫然自失していたりと悲惨な状況だ。
「み、味方は・・・」
はるか前方まで進んでいたであろうバジル軍の兵たちの姿は無い。
煙がいまだあちらこちらに漂っているため見辛いだけだと思う。
しかし、あの爆風は既に止んでおり、敵勢力の要るはずの辺りは静寂に包まれている。
「・・・し、将軍!?ヘルマン将軍はどこか!」
地獄の中でフェイは護るべきヘルマンの安否に意識を向けると、ヘルマンの姿を探し回る。
しかし、その姿は何所にも見えない。
まさかあの爆風に・・・。と考えるが頭を振りその考えを打ち消した。
「ヘルマン将軍!何処(いずこ)におられますか!」

叫び声を上げながら辺りを捜索すると、地面に横たわるヘルマンを見付けた。
死んだ馬の下敷きになっているように見えた。
「将軍！」
急いで駆け寄り、ヘルマンの上に圧し掛かる馬をどけようとする。
しかし、流石に一人では中々に難しい。
馬はそれだけで人間の体重の何倍もある。
如何に鍛錬に鍛錬を積み重ねていてもそう簡単には動かせない。
それでも必死に力をこめ、なんとかわずかな隙間を作ると一気にヘルマンを引き出した。

気付くべきだった。
いや、確認すべきだったろう。
ヘルマンが生きているかどうかを・・・。
馬の下敷きになっていたヘルマンを引き出した事は出来たが、ヘルマンは既に息絶えていた。
腹部より下が無かったのだ。
その光景にフェイは力なくへたり込む。
「・・・」
フェイはただ呆然とヘルマンの遺体を見つめている。
張り詰めた物が切れたようだ。
しかし、何時までも呆然としてはいられない。
敵の追撃があるかもしれないからだ。
せめてヘルマンの遺体を敵の手に渡し、辱めを受けさせるわけにはいかない。
それは女性であるフェイにもいえるのだが、フェイに取ってこの身がどうなろうが知った事ではない。
将軍の身柄を最後まで護るため、辺りを探し回って天幕の布地を見つける。
そしてその布地でヘルマンの遺体を包むと、背中に背負った。

この際、下半身はどうしようもない。
諦めるほかは無かった。
「何としてでも・・・国に連れ帰らねば・・・」
その義務感からフェイはヘルマンを包む布地を落とさぬ様に今度は馬を探す。
が、流石に見渡す限りその姿は無い。
仕方なく歩いてその場を離れようとした。

その時だった。
突然、辺りを爆風を起こしたときとは違う音が耳に入ってくる。
それが何かは分らないが、馬蹄の音にも聞こえたそれから敵か？と思い剣を抜く。
しかし、それは地上から聞こえてくるのではなかった。
その聞こえてくる方向を見ると、奇怪な鳥とも竜とも見えない生き物がそこにいた。
『そこの者、武器を捨てて投降しなさい。こちらは日本国陸上自衛隊。繰り返す、武器を捨てて投降しなさい。身の安全は日本国の名において保障します。こちらは日本国陸上自衛隊・・・』
奇怪な生き物から突然聞こえてくる声に戸惑いながらも、最早逃れられないと悟ったフェイは自決しようと思い立った。
身の安全は保障すると言っているが、そんなものは当てにならない。
その上、騎士であり武人である自分が捕虜などという不名誉な物になりたくは無かった。
剣を自分に向けようとしたその時、突然何かが破裂するような音が騒音の中で聞こえた。
『無意味な事をするな！命を軽んじるにも程があるぞ！』
奇怪な生き物が地に降り立ちながら声をあげる。
その側面から兵士であろうか？
奇妙な姿をした兵士と思われるものが次々と降りてくる。
その内の一人が手にする短剣より小さく見える何かから煙がかすか

に見えた。
「折角助かった命を粗末にするな。生きていれば再起の機会だってあるんだぞ」
分ったような口の利き方をする男にフェイは唇をかむ。
お前に何が分るというのか?
そう言った意味を込めて睨みつけるが男は意に介さない。
「武器を捨てて投降しろ。もはや戦いは終わった。これ以上の流血は無意味だろう?」
先程までとは違い優しく諭すような言葉に、ようやくフェイは剣を捨てた。
諦めにも似た心境になっている。
気が抜けたせいか思わずその場に座り込んでしまった。
「旅団本部に連絡、生存者発見、負傷しているようですが命に別状なし」
男が声を張り上げる。
その間に白地に赤い十字の布を腕に巻いた者達がフェイに駆け寄り額や腕を見る。
フェイは気付いてなかったが、多少なりとも怪我をしていたらしい。
フェイはそのままなされるがままだったが、彼らは乱暴するまでも無く傷の手当てをしているようだった。
「お前さん、運がいいな。生きてるだけでなく額の傷も小さい。痕は残らんぞ」
手当てをしている初老の男はそういいながら笑いかけた。
「私は騎士だ。傷跡が残ろうが気にしない」
せめて騎士としての威厳は残しつつフェイは言ったが、男は尚も笑った。
「やれやれ、気の強いお嬢さんだ」
無礼な!と声を上げようとしたが男は立ち上がったためにその機会は失われた。
横を見ると背を下ろされた布地の中身を確認している者たちがいた。

「アンタの上司かい？」
手当てをしてくれた男がフェイに尋ねる。
「・・・バジル王国将軍ヘルマン・カノープス様だ」
粗末に扱われないよう、敢えて教えてしまったフェイだったが、逆に早計だったか？と思った。
その身分を知ればどう扱われるか分ったものではない。
しかし、彼らはそう言ったことは一切しなかった。
その場で手を頭に持っていく。
敬礼と言われるものだが、フェイはそんな事は知らない。
ただ、祈りを捧げているのか？と思っただけだ。
「班長、どうも指揮官の遺体のようです」
まだ２０そこそこだろうと思われる若い兵士が先程フェイに怒鳴った男に報告している。
「そうか、なら丁重に運べ」
その言葉を聞いて、一応の安心は出来た。
彼らは死者にたいする礼儀を心得ているようだ。
「よし、貴女にも来てもらうが・・・宜しいか？」
班長と呼ばれた男がフェイに向かって歩きながら声をかける。
どの道選択肢はあり得まい、と思ったフェイは黙って頷いた。

その日起きた戦闘は一方的な虐殺となった。
だが、自衛隊側も被害こそ無かったが、隊員の精神的なダメージに対する問題が発生した戦いだった。
また、自衛隊員の意識を変えさせる必要も出てきていた。

それらは、これからの戦いは今までどおりに行かないことを示唆していた。

第３０話「今後の行方」

ーバジル王国首都グラナリア

わずかに帰還した将兵の姿にザハンは苛立ちを通り越して呆然としていた。

１１０００もの軍勢が、ベサリウスの２０００余りの軍勢に敗れたと聞いたからだ。

それも、ぽつりぽつりと帰還してきたものから聞くと、皆恐怖に顔を引き攣らせながら一様に「化け物が出た」と口にする。

化け物とは何だ？と聞いても分らない、としか答えない。

姿は遠目であったのもあり、確認できていないと言う。

しかし、見た事も聞いた事も無い魔法で一方的に攻撃を受けたと・・・。

「陛下・・・これは一大事ですぞ」

レオナルドがザハンの意識を向けさせるために声をかける。

ザハンは、そんな事は分っている、と言いながらも青ざめていた。

「我が国の半分の戦力が失われ、ヘルマン将軍も恐らく・・・」

レオナルドにとってはヘルマンの事より、娘のように思ってきたフェイの事が残念だった。

侵攻軍が敗れたのは帰還した者から推測するに４日前、それから考えて既に７日が経っている計算になる。

それでも帰還しないなら、恐らく戦死か捕虜になったと考えるべきだったからだ。

フェイの事だから最後まで剣を捨てずに挑むであろう。

それを考えれば戦死に違いない、と思っていた。

「現状で軍の指揮を取れる者はおりません。また、兵力が半減しましたので国土の防衛も難しいかと・・・」

それ見た事かといわんばかりのレオナルドにザハンは力なくうなだ

れた。
元々レオナルドは今回の出兵には反対していた。
国土の防衛をおざなりにして侵攻など無理にも程があったからだ。
それを指摘されては反対意見を退け強行させたザハンは何も言い返せない。
「・・・では、今後どうすればいいのだ?」
元々内政も外交も下手としか言えないザハンはレオナルドにほぼすべてを任せてきた。
ザハンはホードラー王国が健在であった頃ならば、有力な諸侯の側に着いていくだけでどうにかなってきたが、この様に国を興して何かをする器ではなかった。
そして、この時もザハンはレオナルドに頼った。
だが、帰ってきた答えは非情であった。
「分りません」
一切を頼ってきたレオナルドにこういわれては椅子の上からズレ落ちるほどに動揺もやむをえない。
「・・・敢えて言うならば」
レオナルドはハッキリ言って、ザハンにこの地を任せるのは危険だと考えていた。
ザハンは自らの主ではあるが、欲が深く他人を省みない。
強いものには弱く、弱いものにはとことん強いと言う性根もある。
なにより、興味の無い事には全くと言って何もしようとはせず、人任せにしてきていた。
それらを考えるとバジル王国を危機に陥れる要素にしかならないのだ。
「あ、あえて言うなら?」
期待を込めてレオナルドに尋ねる姿は王のそれではなかった。
ただの人と変わらない。
王とは絶対権力者であり、威厳を持ってその威光を示さねばならない。

それはただの人ではないのだ。
それを見ながらレオナルドは国を、ではなくこの地の領民を救う手立てを取る事にした。
「全面降伏しかありませんな」
死刑宣告にも似た言葉にザハンは言葉を失った。
最悪、自分は処刑されてしまうからだ。
いや、ほぼ間違いないだろう。
ベサリウスが自領に攻め入ってきた自分を許すとは思えなかったからだ。
「そ、それしか・・・ないのか!?」
悲鳴の様な声をあげつつ、椅子を蹴り倒してレオナルドに詰め寄る。
「奴等だって疲弊しているだろう?そのはずだ!それなら講和で何とかなるはずだ!その間にまた戦力を整えれば・・・」
必死に生き残る道を探そうとするザハンにあきれ返るしかなかった。
既にその段階には無い。
報告から、ベサリウスの軍勢は確かに疲弊しているだろう。
だが、援軍に来た軍勢は一方的に攻撃してきたと言う。
ならば無傷では無かったとしても損害は軽微のはずだ。
それだけの力を持った軍勢が余勢を駆ってくるのは十分に考えられた。
今まだ来ていないのはその準備を進めているか、既にむかっているかだろう。
逆に攻めてくる可能性がある中で講和などに望みを託すのはそれこそ無謀だ。
「無理ですな。兵を率いる者も無く、ましてや報告どおりなら敵は圧倒的戦力を持っております」
バジル王国の軍勢はたしかに１００００はある。
しかし、率いる将がいないのだ。
ガリウスもヘルマンも亡き今、その二人と同等の力量を持つ将がいなければ烏合の衆にしかならない。

しかも、１００００と言ってもあくまでも国内の警備などに着いている者を含めての話だ。
実際に戦場で戦うとするなら5，６０００集まれば良い方だろう。
その程度の戦力では簡単に打ち破られてしまうだろう。
その上、更に相手を怒らせかねない。
「陛下・・・降伏するか、何処かへ落ち延びるほかありませんよ」
レオナルドはある意味確信があってその言葉を告げた。
ザハンに生き残る道を示せば、恐らくそれに食いつくだろう。
今の状況からすればそうなると分っていたのだ。
「お、落ち延びる・・・？」
ザハンは絶望の中で一筋の希望の光を見た様な気分だった。
他に取りえる選択肢は思いつかないし、見えない。
よしんば、落ち延びても再起は不可能だろう。
良くて飼い殺し、悪ければ災いの種として処分される。
良くも悪くもなければ受け入れ拒否で流浪の民と化す。
そっちの方が悲惨かもしれない。
しかし、それに思い至る事ができるほど思慮深くなかった。
そもそも思慮深ければこんな事にはならないだろう。
「そうだ！落ち延びる手があった！城中の財宝を！兵を集めよ！」
ザハンは歓喜しているが、レオナルドは止めるつもりは無かった。
これ以上、暗愚な主君に仕えるのに疲れていたし、何より、最後のけじめだけは付けねばならないからだ。
「では、その様に取り計らいます」
恭しく頭を下げるレオナルドの目に怪しい光が見えたが、ザハンがそれに気付く事は無かった。

バジル軍との戦いが終わった直後から坂上率いる支援旅団は死者の埋葬、及び戦後処理に追われていた。

また、僅かに生き残り、捕虜となったバジル軍の兵（正気だったものだけだが）の手当ても必要だ。
なにより、自衛官の中にはこれ以上戦闘に耐えられない精神状態の者をコンスタンティには寄らせず、直接ホードラーまで輸送せねばならない。
その手配と処理に4日は戦場に足止めされていた。
一応コンスタンティに残る部隊に無線連絡で「交戦中」とさせていたいので、何時でも援軍を送る態勢を取っていたベサリウスを足止めすることにも成功している。
これで今回明らかになった自衛隊、と言うより平和に慣れてしまっていた日本人の精神的弱点は隠し通す事が出来た。
そんな苦労が漸く終わり、バジル軍撃退の報と共にコンスタンティに帰還したときには5日が過ぎていた。
「ご無事でしたか」
ベサリウスが少なくなった手勢でサカガミたちを出迎える。
そのベサリウスに敬礼で応じた坂上らはそのまま祝宴へと招待された。
この世界では戦に勝ったらその都度祝宴を開き、将兵の働きをねぎらい、そして戦死したものに捧げる習慣がある。
正直、現代日本の自衛官には馴染みが無いものではあるが、郷に入れば郷に従えだ。
そう言ったわけで住民上げての戦勝祝いが行われていた。
「いやはや、損害は軽微とは・・・日本は流石ですな」
お世辞でもおべっかでも無くベサリウスは感嘆している。
自分達の常識で考えれば、今回の戦闘の規模から考えても損害は少なく済むはずがないからだ。
それを極一部の軽微なものに止めたとあっては感嘆するより他はあるまい。
実際はホードラー地区へと移送しただけで、損害は発生していないのだが、不自然さを隠すための処置と言える。

坂上は愛想笑いで答えて杯に注がれた麦酒（この世界ではエーリィと呼ばれている）と言われる物を口にした。
炭酸こそ無いが味はビールのそれに酷似していた。
贅沢を言えばよく冷えたものが飲みたいが、贅沢も言ってられない。
「しかし、これでバジル王国もしばらく大人しくなるでしょう」
坂上はそう言って塩も香辛料殆ど使っていない料理を口に運ぶ。
正直、一味も二味も足りない。
醤油がほしい、と本気で思ってしまう。
だが、それは現代日本人による贅沢な悩みである。
ここは内陸部だ。
海からは遠く塩は交易しかない。
ホードラー王国時代は海に面した地区からの交易があったが、今は途絶えている。
香辛料に至ってはホードラー王国でも生産は無く、大陸南西に位置するブランジア帝国からの交易でしか入らない。
しかも距離が相当あるので、海路を使っても時間が掛かり必然的に高価になる。
結局は、ホードラーにおいてだが、食事に関する事が軽視されている文化故の味付けなのだろう。
日本が落ち着き、そう言った文化がこの地に流れたときは大きなビジネスチャンスになるだろう。
それはさて置き、ベサリウスは先程までとは打って変わって真剣な眼差しを向けてきた。
「一旦は戦は終わりました。しかし、今後はどうするかです」
その言葉の意味するところは坂上にだって分っていた。
このまま守勢にまわり相手の疲労を待つか、それとも打って出てバジル王国に攻め入るか、である。
前者にはこちらの戦力を温存させつつ、地の利を生かして有利な条件で戦える。
対して後者は戦力温存は見込めないが、国土を荒らされずに済む。

また、後者に至ってはそこから何を目指すか?によって様々な選択肢が取りえる。
1つ目は領土を拡張する。
2つ目は有利な講和条件を引き出す。
3つ目は後顧の憂いを取り除く・・・つまりバジル王国を滅ぼし、併呑するのだ。
勿論ベサリウスの兵力は激減しており、侵攻するしない以前に防衛さえままならないだろう。
だが、日本次第で可能だと踏んだようだった。
確かに可能だ。
支援旅団がコンスタンティに初めて足を踏み入れた時より1週間が経過している。
空港設備は不十分なれど物資の輸送は順調に行えている。
勿論陸路もだ。
この場に北野辺りがいれば鉄道を引く事も考えるだろう。
だが、坂上にその判断を下す権限は無い。
シビリアンコントロール下にある自衛隊が、政府の意思とは関係なく動く事は出来ないのだ。
一度でもやってしまえば取り返しがつかない悪しき前例を残すことになってしまう。
「残念ですが、その意思決定は我々では出来ません」
坂上は丁重に断る。
その上で本国とベサリウスが協議し、日本政府が許可を下したなら可能かもしれない。と断定を避けた答えをした。
「失礼だが、この軍の指揮官は貴方ではありませんか?」
ベサリウスは元々一介の将だったのもあり、戦場にあれば将の裁量で動く事こそが最良と考えていたからだ。
勿論、連絡手段が限られ、時間もかかるこの世界ではそれが普通だろう。
しかし、連絡手段が時間も掛からずに即可能な技術が確立された現

代日本ではそうも行かない。
指揮官の裁量で動く事など不要なのだ、
そこを説明すると、ベサリウスは逆に不便ですな。といった。
とは言え、坂上からすればその分の責任を上に丸投げ出来るので気持ち的に楽である。
自分が負うべき責任は部下に対するそれだけで済むからだ。
「このままバジル王国を放置はできませんからな・・・。もし宜しければあなた方の政府と協議したいのですが？」
ベサリウスは日本が遠方にあっても互いに連絡が出来る手段を持っていることを既に知っている。
今の発言はそれを貸してほしいとの要請だ。
「それは・・・上と確認してから・・・でよければになりますね」
坂上は嫌な予感を覚えつつもホードラー地区へと連絡をする事にした。

第３１話「攻略部隊出撃」

ーホードラー地区シバリア行政区

ベサリウス支援旅団からの連絡に北野は頭を悩ましていた。
ベサリウスとも協議はしたが、軽々しく判断できない、として一旦協議を終わらせ結論は後日に回していたからだ。
たしかにバジル王国は信用に足らない国なので、味方に引き込むつもりは無い。
できればこの機に消えてもらう腹積もりではあったが、支援旅団はその為には派遣していない。
支援旅団は今後、しばらくはベサリウスの戦力が充実するまでの守備に回しているからだ。
たしかにバジル王国を潰す戦力は支援旅団の規模なら問題なく行えるとは思う。
しかし、いきなり大風呂敷を広げるのは愚策だ。
一歩一歩着実に土台を築きながら動くべきなのだ。
しかも今は状況が宜しくない。

日本政府が南部平定に動き出していたからだ。
日本の資源不足は幾らか緩和できたものの、根本的解決には程遠い。
その為の南部攻略なのだ。
日本国内の状態を鑑みればこの決定は悪くない。
しかし、支援旅団に回すべき物資を南部攻略に回す必要性が出てきている。
流石の北野も政府が何故今この時期に南部攻略を決定したのか、その意図を図りかねていた。
まさか、北野も気付いていなかったのだが、一部資源（主にゴム）の備蓄が底を潰きかけていることなど思いもよらない。

「やれやれ、参りましたね」
心底困っているのか、書類を片付ける手が止まっている。
しかし、南部攻略が始まるまでに物資は出来る限り蓄え、南部攻略の為に投入する必要がある。
ここでバジル王国攻略へと動くだけの物資も戦力も無い。
「こんな時に高橋さん達を支援旅団の手伝いに送ったのは拙かったですね」
北野はため息をつきながら考える。
勿論高橋たちでバジル王国攻撃をやれ、などという馬鹿な考えは無い。
単に何かしらの方策が浮ぶかも知れないといった、相談相手としてだ。
今、高橋たちは捕虜の移送を手伝うために支援旅団へと向かわせている。
今更相談を持ちかけるために引き返させるなど出来ない。
北野には珍しく悩んでいる様子が見られる。
彼とて万能ではない。
海千山千の相手と対等に渡り合ってきた今までの経験が彼の働きを支えているのだ。
北野は頭を悩ませながら、とにかく考える。
打開策はあるはずだ。
打つ手が本当に限られるのは切羽つまった状況になったときだけだ。
という持論が北野にはある。
それ故にまだそこまでの状況ではないはずの現状をどうにかする方法を考えている。
2正面作戦を行うための戦力、物資がどこかにあるはずだ。
他に動かせる余剰と行かなくても、纏まった戦力でもあればいい。
それは何か？
その時、書類の一つが北野の目に留まった。

それは「シバリア動乱」におけるシバリアの被害に関する報告書だった。
「ああ、まだ残ってたのですか」
とっくに全て片付けていたつもりだったが、1つだけ片付けられずに他の書類にまぎれてしまっていたようだった。
「やれやれ、仕事があるのは有難いですが、あり過ぎるのは問題ですね」
そう言いながら北野は書類の決裁を済ませて処理済の箱に入れようとした。
その時、書類の内容を今一度確認していた。
そして気付いた。
今の日本には自衛隊だけが戦力ではない、という事実に・・・。

「つまり、支援旅団に代わってバジル王国とやらを潰せ、と？」
シバリアに配置された日本外人部隊、元在日米軍のアーノルドは北野から相談を持ちかけられていた。
「ええ、あなた方の戦力はシバリアにかなりいましたね？」
たしかに、日本外人部隊は先のシバリア動乱から、増員配置されている。
これは外人部隊にも働きの場をと言う理由でシバリアの防衛、及び周辺の治安維持のためだった。
勿論、防衛には自衛隊もいるが、やはり米軍時代の経験は自衛隊にはないものだ。
しかも現在シバリアにいる外人部隊は全軍で師団規模の戦力だ。
周辺に散っている分を考えると更に1個旅団は編成できるだろう。
「たしかに今の任務よりはやりがいはありますが・・・」
アーノルドはそう言いながら北野の顔を見た。。
大分疲労が積み重なっているのは見て取れた。
「攻略戦、と言うのはこちらにも危険があります。しかし、それを

押してお願いしたいのです」
本来、命令できる立場にありながら北野はお願い、と言った。
これは外人部隊に汚れ仕事を押し付ける事になりかねないからだ。
たしかに外人部隊とは汚れ仕事をする部隊だろう。
しかし、日本政府は今まで同盟国として一緒にやってきた者を状況が変わったからと言って１８０度違う扱いはしたくなかった。
だから率先して汚れ仕事を自衛隊で受け持ってきたのだ。

今までそう言った考えの下、彼等外人部隊を厚く遇してくれてきた北野の言葉にアーノルドは少し考えていた。
たしかに、シバリア動乱の時に活躍はした。
しかし、それ以外の活躍の場は与えられていない。
今回の北野の話は外人部隊の存在感をアピールできる機会ではないだろうか？
どうも日本は遠慮が過ぎる。
もっと使ってもらってもいいのに・・・。
アーノルドとしても大事に扱ってもらえるのは有難いが、やはり米軍時代の様な何かの為に決死に戦う状況を欲していた。
どんな汚れ仕事で嫌われようと、国家の為に命を賭けるのが軍人だ。
その合衆国軍人だった彼等からすれば、国家の為に命を投げ出せる機会に恵まれた自衛隊が羨ましかった。
ある意味、日本人には希薄な愛国心が彼等外人部隊には強く残っている。
それが日本になってしまったとは言え、自分達を受け入れ、その生活を保障してくれているのなら彼らの祖国は今や日本だ。
勿論、望郷の念は耐え難く、そう簡単に割り切れたり、祖国を忘れる事はできないだろう。
だが、帰る手立てなどない現在ではそれしか彼等が生き残る手は無い。
故に彼等は日本の為であればどんな任務でも躊躇う事は無い。

だから、この機会にもっと活躍の広げたいと考えていた。
「我々の指揮権は現在貴方にあります。ご命令いただければどんな任務でも遂行します」
アーノルドの言葉は北野にとっては有難いものだった。
「ありがとうございます。それでは貴隊司令部に改めて命令を下しましょう」
北野の命令にアーノルドは敬礼で応じた。

ーベサリウス領コンスタンティ
北野は即座に政府と協議し、外人部隊司令部とも交渉しバジル王国攻略の手はずを整えた。
鈴平は難色をしめしたが、北野の強い説得でバジル王国攻略を許可した。
これは当初の予定とは違うが、元々バジル王国への軍事行動は視野に入れてあった事や、外人部隊司令部からの要望もあり許可されたものだ。
そしてその決定はコンスタンティに滞在する坂上に即座に届けられた。
ベサリウスはその報に残存部隊を召集し、動かせる戦力を整えだした。
「しかし、ベサリウスの領土は我々が保全するので宜しかったのですか？」
坂上がベサリウス領の防衛を自衛隊に任せた決定に疑問を呈した。
本来、自国領土は自国の力でやるものであり、他国に一任するものではない。
かつての日本とて防衛の一端ぐらいは受け持っていたぐらいだ。
しかし、ベサリウスは笑って答えた。
「危険性は上げたら切りがありますまい。それに、裏切られたらそれだけのことだった。と言う事ですよ」

日本を信頼している、と言う発言に坂上はこれは大任だと思っていた。
守るだけなら今の自衛隊なら問題ない。
だが、裏切らない、騙さないと信じられているのに、その信頼を裏切る事などできはしない。
ある意味、気持ちがいいものでもあるが、重責は大きい。
「了解しました。何があろうと起ころうと貴方の帰還まで全力で守り通してみせますよ」
そういって坂上は敬礼した。
だが、同時にどうしてここまで日本を信じられるのか疑問だった。
はっきり言えばベサリウスにとって主家の仇（かたき）と思われていてもおかしくはない。
その答えは今のところは分らないが、今後も付き合いが続けばわかるのだろうか？
考え込む坂上を他所にベサリウスは日本外人部隊の到着と同時に動けるように兵を整えていく。
特に日本側から食料の確保が懸念されたことから兵糧を重点に準備している。
食料を配給制にして節約している日本と違い、ベサリウス国は食料には余裕がある。
日頃から常に備えていたからだ。
一応日本も備えていたが、備えの規模が違うのでこの差は致し方ないだろう。
「ところで、我が軍の出番はありますかな？」
ベサリウスは日本の実力を知っているので、自分達は足手まといにされるのでは？という懸念がある。
流石にベサリウスは武人であるだけあって事があるならば戦場で働きたいと思っていたからだ。
「今回派遣される部隊は下手すれば日本でも最強の部隊です」
坂上の答えに、正直がっかりしたベサリウスは同時にその力を見た

くなった。
「しかし、最後はバジル王国の首都、たしかグラナリア・・・でしたね。そこが戦場になるでしょう。そうなれば白兵戦ですから」
つまりは出番は最後になるまで無いと言うことなのだが、それでもその機会があるのは僥倖だった。
腕が鳴りますな。と気軽に言うベサリウスに坂上は王が戦場で剣を振るうのはどうなのか？と思ってしまう。
昔はそれもありだったろうが、今の坂上たちの常識では万が一がありえるので指揮官たるものが戦いに参加するようでは指揮官ではないとなってしまう。
しかし、ここは現代世界ではない。
中世の時代で異世界なのだ。
彼等現代日本の常識で考えられる世界ではない。
「確かに王が率先して剣を持つのは問題でしょうな。ですがつい最近まで私は一介の領主でしたから」
立場は簡単に変えられても、生き方は簡単には変えられないと言った。
意気込むベサリウスを前に坂上は不安しか無かった。

先の火力戦から6日、外人部隊が到着した頃には7日が経った時の話である。
日本とベサリウスがバジル王国攻略に動き出したのと、ザハンが国を捨て逃げ出す準備を始めたのは、くしくも同じ時期であった。

第３２話「グラナリア強襲～前編」

ーバジル王国首都グラナリア

バジル軍の十数人程度の部隊がベサリウスの動向を監視するために国境警備を厳重にさせていた。
ベサリウスが先の侵攻に対し報復に出る事が考えられたからだ。
元々国家同士ではなかった事もあり、国境を守備する砦などはない。
その為に国境に駐留する部隊は無かったのだが、ザハンが逃げるための準備中ということもあり編成されていた。
最悪、時間稼ぎを行うのが仕事だ。
勿論その事は伏せられていたのだが、噂と言う形で既に漏れていた。
そんな状態でまともな働きなどできはしない。
しかもバジル軍はベサリウス軍と違い一般市民を徴兵してしての兵である。
士気は著しく低く、間違いなく敵と出会えば四散して逃亡となるだろう。
そんな状態の幾つかの部隊から連絡が途絶えたと報が入ったのは、バジルが逃げ出す準備を始めて３日目の事だった。
「・・・ついに来たか」
予想より遅かったとは思うが、レオナルドはベサリウスの侵攻が始まったと考えた。
しかし、連絡が途絶えようとも軍の動きを見たと言う報告が無い。
軍が動くときはどうしても大所帯だ。
どうしても目に付くもののはずなのだが、その報告は無い。
警備部隊も、わざわざ黙って撃破もされないはずだ。
される前に逃亡するだろうし、最悪、伝令だけでも報告には帰ってくるものだ。
それが無いのはどう言うことなのか？

「まさか、国境を荒らして終わり、などと言うことはあるまいと思うが・・・」
嫌な予感を覚えた、そのときだった。
窓の外から聞いた事の無い音と共に城内が俄かに騒がしくなったのに気付く。
何があったのか、と思い廊下に出ると誰もが空を唖然としてみていた。
「？」
レオナルドも同じく空を見る。
そこにあったのは巨大な鳥の集団だった。
「な、何なのだあれは？」
レオナルドの声に反応するものは誰もいない。
誰にも答えられないからだ。
やがてその鳥は市街地まで降下すると、体内から紐のようなものを何本も垂らす。
そして、これを伝って人のようなものが一気に飛び出してきた。
「て、敵襲！」
誰かが叫ぶ。
敵、それは間違いない。
だが、飛竜などを使っても、空からこんな大規模な兵の展開など考えられない。
その為、対応は後手に回ることになる。

「目標上空！対空砲の心配はない！全員降下開始！」
首都強襲部隊の指揮を執るバーン・イェーガー中佐がヘリの騒音の中、部下達に大声を上げる。
それに反応したかの様に元在日米軍第３海兵師団のＣＨ－４６シーナイト、及びＣＨ－５３Ｅスーパースタリオンから歴戦の猛者達が市街地に降下を始める。

「GO！GO！GO！GO！」
映画のワンシーンの様に次々と降下していく歴戦の猛者たちは着地と同時に戦闘態勢に入っていく。
いや、彼等海兵隊にとっては降下中から戦闘態勢なのだ。
突然の事にグラナリアの一般市民たちは恐慌に陥るが、空から一気に現れた海兵隊に悲鳴を上げて逃げ惑うしかない。
一部警備隊が果敢にも挑むが碌な抵抗も出来ずに血を噴出し地面に転がっていく。
その光景に市民達は近くの建物に逃げ込みだす。
「市民への犠牲は止むを得ん場合を除いて最小限にせよ！」
バーンは地上に降り立つと周囲を固める頼もしき部下達に命令を出す。
迷彩柄の軍服に軍帽、そして愛銃たるＭ１９１１Ａ１コルトガバメントを片手に颯爽と歩く姿はとても戦場にその身を置くものの姿ではない。
しかし、これは彼なりの流儀なのだ。
自らの部下がいる限りそこは戦場であると同時に安全地帯である。
と言う・・・。
部下に対する絶大な信頼がそこにある。
そして、彼は部下の安全のためならば一般市民を盾にした敵を一般市民ごと葬るのに躊躇いは無い。
故に先の発言があった。
「出てくるな！じっとしていろ！」
民家のドアの隙間から彼等海兵隊を覗き込む子供にクリス・マッカラン軍曹が怒鳴りつける。
子供は驚いてドアを閉めてしまう。
それを見てクリスはほっとしていた。
彼には妻子がいた。
祖国アメリカに残して日本に来ていたのだ。
しかし、日本の転移により最早永久に会えなくなっている。

たしかに離婚秒読み状態の夫婦仲だったが、自分の子供と同じくらいの子供が戦火に倒れる姿は見たくない。
その一心での言葉だった。
「中佐、降下地点周辺確保、これより残敵掃討に移ります」
クリスがバーンに状況とこれからの行動を報告する。
バーンはそれに頷くと手近な建物に入っていく。
元々商店だったそこは比較的広い建物だ。
当然逃げ込んだ民衆もいたが構わず入っていく。
「うわぁぁぁ！」
「きゃぁぁぁ！」
男性女性の悲鳴が入り混じる中、おびえた民衆にバーンは告げる。
「この建物を一時的に接収する。安全は保障するので明け渡してもらいたい」
バーンの落ち着いた言葉に怯えながらも非難していた人々は我先にと建物の外へと逃げ出していく。
その後姿に見向きもせず臨時指揮所の設営が始まっていた。
「よし、バード隊は上空より情報収集を開始せよ」
近くにあった倒れた椅子を起こしそれに座ると、その彼の前にテーブルなどが設置されていく。
何度もやってきたような手際の良さだ。
「本隊に連絡、強襲に成功、作戦第2段階へ」
連絡員が無線でバーンの言葉を本隊に送る姿を横目に部隊全体の状況を確認する。
さしたる抵抗もなく順調に作戦は推移していた。
『無秩序に建物が建てられているので道が狭いですね』
上空のバード隊からの報告を聞き、白兵戦が起こりえる状況と判断できる。
しかし、如何に白兵戦が敵の得意分野でも臆する事は無い。
彼の部下にその程度で後れを取る者はいない、と信じていたからだ。
「上からの戦況把握を密に、各隊にはクリアリングをしっかり行う

ように連絡せよ」
以前のシバリア動乱のときと同じようにすればいい、とバーンは考えていた。
あのときに僅かながらの犠牲は出たが、お陰でしっかりクリアリングするだけで相手の抵抗力を排除できる。
「さて、この糞ったれな王様の面を拝みに行くとしよう」
軽口を言いながら状況を見極めるバーンの姿は如何にもアメリカ的指揮官の姿だった。

首都に対する強襲が成功した事により本隊である攻略部隊、海兵遠征旅団はグラナリア近郊の森の中より一気にその姿を現した。
バジル王国は山岳地帯にあるだけあって森が多い。
グラナリアもその例に漏れず森に囲まれた都市だ。
それ故に今までは周辺監視所などもあり、敵襲に対しての守備力は大きい。
しかし、その監視所も動くものがいなければ意味が無い。
その掃除を偉大なる少数精鋭ことアメリカ海兵隊武装偵察部隊（United States Marine Corps Force Reconnaissance）、通称フォース・リコンが行っていた。
彼らの迅速かつ、完璧な掃除を前に国境警備、監視所問わず無力化されていた。
その為にバジル王国側は首都近郊まで接近されていた事に全く気付いていなかった。
「中将、部隊の配置は終了、何時でも攻略に動けます」
参謀の報告にハウザー・ロビンソン海兵隊中将が森中に設営した指揮所で宜しい、と言った。
「もっとも、相手には抵抗する力もなさそうだな」
前線から送られてくる各種情報から、組織的抵抗を行っている様に

は見えない。
その事からバジル軍の抵抗力は緒戦からそがれていることを示唆していた。
それら状況を後方にいながらも把握できる事、そして空中から兵力を展開できる事などを目の当たりにしたベサリウスやその旗下の将たちは驚き以外のものが無かった。
侵攻を開始して僅か2日、しかも首都強襲がこうもあっさり行える彼等を前にしては、同じく少数精鋭を自負してきた彼等の働きは児戯にさえ思える。
「いやはや、日本でも最強の分類にはいる部隊とは聞いてましたが・・・」
これほどとは思っても見なかった、とベサリウスは言った。
その言葉にハウザーはにやりと笑うと、こう付け加えた。
「私どもの居た世界では我等海兵隊が世界最強ですよ」
自信に満ち溢れたハウザーにベサリウスたちも思わず信じ込んでいた。
そもそも、それだけの事を見せ付けられたのだ。
信じるな、というほうが無理らしからぬことだろう。
だが、実はハウザーの言葉は間違っている。
確かに海兵隊は強力無比であるのは間違いないが、それぞれに与えられた役割というものがある。
その専門分野の中で戦えば海兵隊とて勝てない相手はいるのだ。
真の世界最強は存在しないのだ。
だが、海兵隊はそれ単独で特殊部隊と同等のことが出来る。
故に一時期特殊部隊の様に言われた時期もあったが、彼らにとってそれは屈辱だったであろう。
彼等海兵隊は合衆国軍最強を自認しているのもあるが、部隊単独で各種任務をこなせる部隊など彼等以外に居ないからだ。
それが特殊部隊と同列では誇りが許さない。
それが海兵隊なのだ。

とは言え、現状比べるべき相手が自衛隊以外いないのでは現状、確かに世界最強かもしれない。
そんな海兵隊を相手にさせられ、しかも奇襲というべき状況に晒されたバジル王国が哀れに思えてきたベサリウスだった。

第３３話「グラナリア強襲～後編」

ーバジル王国グラナリア

突然の奇襲に慌てふためくバジル軍は、部隊の将は居れども全軍を指揮する将が居ないのもあり、混乱から立ち直る事が出来ずに居た。
本来そこで軍を纏めるべき立場にあるはずの王、ザハンも指揮を執るどころか逃げ支度を優先したから尚更だった。
有らん限りの財宝を持ち出す手配に忙しく、防衛には見向きもしないのではどうにもならない。
何とか各守備隊の指揮官達は城だけは守ろうとしたのだが、すばやく展開してきた海兵隊の前に城壁の門を閉じるどころか門を奪取されてさえいた。
これも誰もまとめ役が居ないために各個の判断で動くのだ。
連携も何も無く、ただ屍を重ねるだけに終わってしまうのは仕方ないといえる。
これが日本の自衛隊や外人部隊なら、上級指揮官が居なくても各個に無線などで連絡を取り合い、連携して行動できるのでいいが、この世界ではそう言った手段が無い。
その為、一度指揮系統が破壊されると立ち直る事が出来ない。
もっとも、バジル王国はガリウス、ヘルマン両将軍を失った時点で指揮系統は破壊されていたが・・・。
「レオナルド！レオナルドは何所だ！」
玉座の間（元は城主の間）でザハンはレオナルドの名を叫んでいた。
困った事があればレオナルドに相談すればいい。
今までそうしてきたように今回もそうしようとしていたのだ。
しかし、幾ら呼んでもレオナルドは姿を現さない。
頼みの綱がいないのではどう行動するかの判断さえ出来なくなっていたのだ。

ザハンはただ玉座の間にて右往左往するのみだった。

一方のレオナルドもまた対応に苦慮していた。
強襲してきた海兵隊の動きが早すぎ、全軍の掌握も出来ないでいたのだ。
全軍の掌握がなされぬままに降伏しても、抵抗を止めぬ部隊が出てくるだろう。
下手をすれば虚偽の降伏として彼自身の首が飛びかねない。
それもあって、とにかく首都に存在する全軍を城に集めようと必死だった。
だが、ここに来て城門が敵に制圧されたと言う報である。
これでは掌握などと言ってられる状況ではない。
敵がなだれ込まれぬように城の門と言う門を閉じて何とか時間を稼ぐしかない。
時間を稼いだ上で、邪魔になるであろうザハンをどうにかしなければならない。
下手したらザハンは逃げ出すために場内の全軍を打って出させて突破口を作りかねない。
しかし、流石に王をどうにかしようとすれば兵権を持たねばできないだろう。
一歩間違えば保身に走って王を殺めた者として、味方に殺されかねないのだ。
「何としてでも兵権を確保しなければ・・・」
状況の把握が困難である以上、躊躇している時間はなくなったと言える。
最早手段は選んでられないだろう。
自分の指揮下においてあった衛兵に時間を稼ぐよう指示すると、そのまま玉座の間に向かっていく。
玉座の間ではザハンがどうして良いのか分らずにわめいている光景

が広がっていた。
ザハンはレオナルドを見つけると縋り付くようにレオナルドに駆け寄った。
正直、レオナルドは蹴飛ばしたい気分に駆られている。
そこを敢えて堪える。
「レオナルド！何所に行っていたのだ！」
自身はうろたえるばかりで何もしていない事を棚に上げてザハンは怒鳴った。
そして矢継ぎ早に対応を求めてくる。
「どうすればいい？逃げ道は？財宝は？護衛は？」
城下の状況も、敵の事も聞かずに自身のことばかりを考えての発言にはうんざりする。
しかし、その状況を打破するためにもやるべきことはやらねばならない。
「陛下、それをどうにかするためにも私に兵権を与えてください」
レオナルドの言葉に、ザハンはビクリと身を震わせた。
一軍を預けるのではなく、兵権という事は全軍の指揮権を預かる事になる。
それはザハン自身の身を守る手段さえ与えてしまう事になるのだ。
本来、兵権を渡しても王の身を守るための防衛手段たる近衛兵がバジル王国には無い。
元々が一地方領主だからだ。
その為に独立後も軍の整備は行っても近衛兵までは組織していなかったのだ。
もっとも、よほど信用出来る者が居なければ近衛兵などは編成できないのだが・・・。
「へ、兵権を渡してしまえば・・・私の身はどうなる？」
恐る恐るレオナルドの言葉を待つ。
そんな主君にレオナルドは顔色を変えずに答えた。
「勿論、陛下の脱出の準備をします。その為の時間を得るためにも

兵権が無ければ何も出来ません」
レオナルドは自らの主君を諭すように言った。
元々文官でしかないレオナルドは軍事的な権限は持っていない。
如何に身分があろうと権限が無ければ命令できないのだ。
「・・・しかし・・・」
躊躇うザハンに再度、今度は強く主張する。
兵権が無ければ自分には何も出来ない、と。
流石にこの上は任せるしかないと悟ったザハンは、レオナルドに兵権を預けると宣言し、賊を防げ、と命令するに至った。
この時を持ってザハンの命運は決まったといえるだろう。

城壁の門は確保したものの、城そのものに通じる門という門を閉じられては海兵隊も進入できない。
仕方なく城の攻略は後回しにされていた。
ハッキリ言ってしまえば城の攻略など簡単である。
歩兵戦力だけでも、門を吹き飛ばす武器はあるからだ。
しかし、簡単に出来るからこそ後回しになる。
城に引きこもってくれるならその分、別の場所に戦力を暮れる。
そうなれば、市内各地で未だ抵抗する敵兵力を無力化を進める事が出来る。
何せ強襲しただけあって纏まった行動をとっていないのだ。
その分、少数が分散配置されている。
それを一つ一つ潰して回らねばならなくなっているのだ。
戦力は少しでもあった方がいい。
「意外と手間取るな」
バーンは市街地の確保に時間が掛かっている状況を見ながら言った。
戦わずに降伏してくる敵もいたが、一部敵戦力が住居に立て篭もって交戦態勢を維持していたりするからだ。
また、戦うでもなく降伏するわけでもなく逃げ回る部隊もあるので、

その制圧にはやや時間が掛かる見通しになっていた。
「司令部より連絡、ベサリウス軍の近接部隊が市内の制圧に協力するそうです」
海兵隊だけで決着を着けたかったバーンは思わず舌打ちするが、住居などに突入しての制圧ならベサリウス軍に任せたほうが無難だと思えた。
なにより、部下を無意味に危険に晒す必要がない。
司令部からの命令を受諾したバーンは、上空からの状況把握に努めるバード隊にベサリウス軍を敵と間違わないように注意させる。
「本場の白兵戦が見られますね」
気軽に言う部下にバーンは、そうだな、と答えた。
確かに白兵戦闘などまず起こりえない。
訓練はしてもそれを使う機会はまずないのだ。
そう言った意味では白兵戦闘を見るのは良い経験になりえた。
もっとも、彼自身、白兵戦そのものをやりたい訳ではない。
一度、演習で痛い目にあっているからだ。
白兵戦の日米合同訓練で、自慢の部下達を軒並み叩き伏せたものがいたのだ。
当時、彼が特別なのか？と思い本人に聞いたところ、自分はちょっとばかり得意なだけで自分以上の人は隊内にゴロゴロ居る。といわれたことがある。
それ以来、白兵戦闘は部下にさせたくないと思っていた。
それを思い出したバーンは少しばかり苦笑いを浮かべた。
「たしか・・・ハタノとか言ってたな・・・」
バーンの呟きに近くに居た兵が、何ですか？と聞いてくる。
それに対しバーンはなんでもない、と答えるとプロジェクターにより壁に映し出された映像を見る。
市内に突入を開始したベサリウス軍は海兵隊の案内の下、各地に立て篭もる拠点に散っていく。
このとき、その中にまさかベサリウス本人が混じっているとは露ほ

どにも思わなかった。

「突入！」

号令と共に打ち破られた扉から建物内にベサリウスの兵が次々に突入していく。

途端に内部にいた敵兵と血で血を洗う剣戟が始まった。

流石に少数であるが、精鋭を目指して育てられただけある。

ベサリウス軍の兵は建物内で振るうのに便利な小振りの小剣（ショートソードメイス）や棍棒、そして小斧（スモールアックス）を手に中で暴れまわっていた。

建物内では下手に威力がある大型の武器や、槍などの長柄武器（ポールウェポン）は逆に使い難い。

むしろ邪魔になるとさえ言える。

そこも考慮した武装の選択は決して間違いではないだろう。

海兵隊も後ろから援護しつつ、目の前で繰り広げられる剣戟にやや興奮気味だった。

「こりゃ凄ぇ！ハリウッドなんか目じゃねぇぜ！」

中世を舞台にした映画で行われる戦いなどかすんで見えるものがあった。

振り下ろせば飛び散る血潮に、己を鼓舞し相手を威圧する怒号。

どれも映画で見るより遥かに迫力がある。

援護も出来ないほどの接近した白兵戦に興奮するなと言うのは難しいかもしれない。

「ヒュー！やっちまえ！ぶっつぶせ！」

海兵隊たちもベサリウスの兵に応援する始末だ。

もっとも、ベサリウス軍の兵は目の前の敵に集中してる上、自ら放つ怒号と激しい剣戟の音で聞こえていないのだが・・・。

こうやって一つ一つ拠点を潰すと同時に、逃げ回る敵を捕捉し、追い詰めるのは海兵隊の役目だ。

狭い路地裏に潜む一隊を目敏く見つけたバード隊から連絡を受けた

海兵隊は、逃げ場を塞ぐように追い詰めていく。
果敢に反撃を試みた者もいたが、逃げ場の無い、隠れるところのない（あっても無意味だが）路地裏では一方的に蜂の巣にされて終わる。
しかし、問題もあった。
戦場の雰囲気に飲まれた若い兵士が暴走し、降伏の意思を示したバジル軍兵士を射殺したり、民家に押し入り好き勝手にしようとするものが現れたのだ。
戦場には付物の光景だが、バーンはこれを許さなかった。
「自衛隊ではこんなことは一切起きなかったのに我が軍が起こすとは何事か！恥を知れ！」
誇り高き海兵隊の一員が、その誇りを汚す事は我慢ならなかったバーンは、その場で銃殺もいとわなかった。
周りが止めなければ自分で現地に飛んでいきかねないほどだ。
どうも、異世界転移に巻き込まれ、半場自暴自棄と化した者が少なからず居る事に気付かされた事態だった。
とは言え、夕方頃にはしないの戦いは終わりを迎え、残すところは敵の本拠地だけとなっていた。

「レオナルド様、市内は制圧されたようです」
城の一室から市内の状況を観察していた兵が報告に来た。
これで、残すところはこの城のみになった。
漸く兵権を得て、全軍の掌握が叶ったと思えばこれだ。
これでザハンを逃がす事は不可能となったが、予定に変わりは無い。
むしろやり易くなったといえる。
「では、皆覚悟を決めよ」
レオナルドの言葉に集まった将は誰も異議を唱えなかった。
目指すは玉座の間。
城への攻撃が始まる前に事を成就せねばならない。

それしかこの城に残されたものを救う手立てはない。
全員がそれを理解しているのだ。
「では、短いこの国の歴史を終らせよう」
レオナルドの決意の一言によりバジル王国の幕引きが始まった。

第３４話「バジル王国の滅亡」

ーバジル王国グラナリア

グラナリア市街の攻防は海兵隊とベサリウスの勝利により、残すところは城のみになってた。
そしてその城は包囲されつつあり、攻撃の開始を待つばかりとなっている。
元々地方の領主の住まいと言うより、山賊や他国の侵略に備える意味で作られていたために防御力を考慮されている城だ。
しかし、それも今や過去のものとなっている。
日本が転移してきた事により、火砲がこの世界に持ち込まれる事になった。
それにより城砦がその本来の役割を果たす事はなくなった。
これは、日本は元々いた世界の歴史でも同じことが起きている、その再現がこの世界で起きていた。
海兵隊の保有する火砲、Ｍ７７７　１５５ｍｍ榴弾砲が長大な射程距離を持ってその照準をバジル王国最後の頼みの綱である城へと向けられている。
榴弾砲とは爆風と破片で人体のみならず、ありとあらゆる物を粉砕する力がある。
それは城砦相手でも同じだ。
石を積み重ねて作られた城砦は堅牢な建築物であるが、現代の火砲たる榴弾砲の前にはその堅牢さは意味が無い。
一度火を噴けば１時間経たずに瓦礫の山へと姿を変えてしまうだろう。
勿論バジル王国側はそんな事実など知る由も無い。
しかし、それを知らずとも国は終わりを迎えているのは分っていた。
だからこそ、せめて犠牲はこれで最後にせねばならない。

その一念でレオナルドは玉座の間へと足を向けていた。

玉座の間ではザハンが脱出の時を今か今かと待ちわびていた。
そのザハンの前にレオナルドが姿を現したことから、遂にそのときが来たと思い表情を明るくする。
レオナルドは吐き気を覚えた。
自分がこれからやることは決して褒められた事ではない。
むしろ汚名を被ることになるだろう。
しかも、幾ら無能だ何だと言っても自分を信用する主君に対する裏切りだ。
幾らこの国に住む民のため、と理由をつけても自分の行いは人のそれに反したものだ。
その事実を目の前にして決心が揺らぐ。
だが、ここまで来て引くわけには行かない。
やらねばならぬのだ。
「おお！レオナルド！脱出の準備が出来たのか！」
実に嬉しそうなザハンにレオナルドは冷たい現実を突きつける。
「いえ、最早脱出は無理かと存じます」
ただ一言の返答だが、ザハンに現実を突きつけるには十分だった。
しばしの間、場は沈黙に包まれる。
言葉の意味を理解し、受け入れるまでの時間だ。
だが、ザハンがそんなに物分りのいい男であればこんな事態にはなっていない。
この期に及んで現実を認めたくないザハンはレオナルドにつかみかかる。
「それをどうにかする為に動いていたのではないのか！？お前は何をやっていたのだ！？」
レオナルドに向けられた罵声を前に、ただ「何もかも遅すぎたのです」と返答する。
レオナルドの告げる言葉の前に、ザハンは力なく床に崩れ落ちる。

「・・・私は・・・どうなる？」
目の前に広がる絶望は深く、その目はどこまでも空ろだった。
「・・・降伏し身命を得る他ありませんが、王となった以上は王としての責務を果たしてください」
王としての責務、それすなわち国と共にあれだ。
国が興された時に王は始まり、国の繁栄と共に王は繁栄し、国の終焉と共に王は終わる。
落ち延びて再起を果たせぬなら、国と共に終われといっているのだ。
つまり、死ね、と・・・。

それを突きつけられた時、ザハンの心中を知る術はレオナルドにはない。
ただ、ザハンは理解できないような様子だった。
「今一度、せめて最後は王らしく振舞い、王としての誤差以後を・・・」
彼は愚かで、強欲で、残酷な人物であったろう。
だが、それでも最後はその名誉を保って迎えさせたい。
それがレオナルドの下した決断だった。
「・や・・い・だ・・・・嫌だ！」
絶叫に似た叫びを上げて、見た目とは裏腹にザハンは機敏にレオナルドの側をはなれる。
もはや彼にとってレオナルドは彼自身の命を狙う敵でしかないのだ。
ザハンは腰の剣を抜き放ち狂気に犯された目でレオナルドを見る。
「お、お前は、この・・・私を裏切ったなぁ！」
正気ではなくなっているザハンの絶叫を合図に玉座の間の外で待機していた兵士達がなだれ込む。
己にとって頼みとすべき兵が玉座の間に入ってきた事によりザハンの心に余裕が生まれる。
「兵共よ！裏切り者を殺せ！」
ザハンはそう兵士達に命令する、が、兵たちは誰も動こうとはしな

かった。
その様子にザハンは再度命令を下すが、やはり兵たちは一向に動こうとはしない。
「よ、余の命令が、き、きき、聞こえないのか！」
半狂乱となって三度命令を下すが、兵たちはレオナルドの背後で動こうとはしない。
何が起きているのか？と言った様子のザハンの前で、レオナルドが兵たちに命令した。
「・・・せめて苦しまぬように・・・」
レオナルドの言葉に兵たちがザハンににじり寄る。
自分の命令を聞かずに、レオナルドの命令で動く兵たちを前にザハンは兵権を預けたままだったからか、と思ったが、そうではない。
兵権は全軍の状況と、その意思確認のために必要だっただけで、実際に命令するために欲したのではないからだ。
「へ、兵権はそやつから取り上げる！だ、だから余の命令を聞けぇ！」
これで、命令を聞くと思ったのだろう。
しかし、最早彼らはザハンの命令を聞く気はない。
生き延びるためにはこうするより他は無いと考えての行動なのだ。
「な、何故だ！」
一向に彼の命令を聞こうとしない兵たちから、レオナルドから返答は返って来ない。
ザハンは徐々に後ろへと逃げるが、所詮は地方領の城の城主の間だったところだ。
然程広くない玉座の間で、逃げ場を失っていく状況に絶望の色が濃くなっていく。
「や、やめろ・・・来るな・・・来るなぁぁぁ！」
それが、ザハンの上げた最後の言葉だった。

一方の海兵隊は攻撃準備が終わり、さあ攻撃だ、と言う段階にあった。
しかし、その彼等の前で閉じられた門が開いていく。
海兵隊の兵士達は打って出てくるか、と思い身構えるが、出てきたのはたった一人の初老の男性だけだった。
手には青一色の旗を持っている。
それが何を意味するのか海兵隊には分らない。
実はこれは降伏の証で、抵抗しない事を示しているのだが、彼等の常識では白旗になる。
文化の違いと言えばそうなのだが、それを分れというほうが無理な話だろう。
そんな状態の海兵隊を前に男が大声をあげた。
「私はレオナルド・フリーマン内務卿！責任者と話がしたい！」
レオナルドと名乗った男の様子から、海兵隊員は「そこで待て」と命じて司令部と連絡を取る。
責任者と話、と言われても取り次ぐべきか判断できない。
最悪、自爆テロの様な真似でもされたら事だからだ。
彼等海兵隊は元居た世界で、アフガニスタン、イラクとで痛い目を見ている。
それは海兵隊だけに留まった話ではないが、その経験から常に慎重なのだ。

バーンは部下の報告を前に肩透かしを食らったような気分だった。
これから総攻撃、と言う時点での軍使なのだ。
まさか無視して攻撃するわけにも行かない。
そこで司令部のハウザーに連絡すると、ベサリウスとも協議してから出なければ軽々しく受け入れられないとなった。
そのため、本日中の攻略は難しくなったと思われていた。
『・・・と、言うわけなのですが、如何お考えになられますか？』
画面越しにハウザーと協議するベサリウスは、そう持ちかけられる

としばらく考えた。
青旗を持っていることから降伏の使者だとは思うが、ザハンがその様な考えをするとは思えなかったからだ。
まさかこの時点でザハンが死んでいようとは露ほどに思っていない。
「降伏の使者ではあるようですが・・・。取り合えず会わないわけにはいきませんな」
ベサリウスの返答にハウザーはどうしたものか判断に迷っていた。
交渉、となればあくまでも一軍を率いる指揮官であるハウザーたち外人部隊は口を出せなくなる。
それはベサリウスの要請で派遣されているため、戦闘での指揮権はハウザーにあったが交渉ではベサリウスにその権限があったからだ。
ハウザーとしては戦闘だけで蹴りを着けたかったというのが本音だ。
そうすれば実績を示せるので日本での自分達の地位が上がり、影響力を持てると考えたからだ。
だが、ここに来て交渉で決着が着いてしまうとベサリウスの実績となってしまい、彼等海兵隊はその手伝いにしかならなくなる。
それでは然程の地位向上はないだろう。
あくまでも実力の一端を示せたに過ぎなくなる。
しかし、こうなった以上は受け入れない訳には行かなくなってしまった。
それに今回が駄目でも次がある。
今焦る必要はないのだ。
「分りました。どちらにせよ、交渉の権限はそちらにありますので任せます。ただし、身の安全を考慮して我が隊の者を付けます」
ハウザーは交渉いかんによっては即時攻撃が出来る態勢を取るためにバーンを同席させる事にした。
万が一、降伏交渉が決裂した場合は、今度こそ有無を言わさずに叩き潰すためだ。
できれば、決裂してもらいたいと願う。
だが、その願いは誰にも聞き遂げられなかった。

ベサリウスとレオナルドは城の中庭で交渉する事になった。
そして互いに自己紹介すると、本題へと入っていく。
その中で国民と兵士たちの身の安全を条件に降伏するとのレオナルドからの提案に、ベサリウスは特に条件をつけることなく受け入れる事にした。
何故ならばザハンが既に亡き者となっているのだ。
ベサリウスも死人に鞭打つ気は更々ないのだ。
身柄引き渡しを要求しても意味が無い。
ただし、遺体の確認だけはする必要があったので、それだけは認めてもらう。
レオナルドは感謝します、と答えて城に合図を送る。
すると兵士達が城から出て来て整列を始める。
全面降伏による武装解除のためだ。
当然、武装解除ともなれば海兵隊の監視下で行われた。
残った懸念は首都に居なかった兵士達だが、それは降伏すればよし、しなければ賊として討つだけだ。
それを考えるとベサリウスは日本に丸投げしてしまえば良いと考えた。
戦力の回復が出来るまではどの道それしかないのだが・・・。

だが、こうしてバジル王国はザハンの死と共に終焉を迎える。
後にこの地を日本、ベサリウスどちらが統治するかで協議がもたれるが、それはまた後の話になる。

第３５話「捕虜」

ーベサリウス国コンスタンティ

バジル王国が外人部隊海兵隊の攻撃を受け始めた頃、コンスタンティでは状態の安定した捕虜からホードラーへの移送が開始されていた。

これはこの世界の情報を少しでも集めるために日本の領内に移動させる必要があったからだ。

ベサリウス側からしても、国内の防備を日本にゆだねている以上は捕虜の面倒まで見切れない、と言う事情も過分にしてあった。

だからと言って、その為に必要な兵力をまた抽出するのも難しいため、高橋たち特殊任務部隊へお鉢が回ってきたのは自然な事だったのかもしれない。

ただ、到着直後に南部攻略やバジル王国侵攻が同時期に始められることを知って高橋たちも大いに慌てることになる。

とは言え、現状任務の変更が通達されていない以上はこのまま捕虜の移送を行う事になる。

高橋たちの部隊には７３式中型トラックが配備されており、行きは輸送隊として、帰りは捕虜移送として動く事が当初より決まっていたので、物資を下ろし次第捕虜の積み込みが行われていた。

「・・・なあ」

井上が捕虜が中型トラックに乗り込んでいく様子を見ながら高橋に話しかけてくる。

大体言いたい事が分っていた高橋は取り合えず無視する事にした。

「捕虜、てこれだけか？」

トラックに乗り込んだ捕虜は６名だ。

正直、こんなに居ないとは思いもしなかった。

実際はまだいるのだが、動かすには危険な状態なので今回はコンス

タンティに残す事になっている。
「後2名いるな」
そっけない感じで高橋が答える。
そんな高橋を見ながら井上はため息をついた。
「これならトラックを4台も連れてこなくて良かったんじゃないか？」
井上の言うとおり、捕虜が10名にも満たないなら1台で十分だったろう。
補給物資の輸送も兼ねての4台だったのが、逆に無駄が多くなった気がする。
明らかに燃料の無駄だろう。
正直、多数とは言ってたが、出発前に何人か問い合わせるべきだったのだ。
はっきり言えば捕虜移送を命じた側、そして高橋の確認ミスである。
「・・・言うな」
正直疲れ果てた表情の高橋は残り2名の到着を待った。
そんな高橋よ井上はじと目で見つつも、代わりに積み込むものを探しに行った。
折角なのだから少しでも持っていくべきものは持っていくしかない。
後で高橋が燃料の無駄、と叩かれないためには必要な事だった。
「やれやれ、帰ったら何かで埋め合わせしないとな」
正直、まさかこんな事になるとは考えてなかった分、出動した部下の手前このまま、というわけにも行かない。
既に数日の休暇は貰ったばかりなので嗜好品になるものを実費でそろえて与える事になる。
特殊任務部隊の隊長、と言っても給料は一般の同階級のままだ。
仕事と責任ばかりが増えて、とても割に合わない。
だが、上から見れば細々とした仕事を押し付けられる上に、大陸に派遣されている自衛隊の中でもダントツの実戦経験がある。
かなり使いやすい部隊なのだ。

そうこうする内に移送予定の捕虜のうち1名は女性で、警務官に連れられてくる。
警務官とは自衛隊内の警備を任務としており、他国で言うところの憲兵（ＭＰ）だ。
普段は隊の秩序維持に努めるが、有事になれば捕虜の取り扱いや部隊移動のための交通整理もおこなう。
とは言っても自衛隊の警務官は一般市民にたいする司法権を持たない。
これは自衛隊には軍法会議に類するものが無いためだ。
よって、隊内での逮捕権や取調べは行っても裁く事はない。
その必要があれば検察庁へ送致して終わりなのだ。
ただし、大陸派遣されてる自衛隊の場合、現地に司法権を行使したり、裁判権を行使する部署が設立したばかりなのもあり、現地住民に配慮の必要からも査問会と言う形で裁く事が認められている。
今回コンスタンティにいる警務官に至っては、コンスタンティに司法、裁判権を持つ組織が存在しない。
よって急遽派遣された経緯を持つ。
「お疲れ様です」
高橋は警務官に敬礼する。
警務官も敬礼で返してくる。
互いに敬礼を終えると書類の交換だ。
確かに受け取った、受け渡したの証明だ。
それが終わるとトラックへ乗ってもらう事になる。
「後1名は？」
高橋は残り2名と聞かされていたので、もう一人はどこかと思い聞いてみた。
「はぁ、もうまもなくだと思いますが・・・」
警務官はそう答えると負傷した捕虜を纏めているテントの方を見る。
その様子から負傷しているのを理解した。
「では、もうしばらく待ちます」

そう言うと高橋は女性の捕虜に向き直った。
女性は赤い髪をし、凛とした印象を受ける。
その眼光は鋭く、誇りまでは失っていない、といわんばかりだ。
「自分は今回あなた方の移送を行う責任者の高橋政信（たかはし まさのぶ）少尉です」
高橋は丁重な対応を行う。
下手に高圧的に出れば逆に反意を持たれかねない。
こう言うのは捕虜とは言え相手を尊重するほうがいいと思ったからだ。
「丁重な挨拶痛み入る。私はバジル王国ベサリウス侵攻軍副将フェイ・アーデルハイトと申す」
この世界らしい言い回しをするフェイに敬礼すると、トラックへの乗車を求める。
拒否されても載せてしまうのだが、こうする事で自発的に乗ってくれるなら有難いからだ。
フェイと名乗った女性は支持されたトラックに乗り込んでいく。
正直、ファイからすればこのトラックには奇妙な感じしかしない。
何せ自分の知っている常識からすれば、馬も無く自発的に動く乗り物など聞いた事がない。
一度見ているが、日本ではこれが普通なのかと思うと奇妙にしか見えないのだ。
「一応、私の部下も乗りますが、万が一不都合があれば言ってください。極力考慮しますので」
トラックに備え着けられた座席に腰を下ろすフェイに言う。
フェイは黙って頷くと、同じく乗り合わせている部下達を見た。
今回移送されるバジル軍の捕虜の中ではまともな分類になるのだが、その目はどうした事か虚ろだ。
これはフェイと違い、砲撃を受ける中で意識を保ってしまったが故にシェルショック、つまり心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）に陥ってしまっていたのだ。
今は薬で落ち着いている上に砲音も無いので落ち着いているが、も

し一度薬が切れた状態で砲音でも耳に入ればパニックを引き起こすだろう。
高橋は荷台に乗る捕虜の様子に、果たして、そんな状態の捕虜から情報など得られるのか？と疑問に思ってしまう。
フェイも変わり果てた部下達の様子に、部下をそう言う状態にしてしまった責任がその両肩に重く圧し掛かっている様に思える。
重苦しい雰囲気の中、井上が数名の自衛官と担架で運ばれる者とを連れて帰ってきた。
「おーい、こいつらシバリアに帰還することになったらしいから、ついでに乗せてこうぜ」
状況を知らない井上がのんきな声をあげる。
その内の一人は面識があった。
「波多野じゃないか」
井上が連れてきた面子の中にハタノが混じっていた。
「高橋少尉？」
波多野は高橋の姿を見て驚いていた。
幾ら同じ自衛官でも任務や部隊が違えば知った顔と出会う事は難しい。
しかも、高橋とあったのはアルトリア以来なのだ。
その時は引継ぎなどで幾つか話をしたぐらいだが、お互いがしっかりと覚えていたのはアリスト村が絡んでいたからだろう。
高橋たちが救った難民により作られた村、そしてその事後を預かった波多野。
互いの接点はそれだけでも、印象が強く会ったのだ。
「久しぶりだなぁ」
高橋の言葉に波多野がそうですね、と答える。
その様子に井上は知り合いだったのか？という表情だ。
「そうか、井上は波多野とは初対面か」
引継ぎのときは井上はその場に無く、責任者同士でおこなわれたからだ。

流石に井上はその立場に無かったので同席していなかった。
「お変わりないようですね」
波多野は高橋の元気そうな姿にほっとしていた。
「そっちもな」
高橋も波多野にそう返す。
同じ組織に属してても、再び会うことは早々ない。
そう言う意味では、無事な姿を見ることは安心につながる。
しかも、互いに実戦の場に居るのだ。
いつ、何所でどうなる下など分ったものではない。
「じゃあ、一応捕虜とは別の車両に乗ってくれ」
高橋は波多野にそう言うと、空いてるトラックを指さした。
４台のトラックの内、捕虜と監視の自衛官が乗るトラック以外は空いている。
そう考えての発言だった。
「了解です」
波多野はそういって敬礼すると空いているトラックに乗り込む。
その後姿を見ながら、移送する最後の捕虜を見る。
担架に運ばれてきた事から、歩く事もままならない程の怪我であるのは明白だ。
そんな人物を移送して大丈夫なのか？と高橋は考えた。
運ばれてきた捕虜を確認すると、これまた女性である。
「怪我の具合は大丈夫なのか？」
高橋が運んできた衛生科の自衛官に問いただす。
「負傷の度合いは重いですが命に別条ありません。ただ・・・」
言葉を濁す衛生科の隊員に高橋は怪我の状態を確認する。
結果、両足の喪失による歩行困難と聞かされ、気の毒に思えてきた。
だが、詳しく話を聞くと、因果応報と言うべきものがあった。
先の戦いでバジル軍兵士に薬物を用いての作戦を提案、実行した中心人物らしい。
その為、他の捕虜とは一緒に出来なかったようだ。

「おいおい、そりゃ重要人物じゃないか」
非人道的な事を平然と行った人物という事で井上は抱えていた同情心が何処かへ飛んでいっていた。
高橋も詳しい話を聞く限りでは同情に値しないと思ったが、それでもやはり気の毒に思った。
確かに足を失ったのは因果応報といえる。
だが、これからの人生を足を失ったことに対するハンデを背負って生きるのは、因果応報を超えてはいないだろうか？
我ながら甘いとは思ったが、戦いが終わっている以上はそこに恨み辛みをぶつけるものではない。
「了解です。では、他の捕虜とは別に扱いましょう」
薬で眠っているらしい女性を波多野たちの乗る７３式中型トラックに乗せる事にした。
恐らく、一緒にすれば要らぬトラブルを招く事になるからだ。
それは捕虜の移送にとってよろしくない。
「分りました。では」
衛生科の自衛官はもう一台のトラックへと女性を運んでいった。
「井上、中田さんはあの女性に付けて置いてくれ」
部隊に所属する医務官は中田信次（なかたしんじ）大尉だけだ。
それなら負傷している捕虜に付けるのが妥当だろう。
波多野たちが乗り合わせた事により、彼等を護衛代わりにすれば問題もあるまい。
「おう、分かったぜ」
井上は何時ものように答えると出発の準備を始めた。
移送する予定の捕虜全員を引き受けているので、何時までも時間をかけてはいられない。
高橋は部隊に出発を指示すると、自らも軽装甲機動車へと乗り込むために足を向けた。

第３６話「捕虜移送」

ーコンスタンティ、レノン間街道

未だ整備されていない街道を高橋たちはレノンへ向けて進んでいた。
将来的に舗装される事になるだろうが、それまではこの悪路を通るしかない。
一応、簡単な整備は行われたようで、以前、田辺を連れていた頃よりはマシになっている。
しかし、やはり舗装された路面ではないために、あまり速度は出せない。
殆ど空荷状態なので出せなくもないが、特別急ぐ必要もないので捕虜に要らぬ負担をかけない為にもゆっくりと進んでいた。
その状況の中、捕虜の監視を引き受けた井上の分隊はトラックへと乗車している。
だが、軽い気持ちで引き受けた井上は後悔する羽目になった。
元々陽気な男である井上は、場が明るいのが好きなのだ。
しかし、捕虜達のどんよりとした重苦しい雰囲気に彼の部下達も黙り込んでしまっている。
正直な話、一刻も早くここから逃げ出した気持ちだった。
（おいおいおい、勘弁してくれよ・・・）
そう思いながらも捕虜への監視は怠らない。
捕虜が今更抵抗するとは思えないが、万が一がある。
その万が一が起これば自身のみならず、部下や部隊全体へ危機を招くからだ。
とは言うものの、流石に実戦を数多くこなしてきただけあり、井上の部下達もうんざりしながらも気を緩めては居なかった。
そんな道中で、一人まともな人物がいたのは井上にとって救いだったかもしれない。

「・・・先程から気になっていたのだが」
重苦しい雰囲気を打ち壊すように話しかけてきたのはフェイだった。
フェイもこの雰囲気には耐え難いものがあったのだ。
まるで自分が責められている、と錯覚してしまうほどに・・・。
責を問われれば甘んじて受けるつもりだったが、それでも無言の圧力（実際はそうではないのだが）は彼女の神経をすり減らすものだったのだ。
「あん？なんだい？」
井上はやや落ちているテンションで答える。
これが普段ならもっと気の利いたことを言ったかもしれない。
が、流石にそんな気分にはなれなかったのだろう。
「貴公の持つそれは・・・武器なのか？」
フェイが井上の持つＭ２４狙撃銃を指差す。
フェイは一般の自衛官達が持つ８９式５．５６ｍｍ小銃を見ていたが、捕虜に対する抑止力のため、銃口の下に銃剣が着けられているものしか見ていない。
つまりは、刃物が着いているから槍の一種、と捉えていたのだ。
だが、井上が愛銃として持っているＭ２４は狙撃用のものであり、銃剣が着いてないどころか着けられない。
勿論、捕虜の監視に同乗している井上の部下達も今は着けていない（車両乗車中につけていると危ないため）が、フェイは取り外し可能と言うのが分かっただけだ。
「武器に見えないか？」
最初、井上はフェイが何を言っているのかが分からなかった。
勿論それは井上が武器と認識しているからの答えだが、フェイたちの様なこの世界の人々にとって、武器とは思えないのだ。
何せこの世界には火薬がない。火薬が無ければ火縄銃のような原始的な銃などの火器が生まれない。
つまり、銃という概念そのものがないのだ。
それを分かれと言うのは無理な話だろう。

「全く見えん」
と、フェイが自分達の武器の常識で言ったのは仕方ない事だといえた。
井上は少しばかり、何と答えればいいのか分からなかった。
話を聞けばフェイが言う武器とは剣や槍、斧、棍棒と言った物や、弓矢ぐらいなものらしい。
弩（クロスボウやボウガンの事）もあったが、銃と言うものは影も形も出てこない。
（・・・火縄銃でもこの世界では未知のものなのか？）
漸くフェイが言わんとしていることを理解した井上は答えに窮した。
銃のことをどう説明していいのか分からなかったのだ。
取り合えず、目に見えない程速く小さな矢をより遠くへ打ち出す武器と説明した。
まるで子供の説明だ。
フェイは理解したのかしてないのか、しきりに頷いているが、実際は殆ど分かっていない。
原理、射程、威力、精度など、やはり武人である分、そう言った事に興味がある。
しかし、捕虜の身ではそこまで教えてもらえるとは思えない。
だが、飛び道具が日本の主武器であると言うのは理解できていた。
「では、お主達は飛び道具でしか戦わないのか？」
理解しても納得できるとは限らない様に、フェイもまたその例に漏れてはいなかった。
生まれながらの騎士であるフェイは己の剣の腕に自信を持っている。
勿論、弓騎兵を率いていただけあり、ある程度の理解はある。あるが、肉薄しての戦いこそ至上と言う考えはやはりあるのだ。
「飛び道具で戦えるのに接近戦する意味がねぇよ」
井上は意味がないといった。
それは失言だった。
少なくともフェイにとっては・・・。

「卑怯ではないか！騎士の誇りを何と心得るか！武人ならば己(おの)が剣で戦う事こそ誉(ほまれ)ではないか！」

こうなる事は容易に想像できたはずだ。

しかし、井上は普通の日本人である。

当然、自分の常識が相手に通じ無い事など分からなかった。

突然怒鳴り声を上げるフェイに荷台にいた自衛官の目が一気に注がれる。

「んなこと言われてもなぁ。接近戦なんか俺たちに取っちゃ大昔の話しだし・・・」

格闘術を含めた接近戦の技術は学んでいるが、やはり最後の手段であったり、その必要があるときにしか使わない。

井上のこの発言からも接近戦は昔のやり方なのだろう。

ただし、井上のこの言葉はある意味で間違っている。

接近戦、つまり白兵戦は現代でも十分に通用するのだ。

如何に技術が進歩し、装備が発達しようと最後に物を言うのは歩兵（自衛隊では普通科）だ。

どんなに近代兵器を揃えようとも歩兵の力こそが最も重要であるのと同じく、接近戦もまた重要なのだ。

その証拠に、元の世界の先進国の一つである欧米の某国は紛争地帯にてゲリラに包囲された際、銃剣突撃を持って包囲網を突破している。

雄叫びを上げ銃剣を持って突っ込んでくる兵士の威圧感は意外と侮れないのだ。

「なんと！？騎士はいないのか！？なんと嘆かわしい！」

なおも食い下がるフェイに井上も売り言葉に買い言葉で応戦を開始する。

「その飛び道具に負けたくせに偉そうにすんな！」

二人の様子は子供の喧嘩にしか見えない。

意味があるのか無いのか分からない言い合いを始めた井上とフェイに他の自衛官は顔を見合わせるしかなかった。

まだ明るいが日が沈みかかっているもあり、高橋は野営することにして部隊を停止させた。
野営の準備が終わるまで捕虜の様子を見に行く事にした高橋は捕虜を乗せているトラックに足を向けた。
しかし、怒鳴りあいと思わしき怒声と野営準備にトラックから井上たちが出てこない様子に異変を感じた高橋は８９式小銃の安全装置を解除して荷台を覗き込む。

そこには大きな子供が二人いた。
「なんだとぉ！？」
「なんだ！？」
顔を突き合わせて互いに口撃（こうげき）しあう二人の姿に思わずため息が出る。
井上の部下達の視線が高橋に「どうにかしてください」と語りかけるように向けられるが、正直放っときたかった。
「・・・何をやっとるか」
高橋の呆れた表情と共に出た言葉に井上とフェイが気付いた。
二人とも７３式中型トラックが停止している事にさえ気付いてなかったのだ。
「井上、俺は捕虜の監視は命じたが、喧嘩しろとは言ってないぞ？」
高橋は思わず頭を抱えてしまう。
「だってコイツが！」
「何を言うかお前が！」
尚も続く子供の争いに高橋は井上の部下に野営準備を命じると共に、捕虜監視を佐藤の分隊に任せた。
ただし、井上は放置の方向でだ。
「一生やっとれ」
高橋は二人をそのまま放置してそこから去った。
まともに相手するには胃にもたれすぎるからだ。

正直言って冗談ではないし、付き合い切れない。
高橋は一応何故こうなったのか?を知ろうと井上の分隊員から話を聞くために歩き出す。
その背後では尚も言い合いが続いていた。
疲れる、というのが高橋の思いだった。

今更逃げ出そうとするとは思えないが、一応監視するために捕虜達にはトラックから降りないで貰っている。
食事や寝床もだ。
ただし、女性がいることもあり、女性に限っては天幕を用意しそこに寝てもらう事にした。
捕虜の扱いは一応警務隊のに遵守するようにするが、警務隊ではない高橋たちはどうしても難しい事がある。
そこは臨機応変に対応する事にした。
「さて、言い訳を聞こうか?」
捕虜に食事が宛がわれているのを背景に高橋が井上を問い詰める。
井上は笑ってごまかそうとするが、流石に付き合いが長いため高橋は誤魔化されない。
もっとも、高橋でなくても誤魔化されないだろうが・・・。
「い、いやぁ、売り言葉に買い言葉というか・・・」
言葉を濁す井上に高橋は盛大な溜息を漏らす。
「おまえなぁ、部下の前でなんて情けない姿晒してんだよ・・・」
流石に同期とは言え高橋は上官だ。
どうしても言わなければならない事は言うしかない。
「頼むから分隊を預かるものとしての立場を考えてくれ・・・」
心底疲れた表情の高橋に井上もすまない、としか言えなかった。
それと同時に、井上から事の経緯を聞くと真面目な表情で言う。
「ふーむ、やはり文化の違いかなぁ?」
フェイの武器や戦い方に対する認識から、ただ技術の差、と言うだ

けではないと考えた。
日本にもかつて武士の時代はあった。
主な戦い方は槍や刀、そして弓だ。
しかし、飛び道具が卑怯と言う認識はなかったはずだ。
例えば戦国大名で織田信長に敗れた今川義元は「海道一の弓取り」と称されている。
もっと遡れば那須与一（なすのよいち）という人物も居る。
また、鉄砲が伝来し戦場に姿を現すようになっても、効果的な武器と言う使われ方をしている。
つまり古来より日本では弓矢を用いた飛び道具の戦いは卑怯でもなんでもなく、戦の手段の一つと捉えられている。
その事からも、フェイの言をそのまま聞く限りでは、接近戦が至上で飛び道具は卑怯、と言うのは何かしらの文化の違いからきているとしか考えられない。
こう言ったものはそれぞれの文明が抱える文化により、大きく変化しうるのだ。
「文化の違いねぇ、単にアイツが石頭なだけだろ？」
確かにそう言う側面もあるかもしれないが、そこは敢えて無視する事にした。
明らかにお互い同レベルだからだ。
「まあ、もしかしたらホードラーの文化だけの話かもしれないし、断定は出来ないな」
高橋はそう言って井上を解放した。
だが、高橋の中で新しい疑問が生じた。
この世界の歴史は、詳しくは分からないものの数千年が記録されていると言う。
しかし、その割に技術的進歩が殆どない。
これは何故か？
一部の技術は日本に及ばなくても高い水準のものがあったりする。
例えばシバリア市の上水道だ。

きちんと処理されたものではないにしても、市内のほぼ全域にいきわたっている。
しかし、逆にある一部分ではまったくの原始的なものだったりする。
例えば下水道。
最も処理に悩む物であると同時に、最も重要なものだ。
しかし、その技術は原始的も原始的だ。
集めて運んで穴に埋めるだけなのだから。
高橋は、もう少しその原因を知ることが出来れば日本がこの世界ですべき事が見えてくる気がしていた。

第３７話「脱走兵」

ーコンスタンティ、レノン間街道

ひとまず食事を終え、捕虜たちも所定の位置で眠る準備に入っていたときだった。
フェイは女性と言う事もあり他の捕虜とは別の場所で休むように言われたときは身を強張らせてしまう。
彼女の中では女性の捕虜は勝者に辱められるもの、と相場が決まっていたからだ。
そのため、女性だけ別の場所と聞かされたときは自分もその例に漏れなかったと思っていた。
たしかに、今まではそう言った事は無く丁重に扱われたが、これからも同じと言う保障は何処にも無い。
だが、フェイの思いとは裏腹に自衛隊員の誰もが一切手を出そうとはしなかった。
それもそのはず、自衛隊は事人道的扱いには、かなり気を使っていたのだ。
万が一にもそんな事態が起きたら、もうまともに生きていく事は出来ないだろう。
銃殺は無いにしても、懲戒免職された上に書類送検され、裁判になり、そして塀の中の住人となるのが確定してしまう。
そればかりか、自衛隊、同僚にいらぬ迷惑をかける事になり、社会的にも抹殺されかねない。
最も、気を使わなくても自衛隊の規律の正しさは元の世界でも有名であった。
そう言う意味ではその心配は極めて低いといえる。
その代わり愚にもつかない機密漏洩などが起こってはいたが・・・。

それはさておき、結局フェイの取り越し苦労で事は済んだ。
それはそれで安心できるのだが、同じ天幕内にテレサがいるのには納得できなかった。
「・・・何故コイツがここにいる？」
ここまで監視兼案内で来ていた井上を睨みつけるフェイ。
井上は、恐らくこの女憎まれてんだろうな、と思いながら、同時に俺に言うな、と言う顔をしていた。
「そんなもんは俺らの知ったことじゃない。憎かろうが手を出すなよ」
そんな事はあるまいとは思うが、一応釘を刺す事は忘れない。
テレサの方はまだ一度も意識を戻していないが、中田が念のために鎮静剤を打っているので、少なくとも夜明けまでは目を覚ます事はないだろう。
「憎んでなどいない！気に食わないだけだ！」
フェイは井上にそう返すが、井上はどう違うんだよ、と呟くに留まった。
「とにかく、騎士様なら寝首をかくような真似はすんなよ」
皮肉を込めて言うが、その心配は要らないだろうとは思っていた。
下らない口喧嘩はしたものの、人柄は真直ぐなようだ。
井上でもそれぐらいはわかるのだ。
「・・・」
沈黙するフェイに寝袋の使い方を説明すると、井上は天幕を後にする。
本来なら女性自衛官を同席させたいのだが、あいにく、特殊任務部隊にいる女性、ミューリと四宮加奈子曹長は今回連れてきていない。
と、言うのも四宮は後方支援を任務にさせていたので特殊任務部隊の会計役だったのと、ミューリに居たっては民間協力者としての従軍なので、特別な事がなければ連れて行かない様にしてたのだ。
そこは高橋のミスが尾を引いているが、流石に責めるのは酷かもしれない。

井上も居なくなった後で、フェイはテレサの顔を睨みつける。
あの戦いの後、意識を失って倒れている所を保護されてから一度も目を覚ましてないという。
しかも両足を膝下から失っている。
自業自得とも思えるが、それを止められなかった自身にも責任があるとフェイは思っていた。
「・・・将軍は戦死したのに、私とお前が生きているとはな・・・」
本来ならフェイやテレサがヘルマンを守って死に、ヘルマンが生き延びるのが普通だ。
だが、現実は逆となった。
何と言う皮肉であろうか。
この運命を呪うべきか喜ぶべきか未だ答えは見えてこなかった。

丁度同じ頃、高橋たちの野営地から離れた丘になっている所に５０人くらいの人影が集まっていた。
その人影の見掛けはバジル軍の将兵だが、実際はバジル軍からの脱走兵だ。
国境警備に駆り出されたが、時間稼ぎの捨て駒にされた事が気に入らなかった為に脱走して盗賊になった集団だ。
一部の警備隊はフォース・リコンによって潰されたが、潰されずに済んだ、またそれ以前に脱走した連中で構成されている。
そのリーダー格になっているのがケーシー・カルマンだ。
ケーシーは元々平民だが、１０年前に志願し軍に入隊、そして山賊を相手に日夜戦い続けた功績で３０人程の部隊を預かる将になった。
正確な身分は兵将と呼ばれるが、今はもう関係がない。
「あれが日本の軍か」
仕事柄夜目が利き、しかも向こうは明かりを灯しているのもあり、遠目からでも識別が出来る。
「どうします？帰りでしょうから物資はさほど持っていないと思い

ますが？」
配下の兵士がケーシーに対応を求める。
ケーシーは日本の強さを見ては居ないが、噂程度であれば知っている。
曰く、素手で武装した兵士を圧倒する。どんなに離れていても人を引きちぎる。敵を皆殺しにしてその血肉を好む。等など・・・。
完全に尾ひれが付きに付いた噂だが、それだけで挑む気にならなくなる話だ。
しかし、こうして目の当たりにすると、噂は当てにならない事が良く分かるといえた。
「どうやら武装はほとんどしてないみたいだな」
実際は小銃を持ち、軽装甲機動車にはＭ２ブローニング１２．７ｍｍ重機関銃やＭＩＮＩＭＩ５．５６ｍｍ軽機関銃があったりと比較的重武装なのだが、見たことが無ければそれが武器と認識できないのは仕方がないだろう。
その証拠に目の前で見せられ、説明されて漸く武器と言うのが分かったフェイの事もある。
だからケーシーが非武装と判断したのは、彼等の常識からすれば間違っていなかった。
「奴等の事実を知る良い機会だ」
そういって仕掛けるぞ、と言うケーシーに配下はすばやく身を伏せながら移動を開始する。
正直、近隣の村を襲撃する方が明らかにリスクは低いし実入りも大きかったろう。
しかし、それまでは守る側だったのだ。
いきなり村を襲撃する、と言う方針には切り替えられなかった。
と、言ったものの、持ち歩く食料にも事欠きだした現状では四の五の言ってられない。
故に街道に張っていたのだ。
そして目の前に日本の輸送隊らしきものが居る。

護衛も殆どいない様子から、狙うには丁度いい相手に見えた。
しかし、彼等の不幸は、相手が自衛隊であったこと、その自衛隊のことを知らなかったこと、そして最後に、自衛隊内で最も実戦経験のある高橋たち特殊任務部隊を相手にしたことだった。

最初に異変に気付いたのは、フェイと喧嘩した井上の分隊員だった。
ハッキリ言えば巻き添えなのだが、止めなかった連帯責任で歩哨にたたされたのだ。
隊員からすればいい迷惑以外の何者でもない。
だが、だからと言って気を抜いていたわけでもなかった。
「・・・？」
一人が空気が変わった事に気付く。
何と言うか、空気が重くなった様な、圧力が加わっているような感覚だ。
そして、それは今までに何度も味わってきた感覚だった。

敵意を向けるものが近寄る、忍び寄ってくる気配。

そう、今までにホードラー制圧、シバリア動乱、テロ掃討、田辺の護衛とで味わってきた感覚だ。
その感覚になった時は大抵、戦う羽目になってきた。
幾度も実戦を重ねるうちに、歴戦の兵の様に感覚が研ぎ澄まされていたのだ。
「・・・おい」
「分かってる、分隊長に知らせてくる」
「俺は夜間装備持ってくる」
数人が談笑するふりをして打ち合わせをする。
と、同時に走らず、ゆっくりと、だが迅速に行動を開始した。
当然、井上もその空気に気付いて赤外線暗視装置を働かせてあたり

を見回す。
「分隊長」
その井上の下に部下が知らせに来る。
「分かってる。高橋に教えてやってくれ」
井上はそう言うと周辺を見渡す。
何処から来るのか？
それを確認する必要がある。
そして見つけた。
こちらを包囲しようというのだろうか？
３手に分かれて動く集団が見えた。
彼等の内１０人程の別働隊が右手側に、同じく１０人ほどが左手側に、そして本隊と思わしき３０人程度の集団が丘からゆっくりと向かってくる。
遠目とは言え赤外線暗視装置は立派にその役割を果たし、自分達に向かってくる集団の動きをはっきりと確認させてくれた。
「井上、どうだ？」
寝ているところを起こされたとは言え、既に高橋は臨戦態勢の様だ。
「数は大体５０ちょい、距離３００、１時、３時、１０時の方向より接近中。おっと、武装を確認、こりゃ確定だな」
自分が確認した事を的確に伝える井上。
それを聞いた高橋は即座に状況から取れる行動を考える。
この周辺に軍はいないはず、となれば野盗か？
しかし、今までは居なかった事から、敗残兵？
降伏を呼びかけるか？
いや、この機に鎮圧した方がいいな。
「総員起こし、戦闘態勢をとれ。井上の分隊はこのまま観測しつつ正面を、佐藤の隊は左翼へ、俺の隊は右翼だ。静かにだが迅速に、だ。」
すばやく無線で連絡すると高橋は８９式の安全装置を解除しつつ、証明弾の準備をさせた。

その時、井上がＭ２４の薬室に弾丸を送り込みながら高橋に向けて呟いた。
「毎度毎度・・・俺達は呪われているのか？」
事あるごとに厄介ごとに巻き込まれることに対するぼやきに高橋は苦笑いするしかなかった。

目の前の日本軍に大きく動きが無かった事に、まだ気付かれてないと判断したケーシーは部下をなおも前進させた。
僅かに動きを見せた時は一瞬焦ったが、見張りの交代のような動きにまだ大丈夫だと考えていた。
もっとも、気付かれても武装は見た限り碌な物がなさそうだ。
不意を突けば幾らでも何とかなる。
そう思っている。
そして、後５０歩程の距離になった時だった。
突然、日本軍のところに煌々と灯っていた明かりが一斉に消えたのだ。
「しまった！気付かれていたか！」
ケーシーは思わず叫ぶと共に、仲間に撤退を指示しようとした。
だが、ケーシーは最後まで指示出来なかった。
井上の持つＭ２４　ＳＷＳ狙撃銃より発射された７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾がその強力な威力を発揮しケーシーの頭部を撃ち抜いたのだ。
右側頭部より内部に進入した弾丸は中にあった脳を引っ掻き回しながら左側頭部へと突き抜け、血と脳漿を噴出させた。
何が起きたのか分からないまま、ケーシーは有らぬ方向に目を剥き絶命してしまう。
（なにが・・・）
絶命の瞬間にそれだけが思い浮かび、そして暗がりえと消えていった。

第３８話「撃退」

「目標距離１００」
井上は目標の動きを観測したまま、接近してくる集団の動向を無線で高橋に伝える。
高橋はそれを聞き、即座に3名の隊員にカールグスタフを構えさせた。
カールグスタフM2は自衛隊で８４ｍｍ無反動砲と呼んでおり、今では旧式化していたものの、カール君と言う愛称で長い間親しまれてきた武器だ。
無反動砲と聞けばバズーカの様なものを考えるが、それ自体は間違っていない。
ただし、用法は何も攻撃だけではないのだ。
「弾種、照明・・・かかれ」
高橋が選出した3名に照明弾の準備をさせる。
夜間戦闘用装備（暗視装置）で仕掛けても良かったのだが、相手の戦意を奪う必要からも照明弾を上げる事にしたのだ。
照明弾はＩＬＬＵＭ　５４５　照明弾と呼ばれており、約３０秒間燃焼する。
その際、約５００ｍの範囲を６５万カンデラもの光で辺りを照らし出す。
車のヘッドライトが低いものでも２０，０００、最高でも約１２０，０００カンデラと言う事からもその明るさが想像できるだろう。

その照明弾の準備が出来たころ、井上より距離６０と連絡が来る。
「距離５０で照明落とせ。総員、照明弾に備えよ。井上、照明が消えたのを合図に発砲。更にそれを合図に総員攻撃を開始せよ」
矢継ぎ早に指示を飛ばすと、井上から距離５０と連絡が来た。
途端に照らされていた照明が一斉に落とされる。

集団の誰かが叫んだのが聞こえると同時に井上が照準を付けていた一人に向けてＭ２４の引き金を引いた。
即座に射撃態勢に入っていた隊員が井上の発砲を合図に照明弾を打ち上げる。
照明弾はやや飛翔した後、空中で炸裂、辺りを照らす小型の太陽の様に眩いばかりの明かりを放ち、接近してくる集団の姿を浮き彫りにした。
途端に攻撃態勢にあった隊員がそれぞれに割り当てられた目標に向かって射撃を開始する。
軽い炸裂音が周囲に響きだし、その音が響くたびに接近してきた集団は一人また一人と倒れていく。
奇襲をするはずが奇襲された形となった戦いは長くは続かなかった。
ほんの数分で接近してきた集団は蜘蛛の子を散らすように我先にと逃げ出したからだ。
しかし、高橋は逃がすつもりなど無かった。
ここで逃がせば、また再度徒党を組み、今度は普通の旅人などを襲うと考えたからだ。
そしてその判断は間違っていない。
いくら軍に居たとは言え、脱走兵である彼らを庇護するものは何処にもいない。
自身の生活の糧は自身でどうにかするしかないのだ。
そして、兵士であった彼らは手に職がない。
結局は盗賊となり無法行為で糧を得るしかないのだ。
だからこそ、殲滅しないにしても拘束する必要がある。
だからこそ逃げ出す彼等を追い詰めるために、数台の軽装甲機動車が唸りを上げて逃げ道を塞ぎに掛かる。
「無駄な抵抗はやめ、武器を捨てて投降しなさい」
車両上部ハッチから身を乗り出し、ＭＩＮＩＭＩを構える佐藤が彼らに警告する。
警告だけで言う事を聞かぬなら当たらない様に地面に向けて発砲、

威嚇し、なお投降せず逃亡を図るなら射殺する。
生かして置いても後々災いにしかならないからだ。
投降せず災いになるくらいならここで潰しておいた方がいい。
そうやってしばらく当たりは発砲音と怒声入り混じって騒がしくなった
だが、１時間も掛からずにまた静かな静寂が広まっていく。
「ほら！さっさと頭の後ろに手を置いて地面に伏せろ！」
そんな静寂を切り裂くように井上が怒声をあげる。
ちんたらと動く彼等を急かしているのだ。
完全に抵抗不能な状態にせねば拘束するために近づくわけには行かないのだ。
生き残った３０名弱が力なく伏せ、次々と拘束されていく。
また、拘束する際に隠し持った武器などがないかチェックも怠らない。
幾つか小型のナイフを持ったものが居たが、それも全て取り上げていく。
かなり手馴れた感じがあるが、これはシバリア動乱時の掃討作戦で培った経験から学んだことだったりする。
瞬く間に無力化された脱走兵の集団は、何故こうもあっさり襲撃がばれたのか未だに分かっていない。
ただ、言えることは彼等の想像以上の実力を日本が持っていた、ただそれだけである。

手際良く襲撃を退け、襲撃してきた者達を拘束していく自衛隊をフェイは天幕の隙間からのぞき見ていた。
その見事なまでの動きは何処の軍でも見なかった高い技術が感じられた。
最初は飛び道具で戦う誇り無き者、程度で見ていたが、下手な騎士も及ばないほど訓練が行き届き、規律正しい兵士など見たことがな

い。
しかも、彼等の戦う様を目の当たりにしたのはこれが初めてだ。
その圧倒的までの戦闘力は、彼女の想像の範疇を大きく外れていた。
（これが・・・日本の兵士なのか）
明らかに騎士とは違う概念、違う行動規範を持ちながらも騎士以上の働きや規律正しさを見るに、彼女は自分の抱いた彼らに対する認識が間違っていた事に気付かされた。
今なお、飛び道具で戦う彼等を認められないが、それでも実力は認めざる得なかった。
もっとも、彼女はまだ２０そこそこである。
一晩で１８０度方向転換は難しいだろう。
だが、それでも目の前で繰り広げられる光景はフェイに大きな影響を与える事になる。

襲撃者の拘束が終わると同時に簡単な尋問が行われる。
その行動目的を知るためだ。
それで分かったのは元バジル王国の兵で、今は命令を無視して脱走した兵隊崩れであると言うことだった。
高橋は拘束した者達をトラックへと乗せ、監視を付け、今度は捕虜の様子を見に行った。
これを機会と捉え逃亡を企てないとも限らないからだ。
しかし、その懸念は杞憂に終わる。
そもそもそんな気力が彼等に残されていないからだ。
また、フェイは誇りが許さないだろうし、テレサに至っては眠ったままである。
更に言えばこんな事態でも一応監視の目は残してあるので、早々簡単に逃げられるものではない。
「報告します。拘束したもの３１名、内負傷者１０名、何れも軽傷です」

佐藤が拘束した者達についての報告を行う。
高橋は此方の損害は?と聞くと無しです、と返ってきた。
「ふう、毎度の事ながら神経が磨り減るな」
損害が無かった事に安堵しつつも、高橋は溜息を漏らした。
「損害なし、と聞くまでは安心できませんか?」
佐藤は高橋が気を使いすぎる事が心配だった。
元々、実戦の場で活躍する能力はあれども、その精神までがそうであるとは限らない。
一戦毎に神経を磨り減らしていく高橋の様子に佐藤は正直言って、いつか壊れるのでは?という思いがあった。
だが、気丈な高橋のことだ、
本当に駄目なときが来るまでは表には出そうともしないだろう。
「そうだな、いい加減なれないとな・・・。よし、もう無いとは思うが警戒は怠らないように」
高橋は佐藤にそう言うと自分の寝床である軽装甲機動車へと歩いていった。
高橋の後姿はしっかりとした足取りではあるが、逆に不安を抱かせる、佐藤はそんな気になってた。
「大丈夫だ、その為に俺らが居る」
唐突に背後から井上が声をかけてきた。
いきなり背後から声をかけられたのと、心中を読まれたかのような言葉に思わず心臓が止まるんじゃないかと思うくらい佐藤は驚く。
「び、びっくりしましたよ・・・驚かさんでください」
抗議の声をあげる佐藤に井上は軽い調子で悪い悪い、と言うと真顔になる。
「お前さんの心配は正しいぜ」
井上の口から神妙な言葉が出てくる。
井上からしても長い付き合いだ。
当然、そう言ったところは分かってくるのだ。
「あいつは苦労性で心配性なんだ。そこは昔から変わってない」

珍しくタバコを吹かす井上に佐藤はそうなのですか?と答えた。
井上は普段は吸わないが、こうした荒事の後には必ず一本吸うのだ。
以前何故か聞いたときには「死んだ奴等への線香代わりだ」と言っていた。
こういう時の井上は嘘は吐かないので、真実を語っているのだろう。
「では、やはり・・・」
佐藤は高橋がこの仕事は続けるべきではないのでは?と思う。
しかし、井上は頭を振る。
「あいつには行くとこがないんだ」
その言葉に佐藤も思わず息を呑む。
高校卒業と同時に親への反発から自衛隊に入隊した高橋は、他の生き方を知らない。
勿論まだ若いのだ。
幾らでもこれから知る事はできるだろう。
しかし、今この状況で責任感が強い高橋が簡単に自衛隊を辞められる訳が無い。
なおの事、高橋にはいくべきところはないのだ。
だから言ったろ?その為に俺等が居るんだ。幾らだって支えてやればいいさ」
そう言ってタバコを消す井上に佐藤はただ頷く事しか出来なかった。

第３９話「レノン方面隊基地」

襲撃があった夜も明け、再びレノンへの移動が再開された。
ただし、野盗と化していたバジル軍の脱走兵３１名を捕虜に加えての移動であるため、当初と異なりやや緊張した雰囲気での移動だった。
今回は井上はフェイとの喧嘩に懲りた高橋が、昨夜の襲撃者の監視に回されており、フェイの元には見知らぬ顔が配置されていた。
昨夜のこともあり、自分の認識の甘さと非礼を井上にわびようと思っていたフェイはその機会を逸してしまった事になる。
そんなフェイの心境を他所に佐藤は捕虜に目を光らせていた。
生真面目な性格なので、与えられた仕事に真剣に取り組むのだが、逆に今回は捕虜達に要らぬ緊張を強いる事になっていた。
実はこの捕虜達は、フェイと違いＰＴＳＤ気味なのだ。
お陰で昨夜はちょっとした騒ぎになったほどだ。
そのぶり返しはないだろうが、佐藤の態度はあまり好ましいものではないといえる。
とは言え、このまま昼過ぎにはレノン入りが予定されている事から、途中休憩もないので交代もできない。
息が詰まる思いをしながらフェイはこの空気に耐えねばならなかった。

ーレノン大河

国境が制定された事もあり、レノン大河のベサリウス側に部隊を置けなくなった自衛隊はレノン市側に検問所を作っていた。
また、橋を何時でも撤去出来るように仕掛けられた爆薬も回収され、

一応は平静を保っているといえる。
だが、細々と行われている交易商人の通行にはかなり注意している様で、厳重な警戒態勢がしかれている。
それもそのはず、ファマティー教のテロリスト、もしくは他国の諜報員を警戒する必要があるからだ。
レノン大河は比較的大きな河であるにも関わらず、流れが急な事で有名だったらしい。
そのお陰で泳いで渡って来る心配がないとされてきた。
逆に交易商人は船で渡る事も禁止されていた事からレノンにかけられた橋を通るしかなく、不便極まりなかったようだ。
とは言っても、現状の日本からすればこれは有難い。
限られた人員を広範囲に広げる必要がなく、一極集中で配備すればいいからだ。
また、定期パトロールを組めば無理やり渡ってくる者も牽制できる。
そう言った意味では不便でもしばらくは新たな橋の建造は情勢にもよるが行われない事になっていた。
「ご苦労様です」
高橋が検問所の警備に当たっている自衛官に敬礼する。
すると高橋より階級が下だったためか全員が慌てて答礼しだす。
「通行許可証と通行目的の書類です。確認してください」
高橋は物腰柔らかに告げると、書類を手渡した。
そこからが手間なのだ。
関係各所に連絡して許可、が普通なのだが、予定外の捕虜がいる。
この場合、レノン方面隊基地にしばらく足止めされることになる。
もっとも、捕虜は全員ここで下ろす予定なので、後は事の経緯の報告と使用した弾薬などの補給に時間が掛かる程度だ。
最悪、シバリア市の特殊任務部隊駐屯地に帰るまで補給を後回しにしてもよい。
そして、ここにおいてきた仲間との合流を果たせば任務完了だ。
むしろ報告などは高橋の仕事が増えるだけの話だ。

他の隊員は気楽なものだ。
「許可が出ましたが、レノン方面隊の司令の元へ出頭するようにとの事です」
案の定、呼び出しが掛かった。
面倒だがこれも給料の内と考えてやるしかない。
「了解です。直ちに向かいます」
高橋はそう答えるとまた移動を開始した。

ーホードラー地区レノン方面隊基地

シバリア市北西に位置する城砦都市レノンとレノン大河に掛かる橋の中間に存在するレノン方面隊の基地は約４１００人からなる旅団が存在する。
元々は2個旅団が駐屯していたが、１つは現在ベサリウス領に派遣されており、ここには2個のうちの1つ、第5旅団が守っていた。
元々第5旅団は北海道の帯広市に司令部をもつ北部方面隊隷下の旅団だったが、転移によりロシアの脅威がなくなり、その規模を北海道に残す必要性がなくなったためにホードラーへと移動していた。
つまり、レノン方面隊は北海道の第5旅団を中核に、もう一つ、新たに編成された旅団（でっち上げで作られたベサリウスに派遣されている旅団）で構成されているのだ。
因みに、同じく北海道にあり、日本でも最強と言われる第7師団が本当なら配置される予定だったが、保有する９０式戦車の輸送の問題から見送られていた。
第7師団は日本で唯一の機甲師団でもあり、その攻撃力は陸上自衛隊でもトップなのだ。
最も活躍が期待できる部隊が輸送困難で活躍の機会を得られないと言うのは皮肉以外の何者でもないだろう。

そんな事もあり、現在この基地にある方面隊司令部へと高橋は出向いていた。
その為、ここで下ろす捕虜と、更に残してきた仲間との合流が果たされていた。
「いやいや、今回もハードだったぜぃ」
井上が疲れた表情でミューリに言った。
今回置いてきぼりを食らったミューリは高橋に文句の一つでも言ってやりたい心境だったが、司令部に出向いているので諦めざる得なかった。
「何を言ってるんですか、一番大変だったのは隊長ですよ？」
佐藤は井上にそう言ったが、高橋は隊全体に責任があるので仕方ない。
「何を言うか、俺は捕虜の面倒をみたんだぞ！？」
井上がさも大変だったふうに言うが、佐藤から喧嘩しただけで面倒は見てないと突っ込まれた。
痛いところを突っ込まれた所為か井上は喧しい、と言ってそっぽを向いてしまう。
丁度その時、井上は喧嘩した相手であるフェイと目が合った。
何か言いたそうな目をしてるフェイに井上は、まだ言い足りないのか？などと思ってしまう。
そう思ったとき、フェイは目をそらしてしまった。
フェイからすれば謝罪したいところだが、やはりそう簡単には行かないといったところだ。
しかし、対する井上からすれば顔も見たくない、と取れる行動だ。
「やろぉ・・・」
フェイは女性なので野郎ではないのだが、ついついそう言ってしまっている。
だが、井上は一応告げたい事があった事を思い出した。
それはバジル王国が降伏し、滅亡した事だった。
これは基地について基地の者がこんな感じだったらしい、と言う程

度の話なのだが、やはりバジル王国の騎士である以上は知りたいだろうと思ったのだ。
もしかすれば知りたくないかもしれない。
だが、知らずに道化で居させる事は逆に悪い様に感じていたのだ。

「よう」
井上がフェイに近づきながら声をかける。
フェイは目をそらしたままになっていたが、井上は構わず続けた。
「バジル王国との戦争だがな・・・終わったぞ」
井上から告げられた言葉に思わずフェイは顔を向けていた。
「・・・どう、なったのだ?」
フェイは国に残っているであろう父親同然のレオナルドのことが急に気になった。
国の行く末は見えている。
間違いなく敗北するだろう。
それだけの力量差があるのは分かっている。
だからこそ知りたいのはレオナルドのことだった。
「王様が死んで降伏だってよ・・・今後はどうなるか分からないが、日本かベサリウスのどっちかが納める事になるってよ」
詳しい話を聞いたわけではないが、それぐらいは聞かされ知っていた。
だが、フェイからすれば王の死は衝撃だった。
最も死を恐れ、死から逃げるはずの王が死んだのだ。
当然、側近のレオナルドが無事であるはずが無かった。
「そ、そうか・・・滅びたか・・・」
体中の血の気が失せるような感覚に力が抜ける。
しかし、フェイは何とか踏みとどまってへたり込むのだけは防いだ。
「あの王が死んだのだ・・・さぞ多くの犠牲がでたのであろうな・・・」
力なく言うフェイを気の毒に思うが、井上にはどうする事も出来な

い。
ただ力なく項垂れる姿を見守るしかない。
「まあ、犠牲といっても守備隊だけらしいし・・・気を落とすなよ」
気遣いからそう言ったが、その言葉を聞いたフェイはいきなり井上につかみかかった。
「守備隊だけ?どういうことだ!?」
周りに居た警務官が慌ててフェイの制止に動くが、井上は手でそれを制した。
気遣いで言った事だったが、自分の言葉に配慮が足りてなかったと思ったからだ。
守備隊だけ、と言っても確かに犠牲は犠牲だ。
それを守備隊だけ、等と言ったら怒りたくもなるだろう。
そう考えたのだ。
だが、それは間違いだった。
フェイは怒ってなど居ないのだ。
守備隊だけならレオナルドの生存に見込みがあるからだ。
レオナルドは内務卿であって文官だ。
間違っても守備隊でもなければ指揮もしない。
それならば、もしかすれば無事かもしれないからだ。
「それならば、守備隊以外の・・・守備隊以外の犠牲は!?」
フェイの言葉に井上も首を傾げる。
(あれ?なんだこの反応?)
予想と違う反応が返ってきている事に気付いた井上は訳が分からなかった。
ではさっきのは犠牲が出た事に対してではないということか?と一生懸命考えた。
井上は決して人生経験が豊かな方ではないが、それと同じく浅くも無い。
そのため、井上は何とか自分が勘違いしている事に気付いた。
だが、その前にフェイを落ち着かさねばならない。

でなければ話も出来ない。
「まあ待て、落ち着け、取り合えず落ち着け、とにかく落ち着け」
落ち着けとしか言ってない井上は明らかにうろたえていた。
こんなふうに詰め寄られる事などなかったからかも知れない。
「詳しい話は俺じゃ分からん！分かるやつに聞いてやるから一端離せ！」
井上の言葉にようやく落ち着いたのか、捕虜である自分の行動に気付いたのか、取り合えずフェイはつかみかかっていた手を離した。
「す、すまぬ・・・取り乱した・・・」
反省する様子のフェイは小さくなっていた。
だが、それも無理らしからぬと言える。
幼き頃に両親を失ってからフェイの後見人として、父と呼んでも良いほどのレオナルドの事が絡むのだ。
多少取り乱すのも仕方ないだろう。
「と、取り合えず、ウチの隊長だったら詳しい話を聞いているかも知れん」
そういって井上はあたりを見渡すが、そう簡単に報告に行った高橋が帰ってくるわけでもなく、そのうちに捕虜を収容所代わりの宿舎へ連れて行く時間となってしまう。
フェイは詳しい話を聞きたいが、これ以上待てない事に残念な気持ちで一杯だった。
それと同じく井上も早く戻ってきて話を聞かせてやってくれ！と焦っていた。
そして、そんな状態の二人の前に警務官がやってくる。
もう、限界なのだ。
これ以上は待てないのだろう。
井上は思わず心の中で高橋の遅さに苛立った。

丁度その時だった。
「なにやってんだお前？」

そんな二人の前に高橋が姿を現したのは・・・。

第４０話「朗報」

高橋は報告を終え、現在の任務についての変更などを受け仲間の所へと歩いていた。
遠くからでもにぎやかな様子が見て取れる事から、漸く帰ってきた感覚になる。
だが、ちょっとした用事で捕虜の所へ行かねばならなくなり、仲間の所へ行く前にそちらに向かう事にした。
ところが、様子のおかしい井上とフェイが目に入る。
その周りには警務官が困った顔をしていることから、また何かやったのかと思いうんざりしていた。
「なにやってんだお前？」
高橋は井上の背後から声をかける。
その声に異様な素早さで反応した井上は高橋の両肩をつかみながら高橋を揺すった。
「おい！バジル王国陥落の話は知っているか！？」
普段と全く違う様子の井上に思わず目が白黒してしまう。
一体何を焦っているんだ？と思うが井上はそんな事にはお構いなしに容赦なく高橋に質問を浴びせかけてくる。
「し、知ってるけど・・・それが・・・」
どうしたんだ？と続けるはずが井上にさえぎられてしまう。
「バジル軍の損害の詳細は！？」
高橋はそんな事を知りたい井上の心境が分からなかった。
いや、高橋にそれを分かれというのは難しいかもしれない。
いざ事となれば誰よりも慎重かつ大胆で、そして相手の考えを読むこと出来るとは言え、平時における人の心のうちを知るのは不得手なのだ。
「い、一応、一応司令との、話で、でたけ、ど」
高橋は揺さぶられているので言葉が途切れ途切れになる。

井上はそれを聞いて詳細を話すように高橋に言うが、何故そんな事を聞くのか?が高橋には分からない。
疑問符を浮かべる高橋に井上はいいから早く、と急かす。
「あー分かったから!わかったから手を離せ馬鹿!」
思わず悪態が口から出るが、井上は一向に気にしない。
仕方なく、高橋は自分が聞いたことの顛末を話し出した。

降伏の意思の証明として連れてこられたザハンの遺体を前にしたベサリウスは、これは自決ではない、ということが直ぐに分かった。
王の自決は毒酒が普通だ。
だが、首筋に刃物で切り裂かれた痕があるのだ。
しかも、自分で斬るならば利き腕の側、つまりザハンは右利きだったはずなので、それが首の左側にあるのは不自然だろう。
更にザハンが自決を選ぶほど誇り高い人物ではない事ぐらいは知っている。
尊大ではあるが、誇りなど持ち合わせた人物ではない。
ホードラー王国が健在だった頃に宮中で会ったことがあるのだ。
そう言う意味ではベサリウスの考えは正しい。
だが、自決であろうと他殺であろうと、どちらでも構わなかった。
要は反抗の意思を持たない証明であればいい。
下手に生きたまま連れてこられても見苦しい様を見せ付けられるだけなのだ。
不快な思いをしなくて済む分。いくらかマシなのかもしれない。
むしろ、配下に見限られた故の死に対して、ベサリウスは自らの戒めとして目に焼き付けていた。
「・・・間違いなくザハン・バジルですね」
ベサリウスの言葉に面通しに来ていたハウザーはなるほど、と頷いた。
「では、後はバジル王国の血族を探すとしますかな?」

実際はそんな面倒はごめんだったが、たしか中世では血統が重んじられていたはずだ。
様々な物語でもよく描かれていたからそうに違いない、とハウザーは考え、根絶やしにする気は無くとも監視対象にする必要を感じていた。
しかし、予想外の答えが返ってくる。
「いえ、それには及びません」
ベサリウスはそう言ってザハンの遺体に白い布をかけてその姿を隠した。
「ザハンの親は既に亡くなってます。また兄弟は・・・皆病死してます」
つまりはザハンが領主になる為に全て暗殺した事を示していた。
流石にここまで徹底するものなのか？とハウザーは思うが、それだけの旨みがあるのだ。
欲深いものほどその手段をとる。
もっとも、ザハン程証拠も残さず徹底的にやるものはいなかった。
と、言うよりこれはザハンの仕業ではないだろう。
ザハンの部下の誰かのやった事だと分かるが、誰かまでは分からない。
少なくともザハンにその手腕は無いのは確かだ。
「また、妻や子と言ったものは居なかったはずです」
５０過ぎの領主であった身にしては珍しくそう言ったものはいない。
と、言うのも露骨なまでのザハンのやり口に縁談を持っていくのが他の多くの貴族に躊躇われたのだ。
本人にもその意思はあったが、いつもご縁が無かった、とされていた。
「しかし、その、他に手を出している事も考えられるのでは？」
ハウザーはザハンのことなど何も知らない。
知らないがベサリウスから聞いた限りでは唾棄すべき存在である事だけはわかる。

卑劣な人間は何処にだっているが、ここまで卑劣なのは歴史上でもそうは居ないのではないか?とさえ思う。

「たしかにその話はありましたが、その・・・数が・・・」

司令部のテントの端にて監視されていたレオナルドが言葉を濁らせながら語った。

つまり、一度手を出しても直ぐに飽きるため放逐されると言うのだ。

それを聞いてベサリウスも天を仰ぎ、ハウザーは露骨に嫌な顔をした。

つまり、最早その実態を把握する事が出来ないほどだというのだ。

「・・・諌める者はいなかったのか?」

流石のベサリウスも苛立ちが見て取れた。

領主であり騎士であったベサリウスからすれば許し難い暴挙と言えた。

「私を含め何人も・・・ですが、私以外の者は処刑されています」

レオナルドは俯き加減でそう言った。

一応ザハンはレオナルドが居なければ領地経営さえ難しくなるのを知っていたのだ。

その為、生かされていたに過ぎない。

運が良かったのか悪かったのかは分からないが、お陰で生きているのはたしかだ。

「・・・後継者を名乗るものが出てきたらどうします?」

あいた口が塞がらない様な表情のハウザーがベサリウスに尋ねる。

ベサリウスはただ一言、そんな酔狂なものは居ませんよ、と答えた。

民衆にも恨まれていたのであろう。

戦いが終わり、ザハンの死と王国の滅亡が呼びかけられたとき、グラナリアの各地で市民が喜びの声をあげたほどだ。

当然、その血を引く後継者が現れても何ら支持を得られないばかりか、告発されるのが落ちだろう。

「分かりました。まあ、それは貴方と此方の上で考える事ですので私が口を挟むべきではないでしょうな」

今更だが、ハウザーはそう言って要らぬ責任を背負い込むのはごめんとばかりに言った。
「では、日本とここの統治について話し合うために一度コンスタンティに帰還しましょう」
ベサリウスは監視は付けるが、しばらくはレオナルドにここの統治を任せる事にした。
今回の降伏の手筈を整え、実行したのは彼だ。
本来は主君を裏切った彼を許すわけにはいかないが、生憎ベサリウスは手勢しか連れてきていない。
更に外人部隊の海兵隊もここに残る事は物資の補給の面から難しかったのだ。
ならば、その能力があるのなら汚名返上、名誉挽回の機会としてやらせてみるのもいいと判断していた。
日本としても南部の問題を抱えているので、嫌とは言うまい。
そう言った計算があったのも確かだったが・・・。
その言葉にレオナルドは生きて罪を償う機会を与えられた事に感謝するように頭を下げた。

高橋は知る限りの話を井上に、いや、フェイに聞かせた。
内務卿を名乗る人物がしばらくバジル地域を統治し、後に帰属する国に明け渡す事を・・・。
その話を聞き終えたフェイは思わず座り込んでいた。
レオナルドが、無事だと分かったからだ。
内務卿を名乗る人物はレオナルドしかいない。
そして、誰にも取って代わる事が出来ないと信じていたからだ。
その目から大粒の涙が零れ落ちる。
高橋は何故フェイが涙を流したのか分からなかった。
そして井上はレオナルドと言う人物がよほど大事な人だったんだな、と思っていた。

「よかったじゃないか、一番知りたいことだったんだろう？」
井上が優しく声をかける。
人目をはばからず、涙を流すフェイの姿は凛々しい騎士のそれではなく、一人の女性の姿だった。
「・・・これで・・・覚悟が・・・できた・・・」
突然フェイの口から思いもよらない言葉が飛び出てきた事に事情の知らない高橋も、知っている井上もギョッとした。
「うぉい！待て！早まるな！」
「ちょ！おま！早まっちゃ駄目だろぉ！？」
流石に二人揃ってうろたえる姿に周りに居た警務官も思わず噴出してしまう。
先程までの光景と打って変わってこれではまるでコメディだ。
「ちょっと高橋さん！女の子を泣かすなんて駄目じゃないですか！」
そこに何時までも戻ってこない高橋と、何時の間にか居なくなっていた井上を探しにミューリがやってきた。
そして開口一番に井上ではなく高橋を非難した。
「ちょっと待った！俺じゃない！これは俺の・・・所為なのか？」
途中から疑問符を浮かべる高橋。
そこに井上が、お前の所為だ！と全てを擦り付けに掛かる。
「あ！コラ！お前が話を聞かせてやれっていうから！」
「喧しい！隊長なら隊長らしく責任を背負い込め！」
途端に騒がしくなる。
そんな二人を放っといてミューリがフェイに近寄り声をかけた。
「大丈夫ですよ。日本の人たちは皆親切で優しい方ばかりですから」
そう言って日本に行った時に買ってもらったハンカチを手渡す。
かなり便利な代物だったので、ミューリは幾つか持っていたのだ。
これで涙を拭くといい、といわれフェイは言われたとおりにした。
非常にやわらかく、そのやわらかさがフェイの気持ちを落ち着かせた。
「すまない、無様を晒した」

そう言って立ち上がったフェイは晴れ晴れとした表情でありながら、騎士の顔だった。

「いーえ、お気になさらずに」

そんなフェイにミューリは歳相応の少女の笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。別に命を粗末にするわけではない」

先程のフェイの言葉に慌てていた二人に答えるように言う。

その言葉で掴み合いをやめ、二人は安堵できた。

ではさっきの言葉の意味は何だったのだろうか？

井上も高橋もそれが気になった。

覚悟が出来た、と聞かされては自決の覚悟かと思ったのだ。

それを聞くと、初めてフェイが笑顔を見せる。

それは井上にとってまぶしいほどの笑顔に感じられた。

「なに、どんな辱めを受けようと必ず生きて再会する、そう言う意味での覚悟だ」

フェイはそう言って彼等に背を向け、警務官の方へと向く。

井上はその後姿に声をかけようとしたが、止めた。

無粋すぎる。

そう思ったのだ。

「ありがとう、知りたかったことを教えてくれて」

背を向けたまま言うフェイ。

井上はは自分が何かしたわけじゃない。と答える。

「では、また機会があれば・・・いずれな・・・」

そういってフェイは歩き出す。

もうその機会は無いかもしれない。

だが、そういわずには要られなかった。

しかし、そのフェイの背に高橋は躊躇いがちに声をかける。

「あ、それなんだけど・・・お別れは・・・その・・・もうちょっと先・・・かな？」

雰囲気ぶち壊しの一言にその場の空気が固まったのは言うまでも無い。

第４１話「町並みの変化」

ーホードラー地区シバリア市

シバリア市内は活気に満ちていた。
終わったとは言えバジル王国と戦争が起き、南部もこれから戦争になると知られているのにである。
それは、本来なら市民に皺寄せが来るものだが、日本は市民に戦費を要求しなかった事が理由かもしれない。
従来であれば戦費の徴収と称して増税されたり、働き手たる男性が徴兵されたり、物資の徴発などが起こるのだ。
しかし、日本の場合、それらをしなくて済む様な態勢作りが出来ているからだ。
つまり、一種の自己完結型の軍（自衛隊は軍隊ではないが）なのだ。
しかも自衛隊のみに留まらず、全ての行政、公的機関、組織がそう作られている。
そうする事で余計な負担が国民に行かないようになっている。
最も、本当の意味での国難になれば、それも形だけで終わりかねないのだが・・・。

しかし、現状の日本は国難の中にあっても最低限の市民生活を維持できるように粉骨砕身していた。
そのお陰もあり、日本本土以外の地域では普段と変わりない市民生活が送られていたのだ。
だが、日本がホードラーを領土に編入したことにより、交易量が随分と減ったのも事実だった。
その為に西方からの嗜好品を含めた品物が不足し高騰していた。
これればかりは日本もどうしようもないのだが、遠方まで出向いての貿易は今なお出来ない。

それは貿易するのにも相手国の承認が必要なのがあったが、何よりもこの世界の地図、海路図がないため迂闊に動けないのだ。
周辺から少しづつ踏み固めていき、日本にある程度の余力が出来るまではこの体制で行くしかなかった。
態勢が整い、状況が好転さえすれば高品質の品物を大量に送り込み、相手の経済を牛耳る事も出来る。
何時か立ち上がるその時までの雌伏の時が今ならば我慢するより他はない。
それが市民の中で風聞として広まっていた。

最も、当の日本としては確かに技術、貿易立国なのでそうしたいのは山々だが、流石にそこまでやる気はない。
下手をすればまた、戦争の種を撒くことになるからだ。
正直言って、ベサリウス国が防波堤の役目を果たせるようになってくれれば、それ以上の拡大をする必要が無くなる。
ただでさえ元の世界の過去にあった満州国並みの広大な領域のアルトリア、そして日本の3倍から4倍に匹敵するホードラー地区や自治区、そしてこれから攻略に動く南部に至っては東南アジア（大陸側のみ）並みの広さがある。
とてもではないが管理しきれないのが実情なのだ。
今後の管理を考えるならば、幾つかの小国として独立してもらってもいいくらいだ。
それが無理でも、日本と大陸の人的交流や教育などを行い、現地の人々を日本人並みの教養と知識をつければ負担も減る。
とにかく何が何でも日本人がやらねばならない状況の拡大は阻止せねば、日本そのものが立ち行かなくなるのだ。

だが、一般市民の多くはそんな日本の気苦労と頭を抱える悩みなど知ったことではないだろう。
今は以前の王国より民衆の生活に大きく変化をきたさずに、戦時下

でも負担をかけない。
それだけで活気が溢れてくるのだろう。
最近では日本から入ってきた文化の習得が市民の一番の関心ごとになっている。
特に定食屋と呼ばれるものの知識を得た目敏い一部商人は、ただ品物を売り出す商店ではなく食事を提供する店舗経営に乗り出している。
その為に一時的処置のはずの日本の法制度を真剣に学ぶものも多く、また、そう言った人々を受け入れる為の教育施設の導入などで行政区は大忙しであった。

そんな以前とは何かが違うシバリアを訪れる事になったフェイは、７３式中型トラックの荷台より眺めていた。
元は中心であった王城は残っていたが、政治の中心ではなく街の象徴となり、その姿は変わらずとも雰囲気は大きく変わっている。
また、未整備だった上下水道の本格的整備がはじまり、各地で日本の建築会社から派遣された人々が汗を流す。
そして、そんな人をターゲットにした新しい商店が立ち並ぶ・・・。
とても交易が滞った都市の光景ではない。
一度訪れた事のある記憶の中のシバリアと、現在のシバリアは生まれ変わったように変化していた。
「・・・凄いものだな」
思わず独り言が口を吐いて出る。
正直言って、ここまでこの地を統治しきっていることには感嘆以外の何物もない。
活気に溢れたシバリアの様子にフェイはただ感心するばかりだ。
とは言ったものの、捕虜の身であるフェイはこの活気の中に出る資格はない。
見て歩きたくとも無理なのだ。
レノン方面隊基地に残されたのはＰＴＳＤに陥っていた捕虜だけだ。

シバリアには未だ目覚めぬテレサとフェイだけである。
その理由は単純で、南部攻略を前に南部の情報を少しでも欲した北野がシバリアに居るからだ。
また、南部攻略する全部隊を指揮する人物も、フェイやテレサの情報を欲していた。
一応、フェイとテレサはベサリウスを侵攻した軍の中心にいたのだ。
それなりの情報を持っている、と期待されていた。
勿論、シバリアに来たのはフェイたちだけではない。
元々任務完了と同時に帰還予定だった高橋たち特殊任務部隊も、その道中は一緒であった。
もっとも、帰還に併せて二人の護送を命じられただけの話ではあるが・・・。
「なんか、漸く帰ってきたという感じですね」
同じ７３式中型トラックに同乗するミューリもフェイに釣られてるように呟く。
高橋はそんな二人を眺めながら、次の作戦までの予定を考えていた。
田辺の護衛任務の時に発覚した問題などを洗い出し、それを克服する意味で訓練せねばならない。
任務を果たしたからお休み、と言うわけにはいかないのだ。
「あー、早く休みたいなぁ」
暢気な井上が外を見ながら呟いた。
「休みな訳ないだろう。帰ったら各分隊長は装備の確認、使用した弾薬と残りのチェック、それを済ましたら俺に報告書を出してもらうんだから」
高橋の容赦ない一言は井上に黄昏をもたらした。
「なんだか帰りたくなくなったよ・・・」
項垂れる井上に隊員たちも苦笑いだ。
「お前らも笑ってられないそ」
そんな隊員たちに冷や水を浴びせるのは忘れない。
「帰ったら先程の確認、報告を各分隊長に行い、その後は各種訓練

だ」
折角任務が終わったのだから休みたいのはわかるが、だからと言って休ませるわけにもいかない。
高橋の言葉に周囲からブーイングが起きるが高橋は目だけでそれを封じた。
「あのなぁ、お前らと違って俺はほとんど休みなんかないぞ?それと比べたら楽なもんだろう」
確かに高橋は休みらしい休みを取らない、というか取れないでいた。
一部隊の隊長にしてはやる事が多すぎるのだ。
キチンとした後方支援を行える人員の配置がなされるまで殆ど一人でやる事になっている。
要請していたその人員も今回の南部攻略で見送られるか大きく遅れるのは明白だ。
その意味では高橋が一番大変なのだ。
如何に隊長でもあんまりと言えばあんまりな状態にある。
「そうですねぇ、お買い物にもいけませんよね」
ミューリが残念そうな不満そうな声をあげる。
高橋はそれが仕事だから、と言うが、流石にミューリもこれはないと思ったのだろう。
1日ぐらいはどうですか?と提案してきた。
が、高橋は即答してしまう。
「無理。今回も戦闘があったせいで提出書類が増えてる」
流石に空気が読めてないと言うか鈍いというか、哀れみの込められた視線がミューリへ、非難の目線が高橋に注がれた。
居心地悪い視線に晒された高橋は、退路とフォローのつもりで言う。
「ま、まあ、各分隊長が早めに報告書を出してくれたら、1日くらいは・・・とれるかなぁ・・・?」
最後は疑問系になってたが、高橋にはそれが精一杯だった。
だが、高橋はその一言が自らの退路を自ら封じる事になろうとは思いもしなかった。

そんな高橋たちを乗せたトラックは、日本国陸上自衛隊シバリア市駐屯地に入っていく。
通常のシバリア駐屯地は、シバリア各地にあった錬兵場や、広大な貴族の屋敷を使っている。
ただし、今しがた到着した駐屯地は、元々は外人部隊が使っていた市内最大の駐屯地だ。
今は南部攻略の司令部が設置されており、今はまだ揃っていないが2個師団3個旅団がここに来る事になっていた。
とは言え、流石にそれだけの人員を収容する事は難しいので、司令部や司令部要員、そしてその警護部隊がはいるだけだろう。
また、補給物資もここに集積されるので、最も警備が厳しい場所になっていた。
「確認しました。ここを真直ぐ行った建物の前でお待ち下さい」
営門で書類などの確認が済み、駐屯地内へと入っていく高橋たち。
そこには日本にあった駐屯地をそのまま持ってきたような感じがある。
建物も何時建てたのか、真新しく、なじみあるコンクリート製のものが幾つも立ち並び、また、地面も舗装されていた。
流石は自衛隊の施設科と言ったところだ。
実際、高橋たちはここに訪れたのは初めてだったが、ここまで整備されていたとは思っても見なかったのだろう。
隊員たちも口々に声をあげていた。

第４２話「問題」

ー陸上自衛隊シバリア市駐屯地

シバリア市郊外に建造された空港から毎日の様に人や物資が運び込まれ、駐屯地はかなりの人員で溢れかえっていた。
これから郊外の仮設宿舎へと移動するのだろう。
列を作って基地内から移動を開始した部隊の姿は、さながら一つの生き物のように規則正しい動きをしている。
これだけでも日頃から厳しい訓練を積んでいるのが伺えるだろう。
フェイとテレサを降ろし、駐屯地の警務官に引き渡した後、高橋たちは北野へと連絡をいれた。
これで北野もここにきて、一緒に聴取することになる。
もっとも、高橋たちの役目はここで終わりだ。
後は自分達の帰る場所、シバリア市内のカトレーア邸近くの駐屯地に帰るだけになる。
元々はシバリアでファマティー教テロリストからの警護で設置された仮設駐屯地だったが、また新たに設置するよりは面倒が少ないと言う理由でそのまま正式に駐屯地にされていた。
元が貴族の邸宅だったこともあり、宿舎の設営も不要なために最小限の設備投資ですんでいる。
「さて、お前達は先に帰っててくれ」
高橋はここに残る用事が出来たので、先にやる事をやっといてほしいと井上たちを帰す事にした。
「了解」
井上たちは敬礼するとそのまま７３式中型トラックで駐屯地を後にしていった。
その姿を見送った後、高橋は北野が来るまでしばらく待たされる事になる。

北野は高橋からの連絡を受け、即座に南部攻略部隊の駐屯地に移動した。
途中で高橋と顔は併せたが、軽い挨拶程度で済ましている。
その後、直ぐに司令部の面々と共に聴取が行われたのだが、何故か高橋も同席する事になっていた。
「ふむ、山岳地帯の戦いはやはり簡単にはいかぬようだな」
南部攻略司令に付いた安藤幹人（あんどうみきひと）中将がフェイの話を一通り聞いた感想を述べる。
今の安藤は南部方面隊総監と言う肩書きを持っている。
ただ攻略するだけでなく、攻略後はそのまま駐屯し、残敵掃討、及び治安維持に当たる事になるのだ。
ただでさえ広大な領域であるため、南部各地には小さい村から、比較的大きな街まである。
ただし、ホードラー王国は南部をあまり熱心に統治していなかった所為か無法者や野生動物（モンスター含め）がかなり生息しているようだ。
流石にバジル王国に仕えていたフェイも詳しくは知らない。
西方北部に位置するバジル王国と南部では勝手が大きく違うからだ。
結局、不明な点が多い、ということを確認しただけに終わっている。
「どうですかね？陸上部隊だけで攻略できそうですか？」
北野は今後の補給のこともあり、早期解決を願っている。
だが、幾ら山岳戦に慣れた自衛隊でも、一筋縄には行かない様子だった。
元々日本は島国名だけでなく、山岳地帯が多い為に自衛隊もそれに併せた戦術を研究してきている。
それでも広大な領域であるため、どうしても時間が必要になるのは明白であった。
「難しいですね。確かに兵力は約3万ですが、この領域を制圧する

には少なすぎます」
近代兵器で武装しながら、少なすぎると判断する安藤。
はっきり言って、日本を完全制圧するだけでも最低１０個師団（米軍基準で約１５万人）を必要とすると言われているのに、その日本より広大な領域をたった3万でどうにかせねばならないのだ。
例え一騎当千の戦力であっても、とても陸上戦力だけではどうにもならないだろう。
「しかも、南端は海に面しているとか?と、すれば他国からの物資補給も可能です。相手の疲弊を待つこともできません」
戦えば勝てるだろうが、ハッキリ言って消耗戦に近い戦いになる。
こちらも湯水のように物資を浪費できるわけではない。
このままでは短期決戦どころか数年がかりの長期戦を想定しなければならないだろう。
当初の想定では、単純な戦闘力の差で圧倒できると本土の幕僚は考えたのであろう。
しかし、その見通しはかなり甘い、といわざる得ない。
以下に情報が不足しており、国内事情も切迫してるとは言え、これは無茶が過ぎる話だ。
「最悪、ある程度確保したらそれで済まして資源を開発するしかありませんな」
必要な資源周辺の安全を確保するに止める、という事を安藤は言った。
しかし、流石にそれは拙いのは安藤でも分かっている。
結局、南部には敵対勢力が残り、将来的に敵が存在し続ける事になる。
やるからには敵対の意思を挫くほどの戦果が必要になるのだ。
「・・・流石に核は使えませんしねぇ」
北野がぼつりと呟く。
いざ本当に必要なら躊躇い無く使いそうな北野なだけに洒落にならない発言だ。

本来、日本には核兵器は存在しない。
生物、科学兵器の類とて防備研究用のサンプルがあるだけなのだ。
だが、在日米軍だった外人部隊の保有していた分を日本は獲得していた。
なので、一応は核兵器を保有する事になる。
とは言え、使わない方針は転移前から変わらず維持されていた。
使えない、そして相手にその威力が分からない為に抑止力にもならない。
核兵器はこの世界ではその存在意義を完全に失っていた。
「使う使わない以前に役に立ちません」
安藤は北野の危険な発言云々ではなく、単純な戦術的意図から使用できないとした。
「都市部に使うならともかく、山岳地帯では山自体が影となって広範囲への破壊が押し止められます。一軍を殲滅できてもそれだけの話で終わるでしょう」
そう言って安藤は核兵器は万能ではないと話す。
流石に軍事には疎いので北野もそれ以外の有効な手立てが浮ばない。
「本格的に事を構えるからには、現在の戦力では難しいです。そこで日本政府にお願いしてもらいたいのですが・・・」
安藤は北野が政府と太いパイプを持っていることを知っている。
それを使わせてほしいと言ったのだ。
北野は内容如何ですが、と言って一応の了承をする。
「抜本的解決策にはなりませんが、航空機による空爆、並びに海上艦艇による海上封鎖、及び沿岸部の制圧をお願いしたい」
つまり、航空自衛隊で山岳地を攻撃しつつ、南部貴族連合の生命線である海上輸送路の遮断をしてほしいと言ったのだ。
今までは大陸の、しかも平地が殆どだったのもあり陸上部隊で事足りたであろう。
しかし、最早その陸上だけで解決できるものではないのだ。
「沿岸部の一部にでも橋頭堡を作る。これだけで相手への心理的圧

力も期待できます」
あくまでも推測ですが、付け加える事も忘れない。
希望的観測で勝てる戦いではないのだ。
使える物は何だって使うべきなのだ。
所謂(いわゆる)総力戦だ。
流石に北野もこれには難色を示した。
燃料は日々増産傾向にあるので心配ない。
しかし、ここ数回の戦いで弾薬の備蓄も底を尽きかけている。
アルトリアで原材料は確保出来、輸送もかなり行われて増産しているが、度重なる戦いでかなり消耗しているのだ。
流石にそれだけの戦力を動かせるかどうかは、政府でも難しいかもしれない。
「うーむ・・・厳しいとしか言えませんねぇ」
南部以外は大体落ち着きつつあるとは言え、それでも西方にはタラスク王国の侵攻が進んでおり、火種がないわけではないのだ。
防衛にのみ従事すればある程度は抑えられるかもしれないが、それでも南部で使い果たせばしばらくは無防備に近くなる。
「しかし、本当に一月、最長でも半年以内にケリを着けたいと思うなら必要です」
実際にそこまで上手く行くと言う保証はないが、それら戦力が無ければ1年2年も覚悟せねばならないだろう。
しかも山岳地帯では如何に自衛隊でも進軍速度はかなり低下する。
補給線の確保も難しい。
この世界ではゲリラ戦術はないのだが、それでも抵抗勢力が散り散りになっても抵抗をやめない場合は、半ゲリラ化するのは必定だ。
戦うからには分散させずに纏まっている所を叩くしかない。
その為には地を行く陸上戦力だけでは無理だった。
上空からの適切な支援があって初めて出来る事なのだ。
そして、相手の俸給線を遮断することは持久戦を不可能にする。
そうなれば決戦を挑まざるえなくなる。

そこに海岸付近にこちらの拠点を確保したならば、否応無く相手の動きも封じる事が出来る。
つまり、敵の体力を奪いつつ動きを封じて、残された力で殴りかかって来ざる得ない状況に追い込むと言う事だ。
そこまでやって漸く日本は目的を果たす筋道を作れる。
「・・・取り合えず現地指揮官の意見書として出しますので、そのまま使ってもいい位の詳細な報告書を作ってください・・・話はそれからです」
北野にしては歯切れが悪い提案だが、それだけ難しい問題をはらんでいた。
ただし、共通する認識はある。

この世界でベトナムを再現させるわけにはいかない。
それだけははっきりしている事だった。

第４３話「フェイの戦い」

会議室に残っていたのは北野と高橋、そして、問題の大きさが浮き彫りになった事で忘れ去られていたフェイの３人だった。
捕虜の身で口は挟めぬと思い黙っていたが、正直どうにかしてほしいとフェイは願っていた。
しかし、その願いは聞き遂げられなかったようだ。
北野と高橋は向かい合うように座って話を続けている。
溜息を吐きたいのをこらえて、フェイはもうしばらくそのまま部屋の隅っこで立ち尽くすほか無かった。

「正直言って参りましたね」
北野が弱気な発言をするのを見たとき、高橋は本当に困っているのだと思った。
いままで北野はどんな状況であれ跳ね除けるだけの気力と覇気があった。
今はそれらが見えない。
日本の状況をかんがみれば時間が惜しいのは分かる。
しかし、時間をかけない様に動くと今度はいざという時の対応が殆ど出来なくなる。
それらを考えると、流石に北野でも気力が萎えるというものだ。
「・・・自分に出来る事はありますか？」
高橋が北野に助力するために提案したが、北野は首を振った。
「いえ、今回はあなた方の出番はありません。南部攻略には参加させるつもりがありませんから」
北野はそういってやんわりと提案を断った。
高橋たち特殊任務部隊に与えられている任務内容と、今回の南部攻略は合わないのだ。
実戦経験豊富な部隊でも、大規模な戦闘の経験自体は少ない。

ましてや、特殊任務部隊はある意味、大規模な隊から戦力を動かさずに済むような小規模の問題などに対処する部隊だ。
それこそ本当に細々とした事柄に対応する部隊として作られている。
今回のような大規模かつ、広大な領域を活動範囲にするには高橋たち特殊任務部隊では手が余る。
「現状、これは政府首脳と防衛省、そして実働部隊である自衛隊そのものが関わる話です。あなた方の出る幕はありませんよ」
少しでも手が必要なら、解体して組み込んでもいいだろう。
焼け石に水でもないよりマシなのだから。

しかし、その為に組み込んで、ほかの事を置き去りには出来ない。
他の事の中には民衆に関わる事もありえるからだ。
また、最近おとなしいファマティー教のことも気になる。
その動向が全く無くなっている事が不気味でしょうがない。
また良からぬ事をたくらんでいると考えて備えなくてはならないのだ。

「いやはや、これでしばらくは安泰、と思ったのですがねぇ・・・それ以前の話になりましたか・・・」
本来外交官であり、現状行政官、ある意味で総督みたいなものだが、そう言った立場にあるだけに南部攻略はやらねばならない事であるのは認識していた。
しかし、まさかそれがここまで困難だったとは流石に読めなかった。
「ふう、どうにか寝返らせたり切り崩したり、果ては分裂させれないものですかねぇ・・・」
実力行使が難しいなら謀略で対応するしかないと考えていた。
流石に謀略を実行する事など出来る人材は居ない。
これればかりは高橋たちには不可能な領分だ。
「どうしたものか・・・」
北野から溜息が漏れる。
そのときだった。

「私に手伝わせてもらえないだろうか？」
突然の言葉にその声の主を見る。
そこに居たのはフェイだった。
「私の養父は南部の貴族にも顔が利いている。もしかしたら力になれると思うが？」
フェイはそう言って北野を見る。
しかもレオナルドのことをちゃっかり養父と言っていた。
正直、このままただ待たされるのは嫌だ。
しかも、聞いてはならないだろう話を聞かされてしまっている。
これは日本側の落ち度だ。
だが、だからと言って見逃してもらえるものではあるまい。
だからこそ、フェイは敢えて声を書けることにした。
そして、勝たねばならない。
フェイに取って一世一代の勝負が始まった。

そんなフェイを見た瞬間に北野はしまった、と言う表情をしていた。
「・・・居たのですか・・・これは、拙い話を聞かせてしまったようですね」
北野の声のトーンが下がる。
忘れていたのは失態だ。
だが、聞かれた以上は放置も出来ない。
フェイの提案があったが、このままにしておく事は出来そうになかった。
北野の雰囲気が一気に険悪なものと変わるのをフェイは肌で感じていた。
北野の事は文官のようなもの、と聞かされていたが、身にまとった空気は文官のそれではない。
歴戦の戦士のそれに酷似していた。
しかし、ここでフェイも引く事は出来ない。

ここでレオナルドと自分の命を救ってくれた恩を返すと共に、恩を売るべきだからだ。
対等な取引であるならば、北野も話は聞くはずだ。
フェイは未だかつて無い大きな賭けに出る。
「私をどうするにしても、話ぐらいは聞いてもらいたいのだが？」
フェイは敢えて挑発的に言う。
ここで自らの立場を意識して引いたらそこで終わりなのだ。
一気に室内の温度が下がった様に感じられる。
高橋はそんな二人をただ見守るしかない。
口を出せないのだ。
自らの失態を償わんとする北野、そしてその北野に挑戦するフェイ。
二人はお互いに一歩も引く事無く立って居た。
「・・・いいでしょう、殺すのは話の後でも出来ますからね」
物騒な事を平然と口にする北野。
先程までのものではなく、本来あるべき姿に戻っている。
「そうしてもらえるとありがたいな？」
フェイはそんな北野に真っ向から立ち向かっている。
様々な経験の差はあれど、今のフェイは北野に負けていない。
「では、提案をお聞きしましょうか？」
北野は先程のフェイの真意を意味を知ろうとする。
何が望みだ？そう言う目をした北野に、フェイは臆する事無く提案を告げた。
「なに、簡単なことだ。南部貴族連合とは言っても実情はそれほどしっかりしたものではない」
ほとんどはったりだ。
自分自身は会議中に求められた情報以上のことは持っていない。
だが、それを気取られてはならないのだ。
「ふ？先程はそんな話をしてませんでしたが？」
北野はそういって手を組む。
まるで見透かされているようだ。

そんな北野の目を真直ぐ捉えフェイは答えた。
「聞かれなかった事まで話すとでも？」
北野は余裕を見せるフェイの内心が読めない。
ここまではっきりとした態度を持った相手は殆ど居なかった。
ただのはったりにも見える。
だが、はったりにしては堂々としすぎているようにも見えた。
それに構わずフェイは提案の続きを話し始める。
「南部貴族連合と言っても、王国滅亡と同時に結束したに過ぎない。
しかも自らの意思というより成り行きでそうなっている」
嘲笑を込めた様な笑みを浮かべる。
まるで南部貴族連合を軽蔑しているようだ。
「ほほう？それは面白いですね。ですが、何故内通者がこちらに来ないのですかね？成り行きでなら抜け出そうとする者もいるはずですが？」
今までそんな動きは無かった。
故に北野はフェイの発言内容はハッタリと断じた。
あくまでも保身のための発言と捉えたのだ。
そしてその考えは正鵠を得ている。
フェイははったりを通そうとしているに過ぎない。
「そんな事も分からないのか？簡単だ。お前達日本が恐ろしいからだ」
フェイ自身も感じた日本に対するイメージ、それを南部の連中が抱いてると仮定して話をする。
「しかも、その恐怖は力があるからではない」
フェイは確信した。
そう、西方は群雄割拠した。
独立の機会だと考えたからだ。
ところが南部は結束した。
これは恐怖からくるものだと。
弱いものほど群れを作りたがるのだ。

「では日本の何が怖いと？」
北野は目の前のフェイと会話してて先程の張ったり、と言う印象が抜けていくのを感じた。
まるでそれが真実の様に見えたのだ。
それだけフェイは堂々としていた。
だが、払拭できたわけではない。
その疑念は未だ大きくくすぶっていた。
「知らないからだ」
漸くフェイ自身気付いた。
自分もそうであった、と・・・。
ここに来るまでに、捕虜となってからの今までフェイは彼等日本を恐れていた。
だから彼等を認められなかったのだ。
だが、そのフェイの認識を変える切欠を暮れた者達が居た。
高橋たち特殊任務部隊だ。
彼等は確かに強い。
しかし、同時に人であると言うことを、姿を彼女に見せていた。
そして、捕虜であるにもかかわらず、彼女自身を気遣うやさしさを持った男・・・。
一瞬、その男の暢気な顔が頭に浮ぶ。
だが、今はそれどころではない。
ここは正念場なのだ。
「知らない？なにを？」
北野の問い掛けが返ってくる。が、その答えは既に見つけている。
「日本そのものを・・・だ」
フェイは言い切った。
自分がそうだから相手も、とは限らない。
だが、これぱかりはハッタリではなく、確信だった。
「南部の連中はお前達の事が分からない。そして人は分からない、理解できないものに恐怖を抱く、違うかな？」

北野は返って来た答えに考えるそぶりを見せる。
どうやら、フェイの言葉が少しづつ北野の中に入っていく。
そんな感じだった。
「違いませんね。分からない、理解の及ばないものに人は恐れを抱きます」
たしかに間違っていない。
それは北野にも分かる。
「だから奴等は群れて、寄り添って恐怖から逃れようとしている。
ただそれだけだ」
そして先程のレオナルドなら顔が利く、これは嘘ではない。
その嘘ではない事実を織り交ぜる事でフェイは自身の言葉に真実味を帯びさせていく。

「なるほど、話は分かりました。だが、それが切り崩せるとどう繋がりますか？」
北野はフェイの狙いが読めてきていた。
小娘でありながら、自分と対等な取引をしようとしている。
これほど腹立たしい事があろうか？
これほど愉快な事があろうか？
まだまだ小娘の領域に留まっているフェイが自分と対等に渡り合おうとしている事に北野はこの世界はまだまだ油断できないと感じていた。
「言ったろ？養父は顔が利く、と・・・。中には穏健派と言うべき者、欲が深い者、そう言ったものと直接顔をあわせられる養父なら説得も可能だ」
敢えて断言する。
あの無能な王の下で一切を取り仕切り、あの国をベサリウスと渡り合えるだけの国にした養父なら出来る。
そう信じていた。
「説得、ですか？どうやって？」

北野は小娘たるフェイにどんな考えがあるのか？
それが聞きたくなっていた。
これは北野が事態打開の方策を求めている所にうまく滑り込んだ、いや、滑り込めたといえる。
「その材料はあなた方次第だがね？領土の安堵でも、資産の保障でもなんでもいいさ。私は切り崩す手段の話をしているのであって、あなた方が用意すべき飴の話はしていないしな？」
フェイはここで北野の答えを待つ。
これで駄目なら終わりだろう。
だが、終わらない、と確信めいた何かがあった。
「なるほど・・・飴は私どもが用意すべき・・・たしかにねぇ・・・」
北野の口調が柔らかくなった。
と、同時に室内に張り巡らされた緊張感が和らぐ。
「その見返りはなんですか？」
北野はようやく、笑みを浮かべた。
その笑みは作られたものではなかった。

ここに北野は交渉で初めて相手に一歩譲った。
敢えて、と付けるべきだが、それでも敬意に値するだろう。
そして、フェイは自身とレオナルドの命を北野から勝ち取る事が出来た歴史的瞬間だった。

第４４話「配備」

北野相手に一歩も譲らずに戦い抜いたフェイは今度こそ退室させられていく。
とは言え有益な情報と共に北野が取るべき道は見えている。
それもフェイとの交渉で得られた事だ。
フェイからすれば自分が取るべき最大限の事をしたに過ぎないが、北野はそれでも評価に値すると考えていた。
「正直、肝が冷えました・・・」
今度こそ二人だけの室内で高橋は北野に言う。
それを聞いた北野は何故？と言う表情をした。
「本当に処分するかもしれないと？」
その言葉に高橋は頷く。
北野ならやりかねない、そう言うイメージが着いているのだ。
「いや、あの後に事が済むまで軟禁しようとは考えましたが・・・流石に殺すのは・・・」
高橋の想像がどんなものであったか分かった北野は意外そうに答えた。
北野は目的の為に非情になれるが、常に非情な手段を用いるわけではない。
今回の自分のミスをフェイに被せるのは些か勝手が過ぎるだろう。
しかし、たしかにそう見られてもおかしくない言動、行動があるので北野自身、反省せねばならない。
「ですが、おかげで有益な話が出来ました」
北野の意図とは違う形で起きたものではあるが、有益であるならば何の問題も無い。
むしろ、今後の南部攻略に向けて展望が少しでも明るくなったのは僥倖だ。
「取り合えず、彼女の養父と連絡を取り合う必要がありますが・・・

直ぐには無理ですね」
元バジル王国の領域をどうするか?が決まっていない以上は勝手に人をどうこうはできない。
そのため、どうしても時間が空く高橋たちに北野は、以前日本に申請した機材を引き渡す事にした。
そし上であいた時間を休息と訓練に注ぎ込んでもらい、新機材に慣れてもらおうと言うのだ。
「取り合えず、今までの働きにこちらから贈り物がありますので、受け取って帰ってください」
北野は今まで多くの功績を挙げてきた特殊任務部隊の労をねぎらうと共に新機材引渡しを高橋に告げた。
高橋はその目録を受け取ると素直に感謝の敬礼をする。
「大切に使わせてもらいます」
中身は確認してないが、きっと隊員が喜ぶものだろう。
そう考えていた。

高橋を南部攻略部隊の駐屯地に置いて、自らの特殊任務部隊駐屯地に帰ってきてから井上たちは忙しく動き回っていた。
使った装備の整備、点検、補給と言った、地味でも重要な作業が待っていたからだ。
高橋が何時帰ってくるか分からないが、ミューリの為にも高橋の負担を減らす必要があった。
もっとも、任務終了後の通常業務にすぎないのだが、だからこそ少しでも早く終わらせる必要がある。
そんな井上たちの耳に聞きなれた音が聞こえてくる。
機種は不明なれどヘリコプターの音だ。
その音の方向にはＵＨ－６０ＪＡ、ブラックホークが2機飛行していた。
「おい、ブラックホークだ。こっちに配備されたのか・・・」
井上が近くに居た佐藤に声をかける。

砂糖も同じ方向を見て驚いた。
「たしか、此方に配備されてるのはヒューイだけのはずですけど・・・」
佐藤の言うヒューイとはＵＨ－１Ｊイロコイのことで、自衛隊ではヒューイと呼ばれていた。
そして、大陸に派遣されているヘリコプターはこのイロコイを中心に配備されている。
あとはＡＨ－１ＳコブラとＣＨ－４７ＪＡチヌークだけだ。
そのはずなのだが、今二人の目には２機のブラックホークが旋回しながら此方の上空を掠める様に飛んでいた。
「南方用ですかね？」
自衛隊では新型の分類に入るブラックホークに佐藤が羨望のまなざしを向ける。
ブラックホークは退役が進むイロコイの代替機としてアメリカよりライセンス生産で導入が進んでいたが、転移により導入はストップしていた。
その新型が目の前にいるのだ。
転移前でも自分達は使えなかった機体が近くにあるのだ。
少しぐらいあこがれても罰は当たらないだろう。
「いいねぇ、新しいものを優先的に回してもらえるのは・・・。ウチは未だに中トラ（７３式中型トラック）とＬＡＶ（ラブと読み軽装甲機動車のこと）だけだぜ」
軽装甲機動車は文句なしの新型なのだが、それも自分達で自由に使えるのは２台のみ、と言う状況から井上も溜息混じりでブラックホークを見ていた。
実際、必要とされれば手隙の部隊から一時的に借りて使う事は出来る。
しかし、普段から使えるのは軽装甲機動車２台と７３式中型トラック４台のみなのだ。
作戦行動可能な人員が６０人にまでなっているが、車両を含めた装

備が不足しているのが現状だ。
これも、燃料の節約を考えてのことなのだが、任務の性質上、高橋たち特殊任務部隊にとっては切実な要望と言えた。
何度も高橋は北野に要望は出していたはずだったが、シバリア市周辺を管轄にする陸上自衛隊司令部との協議で却下されていたらしい。
お陰で活動時の人員も最小限にせざるを得なく、必然的に危険度は増す状態が続いていた。
「ま、俺達には関係ない。取り合えず仕事の続きをするぞ」
井上はこれ以上見てたら上の連中を呪いたくなると思い、作業に戻る事にした。
そんな井上に続くように佐藤が後ろ髪惹かれる思いで後に続いてくる。
「あれ？」
その砂糖はブラックホークを見ながら突然変な声をあげた。
「なんだー？落ちたかー？」
不謹慎と言うか不吉な事を口走る井上に佐藤は答えない。
いや、この場合ヘリの音が煩くて聞こえないのだ。
何かと思い井上が後ろを見ると、そこには着陸しようとするブラックホーク2機の姿があった。

無線で場所を空ける様に指示を出し、開いた場所に寸分のずれも無く着陸するブラックホークの2機から高橋が降りてくる。
呆然と見ている隊員たちの前に高橋がやって来たとき、井上がなんで？という表情をしていた。
高橋の背後では2機のブラックホークはエンジンの停止をしているところだ。
「どうした？」
呆然とする仲間の様子に高橋は何かあるのか？と思って聞いてみる。
「た、隊長・・・この2機は？」

佐藤が夢じゃないよね、と思いながらブラックホークを指差してたずねた。
「ああ、今度からウチに配備された機体だ。まだコールサインも決めてないけど、まあ新しい仲間だな」
そう言って振り向くとブラックホークの姿が目に入る。
これで少しは戦力的に余裕が出来る。
と思った瞬間、部隊全員が歓声をあげた。
今までは他所様から借りて使わせてもらう程、肩身の狭い思いをしていたのだ。
それだけに喜びも大きいと言える。
高橋もうれしいのか、歓声を上げるまでには至らないものの口元は笑っていた。
その、隊員たちの前にブラックホークからパイロットが降りてくる。
「このたび特殊任務部隊に配置されました宮崎正平曹長です」
パイロットの一人がそう言って敬礼する。
宮崎は新設された特殊任務部隊飛行隊の栄えある初代として配置された。
彼は本来なら中央即応団と呼ばれる緊急展開部隊に入る予定だったが、今回の転移以降にアルトリア行きに変更されたのだ。
しかも行き先が雑用部隊と呼ばれている特殊任務部隊だ。
雑用と言われても自衛隊最初の交戦部隊で、その後も数々の実戦を潜り抜けて来た精鋭中の精鋭となっている部隊でもある。
ある意味、中即（中央即応団）よりやりがいがあると言えた。
「改めて特殊任務部隊隊長を務める高橋政信少尉だ。着任を歓迎する」
高橋は宮崎に答礼すると握手する。
その瞬間、再び歓声が上がった。

第４５話「呼び出し」

ーバジル地区グラナリア

元バジル王国領は正式な統治者が決まっていない状態とは言え、名称をバジル地区と改めていた。
日本外人部隊とベサリウスの混成軍の前に半日で陥落したものの、一般民衆は普段と変わらない日々を送っていた。
街の損害は小さく、幾つかの箇所で崩落した建物などはあるが、それ以外の民衆に対する被害は抑えられたと言える。
そのため、民衆の占領軍に対する印象は悪くない。
今まで使っていた公共設備、つまりインフラも破壊されておらず、その為領内には大きな混乱は起きなかった。
一部バジル軍部隊が抵抗、もしくは野盗化したものの、占領軍として残る海兵隊により瞬く間に鎮圧されていた。
本来ならレオナルドを頂点とした治安維持に当たる部隊があるのだが、武装解除されており市内の治安維持さえ出来ない有様だった。
そのため、海兵隊が要所に立ち、治安を守ると同時に賊の報あらば即座に部隊を派遣しこれに当たっている状態だ。
もっとも、占領軍総司令ハウザーとしては何れはシバリアに帰らねばならないだろう。
南部攻略の話がある以上、世界各地の紛争地帯で戦った経験を持つ海兵隊の力は必要になる、と考えたからだ。
故にハウザーの希望としてはベサリウスにこの地を押し付ければいいとさえ思っていた。
確かに領土やそこに眠る資源は魅力的だろう。
しかし、日本は日本の持つ許容範囲限界を既に超えている。
南部を求めるならここは引き渡した方がいいのだ。
管理しきれない領域を抱え込んでも碌な事にはならない。

それは歴史が証明している。
ローマ帝国に然り、モンゴル帝国に然り、オスマントルコに然り、
そして日本に然り・・・。

それらを考えるにアルトリア、ホードラーだけで精一杯なのだ。
この上、資源目的で南部攻略をせねばならないのは仕方ないにせよ、
小さくともバジル地区を得ても管理できないだろう。
それぐらいは政治に疎いハウザーにも容易に分かる事だった。
しかし、南部攻略で地位向上を狙うハウザーには頭の痛い問題もあった。
一部海兵隊員の無秩序な行動である。
乱暴狼藉を働くものが出るたびにＭＰを送り出し、拘束し、迷惑をかけた人々に謝罪と見舞いを送らねばならない。
このままではまたイラクやアフガニスタンの二の舞だろう。
日本政府からも特に注意せよ、と言明されているのに、これでは外人部隊の地位向上どころではない。
幹部を集め監視体制の強化を命じたものの、やはり祖国と切り離された鬱憤や将来への不安が響いているのであろう。
中々収まらない。
今のところは此方も下出に出ているから民衆の感情も悪くはなってない。
だが、このままではいずれゲリラを発生しかねないのだ。
「元合衆国軍人の誇りはないのか・・・」
ハウザーは頬杖をつきながら溜息を漏らした。
コンスタンティで見た自衛隊はそんな事は一切しなかった。
捕虜にさえだ。
それと見ていると自分の部隊の統制が乱れている事が酷く目立っている。
「最悪、軍法会議を開いて処刑もやむを得んかと」
参謀の言葉に、異世界に放り込まれて、限られた同胞を手にかける

のは気が進まない。
しかし、秩序を回復させるためには見せしめも必要ではある。
「問題を起こした奴は後方におくりこめ。犯罪者としてな・・・その上で日本と対応を協議するとしよう」
単に問題を先送りしただけの事だが、限られた将兵をいたずらに消耗させたくは無い。
刑罰を与えて懲りてくれる事を祈るより他は無かった。
「略奪、暴行、またはそれに類する違法行為は厳重に取り締まれ。この地でベトナムやイラク等を再現しては外人部隊の今後に関わる」
ハウザーの言葉に参謀はただ頷くしかなかった。

そんな状態でもレオナルドはバジル地区の内政に尽力していた。
ハウザー等海兵隊の事は気になるが、今のレオナルドに出来る事は内政しかない。
自分達は負けた側であるならば仕方ない、と言うのがこの世界の常識だったからだ。
負ければ略奪や暴行は甘んじて受ける。
それが今までまかり通ってきている。
特に兵士たちにとってはそれも従軍した報酬の一部だからだ。
その為、戦争の後は悲惨なものである。
いたるところに打ち捨てられた遺体。
燃える建物。
乱暴される女性たちの悲鳴と怨嗟の声・・・。
そう言ったものが戦場跡にはあるものだ。
それから考えれば遥かにマシだろう。
その意味では民衆もまだ我慢できる領域にあるのだ。
勿論、限界あるだろう。
だが、彼等が生きてきたこの世界の常識からすればまだいい方だった。

そんなレオナルドの下にシバリアへの召喚礼状が来たのは、王国滅亡から2週間ばかり経ったころだった。
「日本からシバリア市への召喚？」
唐突な事態にレオナルドは何故いまなのか？と考えた。
バジル地区は既に落ち着いており、不穏分子もなりを潜めている。
ベサリウスからの衛士も僅かなれど派遣されている。
今後は、占領軍に従いつつ、地区内の内政を維持するに止めるだけ。
それらならレオナルド以外の無い生還でも出来る事だ。
「・・・そうか、時が来た。と言う事か・・・」
自身の王を殺害した事と、王不在である以上は最高責任者として裁きを受けねばならない事・・・。
それが来たと考えていた。
本来ならここで自決するものだが、自分が自決すれば別のものにそれらが向きかねない。
「最後の責任を果たすとするか」
それだけはさせてはならない、と覚悟を決めると身辺を整理する。
遅かれ早かれ、こうなる事は分かっていた。
それが今来ただけの話だ。
何も恐れるものは無い。
なにより、妻も子も当の昔に亡くしたレオナルドが、我が子の様に育て、見守ってきたフェイの下にに行くのだ。
何の躊躇いがあろう。
レオナルドはそう思っていた。

しかし、そのレオナルドの覚悟は、幸か不幸か全く無意味なものになる。

ーホードラー地区シバリア市

召喚礼状がレオナルドの下に来てから3日後。
レオナルドは幾度と無く足を運んだかつての王都シバリアに足を踏み入れていた。
だが、そのレオナルドもかつての賑わいを凌ぐ活気には驚くより他は無かった。
「なんとも・・・凄いものだな」
賑わいを見せる町並みを日本の車と呼ばれるものから眺める。
バジル王国滅亡の時に見せつけられた空飛ぶ乗り物、ヘリと言っていた物に乗せられてシバリアに来たのも驚きだった。
だが、それ以上にシバリアには驚くものばかりだ。
数は少ないが車と呼ばれる馬車とは違う乗り物が走り、街角には何の意味があるのか分からない柱が立ち並び、その柱には何やらロープが張り巡らされている。
また、夕方で薄暗いにも関わらず街はランプや松明など比べ物にならないほど明るい光。
それが至るところで見られるのだ。
そして、最も驚いたのが匂いだ。
以前のシバリアでは汚物を溜め込む場所が各地にあり、なんともいえない不快な臭いが何処に居ても感じられた。
だが、今のこのシバリアではそんなものが無い。
一体どうやってこれを成し遂げたのか？
内政家一筋でやってきたレオナルドからすれば、これから死に行く身であっても知りたいと思えることだった。
試しに、駄目で元々と思い監視に着いてきた兵士に聞くと、まだ完全ではないものの下水と呼ばれる管が地中に埋められており、それを通って汚水は離れた処理施設に集積、処理されていると言うのだ。
「生活水管と似た構造なのか・・・」
レオナルドの言う生活水管とは、要は水道管のことだ。
下水と呼ばれるものはその技術をそのまま汚水用にしたものと考え

た。
最も、その生活水管、つまり上水道も整備されなおしており、以前と比べても安定かつ清潔な水が供給されるようになっている。
日本は各地の都市を開発するに、使える物は手直ししつつそのまま使い、そして必要なものから優先的に開発していた。
その為、水道、下水、電気と言った順で整備が進められている。
シバリアだけで見れば、水道は市内のほぼ１００％が、下水は７０％、電気は５０％の割合で普及している。
今後は経済的生活水準が向上すれば、それに伴う税金などの徴収が行われる事になる。
もっとも、それはまだまだ先の話になるだろうが・・・。

そんなシバリア市内を抜け、レオナルドは行政区へと入っていく。
そして、そこで思いがけない再会を果たす事になる。

第４６話「南部への謀」

レオナルドがシバリア市に来た日の翌日、シバリア市行政区へと呼び出される事になった。
王城を拠点として使っていない事は驚きだったが、レオナルドに対する扱いにも驚くべきものがあった。
正直言って囚人のように扱われるものと考えていたが、日本は彼を囚人ではなく賓客として扱っていたのだ。
そこからレオナルドは自身の考えとは違う、別の思惑があるのではないか？と考えるようになっていた。
そんなレオナルドの下に姿を見せたのは北野だった。
お互いに自己紹介すると、椅子に座る。
レオナルドはどんな考えがあって自分を呼び寄せたのかが気になっていた。
そして、同様にシバリアを一手に引き受けて開発を推し進める北野に、同じく内政に携わるものとして興味がわいていた。

「早速ですが、あなたにお願いしたい事があります」
しばらく無言だったが北野が用件を切り出す。
お願いしたい事、と言われても現状のレオナルドは命令される側であってお願いを受ける身ではない。
一体どういうことか？
「実は私どもは南部貴族連合を名乗るものたちを相手に戦争せねばなりません」
北野の口から出てきた言葉はレオナルドを驚かせる程のものではなかった。
ホードラー王国を滅ぼしたのは彼等日本だ。
その日本がホードラー王国の所領を得ようとする事に不思議は無い。
「それ自体は勝って終わるのは目に見えてますが問題がありまして・

・・」

戦う前から勝利を確信するなどありえないだろう。

しかし、レオナルドは北野がそう言う事に不思議は無かった。

なにより、グラナリアでの戦いを見るに、それだけの力を有しているのは間違いないだろう。

戦う前から勝敗を云々するのは間違いではあるが、そう言ってのけるだけの物が日本にはある。

「正直言って時間をかけたくありませんし、わが国の自衛隊、あなた方風に言うならば軍に犠牲をだしたくありません」

これは北野の正直な気持ちが入っていた。

先の勝ち負けは北野にとってもやってみなければ分からない話だ。

しかし、負けるかも、と言うことをは口にすべきではないのだ。

だが、時間をかけたくない、犠牲を増やしたくない、これらは北野、いや日本にとって偽らざるべき本心といえる。

「そこで提案です」

前置きもそこそこに北野は本題を話し始める。

正直、時間的猶予は限られているからだ。

今、こうして話す時間だって惜しい。

それでも時間と犠牲を減らせるなら無駄にはならないと思っていた。

「貴方は南部の人々にも顔が知られているそうですね?そこで南部で話が通じる方を此方側に引き込んでいただきたいのです」

どこから調べだしたのか分からないが、レオナルドは日本の情報収集能力の高さに舌を巻くしかない。

たしかに、レオナルドは南部に顔が利く。

それは元々レオナルドが南部出身だったからだ。

南部の東側に位置するレオナルド男爵領の三男として生まれ、バジル領のフリーマン家に婿養子としてだされていたのだ。

フリーマン家は爵位を持たない貴族、つまり平貴族の家で、バジル子爵家に代々仕えていた。

もっとも、フリーマン家は彼の大で終わりになるのは明白だ。

何せ彼は妻と子を流行り病で亡くして居たからだ。
何処からか養子を得るかしなければ断絶になる。
だが、彼自身は断絶してもいいと考えていた。
養子に出される側としては、かなり苦労する事が分かっている。
あくまでも家の存続のために、直系の跡取りが出来るまでの繋ぎ役にすぎないからだ。
それならいっそ、終わらせてやろう。
そう思っていた。
「たしかに私は南部にも親しい間柄の者は少なくありません。しかし、私は婿養子として出された身です。お役に立てるかどうか・・・」
ハッキリ言えばこれは危険な発言でもある。
そうとは知らなかったとは言え、フェイがレオナルドの身の安全を得るために北野と戦ったのが無駄になりかねない。
しかし、北野もそこは織り込み済みで、駄目で元々、と言う北野には珍しい博打をやっているのだ。
「そうかもしれませんな。ですがやれるだけやってもらいます。それで駄目ならその時は力でねじ伏せるまでです」
実際はそんな事はしたくないのだが、そう言うしかない。
「もし、引き込みが出来れば、その分無駄な戦争をしなくて済みますからね」
あくまでも手間を減らす事でしかない。
そう言っているのだ。
その北野の様子から、実際にやりかねないと言う感じがレオナルドにはしていた。
「・・・見返りはなんですかな？」
敢えて俗っぽく報酬を要求してみる。
レオナルドはそれの多い少ないで決めるつもりはないが、報酬次第でやると言う姿勢を見せれば真意が見えてくるのでは？と考えたのだ。

「見返り、ですか？何がいいですか？」
北野はそんなレオナルドに試されている事が分かったのだろう。
レオナルドの要求する報酬に、何でも良いと言わんばかりの態度だった。
「なんでしたら領土でも持ちますか？」
この世界では領地を与えるのが報酬の基本なのだろう。
北野はそれに則って提案してみる。
だが、レオナルドは領土など欲しい訳ではなかった。
妻も子も無くし、国も失った。
しかもフェイまでも失ったのだ。
これからは静かに余生を送るぐらいしかないのだ。
「本当に何でもよろしいのですか？」
念を押すように北野に言う。
これで何でも良いと言うなら逆に信用できない。
死ぬ事は覚悟の上だが、何でも良いとは逆に「与える気があるのか疑わしい」からだ。
「いい、とは言えませんね。私の首ぐらいなら幾らでも差し上げますが、それ以上に死人をよみがえらせろといわれても不可能ですからね」
流石に北野もレオナルドの考えが読めていた。
だが、同時に相当な人物であるのも分かっていた。
一歩間違えれば、北野の方がやり込められかねない。
それだけの思惑を持って発言しているのだ。
「たしかにそうですな。ですが、ご自身の首を賭けるはやめた方が宜しいのでは？」
忠告にも似たレオナルドの言葉に北野は笑う。
「なに、私程度の人間であれば日本には腐るほどいますから」
これを北野を知る人物が聞いたならば、皆一様に「嘘だ」と断じるだろう。
だが、そう言う事で代わりなど幾らでもいると思わせた方がいいの

だ。
「なるほど、分かりました」
レオナルドの分かったとは報酬についてではない。
北野の覚悟の程が分かったのだ。
（己より公を優先するのか・・・）
北野の本質に気付いたレオナルドは自身と似た物を感じた。
「私に出来る事なら微力を尽くすとしましょう」
レオナルドはそう言って北野の提案を受け入れた。
北野としてはまだまだ時間がかかるか？と思われたが、意外にもレオナルドがすんなりと受け入れたので驚きがある。
「そうですか、それはありがたい。で、報酬はどうしますか？」
自身の驚きを隠すように敢えて話を戻してみる。
しかし、今度はレオナルドが笑いながら答えた。
「いえ、見返りは結構です。事が済めば静かに暮らさせていただけるならそれで」
何も残されていない故の悲哀だ。
「そうですか、ですがどちらにしてもわが国は見返りを用意させていただきますよ？功あった者が評価されないのでは色々問題ですからね」
北野はそう言うと話をつめに掛かった。

結局、レオナルドは殆ど単身で南部に乗り込む事になった。
下手に護衛を連れて行っても逆に警戒される可能性があったからだ。
また、日本の側に着く貴族の所領を安堵するとともに、不可侵条約を結ぶ事も飴として用意することになった。
これは、一種の独立を認める事になるが、ベサリウスの例もあるので認めないわけにはいかないだろう。
その上で日本の統治を受け入れる、もしくは庇護を必要とするなら応じる事が決まった。
とは言っても、それは戦争が終わった後の話であり、戦時中である

ならば自領は自らの手で守らねばならない。
守れ無いとなれば余裕がある限りは一時的な援軍も考えるが、恐らくその必要は無いかもしれない。
誰か一人でも日本側に着けば、成り行きで組み込まれていた貴族が水面下で動き出すだろう。
また、それによって内部に疑心暗鬼を呼び起こし、それぞれが協力せずに自領の守りに徹する事もありえる。
勿論、蓋を開けねば分からないが、レオナルドとの話し合いで今よりはずっと楽になる見込みが出てきたのは事実だ。
最終的な結果はレオナルドの手腕如何にかかっている。
それを考えれば重責も重責だが、レオナルドに気負いは無い。
北野からしても駄目なら別の手段を講じるだけだ。
かかる元手は殆ど無かった。

第４７話「鈴木の戦い」

ーー日本国　東京

北野が水面下で南部貴族連合の切り崩しを画策し、自衛隊の南部侵攻準備が進む中、日本では鈴木が国会で野党の突き上げを受けていた。

と、言うのも、確かに日本が生き延びるためにアルトリアを領土に組み込むのには野党も受け入れていた。

また、ホードラーとの戦争、併合は向こうから仕掛けてきた話だ。

だから野党としては結果的に併合となったが、それはそれで認めざる得ない状況だった。

しかし、ここに来てベサリウス国を国と承認し、軍事同盟と取れる約束を交わし、尚且つ侵略を受けたベサリウス国に援軍を出したことが受け入れられなかったのだ。

彼らの目には戦前の旧大日本帝国のように見えていると言って過言はない。

更に、ベサリウス国の北に位置するバジル王国に米軍を投入し、これを滅亡させた。

ここに来て野党は鈴木を完全に軍事主義者と断定し、その座から引き摺り下ろそうとしていた。

彼らに幸運だったのは、その機会と言うべきものが直ぐ後に南部に対する自衛隊の派遣だった。

今回ばかりは完全な侵略政策と言ってもいいだろう。

なにより安定した資源確保を目指しているのだ。

否定すべき言葉がない。

それ故に野党は主だった党と大連立を組み、更に鈴木の所属する与党内部の反鈴木派を糾合し鈴木に退陣を要求するに至っていた。

「これは明らかな侵略行為です！資源が無くとも買い付ければいい！今まではそうしてきたのに何故ここに来てそれをしないのか！資源を安定確保とお題目を挙げながら悪しき軍国主義を今の世によみがえらせる気ですか！？」

国会では質疑が進められ、若い議員が鈴木を糾弾している。

そこらでは鈴木や閣僚に対する野次が叫ばれる中、鈴木は静かに若い議員の言葉を聴いていた。

「この様な暴挙を国民が許すとお思いか！？即刻首相は退陣し自衛隊を引き上げて話し合いの場を持つべきです！それをしなければ日本は過ちを再び犯すことになります！」

熱の込められた主張と周りの圧倒的支持を受けて若い議員は首相の様子を余裕を持って見る。

しかし、鈴木は全く動じた様子が無い。

それもそのはずだ。

鈴木からすればどんなにきれいなお題目を掲げられようと、それが現実的ではないとわかっていたからだ。

以前の世界であれば国交が無かろうとも話し合いの場は作れる。

しかし、この世界では日本は完全に異分子なのだ。

そして異分子は排除の対象になる。

つまり、日本と率先して国交を持とうとする国や、交渉を持とうという国はほとんど無い。

あっても切羽詰った故の選択肢にすぎない。

ならばどうするか？

日本が日干しになる事はアルトリアやホードラーの獲得で無くなったと言えるが、だが今の文明レベルを維持することは出来ない。

必要な資源がまだまだあるのだ。

確保されてる、将来的に確保さてるものを含めた今の資源では各産業やそこから生み出される製品は昭和以前にまで後退せざる得なくなるだろう。

足りないものは代用できるものなので補うしかない。

しかしすべてを補えるものでもない。
そして一般家庭においては日常的に存在した、身近なものが姿を消していくことになる。
そうなれば自分たちの文明が中世とまでは行かないにしても大きく後退することは明白だ。
現代の便利な生活の中で生きてきた一般市民がそれに耐えられるだろうか？

答えは否だろう。
それが長く続けば耐えられる、我慢せざる得なくなるだろうが、それまでに日本では混乱など生易しい状況になるだろう。
最近の若い世代は知らないだろうが、日本は元の世界でも石油ショックと言われる混乱を経験している。
石油ショックは湾岸戦争などで石油が日本に入ってこなくなるのでは？と言うデマから始まったものだが、今回の場合はそれとは違う。
現実に物が作れなくなり、身の回りからなくなるのだ。
全くの無資源国では無かったにしろ、採算が取れないことから国内の資源開発はほとんど進められてはいない。
そのため国内の資源開発を進めることで一時的には流通させて沈静化も可能だろう。
しかし、絶対量が少ない上に何時まで資源を算出できるか？と言う限りがある。
つまり、以前の世界の常識で物を考え、動いては亡国へとまっしぐらなのだ。
日本はこの世界に転移してからずっと常に綱渡り、薄氷を踏むが如く状況が続いていたのだ。

「鈴木総理」
議長から名前を呼ばれた鈴木は若い議員からの質疑に答えるために答弁をはじめた。

「先に申し上げて起きますが、貴方は今この国を取り巻く状況が分かっておいでですかな?」
鈴木からの反撃にも若い議員は余裕の表情だ。
周りには自分に賛同する者がほとんどだ。
臆する理由は無かった。
「わが国日本はこの世界に転移しました。それはわが国が転移する以前の世界とは常識も、価値観も何もかもが全く異質なこの世界へです」
鈴木は静かに日本の状況を告げる。
そして鈴木の反撃が始まった。
「ホードラー王国と戦争をする時の事をお忘れか?以前の転移する前の世界で通用した全てが通用しなくなったのです。我々はここにきて、全てを一から学びなおさねばならなくなったのです。この世界にあらゆる国際法は存在しません。あるとすればファマティー教に従うこと、そして弱きものは淘汰されるというものだけです」
鈴木の言葉に周囲からは詭弁だ!自己正当化だ!言い訳だ!と野次が飛ぶ。
その野次が余りに酷く、聞くに堪えないものまである。
国会は野次のために怒号が響き渡る会場となっていた。
しかし、鈴木はかまわず続ける。
「その新しき世界で我々は生き残る道を模索しなければなりません。しかし、その道は皆さんが考えている以上に険しいのです。確かに石油を含めたエネルギー資源、生産業には欠かせない各種金属などの鉱物資源、そして食料資源と確保は出来ました。これも国民の皆様の協力とご理解あってのものです。しかし・・・」
最早、鈴木の言葉はマイクで拡張しても聞き取るのは難しい。
各報道機関はそれでも鈴木の言葉を拾おうと必死な状態だ。
それでも鈴木はそのまま続ける。
「それだけで私たちが慣れ親しんだ便利な生活を維持できるものではありません。転移直後と違い大分改善された様に見えても、そう

見えるだけで現実は未だに厳しいままなのです。この状況で悠長に交渉は明らかに日本の今後に影響を与えます」

この時になって報道機関はようやく鈴木の音声を確保でき始めており、テレビやラジオでは鈴木の話がまともに聞ける様になっていた。

「にもかかわらず、話し合い、交渉と仰いますが、全くの未知の世界で何処を窓口に交渉するのでしょうか？しかも力で持って事の解決が常識であり交渉でもあるこの世界で、わが国と交渉を受けてくれる国がありましょうか？答えは否です。既に我が国は何度も南部貴族連合と名乗る武装勢力と言うべきところと交渉をすべく持ちかけています。しかし、その全ては拒否です。ファマティー教徒ではない、それだけが理由でです。」

鈴木が答弁をしていても、この場に聞く耳を持つものは殆ど居ないのであろう。

そう思わざる得ない状況で、鈴木派最後の言葉を放つ。

「私とて武力の解決は望まない、が、だからと言って日本を飢えさせる訳にはいきません」

そして、遂に温厚で知られた鈴木が吼えた。

「如何なる話し合いも拒否する相手に遠慮して、我が国、日本に滅びろという気か！そして国民に諦めろとでも言うのか！」

鈴木の咆哮に野次が一瞬にして収まった。

それだけ珍しいものだったのだ。

静かになった国会で鈴木は言葉を締めた。

「野党の皆さんには現実的な意見をだしてもらいたい。単に私を非難するのではなく現状の日本を救う為の現実的で尚且つ具体的な案を提出していただきたい。はっきり言えばそれが無い内には話しが出来ないと申し上げておきます」

そういうと鈴木は自分の席へと戻っていった。

第４８話「南部へ向けて」

ー日本国　東京　総理官邸記者会見

鈴木が国会で奮闘した翌日、伊達は内閣官房長官として各マスコミの前にて現在の日本の状況を報告していた。
これは以前より考えられていた物で、南部侵攻が提案された時から準備していたものだ。
その時から鈴木たち閣僚は、今回の様な突き上げがあることを予想していたのだ。
これで国民に現状を認識してもらい、その上で南部侵攻の必要性、そして協力をしてもらうことを目的としている。
もっとも、協力というのは別に武器を持って戦え、とか政府の決定に従え、ではない。
最終的に国民が困窮しないための行動と言う事を理解してもらうだけでよい。
そお考えから隠していた、と言うより公表できなかった資料をも公開するに踏み出したのだ。
ただし、当然問題もある。
この厳しい状況に絶望し、自棄になることも考えられる。
下手をすれば混乱がおき暴動もおきかねない。
また、やはりどんなお題目を掲げても侵略には違いないのだ。
当然、これでも理解してもらえずに国民が反鈴木で大騒ぎにもなりかねない。
しかし、やらないわけには行かなかった。
やらずに断行し反発されてしまえば国内が纏まらずにやはり混乱を生み出す元凶になるだろう。
また、かつての大日本帝国の様に、後世にまで影響を与える問題に

もなりかねなかった。
もちろん公表したからといってそれが防げるとは思えないが、少なくともまだマシな状況には出来ると判断されたのだ。
「・・・では今回の行動は必要だと仰るのですね？」
記者の質問に伊達はうなずく。
「はい、ここでホードラー南部を平定しなければ資料が示すように日本は日干しにはならなくとも困窮することになります」
普段と違い穏やかなしゃべり方をする伊達ではあったが、性に合わないむず痒さがあった。
だが、これも仕事のうちと割り切っているのも事実だ。
「しかし、武力侵攻と言われても仕方ないのでは？軍国主義の復活と危ぶまれてますが」
先ほどとは違う記者が質問をぶつける。
それに対し伊達は眉をひそめた。
「質問の前には社名と名を名乗ってからにしていただきたい」
転移前から、記者の質の低下があったが、いい加減にして欲しいという思いがあった。
本来、報道に携わるものは質問する際に社名と自身の名を出すものだ。
特に規定はないが、それが礼儀として慣習化していた。
「・・・失礼しました、毎朝の真鍋です」
伊達の一言に不満を露にしながらも彼は一応名乗った。
その様子に不愉快な思いが込み上げてくるが、そこは我慢して質問の内容に答える。
「たしかに武力侵攻といえます。しかし、軍国主義は行き過ぎですな。何も軍事を政治の主導に持ってきてはいないのですから」
伊達の言葉を説明すると、軍国主義とは政治の主な手段として軍事が存在し、軍事を優先して決定が下されるものを言う。
何も軍事行動をするから軍国主義とはならないのだ。
逆に民主主義とは民衆が主権を持って政治を動かすことを言うので

あって、議会があるから民主主義、とはならない。
ただし、この場合、議会なくして政治を行うことは難しいので民主主義の国には議会がある。
ちなみに議会制民主主義は近代になってから確立した民主主義の形態であり、現代では此方が民主主義の代名詞にもなっている。

「つまり、致し方ない行動だと？」
伊達の答えに記者が納得できないといった様子で更に質問を重ねてくる。
「はい、まさか国民の皆様に困窮してくださいとはいえませんからね」
そんな伊達を幾つ物フラッシュが浴びせかけられる。
何度経験してもこれだけは慣れない。
「朝読の中村です。南部平定が日本にとってのベトナムになりかねませんが？また憲法第９条に違反することになります。それはよろしいのですか？」
この懸念は政府にもあった。
南部は山岳地帯だ。
如何に日本の自衛隊が山岳になれていても、未知の山岳地帯に行くのだ。
装備の問題から隊員の健康状態、食糧事情などの問題は尽きない。
相手が中世の装備だから楽に勝てる、と考える方がおかしいのだ。
剣や槍、弓矢と言った装備は確かに時代遅れな武器だが、人の命を奪うのは十分過ぎるものでもある。
また、使いようによっては銃と違い単純な構造であるためにブービートラップ（馬鹿者がかかる罠）に転用しやすいことや、環境による故障などはない。
「たしかにベトナム化の恐れはありますが、そこは実際にベトナムで戦った元在日米軍と緊密に連絡を取り、自体の複雑化を防ぐ段取りをします」

伊達はそう答えると直ぐにもうひとつも質問に答える。
「憲法違反との話ですが、これには当たらないと考えます。根拠といたしまして、南部貴族連合を名乗る集団は厳密に考えても国家ではなく武装勢力です」
伊達の言葉どおり、現在の日本の法や、以前の世界での国際法に照らし合わせても彼等南部貴族連合は国家ではない。
たしかにこの世界で言えば国家なのかもしれないが、日本から見れば国として成り立っていないのだ。
あくまでも自分たちの権益を守る上での、日本という脅威に対する身内の集まりでしかない。
国交も無く、国家でもない上に武装した集団を指す言葉は『武装勢力』にしかならない。
武装勢力が収める土地は何処の国でもないので厳密に言えば『侵略』にもならない。
あくまでも平定、もしくは鎮圧である。
そのため、憲法第9条にも違反しない、と鈴木たちは判断していた。
「一応時間なのでここらで区切りますが、後日改めて国民の皆様に情報を公開しつつ説明したいと思っています」
伊達がそう仕切ると記者たちは一斉にマイクを向けて矢継ぎ早に質問を向けてくる。
しかし、伊達はそれには取り合わずに会見場を後にした。

「これで国民が納得してくれれば良いがな」
総理執務室で茶を飲みながら伊達がこぼした。
正直言って、マスコミが変に煽らないか?が最大の懸念だ。
しかし、済んだ以上は後戻りは出来ない。
「国会も与党の若手から造反の動きがあります。近々内閣不信任案が出されることになりかねません」

阿部は若手を中心に押さえが利かなくなりつつある現状を告げる。
敵は外だけでなく内にも潜むもの、と言うが、足を引っ張る味方ほど恐ろしい存在は無いだろう。
事実、この状況下に解散総選挙を望むことが如何に危険かを理解してないものが多い。
「現在の日本の状況を冷静に見れば楽観など程遠いと分かるものだがな」
阿部の話に伊達も思わずため息が吐いて出る。
そんな二人に鈴木は苦笑いを向けるしかない。
「とは言ったものの、動き出したからには止められん。大陸の自衛隊の方はどうなってる？」
伊達の言葉に伊庭が答えた。
「現在予定の８割までは準備を完了してます。ただ、向こうに派遣している北野が内部の切り崩しに動いてるようで、もう少し時間が欲しいとの連絡をうけてますね」
事の詳細を収めた資料を伊達に手渡す。
それを見ながら伊達はそんなまねが出来るのか？と疑問があった。
「まあ、彼も失敗を前提にしてるから、うまくいけばめっけもん程度に考えるべきだな」
先に資料を確認していた鈴木がフォローを入れた。
正直言えば越権行為なのだが、基本的に総督扱いで全権を委任している。
そのため北野の決定についてアレコレ言えないのだ。
だが、このままにしておくことも無理だろう。
既に北野に権限がありすぎるとして問題視する声が出ているのだから。
いずれは正式な権限の分譲、割り当てが必要になるだろう。
「非常時が続いているから今は仕方ないが、あいつも少々やりすぎだな」
今回のことだけにかかわらず、幾つもの事柄で越権行為といえる独

断専行があった。
しかし、どれも有益なので黙認してきたが、流石にそろそろ引き締めねばなるまい。
「本人もそれは分かってのか若手でも良いから内地よりもっと役人を出して欲しいと・・・」
北野の上司である加藤がそう答える。
本来なら日本からもっと人を送って、現地の状況を確認するとともにホードラー、アルトリア両地区を統治し、円滑に開発を進めるべきなのだ。
だが、今までは危険があることから志願制にしていたのが祟っている状況になっている。
その問題を北野一人に押し付けている状態が続いていた。
とは言うものの、いい加減何とかしなければならないのも事実だ。
大分落ち着いてきたのもあるので、思い切って志願制をやめて任命制にする時期になってきたのかもしれない。
「その件については南部の平定が住むまで待った方がいいな。ただし人は送るべきだ」
鈴木はそう結論を出す。
今は大鉈を振るうべき時では無い。
今の状況をよくする為にも必要なのは、船頭多くして舟山登る状態ではなく、いざとなれば即断即決できる独裁者なのだから。

第４９話「外人部隊」

ーー日本国　横田飛行場

元在日米空軍司令部、現外人空軍部隊司令部のある東京都多摩地域の横田飛行場。
現在ここで陸海空揃っての緊急の会議が行われていた。
陸軍部隊からはクラーク・Ｄ・バーミンガム少将、海軍部隊からはエドガー・フィッチャー中将、そして元在日米軍総司令だった空軍のドナルド・Ａ・フィールド中将が一堂に会している。
本来であればエドガーが全部隊の総司令として立たねばならないのだが、元々部隊の維持管理が在日米軍司令部の役割で、作戦指揮権はホノルルのヒッカム空軍司令部が行っていた。
しかし、今回の日本転移によってヒッカムとの連絡は遮断され回復は最早望めない。
そうなると維持管理が目的の司令部では今後の活動に支障をきたす事が想定できたので元在日米軍各軍の司令官が協議で行動を定めることになった。
当初は空軍司令が全体の責任者ではあったが、自分たちで独自に作戦指揮権を行使しなければならなくなったために、苦肉の策として定められた方針だった。
そして、今回の会議の議題は「ホードラー南部への侵攻」だ。
本当ならもう一人、海兵隊からハウザー・ロビンソン海兵隊中将が出席すべきなのだが、本人が海兵隊全軍を持ってバジル王国攻略に向かっており、未だ現地より帰還していない。
既に急遽打ち上げられた通信衛星を使っての衛星通信で会議に出席してもらおうとしたものの、本人より「現地より動けないので参加するだけ無駄になる」と言って拒否されてしまっていた。

これは、本来なら問題なのだが、陸軍のクラーク以外皆中将であると言うのが災いしていた。
如何に在日米軍総司令だったドナルドでも、直接の命令権を持たない為におきた事だろう。
なにより、海兵隊は「誇り高き少数精鋭」を自負しており、より上位の命令以外はあまり聞いてくれないのだ。
とはいえ、日本から要請（命令と言うべきだが）で、南部攻略の為に部隊派遣をしなければならない。
ハウザーの不参加があっても協議して決定しなければならない事がありすぎた。
「さて、我が第7艦隊を出すのはいい。しかし、現地が山岳地帯というのが気にかかる」
エドガーはそう言って現地の衛星写真を見る。
そこには２０００m級の山脈が連なっており、南部貴族連合の敵陣地と思わしきものが見当たらない。
それもそのはずで、この世界の陣地とは砦や城砦を持った街などであるため、現代の知識しかない彼等には判別がつかないのだ。
中世など過去の戦訓を学ぶ機会があっても、まさか現代でそれを実際に目の当たりにするなど思えるはずがない。
陸軍のクラークも衛星写真を見てしかめっ面を隠そうともしなかった。
「たしかにな。現地の地図も無い、状態もわからない、環境もわからないではな」
クラークはそう言って衛星写真を机の上に投げ捨てる。
ほとんど現地の情報がないのだ。
これで戦えと言うのは無理だろう。
情報とは軍事においては基本中の基本なのだ。
それがこんな状態では基礎からやり直せ、と言いたくもなる。
「そうは言うが、この世界では情報さえまともに手に入らん。衛星写真でも事前にあるだけマシなほうだ」

ドナルドも内心は同意見でも、現地帰りの自衛官から聞いた話があるのでこの状態も仕方ないと思えた。
何より、この世界では地図さえまともなものは無い。
あってもデタラメとしか言えない代物で、当然測量も無いので目的地への距離、方角、位置関係何もかもがいい加減なのだ。
最悪なものになると、大きな都市であるにもかかわらず記載が無いものさえあった。
「これでよく自衛隊は戦えたな」
本気で感心してしまうクラークだったが、これには現地の人の協力があったからだ。
アルトリアに逃げ込んだ難民、そして歩を進めて行く先々の住人の案内など、必要な情報を現地で獲得していたから可能だったのだ。
これは、意図してそうやったのではなく、お人よしといえる日本人の性分と、現地に被害を与えずに現地人を慰撫して回ったことが功を奏した結果だ。
「しかも見てくれ」
エドガーは別の衛星写真を二人に見せる。
そこには道らしきものと、本来ならありえない物が写っていた。
「なんだこれは？」
そう言ったのも無理らしからぬといえる。
そこに写っていたのは、数人の人影らしきものと、その人影よりやけに大きく写った人型の何かだった。
「・・・これは、モンスターとでも言えばいいのか？」
ほかに形容の仕方を知らない。
そう言った感じでドナルドがつぶやく。
それはオーガと呼ばれる食人の化け物であり、最大で３ｍにもなる体躯と、それから繰り出される豪腕を誇る生き物だ。
それ故に、馬などが使い難い荒地や山岳地帯で人の代わりに使われることもあった。
気性も荒く、油断すると一撃で命を奪われかねない。

そんな存在なのだ。
「・・・本当に物語の世界のようだな」
何とも言えない微妙な空気が会議室を包む。
だが、ここをどうにか確保しなければ彼らもまた日本とともに滅びることになる。
「日本政府も頭を悩ましているようだが、少なくとも相手は人間であるのは代わりない。しかも俺達の時代より数百年前の装備の原始人だ」
聞く人が聞けば問題だ、と騒ぎかねない発言だったが、正面切って戦うなら負けることはないとクラークは思っていた。
問題は、相手が正面切って、つまり「決戦」に乗るかどうかだ。
彼等とて自衛隊との戦いで痛めつけられた分、それなりに対策は練るだろう。
それがどの程度のものか？ぐらいは把握しないと作戦も立てようがない。
今までは決戦に相手が乗る、もしくは挑んできたからこそ圧倒できた。
しかし、逆に決戦から逃げられ、ゲリラ戦術を取られれば負けないにしても泥沼に引き釣り込まれてしまう。
それこそベトナムの再現になってしまうのだ。
「我が海軍は海上自衛隊と共に海上封鎖、及び陸上の支援だが、陸軍と空軍はどうするのだ？」
エドガーは海軍で出来ること出来ないことを理解している。
だから日本政府から渡された大まかな作戦の概略から自分たちに与えられる役目を直ぐに理解していた。
「どうするも何も、空軍は補給物資の空輸ぐらいしか出来んよ」
情けないことだが、空軍の動かせる対地支援機が可能な航空機はＦ－１６Ｃ／Ｄしかない。
だが、予備部品や整備を考えるととても出せるものではない。
これでは十分な稼働率を確保できず、円滑な対地支援が望めない。

それならば整備や予備部品が確保しやすい自衛隊の航空機に任せるしかないのが実情だ。
現に航空自衛隊はＦ－４ＥＪ改ファントム?４０機、Ｆ－２を２０機、合計3個飛行隊６０機を展開する予定だ。
Ｆ－４ＥＪ改に関しては日本国内で稼動状態にある前期を持ち出しているると考えられる。
しかし、問題もある。
幾らなんでも精密爆撃が可能かどうかはハッキリいってわからない。
一応、そのための装備や訓練はしている様だが、その精度まではやってみないことには分からないのだ。
「陸軍は海軍と共に南部の海上封鎖、そして上陸しての橋頭堡確保だな」
クラークはそう言ってコーヒーに口をつけた。
南部の敵地に上陸、これは正直言ってかなり危険な任務になるだろう。
何より万が一の退路が無いのだ。
いざとなればヘリでの脱出も考えられるが、やはり心理的に退路がないと言う状況になる。
相手の規模にもよるが、綿密な偵察による敵の動向把握が重要になるだろう。
「こんな時にこそ海兵隊の出番だと思うんだがな」
ドナルドはバジル王国への攻撃に出撃していったハウザーが恨めしく思えた。
あの時のハウザーは強硬にして譲らずで埒が開かない状態だった。
おそらく自分たちの地位確立の立役者になりたかったのだろう。
それは分からなくも無い。
しかし、南部に対する具体的な行動案が出てくるに従い、本来陸軍に任せるべきことを海兵隊が掻っ攫って行ったことは後悔するしかない。
だが、短時間での強襲、制圧はたしかに海兵隊ならではの芸当だ。

それを考えると仕方ない事なのだとも思えてくる。
「やれやれ、せめて補給だけは欠かさないようにしたいものだ」
クラークのぼやきはこの場の全員が同様に感じていた。

ー日本国　横須賀　外人海上部隊旗艦ブルー・リッジ

第7艦隊の旗艦である指揮揚陸艦ブルー・リッジに帰ってきたエドガーは疲れた表情を見せた。
正直言って南部攻略は難しいの一言に尽きたからだ。
険しい山脈と深い森、そして未知のモンスター。
どれを取っても脅威になるだろう。
勿論、第7艦隊最強の攻撃力を持つ空母ジョージ・ワシントンの航空機を総動員すれば、相手の手出しできない空から一方的に攻撃が出来るだろう。
その攻撃力は1隻でちょっとした国なら焦土に出来るぐらいだ。
しかし、それを持ってしても出来ないこともある。
地上の制圧だ。
これればかりは陸軍、と言うよりも歩兵にしか出来ない。
海軍はそのお手伝いぐらいしか出来ないのだ。
相手を圧倒するのと、相手を制圧するのでは訳が違いすぎる。
「せめて相手の拠点が分かればやりようもあるのだが・・・」
エドガーの呟きは、日本が未だに南部貴族連合の拠点を把握できていないことへの不満があった。
未知の世界でそれを言うのは少々無理を言っていると分かってはいる。
しかし、分かっているのと納得しているのとは別問題だ。

相手の拠点、出来れば戦力が集結しているところを空爆するだけで陸戦の援護と言う意味では大きい。
物資集積所もあれば尚いいのだが、それを把握するには今打ち上げられている衛星だけでは無理がある。
今、日本がこの世界で打ち上げている衛星は通信用と観測用だけであり、偵察衛星は含まれて居ない。
観測用とて衛星写真を撮る分には何とかなるが、あまり精密なものまでは無理があった。
今回撮れた衛星写真も、無理をして搭載した超高精度カメラによって何とか撮れたもので、そのために衛星の寿命は短い。
今まで本格的な偵察用軍事衛星を持たなかったゆえの弊害だ。
もっとも、それを責める事は出来ない。
むしろ良くやっている方だと言える。
これが米国だったならどうなっていたか？
しばらくは持ちこたえられるのは確実だ。
しかし、大量消費構造の米国では、いずれ持たなくなる。
その時は日本と同じ選択をするだろう。
しかし、日本と同様に統治が出来るか？と言う問題にぶち当たる。
残念ながら、占領地としての軍政はできるだろう。
力で押さえつけて従わせるならば・・・。
しかし、日本のように現地の人々の支持を得つつ、インフラを整え、協力関係を作り、発展させる力は無い。
いや、あるのだろう。本当ならば・・・。
しかし、その概念が日本と比べることも出来ない領域なのはたしかだ。
それはアフガニスタン、イラク戦争後を見れば一目瞭然だ。
敵を作り続けてきたのもあるが、米国は反感ばかり買い日本は尊敬を得る。
その差を明確に見てきたのだ。
その日本が未だに情報を揃えきれないところを見ると、米国なら出

来るとはいえない。
現地の協力者を得ながらにして未だ情報を得られないのは日本の責任ではないのだ。
「このままでは初戦はともかく、その後が続かないな」
その後はどうなってしまうのか？
ベトナムの様に泥沼化するのか、それとも・・・？
そこまで考えてエドガーは頭を振る。
それは政府の人間が考えることであり、軍人である彼の領分外だったからだ。
最悪、日本がこれに失敗したならば、ホードラー南部の上に、地上の太陽を生み出すことになるだろう。
それだけはエドガー自身避けたい選択だった。

第５０話「国内からの救いの手」

ーー日本国　東京　防衛省

防衛省では伊庭防衛大臣のもと、ホードラー南部海上封鎖についての議論が繰り広げられていた。
ホードラー南部は以前も出たとおり山岳地帯で、平地は南端の海岸線付近を中心に各地にわずかばかりあるだけだ。
そのため、食料の自給自足が極めて困難で８割方をホードラー中央部、東部からに頼っている。
これは平地が殆どなく、また農地に必要な河川が少ないためだ。
小さな河川は幾つかあるが、途中に森があったり、山が間にあったりで水を引くことが難しい。
結果、ホードラー南端の海岸線付近で細々と農業が行われているだけなのだ。
では、主な産業は？と言うと鉱山だ。
銅、銀、鉄、錫、鉛など、鉱物資源は幅広く算出している。
滅びたバジル王国も山岳地で、比較的鉱物資源を算出できるがその算出量、質、埋蔵量は段違いといえた。
結果として南部貴族連合は主な収入を鉱物資源の輸出に頼っており、中央へ収める税金を資源を売った資金で支払っていた。
だが、逆に今回の様な情勢になった時、その食糧生産量の低さが足かせになる。
ホードラー南部の総人口は元王城のある、現シバリア市に残されていた資料で見ると、正確な統計こそ無い（そもそも戸籍と言う概念さえ無かった）ものの、推定で１１万人。
その内、約３万人が鉱山、もしくはその関係で生計を立てている。
ちなみに農業従事者は総人口の１割程度しかいない。

それ以外は家族だったり商人などと見られている。
ちなみにこの資料には１０才以下の子供は全く考慮されていないもので、これがどこまで正確かは大いに疑問があるものだ。

それらの事から、国は滅んでも溜め込んだ資産や、算出する資源を売った資金を元に食料を他国から購入している。
この話は先日の小競り合いの時に捕虜にした者を尋問して得たものだったが、密かに派遣されていた「おやしお型潜水艦」の「いそしお」の監視結果で裏付けは取れていた。
この派遣に関してはベサリウス国と協定が結ばれる前に行われていたのだが、当時海上自衛隊は派遣には消極的だった。
と、言うのも海域の情報が全く無かったため、座礁を含めた事故を恐れたためである。
だが、結局政府の指示により押し切られた形で行われていた。
この調査で、ホードラー南部の海域はマラッカ海峡のような形状をしている物の、水深が最大で１２００ｍ（最も、測量を行っていないので推定ではあるが）にも達する深さがあることがわかっている。
また、対岸に位置する島（衛星写真で島と確認された）は日本本土の倍があることもわかっている。
ただし、内情に関しては未知のままであり、また、海域には大型の生物（詳細は不明。いそしおもソナーで発見はしたが接触はしていない）が生息しているためか行き来は無い。
では何処から食料を輸入しているのか？
これはまだ正確な情報ではないが、小さな半島が北西部にあり、そこから輸入しているのでは？と考えられた。
国名はホードラー王国の残した資料によるとトラストバニア王国といい、かつては小国だったが近年に勢力を伸ばし、宿敵だった半島北部のレアルトバニア王国（約２０年前までは南北に分かれていた）を打ち破って吸収しており、大国とは言えなくとも中堅国家となっている。

そのトラストバニアは産業に力を入れており、農業も幅広く行われて一大経済圏を持った国だ。
ホードラー南部との付き合いも長いようなので、そこからの輸入が一番可能性が高いと推測された。

さて、その食料補給路だが、沿岸（比較的浅く、大型の生物が来れないところ）を使った海路と、海岸線を通る細く長い街道（殆ど整備されていないが）も陸路、この両方がある。
侵攻の際に行われる上陸、及び橋頭堡の確保はこの陸路の出口付近と言うことになるだろう。
そして、海路は海上自衛隊と外人海軍部隊による封鎖になる。
この両方を封鎖せねば片手落ちになり、相手の戦意を奪うのは難しくなるだろう。
それを踏まえ、派遣する艦艇は慎重に選ばなくてはならない。
海上の封鎖は勿論、陸路を封鎖した部隊の支援も同時に行わなくてはならないからだ。
そうなると護衛艦だけでは難しく、おおすみ型輸送艦は勿論のこと、ヘリコプターを数多くそろえられる艦艇が必要になる。
外人海軍部隊の第７艦隊に空母はあるが、垂直離着陸出来るヘリコプターは第５１軽対潜ヘリコプター飛行隊第３分隊のみのため、危急の時は数が足りなくなる。
もっとも、外人海軍部隊もエセックス級強襲揚陸艦を派遣するのだが、やはり数がある事に越したことはない。
そのため、ひゅうが型ヘリ搭載護衛艦を含む護衛隊群を派遣することになっている。
問題は何処の護衛隊群を出すかだ。
現在ひゅうが型ヘリ搭載護衛艦を保有する護衛隊群は２つある。
第１護衛隊群と第４護衛隊群だ。
しかしここで問題となるのは、東京の守りに付いている第１護衛隊群は動かすのは難しいだろう。

そして戦略予備的扱いの第４護衛隊群で問題はないのか？だ。
もっとも、既に結論は出ているともいえた。
第１護衛隊群は動かしたくても動かせないのだ。
その理由は、第１護衛隊群は別名「広報の１群」とも呼ばれており、最新鋭艦艇の配備が早いと共に、国民への公開展示などを行うことが多い。
そして、現在の日本の状況では国民の不満を和らげるための行事が予定されていたのだ。
これればかりはいきなりキャンセルは難しい、と言うよりも無理がある。
そうなると第４護衛隊群しかない。

そして、ここまで結論が出れば後の問題は補給だ。
片道で１週間、状況によっては多少前後するだろう。
その距離であればそれほど問題が無いように見えるが、燃料が問題になる。
民生を優先してるのもあり、自衛隊への割り当てはどうしても少なくなる。
最近ようやく灯油やガソリンが出回り、市民生活もよくなっている中で民生から削るわけには行かない。
仕方なく、国内に残る海上自衛隊の割り当てを削ることにする。
とは言っても当然、大幅には削れない。
そんなことをすれば訓練や哨戒など、必要な行動が取れなくなってしまう。

しかし、この問題は意外な形で解決することになる。

「よろしいのですか？」

伊庭は再度確認するように尋ねる。
今、伊庭の前にいるのは日本の石油エネルギー関連をまとめる石油連盟会長、大隈（おおくま）　茂久（しげひさ）だ。
「国難とも言うべき事態において悠長にし照られませんでしょう。我が石油連盟加盟企業全社は自衛隊に対しての燃料の提供をする用意があります」
大隈はそう言って、石油連盟に加盟している企業の署名を手渡した。
「しかし、民生、つまり国民に渡るべき分は受け取れませんよ？今が大事な所なのです」
喉から手が出るほど欲しいからと言って飛びつくほど伊庭は軽挙ではない。
何故大隈、いや、石油連盟がこの様に出たかを見極めなくては、後でとんでもない利息を吹っかけられかねないからだ。
しかし、伊庭の想像に反し、大隈はそんな素振りは見せなかった。
「とんでもない！我々はお国でやっていた備蓄政策のおかげで多少の蓄えがあります。民生に廻しつつも、自衛隊へ提供する分は残っております」
そう言って大隈は現在の石油関連企業の状況を説明する。

原油を発見、採掘を開始したことにより、その生産量も着実に上がっている事から国内は息を吹き返しつつある。
その上で、原油の月産量、そして国内、及びアルトリアやホードラーなどの大陸での使用量を差し引くと確かにまだ足りない。
だが、ここで鈴木が転移前に行った備蓄政策が生きてきていた。
日本の転移が起こりえると予測した鈴木が行った備蓄政策で、石油関連は思ったほど備蓄が集まらなく、絶望的とさえ言われていた。
だが、政府の行った備蓄政策以外にも、彼等石油関連企業、所謂「石油連盟」は独自に備蓄を開始していたのだ。
それは海外での紛争などで原油輸入が困難になったり、価格が高騰する事を想定したものではあったが、そのかいもあってそれなりの

備蓄が出来ていた。
また、今の原油の月産量が少なくとも、今後の月産量向上が見込めることから、国内備蓄を上手く廻すことにより破綻を来たさぬ様にできる。
現在の産出量と消費を計算した上で備蓄を廻せば最大で6ヶ月は問題なく民生に廻しつつ、消費にも対応できる。
この話を聞いた伊庭は正直なんと言えばいいのかわからなかった。
企業が政府に指示された備蓄以上に原油を確保していたのはうれしい誤算だが、逆に見れば政府への報告が虚偽であったとも見れるのだ。
それが早い段階で分かっていれば、今まで燃料の問題で頭を悩ます事もなかった、いや、軽減できたであろう。
だが、大隈たちの考えも分かる。
いつ、原油がどうなるか分からない中での企業としての予防努力、リスクマネージメントとも言えるからだ。
また、最初から分かっていればどうだったろうか?
湯水の如く使う選択肢は無くとも、国民はまだあるからもっとだせ、となっていたかもしれない。
あくまで結果論ではあるが、それが良い方向に結果が出ているのでは責めることは難しい、いや責められない。
「・・・正直、色んな言いたいことはありますが・・・」
伊庭は机の前から歩み出て大隈の手を握る。
「助かります。これでこの国は救われる!」
内心複雑な思いがあるが、伊庭にはこう言うしかなかった。
勿論相手も企業家だ。
当然見返りを求めてくるだろう。
しかし、大隈は見返りなど要らなかった。
それは、アルトリアでの原油採掘に自分たちを使ってくれたことと、将来的にその採掘権の民間への委譲が確約されているからだ。
ある意味、先に恩を受け取っているのだ。

ここで返さねば企業人として恥にしかならない。
何も企業は利益だけを求めているのではない。
ちゃんと恩には恩で応えるし、義理には義理で応えるのだ。
そして大隈は企業家として辛辣な人物であると同時に、義理堅い人物でもあった。
今回の為に内密に備蓄したものを供出するように各企業を説得までしている。
「後はお国次第です。この日本を滅ぼすも、復活させるのも・・・」
大隈はそう言って伊庭の前から去っていった。

伊庭の報告を聞いた鈴木や伊達も、大隈の話には複雑な思いがしていた。
だが、これほどありがたい話も無い。
「これで南部平定の問題の一つが解決したな」
伊達は何とも言い難い心境ではあったが、一定の目処が立ったことは心配の種が一つ無くなったことになる。
それは諸手を挙げて受け入れるしかない。
「確かにな。増産も順調のようだし、原油の問題は予定外のことがない限り解決した、と見ていいだろう」
鈴木も安堵の表情だ。
後は南部平定がどれだけ短時間で終えられるか？
これが最大の問題だった。
これが長々と時間をかければ、幾ら燃料の問題が解決しても資源問題は解決しないのだ。
石油製品による代用も可能だろうが、やはりそれだけで全てが解決するものではない。
閣僚からは「南部平定を止めてもいいのでは？」と言う意見も出たが、元々鉱物資源の確保と、ゴムなどの天然資源の確保が目的なのだ。

止めることは出来ない。
「少なくとも湯水の様に、とは行かなくとも自衛隊の展開には問題がなくなったな。これなら北野君の謀略と合わせられたならば短期でけりをつけられる」
勿論油断は出来ないし、短期で終わらせる努力はすべきだが・・・と伊達が言った。
鈴木はそれに頷きながらも、短期で終わらせる為に食料補給路である海上封鎖を行うことに不安があった。
それは南部貴族連合だ。
万が一、備蓄が十分であるならば、そこを叩かなければ相手の戦意を奪えない。
また、よしんば成功したとして、南部に住む民衆も苦しめることになる。
それが日本に禍根となりえるのではないか？と思ったのだ。

だが、どちらにしてもこの鈴木の不安は後に裏切られることになる。
この時の鈴木は貴族と人間の多くがどう言った存在なのか？
それを知らなかったのだ。
日本に取っては良い結果になるのだが、その時になって鈴木は王族、貴族といった物に不信感を持つことになる。

第５１話「漂流」

ーーホードラー南部　諸侯領

北野より南部貴族連合の切り崩しを請け負ってから2週間、その僅かな間にレオナルドは既に7家の切り崩しに成功していた。
正直、レオナルドは見て回った限りではあるが、内情を見るに前線に近い貴族ほど困窮しているのがわかる。
何時起こるか分からない前面戦争、そして中央から得られていた食料の交易が途絶えて約半年、解かれることの無い動員・・・。
それらは前線とも言うべき、矢面に立たされる領地ほど厳しい現状がある。
元々、大諸侯というべき大きな領地を持つ貴族ならばともかく、小さな領地しか与えられていない諸侯では、対面を保つだけ、食っていくに困らない程度の実入りしかない。
鉱山経営自体も、それなりの規模の諸侯では大々的な投資も出来ずに細々とやるしかない。
そのため、領地の安堵を持っての確約よりも身の安全と手持ちの資産（領地は除く）の保障、そしてそれなりの資金の方が喜ばれた。
ここまで見て回ったレオナルドは確信していた。
この南部貴族連合なる集団は一握りの大諸侯による利権の保全が目的であり、それ以外の小規模な諸侯を食い潰すのが目的なのだ・・・と。
そしてそれが可能なのか?という点についても南部最大の都市であり、ホードラー唯一の港湾を持つホーランド侯爵領ディサントが食料の荷揚げ地であることからも狩野なのだと結論付けられた。
そのため、レオナルドが切り崩した、と言っても機会があれば即寝返っただろう小貴族でしかない。

逆を言えば大勢に影響しない、毒にも薬にもならない存在ばかりだ。

また、日本に対抗すべく山地にいくつかの砦を森の中に目立たぬよう配置されている。

それらはどれも木造の急造されたものだが、森の中であるのもあって風景に溶け込んでおり、山の上から見ただけでは発見は難しい巧妙なつくりをしていた、

更にその砦はどれも大諸侯の息のかかった者が、その周りに住まう小貴族の資金でもって駐屯している。

兵は普段そこに居て、必要ならば前線に向かう形なのだろう。

このことから考えるに、普段から全軍が集結しているのではなく、幾つかの砦に分散配置され、時がくれば一気に集結して敵を叩く戦法なのだろう。

山岳、森、これらが敵の動きを抑制し、何処か一つが攻撃を受けた時に森の中に作られた各砦から、これまた森の中に作られた整備された道を使って即座に集結する。

これは正直言って厄介な構造である。

下手な手出しは、逆に包囲殲滅の憂き目に合うからだ。

レオナルドは日本はこの厄介な敵に、どう挑むのかが気にかかっていた。

「思った以上に備えを怠っていない。やはり数度の小競り合いで日本軍の実力を測っていたのだろうか・・・？」

ハッキリ言って軍事に疎いレオナルドが結論を出すことは出来ない。

だが、素人目に見てもこの備えは日本を苦しめるのではないか？

更に日本が勝てるかどうかも怪しい物を感じさせるのに十分だった。

しかし、レオナルドにそこから逃げるすべは無い。

フェイが救われていたこともあるが、日本の実力が見てきた限りである保証も無いからだ。

何より、短期間で制圧下にある領域を開発、整備し、その環境を大いに向上させてきたのだ。

軍事力だけでなく、技術力、教育、法整備や制度、どれもが洗練された（あくまでも彼視点では）物だ。
要は国力がホードラーの幾倍、いや、ホードラーに限る事ではない。
あのファマティー教に長年抵抗してきた帝国・・・グラングルカ帝国よりも圧倒的に国力が勝っている。
大陸でも上位５国の一国に数えられる帝国よりもあると予想できるのだ。
それはバジル王国がバジル領であったころから内政に携わってきたレオナルドだから見えてくるものだ。
その日本が、苦戦はしても負けるとは到底思えない。
結局のところ、戦争とはどのような形であれ国力の高い方が勝つようになっている。
国力の差を覆すには「天才」と呼ばれる名将や宰相、名君と呼ばれる王、そして長年にわたっての下準備が必要なのだ。
一朝一夕で国力の差を覆すなど夢物語に過ぎない。
それでも必ず、とは言えないのが国力の差だ。
その国力で考えるならば、日本は底が知れない。
何よりも、日本はアルトリア地域を手中にしているが、そこが本拠地ではないのだ。
あくまでもアルトリア地域、いや、大陸にいる日本は本国より派遣された「一部」だと言うのだ。
それだけを持っても、日本の国力の高さは大陸でも頂点に位置するのだろう。
「・・・日本が勝つも敗れるも私が考えるべきところではないな」
レオナルドはそう呟くと、次の目的に向かって馬を走らせた。
今の彼に出来るのは、日本の勝利、ただそれを成すための幾つもある手段の一つに過ぎないのだから・・・。

ー日本国　尖閣諸島沖

レオナルドがホードラー南部で活動し、日本は着々と南部平定に向けた準備を整えている頃、新たな問題がおきていた。
転移前は難しかった尖閣諸島の資源調査、開発が始まっていたことにより、日本はその周辺の海洋調査、及び周辺の探索を行っていたのだが、その海洋調査中に思わぬ出来事が起きたのだ。

この時、海洋調査を行っていたのは「にちなん型海洋観測艦にちなん」と、その護衛に付いていた「はつゆき型護衛艦はるゆき」と「同型艦あさゆき」だ。
「はるゆき」は随時、艦載ヘリであるＳＨー６０Ｊが飛び立ち、周囲の状況を観測、監視していた。
そのような状況の中、はるゆき艦長である内海（うつみ）　春樹（はるき）中佐の下に報告があったのは昼食も終わり、さて午後の仕事を、という時だった。
「艦長、レーダーに感、方位２－１－２、距離８０（ｋｍ）の海上」
即座に艦内電話をとりＣＩＣと繋ぐ。
「何か？」
ＣＩＣの船務長からの報告に内海は問い質す。
「・・・船、だと思われますが、速度６ノット、進路北北西に向かっています」
内海の問いに船務長は躊躇いがちな報告をする。
この辺りで操業している漁船は無い上に、その他民間船舶は存在しない。
また、いまだ海上封鎖の艦隊派遣も行われていないので、当海域に艦艇があるはずもない。
ましてや、艦艇であるならばＩＦＦ（敵味方識別装置）に反応があるはずだ。
「６ノット？随分遅いな・・・」

内海は速力の遅さが気になった。
今時の船で６ノットの速力では非効率的だ。
最大、とは言わなくとも巡航で１０以上は容易に出る。
「通信はは通じないのか？」
次に所属を確認するために通信の有無を聞く。
「さまざまな周波体を試しましたが・・・応答なし」
ここまで来ると正直困った話になる。
この世界の海は今までの世界と違う。
どんな生き物が生息するのかも分からない上、それが脅威になるかどうかも分からない。
当然、「にちなん」の護衛に付いている今、万難を排して望まねばならない。
内海は少し考えると上空にいるＵＨ－６０Ｊを確認に向かわせることにした。
「ツバメに連絡、本艦より２－１－２、距離８０の海上に船舶らしきものを発見、至急確認に向かえ」
内海の指示は復唱の下、通信科要員よりＵＨ－６０Ｊに伝えられる。
その指示を聞いたＵＨ－６０Ｊ、ツバメは安田（やすだ）　敦（あつし）機長により一路、不審船舶に向かう。

「機長、なんですかね？これ？」
隣に居る飛騨（ひだ）　友二（ゆうじ）は眼下の海上に浮かぶ物体を見て安田に尋ねる。
「どう見ても帆船だろ」
見たままの様子に安田は冷静に答えるものの、その状態を見て帆船と言って良いのかハッキリ言って自身がもてないのも事実だ。
彼らの下の海上にはぜんちょう３０ｍ程度の帆船だと思われるものが浮いている。
しかし、その船はメインマストが船尾付近にあるのだ。
そして補助用のマストが船の横に出ているのだ。

従来の帆船とは似ても似つかない、そんな風体だ。
ちょうどメインマストを中心に左右に帆がある姿から、船に大きな扇子をくっつけた感じがある。
しかも、その船は嵐にでもあったのかいたるところが損傷しており、見た目の状態から幽霊船に見えなくも無い。
「機長、甲板に人影あり！」
飛騨の指差す方向には船員だろうか？
人らしきものがうつぶせに倒れこんでいる。
「はるゆき、こちらツバメ、対象は帆船と思われるが損傷激しく漂流中と思われる。至急救助の必要ありと思われます」
倒れた人らしきものに安田は即座に反応し、はるゆきに一方を入れる。
遠目から見てもかなり危険な状態に置かれているのが見て取れたのだ。
しかし、普段と違い、要救助な状態にもかかわらず「はるゆき」から意外な指示が来る。
『はるゆき了解、本艦到着まで現状で待機せよ』
安田と飛田は互いに顔を見合わせた。
後ろのキャビンには2人の隊員がいる。
それを降下、救助活動を行わずに待機と返ってきたからだ。
「こちらツバメ、もう一度確認する。待機と言ったか？」
聞き間違いであって欲しい、そんな一年を打ち砕いたのは艦長の内海だった。
『こちら「はるゆき」艦長の内海だ。申し訳ないが待機である。現状を維持せよ』
再度の通告に安田は怒り心頭だった。
まだ救えるかもしれない命が目の前にあるのに待機とは！
何を考えての指示か全く理解できなかったのだ。
「再考を願います！」
必死に感情を押さえ込むが、やはりどうしても抑えきれない。

だが、必死の要請にもかかわらず内海は頑なに許可を与えなかった。
『現状待機だ。申し訳ないが以前の世界ではない。何があるかも分からない状況で危険を犯させるわけにはいかん』
以前の世界ならば常識的な行動でも、この世界では違う、そう言っていた。
その言葉を耳にしながらも、安田は納得が行かず歯噛みしている。
だが、命令は命令だ。
ここで命令を無視するわけにもいかない。
それが組織だ。
一人の勝手な行動が、全体への危機に発展することは防がねばならない。
「・・・了解、現状のまま待機します」
安田は無念をこらえ切れない表情で船をみる。
人影は幾つも見えたが、みな甲板に倒れこんでいる。
僅かながらに動いている者もいるが、現状では手を出せない。
「くそ・・・何のために俺たちは居るんだ・・・！」
悔しさを隠そうともせずに安田は血も流れんばかりに唇を噛んだ。
そんな安田にどう声をかけていいか分からないひだは、ただ沈黙するしかなかった。

第５２話「帝国から」

ー日本国　総理大臣官邸ー

尖閣諸島南方沖で発見された船舶の情報は直ぐに海上自衛隊佐世保基地へ送られ、そこから幾つかを経由して鈴木の元に届けられた。
「なに!?ふむ・・・ふむ・・・」
防衛省の伊庭は鈴木に急遽連絡を居れ、鈴木は電話を片手に伊庭の報告を聞いていた。
その様子を見守る伊達も、突発的自体がおきたことを認識し、閣僚に連絡を取っている。
「現在の状況は?・・・いや、直ぐに救助を行うんだ」
どうやら伊庭は慎重論を唱えているようだったが、鈴木は大胆に行動すべきだと主張していた。
もしかすれば、それが元で国交をまともに持てるかもしれない。
淡い期待ではあるが孤立状態を続けている日本にとっては期待せずにいられないのだ。
「そうだ。監視は着けるが国内へ連れて来て構わん」
鈴木はそう言うと伊庭に頼む、と言って電話を切った。
すかさず、伊達が何がおきたのか確認する。
その伊達に鈴木は興奮冷めやらぬ様子で答えた。
「尖閣の南の海上で船舶が発見された。しかも、作りからホードラーの物とは違うらしい」
鈴木の言葉に伊達も目をむいた。
ここに来て別国家の物と思われる船舶との遭遇なのだ。
「それはまた・・・だが、まだ可能性なのだろう?」
まだ断定はすべきでない、と伊達は鈴木を諭すが、鈴木としてもそうであって欲しい、と願わずには居られない。

「確かに詳しいことはこれからだ。だが、可能性だけなら大いにある」

詳しい写真と救助した乗員の警護、監視を警視庁に指示すると共に、船舶の専門家を呼ぶ必要から、適当なのを選んで欲しいと鈴木は付け加えた。

それから1時間もしない内に伊達の元に写真が送られてくる。

わざわざ電送してきたようだ。

「これが問題の船か・・・」

一見すると船体に扇子のような物をつけた形状に思える。

専門家によるとそれは非常にバランスが悪く、遠洋航海には向かない船だった。

江戸時代に日本で活躍していた千石船の帆を左右にも張り出した物、とも言える。

それでも、千石船などは基本的にバランスを保つために中央付近に帆を張るが、船尾に張る船など利いたことが無い。

ホードラーの船も例に漏れずに中央付近に帆を張り、帆船としてはスループと呼ばれる船に近い。

スループとは一本マストではあるが、横帆（船の中心線と交差する方向に帆を張るもの）ではなく縦帆（船の中心線に沿う方向の帆）と、幾つかの帆で構成されている。

ただし、ホードラーの船はスループに似ている、近いだけで明確にスループではない。

しかし、今回発見された船舶は比較的「千石船」や「ダウ」に似ているのだ。

恐らく違う文化圏で作られた船、と考えるのが妥当に思えた。

「とりあえず、乗員は全部で17人、内9名が既に死亡、8人が重態で尖閣の臨時開発病院へ緊急搬送しています。また、生存者8名のうち3名が意識不明、5名は意識はあるものの衰弱が激しいとの

事です」
阿部が会議で動けない伊庭に代わって、伊庭からの報告書を読み上げる。
それを聞いていた加藤は意識のあるものに事情は聞いたのか?と確認を求めてきた。
「救助したばかりらしいので詳しいことはまだのようです。ただ・・・」
報告書を見ながら答える阿部は一瞬言葉に詰まった。
そこに書かれていた一文が見間違いに見えたからだ。
しかし、阿部が何度読んでもその文章が変わることは無い。
「どうした?続きは?」
伊達が催促する。
それに阿部は震える声で続きを答えた。
「・・・乗員は・・・グラングルカ帝国から我が国への特使・・・と名乗っている・・・そうです」
それは鈴木の期待が現実のものとなった瞬間だった。

誰もが信じられない思いだった。
特使、そう聞こえたからだ。
何度も確認の為に問い直しても同じ答えだ。
ここにきて新たな国家との出会いに鈴木は興奮していた。
だが、そこで伊達が注意を促す。
「まて、喜ぶのは早い。特使は特使でもホードラー王国の時と同じかもしれんぞ?」
伊達の一言で、室内は一気に静けさが支配する。
かつて日本に従属を要求してきたホードラー王国のことが思い起こされたからだ。
「・・・たしかにな、だが、グラングルカ帝国・・・どこにある国だ?」

外務大臣の加藤は、初めて聞く国名に戸惑っていた。
衛星を打ち上げたことにより、この世界が以前の世界と全く同じ大きさであることは分かっている。
また、この時に日本の緯度経緯が図られたが、それも以前の世界と一致しているのが分かっていた。
更に衛星写真から大陸なども確認されており、ホードラーのある大陸とは別に、他に6つの大陸があることも分かっている。
しかし、国名までは地表に大きく書かれているわけでもないので、いきなりグランングルカ、と言われてもさっぱり分からないのだ。
「・・・たしかに場所まではわかりませんなぁ・・・」
阿部も報告書に書かれていないか見てみたが、当然書かれてなどいない。
乗員に確認してもらっては?と言う提案もあったが、正確な、どころかいい加減な地図しか無かったこの世界のことを考えれば、衛星写真をみせて何処にある?と聞かれても答えられないだろう。
ましてや地図はこの世界では軍事機密に等しい扱いだ。
地図を見た事のある物も軍関係でなければ先ず見たことがあるまい。
「とにかく、状態が良くなるまで様子を見るしかないと思われます。それから話を聞いてみては?」
加藤の提案に鈴木はそれで行こう、と結論を出す。
「後は、一体何の用で来たのか?だな・・・」
伊達はそういいながら、漠然とした不安があった。
彼らは日本への特使という。
しかし、日本の場所を知る者は日本人以外この世界にいるはずが無い。
そもそも、この世界の人を日本に連れ込まなかったのは場所を特定させないためだった。
それは、日本が島国である以上、海から攻められては面倒だったからだ。
平和な状態が確保できない限り、日本の防衛力を大陸に送らざる得

ない。
その結果、日本の防備は低下しているのだ。
勿論、航空、海上自衛隊はその大半が日本におり、一応海上保安庁もある。
しかし、日本の保有する海域は広大で、現状の持てる航空機、船舶すべて使ってもカバーしきれたものではない。
だから海からの敵を警戒したのだ。
なによりも、日本の食糧事情から漁師には優遇して燃料を与え、操業して貰っている。
その無防備な漁師に被害があっては堪った物ではないからだ。
それが伊達の不安だった。

「何の用・・・と言っても交渉目的以外で特使を送りますか？」
加藤は怪訝に思っていた。
特使を送るならば交渉が目的のはずだ。
勿論、交渉の皮を被っての恫喝はありえる。
しかし、それもまた交渉の一形態に過ぎないと言えば過ぎない。
その加藤の考えとは別に、鈴木が一番恐れている事態を口にした。
「・・・破壊工作・・・が目的の場合もありえるな」
先程まではやや興奮していたが、伊達の一言で冷静さを取り戻した鈴木は、単純に額面どおり受け取ってはならないことを思い出していた。
特使といいつつ、破壊工作を行うテロリストかも知れないのだ。
なにせ、この世界に国際法なるものは無い。
日本は国際法が存在しない、つまりある意味「何でもあり」の世界に来ているのだ。
安易に考えるべきではない。
「そうなると、救助、は早計だったかな？」
自分の考えで指示したこととは言え、失策だったかもしれないのだ。
しかし、伊達は首を横に振った。

「いや、あの状況下で見捨てる訳にも行くまい。それに、尖閣に収容したのはある意味好判断と言える」
伊達は鈴木に芽生えた不安を振り払う様に自身の考えを口にする。
尖閣ならば広さはない。
四方を海に囲まれた島である以上、日本本土よりも逃げ場が無い。
また、今の尖閣は資源調査の名目で自衛隊や調査員が言っているが、民間人はいないのだ。
被害は宰相にとどめられるだろう。
「悪い方にばかり考えていられんな。とにかく、そいつらの回復を待って話を聞くとしよう」
伊達は、閣僚の中に芽生えていた不安を打ち消すためにそう言った。
閣僚たちが下がった後で、鈴木と伊達は救助したグランングルカ帝国の特使から話を聞くのは誰にするか?で話し合っていた。
はっきり言って、日本本土までつれてくるのは危険だ。
万が一、破壊工作員、またはテロリスト、そして敵対の意思を持っていた場合が怖いのだ。
ようやく国民の生活が戻りつつある中でテロをされたら鈴木たちに取って致命傷になりかねない。
また、万が一敵対の意思を持っていた場合、日本本土の位置を教えてしまうことになる。
勿論いずれは知られるものだが、せめてホードラー南部の平定が終わった後でなければ防衛にも事欠く有様だ。
国民の中から自衛隊への入隊が増えているものの、それが使い物になるのは当分先になる。
ならばリスクは出来る限り抑えていかねばならない。
それを考えると尖閣で事情を聞き、交渉するとなっても尖閣で行うべきだろう。
ただし、そうなると今度は誰をおくるのか?となってしまう。

閣僚はそれぞれ国内に関する問題などを抱えている。
安易に出向けるものではない。
そして、相手によってはその対面を保つためにそれなりに高い地位にいるものを送る必要もある。
まさか事務官を送りつけるわけには行かないし、事務次官も駄目かもしれない。
本当に頭の痛い問題である。
「・・・俺が行くべきだと思うがなぁ」
しまいには官房長官の伊達が行く、と言い出していた。
流石に鈴木もそれは困る、と押しとどめるが、相手の対面を保ちつつ、緊急時には行動できる人物は伊達か伊庭しかいない。
流石に外務大臣の加藤では前者はともかく、後者は無理だろう。
伊庭ならどうか？と鈴木派言うが、伊庭も伊庭で南部平定に向けた準備で忙しい。
とてもではないが動けまい。
つまり、鈴木が幾ら代案をだそうと、最終的に伊達しかいないのだ。
だが、この人選にも実は問題がある。
伊達はタカ派と呼ばれるだけあって、かなり強硬な人物だ。
暴力こそ振るわないが、激昂すると何を仕出かすか分かったものではない。
そう言った悪癖も持っているのだ。
だが、実際に交渉に望むだけならば、現状は伊達しかいない。
「・・・正直言って賛成しかねるが・・・」
鈴木もついに折れることになった。
不承不承と言った感じで認めることになる。
「なに、心配は要らん。最悪、相打ち覚悟で何とかする」
そう言って豪快に笑い飛ばすが、その様子には不安しか沸かない。
希望を言うならば、相手が敵対的でないことを祈るしかなかった。

第５３話「医者と患者」

ーー日本国　尖閣諸島　資源調査開発施設

救助した特使を収容してから2日。
尖閣諸島で働く職員の為に作られた設備、臨時開発病院。
そこに収容されたグランングルカ帝国の特使一向は山本（やまもと）　完治（かんじ）医師の治療の甲斐あって、危険な状況からだ知っていた。
「先生、政府の方が見えられています」
丁度カルテをパソコンに打ち込んでいるとき、看護士がやまもとを呼びにきた。
途中なのもあって手を止めたくないが、来た以上は拒否も出来ない。
そのため、すぐ行く、と答えてデスクから立ち上がった。
「やれやれ、ウチの政府はこっちの都合は考えないしなぁ」
ぼやきながらもやまもとは仕事のうち、と割り切ってはいた。
こんな事は東京の救急救命センターで働いていた頃に良くあったことだ。
こっちの都合はお構いなしに次から次へと患者が来ていたのだから。
それに比べればここでの仕事は退屈なくらいだった。

「お待たせしました」
身形を整えてからホールに来た山本は政府から来たお偉いさんに手を差し出す。
相手も、お疲れ様です、と言って手を取る。
しかし、その顔を見た山本は驚くしかなかった。
鈴木総理の懐刀と呼ばれた伊達がいたからだ。
まさか、こんな辺境と言うべき場所に来るとは思いもしなかったのだ。

「こ、これは官房長官、こんなところまでご苦労様です」
先程までの憂鬱さが一気に吹き飛んでいく。
ＴＶの向こう側でしか見たことの無い御仁の登場に流石の山本も緊張していた。
「早速で申し訳ないのだが収容された人達の容態は？」
伊達は今の状況を知りたかったので、挨拶もそこそこに聞いてみた。
山本は少し考える仕草をしてから答える。
「容態は安定しています。当初衰弱が激しかった為、危険な状態でしたが・・・何とか持ち直しています」
山本はそう言って脇に抱えていたカルテの写しを見せる。
伊達は一応見てはいるが、流石に何が書いてあるかさっぱり分からない。
とりあえず分かった不利をしつつカルテを返した。
「話はできそうかな？」
とりあえず話をしなければ何をしに来たのかも分からない。
そのため、状態が安定しているなら話を聞こうと思っていたのだ。
しかし、山本は首を横に振った。
「衰弱が激しかったのもあり、まだ眠ったままですね。意識のあった人もよほど体力を消耗してたのか、あれから眠ったままです」
山本の答えに伊達は目覚めたら連絡を、と言い残し後を任せることにした。
まだ眠っているなら、今ここで出来ることは無い。
何時目を覚ますか分からないが、目を覚ますまでに曳航されてきた船を確認するために港に向かうことにした。

伊達が病院から港に向かってから1時間余りが経過したころ、臨時開発病院の病室で眠っていたカディス・クロイツァーが目を覚ました。
薄ぼんやりとした視界の中、見たことも無いほど綺麗な白だけが目

に入る。
（ここは、天国なのか？）
はっきりしない頭でそんなことを考えるカディス。
しかし、自分がどうしてここにいるかを思い起こそうとする。

使命を帯び、国を出て約3ヶ月。
素性を隠し交易船の振りをしつつ、一路東をを目指した一行は途中で何度も危機を乗り越えてきた。
しかし、何処にあるか分からない目的地に、一向は疲れ果て、何人もが病に倒れ、その都度人数を減らしながらも目的地日本を目指す。
だが、いつの頃だったかに命運は尽きた。
嵐に出会ったのだ。
元々祖国の船はファマティー教との争いに敗れたことにより、長距離航海の出来ない沿岸航行用の船しか保有を許されなくなった。
領土の約半分を奪われた故郷を救うためとはいえ、そんな船で3ヶ月も航海し、その結果が嵐に遭遇する。
この不運で完全に自分たちは水や食料を失い、最後の力を振り絞って陸地があると思われる方向を目指した。
だが、努力の甲斐なく、陸地を見ることなく彼らは力尽きた。

そこまで思うと漸く意識がハッキリしてくる。
と、同時に自分たちの不甲斐なさに涙がにじみ出てきた。
その悔しさを思うと情けなくなってくるのだ。
「皇帝陛下・・・国を救う手立てを得る事無く天へ来てしまった我らをお許しください・・・」
思わず嗚咽が漏れてくる。
うずくまるように身を縮めて涙を流すカディス。
しかし、そこで彼は異変に気付いた。
自分の左腕から、妙な紐らしきものが生えていた。
当初は変な病気か？などと思うが、身を起こして辺りを見回すと何

かの一室のように見える。
左右には誰かは分からぬが、人の寝息が聞こえてくる。
「ここは・・・？何処だ・・・？」
そう呟いたカディスは自分が寝ていた場所を見る。
見たことの無い作りのベッドだ。
木材ではなく、金属と見たことも無い物質（強化プラスチック）で作られたベッド、そして自分の腕から生えている紐の先には妙な液体が入った容器。
思わず慌てて紐を引っ張ってしまう。
するとあっさり自分の腕から抜け落ちる。
だが、乱暴に引っ張ったため、鋭い痛みと共に腕から血が流れ出していた。
しかし、ベッドの布を引きちぎり止血すると腕についていた紐を見る。
それは、先端が金属で出来た針だった。
そして針の先から容器の中身なのだろうか？
液体がベッドの上で染みを作っていた。
「まさか！？毒か！？」
完全に思い違いをしているカディスだったが、そもそもこの世界に「点滴」なるものは存在しない。
ましてや、医療技術も日本とは段違いに遅れている。
その意味では彼の反応はしごくもっともな物だった。
だが、彼にしてみればたまったものではない。
何をされたのか、何を身に流されていたのかなど知る由も無い。
当然慌てて止血した布を更にキツく縛り、毒（点滴の中身、大抵はブドウ糖などの栄養）の進入を防ごうとする。
だが、冷静になれば、毒であったならとっくに死んでいると気付くものである。
しかし、今の彼は見知らぬ場所で、見知らぬことをされていたのだ。
半狂乱、とは行かなくともパニック状態に陥ってしまったのも無理

は無い。
必死で腕を縛り上げるカディスの病室に、山本が来たのはそのときだった。
ドアが開く音にドアに目を向けるカディスと、ベッドの脇で必死に腕を縛る病人の姿を見る山本。
二人の視線が合った時、なんとも言いようの無い空気が流れていた。
だが、一瞬にして山本は状況を把握する。
伊達や酔狂で救急救命センターと言う戦場で命を相手に戦ってきた男ではない。
すぐにカディスに飛び掛ると腕を縛ろうとするのを止めさせようとする。
「な、何をするか！」
「馬鹿な事はやめなさい！」
二人の叫び声が病院に響き渡る。
と同時に警護に当たっていた自衛官が小銃を持って病室に飛び込んできた。
「先生！？」
二人のもみ合いを目の当たりにした自衛官は山本に声をかける。
山本は誰かは見てなかったが、人が来たことを知ると同時に叫び声を挙げた。
「患者が錯乱している！取り押さえるのを手伝ってくれ！」
必死なのはカディスもそうなのだが、山本はカディスが錯乱を起こしたと思い彼以上に必死になる。
命を救うために必死に命を追いかけてきた山本だからこそ、如何なる歴戦の勇でも敵わない程の迫力を持っていた。
「落ち着くんだ！そんな事をしても体を傷つけるだけだ！」
山本の必死の言葉に自衛官も一緒になって取り押さえつつ声をかける。
そうやっている内にドンドン人が集まっていき、１０分もしない内にカディスは完全に押さえつけられた。

暫らくして、山本たちの必死の声かけもあって、漸く落ち着きを取り戻したカディスは山本（自衛官二人も同席の下）と病院の休憩室で相対した。

「落ち着いたかい？」

山本はカップに入った緑茶を差し出す。

カディスは恐る恐るそれを手に取り、中を覗き込む。

今まで嗅いだ事の無い不思議な匂いだ。

湯気が出てることから熱いのだろうとは予想できる。

だからカディスは少しづつ飲もうとしたが、熱くて飲めたものではない。

ふと山本と名乗った医者を名乗る男を見る。

彼は美味しそうにお茶を啜っていた。

その様子にカディスは下品だ、と思っていたが、山本はその視線の意味に気が付いていた。

「ああ、君たちはすする、と言うことをしないんだね」

そう言って山本は冷蔵庫からペットボトルに入ったお茶を取り出し、別のカップに注いで渡した。

カディスはそれを受け取ると少しだけ飲む。

先程飲もうとしたお茶と違い、今度のは冷たい。

しかも山の湧き水のような冷たさだ。

渋みがあり苦い飲み物だったが、不味くは感じない。

むしろさっぱりとした苦味だ。

そして今度は一気に飲み干す。

喉が渇いていたのもあり、飲み込んだお茶が喉を潤していく。

「・・・ふぅ・・・」

思わずため息が漏れる。

そんなカディスの持つ空のカップに山本がまたお茶を注いだ。

「人心地ついたみたいだね。気分はどうだい？」

山本の温和な言葉に、緊張しっぱなしだったカディスもここに来て

緊張を解いた。
「悪くない。それよりもここはどこなんだ？」
カディスの答えと、場所を尋ねる質問に山本は静かに答えた。
「尖閣諸島の病院だ」
だが、ここでもお互いに食い違いが発生する。
何故ならばこの世界に医者はいても病院なるものは無いのだ。
医者は患者の求めに応じて患者の家に出向く、それがこの世界での医療なのだ。
そればかりか、殆ど治療らしい治療も出来ない。
本当に簡単な怪我や、ちょっとした病しか対応できないのだ。
それでもちゃっかりと代金だけはとるので、お金のない者は医者に見てもらうことも出来ない。
「ビョウイン？とはなんだ？」
聞きなれない言葉にカディスは首を傾げる。
それを聞いた山本は簡単に、それこそ子供に聞かせる様な説明をする。
と、言うのも、元々この世界に存在しないものを説明するのに、自分たちの常識で説明しても通じないからだ。
山本はそれに関して幾らかの経験がある。
とは言ってもこの世界ではない。
日本が元々存在していた世界での話だ。
彼は何度か、ＮＧＯとして活動したことある。
そのとき、現地の人が知らないものを教えるときにこうやってきたのだ。

それを聞いたカディスは驚いていた。
患者が、ビョウインなる施設にきて治療を行い、すぐに直らない、もしくは動かすのが危険な患者を寝泊りさせて夜も昼も無く治療に当たるということにだ。
彼の知っている医者という物は、ちょっと診たら薬だけ置いてお金

を貰って帰ってしまう。
しかも馬鹿高いだけで直らないこともしばしばあるのだ。
そのため彼は、山本を国一番の名医と勘違いしていた。
「貴方は大変優れた医者なのだな」
カディスのこの言葉に山本は首を横に振った。
「私は平凡な方だよ。私より優れた医者はこの国にはたくさんいる」
救命救急センターで働いていたこともあり、救える命はたしかに多かったが、救えぬ命もまた多かったのだ。
実際、彼は技術を持った優れた医者だ。
だが、同様に彼以上に技術を持った優れた医者はたくさんいるのだ。
「そんな馬鹿な！貴方が平凡な医者なら我が祖国の医者はなんになるのだ！？」
カディスはそう声を荒げるが、山本は優しく答えた。
「この国ではそんなものだよ。君の国の医者がどんなのかは知らない。しかし、この国では普通のありふれた医者の一人に過ぎないんだ」
山本の言葉に愕然としてしまうカディスだったが、それで納得するしかなくなってしまう。
何故ならばそう語った山本の目に深い悲しみを見たように思えたからだ。
それだけ多くの人の死を診てきたのだろう。
「詮無きことを言った。すまない」
思わず頭を下げる。
だが、山本は患者を助けるのが医者の仕事だよ。
とだけ答えた。
カディスから見ればそれは人として尊い存在に見える。
それだけこの世界の医者は酷いのだろう。
だが、それは日本が、と言うよりも元の世界の医療は、多くの犠牲の上で成り立っている歴史があるからだ。
この世界にはまだそれが無い、ただそれだけなのだ。

「ところで、私の仲間は？」
ふと、思い出したようにカディスは自分の仲間お安否が気になった。
だが、山本の口から悲しい報せを受け取ることになってしまう。
「・・・詳しくは知らないが、君の乗ってた船が発見されたとき、１７人中９名の死亡が確認されている」
その知らせには言葉が出ない。
出しようが無いのだ。
共に国を救わんと船出した仲間。
その内、生きてここまで辿り着いた者の半数以上が二度と祖国の土を踏めないのだ。
「そうか・・・国を出たときは３０人もいたのに・・・」
その呟きは、彼がどれだけ過酷な航海を仲間と共にしてきたのかを伺えさせた。
だが、同様に希望もあった。
「君を含む残った８名は無事だよ。ただ、かなり弱ってたからまだ暫らくは眠ったままだろうね」
山本課の言葉にカディスは少しだけ喜んだ。
まだ無事な者がいた。
それだけでもうれしいことだ。
まだ、自分たちは生きている。
生きている限り敗北ではない、と思っていた。
だが、そうものんびりしていられない事情が彼にはあった。
「そうだ、誰か船を貸してくれる、もしくは出してくれる人はいないか？」
完全に信頼しきっているのか、山本にたずねるカディス。
だが、山本は船の有無は答えれても貸す、出すの判断はできない。
権限が無いのだ。
「うーん、どうだろうねぇ船はあるけど・・・そもそも何処へ行くんだい？」
答えを曖昧にしつつ、山本は逆に質問する。

それにカディスは素直に答えた。
「我がグランングルカ帝国と皇帝陛下の恩為に日本と言う国に行かねばならないのだ」
堂々とした態度と言葉に山本は何と答えて良いのか分からなかった。
ふと警護に着いている自衛官を診るが、自衛官も困った表情をするしかない。
「どうしたのだ?分からないのか?」
急に不安を持ったカディスを安心させる必要もあり、山本は後で怒られるのを覚悟で答えることにした。
怒られるで済めばいいが・・・、と思いつつ・・・。
「なら、君の旅はここで終わりだ」
山本の一言は、カディスに警戒心を再度持たせてしまう。
「・・・どう言うことだ?」
声に緊張がこめられ、殺気もあるのだろう。
室内の空気が妙にピリピリとしてくる。
だが、山本は平気な顔で答えた。
「ここは日本国の南端、尖閣諸島だからさ。そう、ここは日本なんだよ」

第５４話「面会」

ーー日本国　尖閣諸島

山本にここは日本だと教えられたカディスは喜びを露にしていた。
しかし、生き残った仲間を一人一人確認していく段階で再び沈んだ表情へと戻ってしまう。
一番重要な人物、代表者が死亡していたのだ。
カディスはあくまでも一武官であり、今回は死亡した代表の護衛役でしかなかったからだ。
これでは交渉どころではない。
特使付きの文官で生き残っていたのは1人だけで、他は護衛役、もしくは船員でしかなかったのだ。
その文官も一番症状が重く、目が覚める気配は一向に見えてこない。
命に別状はない、と言われてもこれでは何時になったら交渉が出来るかわからないのだ。
まさか一武官であるカディスが交渉に立つ訳にはいかない。
それは彼の持つ権限を逸脱すると同時に、何の知識や経験も無い彼には荷が勝ちすぎることだからだ。
患者の一人が目を覚ました、と聞いて戻ってきた伊達も、詳細を聞いてガッカリしている。
伊達とて何時までも尖閣にとどまっていられないのだ。
せいぜいとどまれて3日しかない。
それを越えると一度帰還しなければならなくなる。
こうなると、意識がある、としか報告が来てなかったとはいえ尖閣に来たのは早計だったといわざるを得まい。
「状態を問い合わせて確認すべきだった」
後に伊達はこう言ってこの時のことを振り返ることになる。

取り合えず、このままでは埒が開かないので目が覚めたカディスに面会を申し込み、その後は尖閣の調査、開発状況を視察して文官の目が覚めるのを待つしかない。
実際、視察は必要だったのでこれを口実にすれば問題には発展しない、と判断された。
そのカディスも、日本の政治に携わる重臣が面会を求めている、との問い合わせに交渉でなければ会ってもいいのでは?と考えていた。
外交の経験も知識も欠けている故の判断だったが、この段階から交渉は始まっているともいえた。

「カディス・クロイツァー騎爵です」
「伊達(だて)　正行(まさゆき)内閣官房長官です」
互いに挨拶を交わすと席に着く。
伊達としてはここで出来る限りの情報を、カディスとしては下手な約束をしない事がお互いの思考にあった。
日本としては帝国が何を望み、そして、何処にあるのか?と言った情報が欲しい。
帝国としては日本と秘密軍事同盟、そして武器の供与と援軍が欲しいのだ。
その見返りに何を渡すか?が交渉の基本的なものになる。
一方的な譲渡など外交には存在し得ないからだ。
だから伊達は、情報の見返りに交易、つまり貿易協定を、と考える。
一方のカディスは同盟と供与、援軍の見返りにとんでもない要求をされないように、と考えていた。
「クロイツァー殿に置かれましては、御身体の調子はいかがですかな?」
先ずは伊達が他愛も無い話を切り出す。
まだ、動くには早いからだ。
焦って動いては足元を見られてしまう。

だからカディスの体を気遣うフリ（本心でもあったが）をして相手が動くのを待ったのだ。
「おかげさまで、元気、とは行かなくとも大分良くなりました」
カディスは言葉を選びつつ、そう答えた。
迂闊な答え方は絶対にしてはならない、そう自身に言い聞かせつつ・・・。
「それは良かった。何か不自由があれば仰ってください。幾らか話は通しますので」
あくまでも話を通す、としか言わない。
話は通しても許可、となるかは別問題としたかったのだ。
なにより、下手なことは口約束になってしまうのだ。
相手が交渉役でないにしても迂闊なことは言わない。
そこは伊達とて理解していた。
「お心遣い感謝いたします。ですが救助していただいた身、わがままは申しませぬ」
カディスは騎爵と言う貴族である。
当然、この程度なら問題は無い。
ある意味、貴族同士のやり取りも外交といえなくないからだ。
とは言え、あくまでも軍人貴族（軍事に関わる貴族）であるため、それほど貴族の機微が分かる訳ではない。
あくまでも儀礼的な挨拶レベルなのだ。
「さて、救助いたしましたが・・・これから如何されますか？全員が良くなってからになりますが、祖国にお帰りになるならば送り届けますが？」
伊達は暗に即時帰国を臭わせることを言う。
何かしらの交渉をしたいからここまで来たのであろうが、その交渉を受ける必要が無いと思わせたかったのだ。
これにはカディスも焦るしかない。
ここで交渉も出来ずに帰国させられれば、犠牲を払ってまで日本を目指した意味がなくなってしまうのだ。

しかし、だからと言って安易にどうするか？などはいえない。
これが北野なら「全員が目覚めてから相談させてください」等と言うのだろうが、彼にはそこまでの知識と経験が無い。
故に思わず言ってしまうのだった。
「い、いえ、我がグランングルカ帝国は貴国との軍事同盟の為に来たのです！おいそれと簡単に帰れません！」
カディスの言葉に伊達は我が耳を疑う。
（軍事同盟？正気か？）
この世界に来て初めて相手の国からのまともな提案だ。
田辺との交渉と状況に押されて決断したベサリウスとは違ったのだ。
だが、軍事同盟と言うのが問題だった。
太平洋戦争後の日本は専守防衛を旗印にしてきた。
この世界で生き残るためにあえて先制攻撃に踏み込んだが、その内面には専守防衛が生きている。
かつてのアメリカの様に他国の戦争に首を突っ込む気などないのだ。
ベサリウスの時はなし崩しにそうなってしまったが、緩衝地帯が必要だったことからも突っ込む必要があった。
だが、何処にあるのか分からない、話を聞けばかなり遠い所にある国の為に戦争をやるつもり等更々無いのだ。
これが貿易協定や、地位協定、もしくは通商条約等の経済的な同盟なら考える余地があっただろう。
しかし、軍事同盟にも色々あるが、日米安保のアメリカの様にはなりたくはないのだ。
この世界では超大国日本、と言う立ち位置であっても他国の後ろ盾にされては迷惑千万としかならない。
「軍事同盟ですか？いやはや、大胆ですなぁ」
伊達はそう言って笑いながら、内心では冗談ではない、と思っていた。
「しかし、日本は我々と共通の敵を持っております。共闘できるのではないですか？」

乗り気な様子を見せない伊達にカディスは訝しげに聞いてくる。
グラングルカ帝国は長い間ファマティー教と敵対し、その影響下にある国々と争ってきた。
これはグラングルカ帝国には古くから別の宗教もある上、他の国では迫害されてきた宗教にも寛容だったことからの争いだ。
何せファマティー教は唯一絶対神にして、異教や異端を認めていない。
それ故に一方的な弾圧と改宗を要求してくるのだ。
これは日本も経験済みである。
しかし、日本は圧倒的な戦力差と、圧力に屈しないだけの軍事力を持っていたから跳ね除けていた。
だが、文明レベル的にファマティー教の国々と大差の無い帝国では、如何に大国とは言え長い戦争による経済的封鎖、圧力に屈っしざる得なかったのだ。
だからこそ、今ではその支配下に置かれて独立国と言うより属国に近い扱いをされている。
勿論、心からの臣従などではなく、機会さえあれば反撃、復讐に動くだろう。
そのための下準備として日本との同盟を希望したのだ。
だからこそグラングルカ帝国は、日本もファマティー教国家に敵対意識がある、と考えたのだが、それは大きな間違いであった。
日本はファマティー教の押し付け、異教異端に対する弾圧を嫌い、それを掲げる彼等に対抗したのであって敵対する気は特に無いのだ。
向こうがテロに走らないこと、日本の領内では日本に従う事を認めるなら入国させるのもやぶさかではない。
しかし、現状では危険しかもたらさないと言える為に締め出しをしているのだが、どうもそれが敵対として見えた様だった。
なにより、それとてファマティー教に対してであって国に向けたものではない。
それは相手の国が判断すべきことであるが、日本としてはそう言う

立場でしかなかったのだ。
「敵、ですか？さて、今の我々に敵らしい敵など存在しませんがねぇ」
ファマティー教など眼中には無い、路端の石にもならん、と言わんばかりの態度だった。
もっとも、このときは南部に対する攻撃準備中であり、敵といえば南部となるだろう。
だが、そんなことまで教えてやる義理は無い。
「我々にとっての敵などそれこそ自然災害くらいなものですよ」
この時、伊達が言った自然災害くらい、の発言は大いにカディスを驚かした。
この世界での自然災害は、ファマティー教に言わせれば堕落した地域に降される天罰と言う認識が強かったからだ。
堂々と彼等ファマティー教を退けただけあって言うことが自分たちとは違う、と感じていた。
「では、敵足り得ないというのでしょうか？」
軍事的観点からカディスが質問する。
軍事的観点からならばカディスとて理解できるからだ。
むしろこの分野では伊達の方が分が悪いだろう。
しかし、伊達とてタカ派と呼ばれるだけあって、その辺りはそれなりにでも勉強している。
「現状では敵とする必要が無いだけです。我が国は他国がどうであれ平和であれば良いのですから」
実際は周辺が紛争、戦争状態にあっては面倒ごとしかないので対処はする。
だが、ここで安易に介入を匂わせては軍事同盟の話が引っ切り無しに来ることになる。
幾らなんでもそれは勘弁願いたいのだ。
もし、結ぶとすれば緩衝地帯としてのベサリウス国、大森林を領域とするエルフ共和国だけだろう。

南部は平定されたと仮定した上でなら、将来的な自治権を与えて保護地域に組み込む、いや、独立へとつなげたいところだ。
その後であるならば同盟もやぶさかではない。
しかし、遠方にある国と同盟は利益がないのだ。
まさか遠方にある帝国（実は大陸の反対側）と軍事同盟を結ぶとして、ファマティー教国家を挟み撃ちに出来る、とか言うわけでもない。
挟み撃ちどころか、帝国だけになるだろうが各個撃破されておしまいだ。
その分、日本に対する敵対心を育てるだけにしかならないのだったら、軍事同盟の意義は存在しない。
同盟とはお互いに明確な利益が無ければ結ぶことはないのだ。
「まあ、そちらも交渉できる方がまだ臥せっているのでしょうから、この話は後日改めて・・・では如何ですかな？」
伊達はグラングルカ帝国が日本との軍事同盟を求めているという情報を得て満足、とまでは行かずとも成果はあったと考え、面談を切り上げることを提案する。
しかも交渉の確約だけで、見返りをほとんど払わずに無料で得られたのだ。
これ以上の欲は見せるべきではないと考えたのも無理は無い。
「分かりました。交渉役が目を覚ましたならばその時にまた・・・」
逆にカディスは下手な約束をせずに、次回の交渉を約束できた、と言うのに満足だった。
しかし、この時に帝国の目的を言ってしまった事は、迂闊ではなかったか？と責められることになる。
しかし本来、交渉役でもなかったカディスが交渉のきっかけを作ったのも事実だった。
その意味ではこの面会は無駄ではなかったといえる。

伊達が去った後、疲れた様子でカディスは個室のベッドで休むことになった。
目覚めたばかりで体力が回復しきっていないところに錯乱騒ぎ、そして伊達との面会だ。
疲れるな、というのは無理な話である。
だが、ベッドに横になりつつもカディスは伊達のことを振り返っていた。
「・・・なんと強大なのだ・・・」
伊達の堂々と、自信に溢れ、だが慎重にして大胆な姿。
それは王者の風格に似てさえもいた。
アレでこの国の主ではなく、宰相（内閣総理大臣の事は宰相と思っていた）の側近に過ぎないと言うのだ。
ではこの国の主、王は一体どのような人物なのか？
その事が彼には非常に好奇心をそそられた。
拝謁してみたい。
そう思いながら、彼はまだ見ぬ日本の王を夢に見ていた。

第５５話「凶弾」

ーー日本国　横須賀

伊達が尖閣諸島でカディスと面会し、期限が過ぎても会談が出来る状況に無かったために、一度引き上げると連絡が入ったその日。
ホードラー南部平定の海上封鎖の為に外人海軍部隊の空母ジョージ・ワシントン、並びに強襲揚陸艦隊が横須賀の港を離れていく。
その光景を鈴木は祈るような気持ちで眺めていた。
同時期、広島の呉からも海上自衛隊第４護衛隊群が「おおすみ型輸送艦おおすみ」ならびに「しもきた」を従えて出向している頃だろう。
そちらには伊庭防衛大臣が出向いている。
そして鈴木がいる横須賀港では離れ行く外人海軍部隊をカメラに収める報道機関、並びに市民団体の抗議集会が行われている。
艦隊が港から離れ、遠くに行くと今度は会場に設営された壇上にいる鈴木に抗議が向けられる。
その多くは罵声であり、非難、批判と言ったものではない。
何故ならば「軍国主義者」「戦争屋」「独裁者」等とシュプレヒコールを繰り返すのだ。
これが罵声でなければなんと言えばよいのだろう？
だが、鈴木はそんなものにはかかわっていられない。
外人海軍部隊を見送った鈴木は報道陣に囲まれながらも官邸に向かうために車へと歩を進める。
報道陣がそんな鈴木の声を拾おうと躍起に質問を投げかけるが、ここで質問に答えては居られない。
そのためＳＰが周囲を固めつつ、警官が報道陣を抑えていた、そのときだった。

警官隊の警備の中をすり抜けた一人の男が鈴木へと駆け寄っていく。
気付いたＳＰが男と鈴木の間に割り込んだが、男は手にした拳銃を発砲していた。
「侵略主義者め裁きだ！」
男が叫ぶと同時に乾いた破裂音が響いた。直後、報道陣は我先に悲鳴を上げながらその場から離れようとし、一部はその結果を見届けんばかりに人の波に逆らってカメラを鈴木に向けた。
「貴様何をするか！」
ＳＰの一人が男に飛び掛る。
だが、その前に男は再度発砲、警官隊も慌てて男を背後から取り押さえる。
「貴様らは権力の犬か！？敵はそこにいるんだぞ！」
取り押さえられながら必死の形相で叫びを上げる男。
そして警官隊とＳＰが怒号を上げつつ取り押さえた男を拘束する。
その間に鈴木は他のＳＰと警官に守られながら車へと走り去っていった。
後に残されたのは凶行に及んだ男と取り押さえる警官たち、倒れたまま動かないＳＰとその仲間のＳＰと救急隊員、そしてそれらを取り囲む報道陣だけだった。

ー１日本国　総理官邸

「鈴木の容態は！？」
伊達が慌てた様子で総理官邸執務室に息を切らせながら飛び込んでくると、開口一番に鈴木の安否を聞いてくる。
恐らく、尖閣から成田空港へ到着してから真っ直ぐに来たのだろう。
今頃は伊庭も呉からヘリで向かっているはずだった。

そして、その総理官邸執務室には閣僚が集まっていたが、誰も伊達の言葉に声を返さない。
一様に黙ったままだ。
正直言って伊達はまさか、とさえ思った。
「心配かけたようだな」
不安を抱く伊達の耳に鈴木の声が飛び込んでくる。
閣僚が道を明けると、そこには怪我一つしてない鈴木の姿があった。
「・・・だ、大丈夫・・・なのか？」
沈んだ表情ではあったが、特に怪我をした様子も無い鈴木に伊達は腰が砕けそうになる。
しかし、何とか踏みとどまると事の仔細を聞くことにした。

犯人の放った銃弾は2発、だが、その2発とも鈴木を守ったＳＰが文字通り「身体を張って」防いだのだ。
しかも防弾チョッキを着込んでいたにも関わらず、2発とも防弾チョッキを貫通していた。
もし、ＳＰが身をもって防がねば鈴木はここにはいなかっただろう。
鈴木を守ったＳＰは意識不明の重体で都内の病院に運ばれ、今も懸命な治療の真っ最中だ。
それが役目とは言え、倒れたＳＰの事が気にかかるのか鈴木は暗い表情なのだ。
「それで、その犯人の主張は？」
伊達が怒りを込めた目で事務次官を見る。
別に事務次官が悪い訳ではないが、睨まれた事務次官は顔を真っ青にしていた。
「気持ちは分かりますが落ち着いてください」
阿部が恐怖で動けない事務次官の変わりに報告書を読み上げた。
それによると、男は「侵略主義を推進し、平和を脅かす国賊に天誅を加えた」と主張しているようだった。
報告を聞いた伊達は怒り心頭だ。

「何を自分勝手な！侵略？ふざけるな！誰が好き好んで戦争などやるか！しかも平和を脅かすだと！？それを語るなら暴力に訴えるな！国賊なのはそいつの方じゃないか！」
大変な剣幕に、流石にタカ派な伊達に慣れている者たちもタジタジになっている。
触れば爆発しそうな勢いに止めに止められない。
「まあ、待て、落ち着け」
そんな中、付き合いが最も長い鈴木本人が抑えにかかる。
とは言え、落ち着け、といわれて落ち着けるなら苦労は無い。
何とか伊達を宥めて、話をしようと鈴木は苦労していた。

漸く落ち着きを取り戻した伊達は、怒りがまだ収まらないとは言え、話を聞くことが出来るようにまでは冷静さを保っていた。
「犯人の背後関係をしっかり調査した方がいいな」
鈴木の話を一通り聞いた伊達はその様に発言した。
元から反社会的思想はあったのだ。
ここにきてそれが無くなったわけでもない。
鈴木を含む現政権が続くことが不都合に感じる集団があるやもしれない。
その意味では背後関係を洗う必要がある。
そもそも、銃等というものが一般人が手にすることはきわめて難しいのが日本だ。
裏社会で手にする事は可能かもしれないが、少なくとも容易に得られるものではない。
しかも今回の見送りとて、直前になってから公表したのだ。
市民団体は鈴木が出てくることさえ知らなかったのに、犯人が銃を手に入れてそれを使うなど即座に出来るものではない。
何かしらの存在、組織がある可能性は否定できなかった。
「そうだな。そこは公安と警察庁に任せよう。それよりもだ・・・」

鈴木派自分が狙われたのにも関わらず、それ自体は些細な問題としか思っていなかった。
今までだってかなり強硬に事を進めてきているのだ。
当然、今回のような事態を想定してなかったわけではない。
また、重要な時期にあるとはいえ、既に自分が倒れても代わりに立つ人物もいる。
今後、物事を進めるのに鈴木である必要は無いのだ。
勿論だからと言って辞任すれば余計な混乱を招く可能性もあるので、最後まで遣り通すつもりではある。

「例の収容した特使のことだが、どうだった？」
今一番の気がかりはそれだ。
相手の主張、要求に動出るべきか？が最重要なのだ。
南部平定を直前に控えたこの時期に余計な問題は出来る限り抱えたくないのだ。
「ああ、敵対の意思はないようだが、とんでもない要求だったよ」
とても面倒そうに語る伊達の様子に、集まった一同は不安を隠せずに居た。
「日本からの支援を求める軍事同盟を結びたいそうだ」
この提案には流石の鈴木も頭を抱えるしかない。
今の日本が何処と軍事同盟など結べようか？
そもそも、南部平定を成し遂げたとしても、日本の手に余る領域になるのは明白である。
ある程度の自治を認めるか、親日政権の国として独立してもらう事が前提に無ければ平定にだって動きはしない。
「軍事同盟ですか・・・かつての日米安保、と見た方がいいですかね？」
加藤はそう感想を言うが、恐らく自分たちが米国の役割を持ち、グラングルカ帝国が日本の立場に成る事は容易に想像できた。
流石に海外拠点を持つ事はマイナスにはならないが、あまりやりた

いものでもない。
メリットとして、海外拠点を持つ事は、自衛隊を含む部隊を展開させやすく、また、通商路の保護の観点からもアリと言えばありだろう。
だが、デメリットとして、その海外拠点の国で有事が発生した場合、日本が参戦するしないに関わらず巻き込まれる恐れがある。
さらに、在日米軍の基地もんだいのように、後々は鬱陶しい存在にされかねない。
メリットとデメリットを勘案するに、今現在の状況も踏まえるとそんな真似をする必要、利益が無いのだ。
メリットがデメリットを上回るならばともかく、上回っても小さい、もしくは殆ど大差ないのであればやるべきではない。
それが鈴木を含めた全員の考えだった。
「軍事同盟はないなぁ。せめて通商協定にとどめるべきだろう」
鈴木の言葉に伊達も賛成する。
もとよりそれ以外の選択肢はない。
「しかし、エルフ共和国とベサリウス国は相互防衛協定を結んでいますが？」
加藤の言葉に伊達は意味合いが違うと否定した。
「エルフ共和国の相互防衛は、そもそも我が国の理解者であるあの国だからだ。それにエルフ共和国が無ければ我が国は我が国に敵対する国と直接面することになる。ある意味緩衝地帯としてのエルフ共和国なのだ」
つまり相互防衛協定、後の同盟であるが、あくまでもその方面に対する防衛戦力の貼り付け、展開を軽減させるための処置なのだ。
出なければただでさえ少ない日本の戦力を広大な領域に展開させねばならない。
如何にこの世界で強力無比を誇っても、そこまでは不可能なのだ。
その意味ではアルトリアの守りはエルフ共和国、そしてホードラー地区の守りはベサリウス国が受け持っているともいえる。

勿論、日本とてそれらの国に何かあれば助けを出す必要があるのだが、少なくとも大規模戦力をアルトリア、ホードラー両地区においておく必要がなくなるのは非常に助かるのだ。

「単純に政治的観点から見れば帝国と結ぶのは悪くない。だが、軍事的観点から見るならばリスクが大きすぎる」

鈴木はそう言って軍事同盟の可能性を否定した。

だが、それとは別に、軍事的留学、つまり向こうの将校を受け入れて教育するのはありではないかとも考えていた。

全てを教える必要は無いが、ある程度の教育をする分には可能だろう。

お互いに相手の戦力の一端でも知っていれば、わざわざ敵対するよりは友好関係を持っていたほうが得であると判断できるはずなのだ。

また、必要ならある程度の武器を渡してもいいと思っている。

ここで言うある程度、で即座に思いつくのは火縄銃だった。

火縄銃は人の命を奪うには十分な威力はあるが、使用には制限がかかる上、十分な科学知識と技術を持たなければ独自開発もままならない。

また、流石に火縄銃の威力では現代の防弾チョッキを貫通させるのは難しいのだ。

とはいえ、これは鈴木の頭の中にある構想で、具体的検討もしてなければ研究もしていない。

流石に思いつきで提案する機にもならないので、まだ誰にも話していない領域のはなしであった。

「軍事同盟、協定が無理なら、せめて通商協定と考えられるが、奴さん方がなっとくするかねぇ？」

正直、伊達も情けを知らないわけではない。

命がけで遠洋航海に向かない船でわざわざ何処にあるか分からない日本を目指した彼等に、少しぐらいは報いてやりたかった。

だが、政治が関わる以上は下手に情けはかけてやれないのも事実だ。

「せめて別の形で支援できればいいのですがね」

阿部も比較的彼等に同情的だった。
既に大半の仲間を失っているのだ。
そこまでして漸く辿り着いていながら、何も成果なしでは哀れにも程がある。
最悪、彼等は命を持って使命を果たせなかった償いとしかねない。
「そこは、向こうが交渉できる状態になってからの話だ。今は何もできんよ」
鈴木は、先程の構想を語るべきか動かを悩んだ。
恐らく、これをやるからには他の2国、エルフ共和国とベサリウス国にも持ちかけられることになるだろう。
果たしてそれが日本にとって良い結果になるかどうかは判断しかねるのだ。
エルフたちは恐らくだが問題はない。
元々彼等はファマティー教国家から見れば亜人として差別の対象なのだ。
日本という余り人種差別とは無縁の国だからこそ彼等と友好的に付き合える。
それを考えれば、エルフたちが日本と事を構えることは考え難い。
大してベサリウス国はどうだろうか？
これも基本的に、彼らの危機を助けたのは日本だ。
たしかに主家である王家を滅ぼしたのは日本だが、少なくともベサリウス本人はそこを気にする程ではない。
そう言う意味ではベサリウスが実権を持っている間は問題は無い。
だが、ベサリウスから別の人間に実権が移ってからはどうだろうか？
これればかりは予想出来ないし、実権を持った相手によっては友好関係の維持が難しくなるかもしれない。
それでも、此方から支援、援助をしていれば敵対と言う方向には向き難いだろう。

しかし、この2国と帝国は全く立場が異なる。

帝国はファマティー教との戦いに敗れ、そのために多くを失ってきた。
それを取り戻すために日本と組もうというのだ。
つまり共通の敵がいるから手を取り合う関係に過ぎないのだ。
では、共通の敵が居なくなればどうなるのか？
これは全く予想が出来ない。
敵対されても海の向こう側だろうから、脅威と言う程の存在にはなりえないだろう。
しかし、帝国からすればあくまでも日本と言う存在を利用して目的を果たす、そう言う思惑があっても不思議ではない。
これが近い位置にあり、また、日本と幾らか関わった国であるならばまだやり様はあるが、現状でそうはなってない帝国に支援、援助は難しいといえた。
勿論、しなければ関係も始まらないのは分かる。
だが、不確定要素が多すぎて判断する材料がないのだ。
安易に支援、援助も難しいとしか言えない。
恐らく、協議が始まっても結論は出せないかもしれない。
それを考えると、鈴木は自身の構想を表に出すのは早計である、と結論付けた。

「まあ、ここで幾ら話し合っても推測にしかなるまい。彼等と協議してから再度考えたほうがいいな」
先ずは正式に彼らの要求、目的を聞いてからだ。
と、鈴木は表向きの結論を口にする。
何か考えがある、と悟った伊達はあえて何も言わず受け入れ、この場は解散となった。

「で？実際はどう考えているんだ？」

皆がそれぞれの仕事に戻っていった後で、鈴木にどんな考えがあるのかを伊達は問うてみた。
言うほどのものではない、としていた鈴木ではあったが、伊達の「隠し事は勘弁してくれ」と言う眼光に折れてしまう。
そして先程の構想を口にし、その考えに対しての伊達の意見を聞いてみた。
伊達は鈴木の構想を聞かされて、正直度肝を抜かれた思いだった。
何たる大胆不敵な構想なのだ、とさえ思った。
たしかに今の日本がやっていることは前例が無いことばかり。
しかも率先して動いているぐらいだ。
十二分に大胆不敵といえることだろう。
だが、日本では法令となっていないが、自粛と言う形で謂わば慣習的になっている「武器輸出禁止」の原則を大きく打ち破るものとさえいえた。
流石にこれは国内の反発が大きくなると想像できる。
だが、友好国が自主独立の為に戦うとしても、十分な防衛力を持たなければ結局は日本が出て来ざるを得なくなる。
そうなれば結局日本が戦うことに他ならない。
しかし、敢えて骨董品レベルでも武器を与える、いや、輸出するならばこの世界では破格の力になる。
一番怖いのは敵国にその技術が流れることだが、現在の武器体系が完成するのには莫大な資金、労力、時間と血と命がかかる。
すぐに脅威になるとは思えない。
ましてや、この世界には魔法なる力も存在している。
現状でその力を持つ者は非常に限られているものの、実践投入されるならば馴染みある魔法の方だろう。
それを考えると、骨董品レベルの武器を与えることに脅威はない。
むしろ、それは戦術、戦略をしっかりと考えねば運用することが出来ないのだ。
ならば与える事そのものは悪い考えではない。

問題は、帝国の立ち位置だ。
それだけが懸念材料なのだ。
「ハッキリ言わせてもらえば、こっちから向こうに人をやってみてみなければ判断できん」
相手を信用するもしないも、特使だけを見て判断できない。
伊達はそう言っているのだ。
「それは私も考えたが、誰を送るというのだね?適任者は今ホードラーで手一杯だよ?」
鈴木の頭の中に北野の姿が浮かぶ。
しかし、伊達は奴だけが人材ではない、と答えた。
「若いながらかなり出来る奴がいる。そいつにやらせてみたい」
どうせ駄目なら定刻との付き合いは形だけにとどめればいい。
伊達はそう思いながら、若いながら出来る奴を思い浮かべていた。

第５６話「謀の終わりと帰還へ」

ーーホードラー南部　ディサント領

南部貴族連合の盟主にして、南部の実質的な支配者になっていたディサント候シルス・Ｈ・ディサント侯爵は不機嫌だった。
先日、小なりとは言え一部の諸侯がこれ以上の負担には応じられない、と通達してきたからだ。
たかが地方の村落の領主風情が南部を纏める立場にあるシルス自身に反抗しているのだ。
彼自身からすれば到底許せるものではない。
しかし、現在はホードラーを打ち破った日本が北におり、軽々しく粛清などで内紛など起こせない。
つまりは傍観するしかなかったのだ。
その分食料の割り当てを大幅に削って見せしめとしているが、その効果はすぐには出ない。
多少なりとも蓄えがあるからだ。
「忌々しい話だ」
憎々しげにシルスに反抗する貴族の一覧を見るシルスは、事が起きれば彼等が日本に寝返る事位お見通しだった。
それでも手出しできないのは烏合の衆とも言うべき南部貴族連合の実態がある。
日本とホードラーが戦争を始めた時、西部諸侯は西への守り、南部はその立地と状況から動員を免除された。
おかげで現在も戦力を維持できているが、既に長期化する対日本への動員で各地に不満がたまっている。
負担を各地の領主に持たせたのだから不満が出るのは分かっているが、誰のおかげで今の地位についていられるかを忘れているのでは

ないか？とさえ思える。
今も貴族としていられるのはシルスが防衛戦力を供出しているからだ。
その戦力が大きいからこそ日本も南部に進んでこない（と彼は思っていた）のだ。
それを考えれば自分に従い、そのために負担を負うことは悪い話ではないはずだ。
その分、防衛は優先的に行っている（つもりだけであるが）し、食料の割り当ても多少は多めにしてきた。
言わば飴と鞭を使っていたのだが、それが分からぬ愚鈍な物が多い。
そうシルスは毒吐いていた。
「閣下、ご報告したきことが・・・」
彼の側近の一人がシルスの元にやってくると、来るなりそう切り出してきた。
「なんだ」
不機嫌さを隠そうともせずに居るシルスの様子に恐縮しながらも、側近は彼自身の役目の為に報告をした。

「・・・つまり、我が領内で領主どもを誑かす者がいる。ということか？」
側近の挙げた報告は、見知らぬ人物が単独で幾つかの領主の所を回って密談を繰り返している、と言う話だった。
これで合点がいった。
最近、領主の中からシルスに歯向かうものが出始めたのも、その密偵が原因だとすれば納得できる話だ。
恐らく、地位や財産、そう言った餌に釣られたのだろう。
「なるほど、明確な反逆といえるな？」
シルスの言葉に側近は、御意と答えて頭を垂れる。
そうなると話は変わってくる。
甘い餌に釣られた愚か者には見せしめとして反逆の罪で討たねば示

しがつかない。
その意味では領主を手勢で攻めて討てばいい。
南部貴族連合に対する反逆、となれば大義名分は十分にアリ、内紛には発展しない。
ただ、問題もある。
何処まで釣られた馬鹿がいるのか？
それを把握しなければならない。
把握もせずに1つや2つを討っても、逆に残った者が自身の保身の為に日本を呼び込む事になるからだ。
今は日本も軽々しく動けないだろうが、日本に味方し支援する者があれば攻めてくる事は確実だと思っていた。
「まず、その密偵の情報はどこまで揃っている？」
事を起こす前に密偵を捕らえねば、その辺りの情報は全く無いのだ。
捕らえて吐かせれば、誰が裏切っているかを判断できる。
まさか、シルスに反抗しているからといって断定して討つ事は結束に亀裂を入れることになるからだ。
「素性などは・・・ただ、その風貌などから単独である、とだけは分かっております」
側近の答えにシルスは少しばかり考える。
何も彼自身が直接動かねばならないわけではない。
自分の支配下にある帰属、領主を動かせばいいのだ。
「よし、即座に捕らえろ。生かしたままだ」
シルスの目に残酷な光が宿る。
その様子を見てた側近は顔を青くしつつも、心得ました、と言って下がっていく。
シルスはその姿を見つつ、どのような手段を使って領主どもを締め上げるかを考え始めていた。

ーーホードラー南部　ファーレン子爵領

レオナルドは南部でも老齢ながら理解力があると言われているジョナサン・K・ファーレン子爵の所に立ち寄っていた。
ファーレン領は約三千程度の町１つと１００人規模の村３つを治める大諸侯と言える貴族だ。
そのファーレン領でレオナルドはジャナサンと協議を重ねていた。
そして、両者は合意に達っすることが出来ていた。
これはレオナルドの切り崩しの中でも最大のものだろう。
「これで領民が苦しまなくて済みます」
ジョナサンはそう言ってレオナルドに感謝の言葉を伝える。
ジョナサンは元から南部貴族連合に参加するつもり等無かったのだ。
ただ、自領の周りが勢いに乗って参加したのに、自分だけが参加しなければ一斉に攻められていただろう。
それを回避するためにも形だけは参加しとかなければならなかった。
だが、参加すればした分、日本がいざ南部へ来たときに敵として来ることになる。
そうなればやはり領民を巻き込んでの戦争になっていたであろう。
それを回避するためにも、レオナルドの話はありがたいものである。
ただし、おいそれと簡単に飛びつけば足元を見られる。
それをおそれてお互いに議論と協議を重ねて、お互いが合意できる話にしたのだ。
「いえ、閣下の領民を思うお気持ちには頭が下がる思いです」
レオナルドはジョナサンが提示した条件の大半が領民の生活に関わることだったのを思い返していた。
何よりも、レオナルド自身がバジル王国で内務卿と言う立場にあったのだ。
領民が如何に大切であるか、など言われなくても分かっているぐらいに・・・。
それが分からぬものの集まりが南部貴族連合なのだ。

いや、分かっていても目先の利益に飛びついた、ともいえる。
その意味ではジョナサン程に物事を理解し、実践している貴族は南部だけでなく、ホードラー全域でも少ないだろう。
レオナルドが知る限り、せいぜいベサリウスぐらいなものだ。
その意味では貴重な良き理解者とも言える.
「何、所詮貴族と言えど領民なくば飢える存在にすぎん。権力者とは権力を持つものとしての責任と義務を持って民に奉仕すべき存在でしかない。その代わりが民の生活を守ることなのだ」
実に不自由な物だよ、とジョナサンは自嘲気味に笑う。
だが、そんな彼とて昔からそうだったのではない。
かつては、民のことを省みず、ただただ貴族と言う特権意識を持っていた。
しかし、その彼を変えたのは今は亡きジョナサンの息子であった。
彼は父であるジョナサンの行いに頭を悩め、そして出した結論が民と共に父に歯向かうであったのだ。
それはたった一ヶ月の出来事でしかなかったが、その結果ジョナサンの息子は帰らぬ人となり、民にも多くの死傷者が出てしまっていた。
当時はジョナサンも逆恨みに等しい憎悪を持って民に暴政を行おうとしていた。
そのジョナサンを押しとどめたのが、孫のベルンだった。
彼の息子は、市井の町娘との間に一人の子をなしていたのだ。
その事実と、息子の相手と孫、そして息子が残した手記を読むに至り自身の過ちに気付いたのだ。
そしてジョナサンは変わった。
己の命を懸けて父を諫めた息子と、その相手と孫、それらが為にもジョナサンは今までの自分を省みて、善政をしくことになる。
今でも彼が子爵として現役に立っているのは、孫が成人になるまでの繋ぎなのだ。
その前に、日本と言う存在による王国の崩壊が起きたものの、孫娘

の為にも領民の為にも最良と思える選択を取った。
それが今のジャナサンだった。

「次はどちらへいかれるのかな？」
ジョナサンの質問にレオナルドはウェーザ男爵領へ、と答えた。
しかし、それにはジョナサンは難色を示した。
止めた方がいい、と・・・。
「何故ですか？」
レオナルドは決して話の分からないはずの無い男爵の下に行くことを反対された事に驚いていた。
「知らなかったのですか？今は代替わりしておりますぞ？」
想定してなかった事に、レオナルドは詳しい話を求めた。
ウェーザ男爵は非常に話の分かる人物で、特に民のため、と言うところは無いが結果として善政を敷いている人物だった。
税が重ければ民の活力を奪い、市井に金が回らずに経済が悪くなる。
逆に軽すぎれば領地の経営そのものが悪化してしまう。
その見極めが上手く、なおかつ、市井からの嘆願にもきちんと耳を貸したうえで、きちんと筋が通って、道理にそっているならば政策を改めることが出来る人物だった。
これだけ聞けば良い貴族、であるが、要は最終的に自分に利益が回って来るならば形にはこだわらないだけなのだが、その結果が善政であるならば名君と呼んで差し支えないはずだった。
しかし、南部貴族連合が発足された当時、彼は王宮に居たこともあり、日本と戦うことは利にならない、として反対に回ったのだ。
手を取り合ったほうが利益になる、そう考えたのだが、それが拙かった。
日本がそのまま南部に来れば彼の言葉通りになったかもしれない。
しかし、日本はまず地盤固めから入ってしまった。
これは日本が悪い話でもないのだが、結果としてウェーザ男爵は領

を守るために息子に蟄居、殺害されていた。
そして後釜に座った息子がまた話の分からない人物で、自分の中の貴族の理想として民を導く存在、を強く持ってしまっていた。
結果として自分の理想を民に押し付け、それに反発するものを磔に処すなど、暴虐無人な行為が行われていたのだ。
今では男爵領はかなり荒れ果てており、いつ反乱がおきても可笑しくない状況にある。
もっとも、氾濫を起こすだけの気力も無い、食料も無い、助けも無いでは蜂起しようにも出来ないのだが・・・。
「・・・あの豊かな領がそのようなことになっているとは・・・」
ジョナサンの忠告が無ければ危うくレオナルドは自ら絞首台に進むところだったのだ。
その上でジョナサンには危惧することがある。
幾つかの領地から盟主であるシルスに反抗する様な行動が見て取れている。
これは背後に日本が付いたことで、気が大きくなってのことだろう。
しかし、逆にそれは目を付けられる行為に他ならない。
そして、それとて彼等自身だけの判断とは思えなかった。
決して無能ではないシルスのことだ。
ある程度は尻尾をつかんでいる、と考えた方がいいのだ。
「まだ協力者を募りたいでしょうが、ここは一旦引くべきです。でなければ全てが水の泡となりかねません」
ジョナサンの言葉にレオナルドは派手に動き過ぎたやも知れないと考えた。
ある程度は味方に引き入れた。
その成果を持ち帰らずにここで果てるのは愚作だろう。
「わかりました。確かに潮時のようですね」
この辺りが限界か？と思ったレオナルドは直ぐに帰還することを決意する。
だが、既に追っ手がかかっているかもしれないなら、このファーレ

ン領はどうなるのか？
それが気がかりだった。
折角、協力関係を持てたのにここでレオナルドが引いてしまえば彼とその身内が危険ではないか？と思ったのだ。
だが、その心配を口にしたレオナルドにファーレンは笑って答えた。
「なに、奴の手勢が来たならば、貴方を追い返したと言えば疑いはあっても動けますまい。それに、貴方が領内を出たときを見計らって書状の一枚でも出せばシルスのことです。内紛を恐れて動きは取れないでしょう」
老練なだけあって、その読みはかなりのものだ。
盟主の性格をも考慮した上で対処すればどうとでもなる、と言うジャナサンに頭を下げると、レオナルドは一路シバリアへの帰還を優先させた。

第57話「幕開け」

ーーホードラー南部　ディサント領

この日、シルスは先日の日本からの密偵の捕縛が空振りに終わった事に原を立てつつも、連合内部に日本により誑かされた領主の情報を意図的に流して討伐する名目を作り上げつつあった。
各地の有力な諸侯からも「貴族の誇りを売り払った裏切り者には制裁を」と言う書状や、シルスに面会して直接打ち上げる者までいた。
そこでシルスは一度貴族連合に所属する諸侯、貴族を集めての協議会を開いた。
勿論誑かされた、と見做された領主は読んでいない。
そして、協議会といっても大抵この後に控えているのは宴席だ。
シルスは誑かされた領主の討伐を行うと同時に、内部でまだ日和見的立ち位置にいる諸侯に対する牽制、及び結束の引き締めを図るつもりだ。
協議は滞りなく進み、当然ながら全会一致で日本に靡く領主に対する制裁が可決される。
シルスが事前に流した情報、及び有力の大半も賛成している以上は他の領主や小諸侯には異を唱えられない状況にあっては当然の結果と言えた。
そして続く宴席でも、シルスは豊富にある食料を惜しみなく使った豪華な宴席を披露する。
これは自分が居なければ立ち行かなくなるぞ、と言う無言の圧力であると同時に、自らの権勢の大きさを示している。
「流石はディサント侯、この様な見事な宴席、中々出来ることではありませんな」
シルスにおべっかを使っているのはレックス・ハウゼン男爵。

地位こそ男爵であるがシルスの腰巾着として長年従ってきただけあり、それなりの所領を持っている。
しかもディサント領の直ぐ隣で陸路輸送路の要を守る立場にある。
海が嵐で使えない時はこのハウゼンの領地から伸びる陸路を使って輸送路を確保している。
いわば二段構えの輸送路の確保がシルスの立場を確固たるものにしていた。
その上でシルスは海に面している自領の立場を利用し、王国には秘密で私掠船団、つまり海賊行為を行っており、当然それらは私兵でありながら海軍と言うべき存在を保有していた。
もし、他の海に面した領地が独自に海路を作ろうとしても、シルスの艦隊でそれを妨害、壊滅させてしまう。
こうすれば必然的にホードラー南部の諸侯はシルスを頼るほか無くなるのだ。
つまりシルスは陸、海路を押さえている事で他の何者も台頭出来ないようにしていたのだ。
それは彼の代で成し遂げられたことであり、これだけをもってもシルス自身が優秀な戦略家であることを示していた。
「いやいやハウゼン男爵、これも貴公の協力あっての物。今後も私と共に南部を支えましょう」
表面だけ見ればシルスは爵位が低いはずのハウゼンにも礼を尽くす腰の低い物腰の柔らかい人物に見えるだろう。
だが、実際はあの手この手で権益を独占しているだけなのだ。
そんな二人を冷たいまなざしで見るものがあった。
二人の繋がりを実は既に把握していたジョナサン・K・ファーレン子爵だった。
「いい気な物だ」
独り言とはいえ率直な意見を口にするジョナサン。
内情を知っているが故の言葉だ。
彼もまた日本に付いた一人だったが、以前にレオナルドに打ち上げ

た方法を持って偽の密偵の情報、並びに告発で警戒されなかったのだ。
実際はシルスは訝しげに思っていたであろう。
しかし、そこは年の功。
長年に渡り魑魅魍魎が跋扈する王宮、貴族社会と関係を持っていた彼は謀略においてはシルスより1枚も2枚も上手だった。
ジョナサンは大胆にも疑いを晴らすために自領へシルスの兵を招きいれ、その上で兵たちを誘導していたのだ。
自身の兵の報告もあり、シルスは疑いを完全に捨て去りこそしなかったが、一応は信用することにしていた。
何よりも変に疑い続けては本当に裏切られかねないと思ったからだ。
「ファーレン子爵、お楽しみですかな?」
林檎の果実酒シードルを口に運ぶファーレンの元にアルト・ケッセルリンク子爵がやってくる。
比較的若く、活力に溢れたアルトは20そこそこで領地を継ぎ、それから30年に渡って領地が隣り合っているジョナサンと交流を持った人物だ。
「ああ、ケッセルリンク殿、ええ、楽しんでますよ」
突然やってきたケッセルリンクを前にしても一切の表情を崩すことが無いジョナサンは流石といえるだろう。
普通なら驚いても可笑しくないし、巣越すぐらいは動揺してしまうかもしれない。
しかし、彼はそんな素振りを見せることは無い。
「それは良かった。もっとも、私は楽しめてませんが・・・」
アルトはそう言って手にしていたワインを一気に飲み干す。
その言葉の真意を探ろうとジョナサンは何故?と聞いてみた。
「砂上の上に立った城に過ぎない彼らを思うとね・・・」
そう言ってアルトは今も取り巻きと笑っているシルスを横目で見る。
その目には憎悪と軽蔑が込められているのをジョナサンは見逃さなかった。

「砂上の城、とはまた随分な話ですな。何か思うところでも？」
ジョナサンはそう答えていながらもアルトのことを考えていた。
ハッキリ言って何か優れたところがあるわけではない。
ある意味凡人といえる。
しかし、アルト自身は、自分が凡人であると言う事を自覚していた。
故に優秀な人材を集めることに労力を割き、その集めた人材を使っての領地経営を行っている。
そのため所領としてはジョナサン程ではないものの、それでも２００人程の小さな町を交易路の中核にすることで町は小さくとも宿場町とし成功している。
しかし、その成功とて莫大な私産を投じての街道整備などに費やされ、将来的な収入は明るくとも現状はかなり厳しいはずだ。
それでなくば今頃、彼の領地はジョナサンの領地を越えていたかもしれない。
だが、それ故にジョナサンと交流を持ち、お互いに街道整備で力をあわせては来なかっただろう。
それだけに信用できる人物でもある。
「貴方が気付いていないはずがありますまい。彼等は今はああして要られますが、将来的に考えれば基盤が脆弱です。ひとたび狼煙が上がればあとは崩れ行くのみでしょう」
アルトはそう言って杯にワインを注ぐ。
実はホードラー南部ではワインは造れない。
いや、ホードラー全体で見てもワインは存在しない。
全て他国からの輸入なのだ。
ホードラーで作られる酒は麦から作られるエール、林檎から作られるシードル（ただしシードルはシードル・ワインとも言われるが）、蜂蜜から作られるミードぐらいなものだ。
なので今彼等が口にしているワインなどは全てシルスの輸送路からもたらされたものである。
つまり、これだけをもってもシルスの権益は莫大な物と分かるのだ。

その上でシルスが独占するこの権益は嫉妬の的であり、内情には多くの敵を孕んでいる事になる。
アルトはそこを指摘した上で、一度狼煙があがれば、つまり日本が本格的に動けば日本に同調するものが後を絶たなくなる。
そう言っているのだ。
「しかし、我らが口にするこの食事も元を言えば彼からの供給です。日本にこれだけのことができますかな？」
敢えて試すようにジョナサンはアルトに投げかけてみる。
恐らく、アルトは日本が来るなら諸手を挙げて歓迎するのだろう。
だからこそ、ここでハッキリさせねばならない。
ジョナサンと同じ旗色を定めているのかそうでないのかを・・・。

「可能でしょう。でなければ短期間にホードラーの大半を制圧できますまい。それに、中央から流れてきた物に面白いものがありましたよ。それだけでも日本には我らが考える以上のものがある、といえます」
抽象的な表現でさっぱり要領を得ない言葉にジョナサンが首を傾げる。
「面白いもの、ですか？」
ジョナサンの様子にアルトは懐から「それ」をとりだした。
そこには見慣れない、妙な文字と内容物の書かれた金属製の物体があった。
これを日本人が見たら大いに笑うだろう。
何故ならばその表面に書かれていた文字は日本語で「さんまの蒲焼」と書かれていたのだから。
アルトはその金属の物体が日本から持ち込まれたものと聞き、たった数個に金貨１０枚を払って交易商人から購入した。
だが、それの使い方を聞いて更に驚くことになった。
なんと食べ物であったのだ。
しかもそれは一般人が簡単に口に出来るものではないと思った。

少なくとも保存方法、そして中の食べ物の味、どれをとっても軍で使うようなものに見えたのだ。
長期間の保存が効き、味も良く、手軽に食べられることは軍において最も必要とされるものだからだ。
それとの出会いはアルトは交易路を整備し、中核となした以外の新たな収益を挙げる手段を思いつかせるに十分だった。
だが、それはどうにも上手く行かない。
何よりも缶詰の本体そのものが作れないのだ。
材質、成型、製法、密閉など、どれも彼の想像を超えていたのだ。
今は他の物で代用できないか？になっているが、現状ではまだまだ完成には程遠い。
だから彼としては日本と争うよりも協力したかった。
もっとも、ジョナサンがレオナルドの身を案じた事でレオナルドはジョナサンを最後に帰還してしまっていたが・・・。
恐らくレオナルドはウェーザ領からアルトのいるケッセルリンク領に向かうつもりだったのだが、ジョナサンが止めさせてしまった。
本来なら味方になっていたはずのアルトが味方でなかったのはこのためだった。
とはいえ、あの時点でレオナルドを帰還させねばつかまっていただろう。
それを思うとジョナサンはままならない物だ、と考えざる得なかった。

アルトは周りに見えないように貴重な金属製の物体、缶詰（しかもプルトップ式）を開いてその中身をジョナサンに見せる。
見たことも無いその見た目に正直言って食べれるのか怪しい雰囲気がある。
だが、匂いは良く、それだけで食べ物であることは確かに思える。
それ故にアルトの薦めもあってジョナサンはそれを口に運んだ。
「！？」

少々くどい味付けに感じるが、それでも塩が聞いており深い味わいもある。
その味にジョナサンは大いに驚いた。
「これが私の回答なのですよ」
恐らく、試されていることを知っていたのであろう。
アルトはそう言うと自身も缶詰の中身を口に運ぶと満足そうな顔をした。
二人でこっそりそれを処理すると、お互いの顔を見合わせて笑顔になる。
「どうやら、警戒がすぎましたかな？」
ジョナサンの言葉にアルトは首を振った。
警戒するのが当たり前だからだ。
「いえ、私が貴方の立場であっても同じでしたでしょう」
アルトはそう言うと空になった缶詰の中を綺麗に布で拭き、別の布で包むと懐に戻した。
ただ捨てるのは勿体無い。
これもまた貴重な研究の為の資料なのだから。
この時、ジョナサンは日本が来たとき、自身の身をもってでもアルトを救おうと決心していた。

宴もたけなわになり、諸侯が酒の勢いもあって大きい口を叩き始めた頃、突然会場に兵士が飛び込んできた。
「シルス様！」
慌てた様子の兵士のシルスが叱責を飛ばす。
「何をやっているか！」
だが、シルスの叱責なんかは兵士にとって動でもいい事柄だったのだろう。
必死に窓を指差して騒いでいた。
その兵士の様子に諸侯も窓の外になにがあるのか？と思いはじめて

いた。
ここは日本との前線ではない。
慌てる様なこと等ありはしない、はずだった。
シルス以下、諸侯の多くが夕闇が迫る外の様子を見る。
そして、場は凍りついた。

そこには、夕闇が迫る海上が見えるのだが、そこに見たことも無い多くの船と思わしきものが浮いていた。
しかも、距離は相当離れているのを差し引いても、かなり巨大な船である。
「な、なんだ・・・あれは？」
シルスも信じられない光景に言葉が上手く出ない。
そんなシルスに兵士が告げた言葉は、シルスの手から杯を落とさせるに十分な衝撃をもたらせた。
「日本軍です！旗から考えても日本の軍です！」
静まり返った宴席の場に、シルスが取りこぼした杯が床に当たり砕ける音が響き渡った。
そんな彼等を後ろから眺めている二人、ジョナサンとアルトはついに始まったか、とお互いの顔を見合わせると頷きあった。
動く時がきたのだ。

第５８話「夜間の奇襲」

ーーホドラー南部沖海上

ホードラー南部の都市、ディサントを一望できる海上に展開した海上自衛隊第４護衛隊群とおおすみ型輸送隊、そして空母ジョージ・ワシントンと揚陸指揮艦ブルー・リッジ率いる外人海軍部隊「第７艦隊」（艦隊呼称はそのまま使用中）は南部貴族連合に対する圧力も考えて、敢えて相手からも見えるようにしていた。
その艦隊は、上陸は翌日としており、この日はあくまでも顔見世としていた。
「やあ、これは観艦式並の陣容だな」
第４護衛隊群司令、佐竹（さたけ）　陽一（よういち）少将はそう呟くとディサントのある方向を望遠鏡で見る。
平地にあるだけに城壁があるかと思われたが、そう言った類のものはなく、港に関してもあまり整備されていないように見受けられた。
勿論、日本の様な港を考えていたわけではないが、出来れば揚陸する際にヘリを使うだけでなく直接接舷したかったのだ。
とは言っても、あくまでも出来ればの話であって期待はしてなかった。
「やはりエアクッション艇を使うべきでしょうね」
実際はエアクッション艇は使わないとされていたが、やはり物資の荷揚げには欠かせないのだ。
ひゅうが型ヘリ搭載護衛艦「いせ」艦長の木下（きのした）　学（まなぶ）大佐がエアクッション艇の使用をあげたのは普通のことである。
「仕方ないだろうな。今後に期待しよう」
佐竹はそう言うと第７艦隊のブルー・リッジに座乗するエドガーと連絡を取った。

その間に木下は全艦隊に停泊を通達し、第４護衛隊群隷下にある第８護衛隊４隻に警戒任務を告げた。
第４護衛隊群は２つの護衛隊が合わさって編成されているもので、合計８隻が所属している。
内訳は第４護衛隊に「ひゅうが型ヘリ搭載護衛艦ＤＤＨ－１８２いせ」「はたかぜ型護衛艦ＤＤＧ－１７１はたかぜ」「あさぎり型護衛艦ＤＤ－１５５はまぎり」同じく「あさぎり型護衛艦ＤＤ－１５８うみぎり」の４隻。
そして第８護衛隊に「こんごう型イージス護衛艦ＤＤＧ－１７４きりしま」（正確にはミサイル搭載型護衛艦だが、ミサイルを積まない護衛艦は存在しないためイージス艦と称される）「むらさめ型護衛艦ＤＤ－１０５いなづま」同じく「むらさめ型護衛艦ＤＤ－１０６さみだれ」「たかなみ型護衛艦ＤＤ－１１３さざなみ」の４隻。
計８隻である。
このうち「きりしま」を旗艦として以下「いなづま」「さみだれ」「さざなみ」が夜間警戒に着く事になっていたのだ。
相手にも海軍戦力があると思われたが、現状で考えるに４隻で対応可能である、とされていたので問題はなかった。
ちなみに、イージス艦がよく艦隊の旗艦の様に思う人もいるが、基本的に護衛隊レベルでなら兎も角、護衛隊群以上であれば旗艦としての運用はされていない。
あくまでも艦隊の防空を担う艦艇なので指揮を執ることよりも防空そのものが主任務なのだ。
「艦長、やはり最終的な打ち合わせはブルー・リッジでやることになった。準備してもらえるか？」
佐竹が木下にヘリでブルー・リッジに向かうことを告げると木下は即座に準備をさせた。
ブルー・リッジに佐竹が降り立つ時には既に夜となっていたが、そ

れでもエドガー本人が出迎えてくれていた。
「ようこそブルー・リッジへ」
そう言って手を差し出すエドガーの手を握り佐竹も「お世話になります」と告げた。
そしてそのままブルー・リッジ艦内の作戦指揮所へと向かう。
作戦指揮所では艦隊の情報、並びに現在偵察任務についているＥ－２Ｃイーグルアイから送られてくる情報を精査していた。
Ｅ－２Ｃは空母ジョージ・ワシントンに搭載されている双発プロペラ機で、早期警戒機となっている。
通常であれば対航空機、艦船の偵察、情報収集に使われるが対地偵察、情報収集ができないわけではない。
また、無人偵察機であるＲＱ－２　パイオニアをも使い更に綿密な情報を集めている。
「上陸は明日になりますが、最終的な手順と打ち合わせをしたいと思います」
佐竹はエドガーに向かってそう言うとエドガーも頷いた。
実際、既に作戦は決まっている物の、実際に現地では何があるか分からない。
そこで直前でのめん密な打ち合わせが必要になるのだ。
本当なら着いたその日のうちに作戦を行いたいが、現地の情報がどうしても不足してしまうのでこの様な体制をとることにしたのだ。
「相手の兵力は船舶は港にあるだけで８隻、小型のボートやヨットクラスであれば２４隻を確認している」
本来なら佐竹が作戦を仕切るべきなのだが、エドガーの方が階級は上なのだ。
やはりそこは経験の多いエドガーに任せるべき、と考えた政府の指示もあり本作戦はエドガーの指揮で行われる。
そのため佐竹はその支援、と言う立場にある。
「空母ジョージ・ワシントンと第８護衛隊はここで睨みを利かせつつ、第４護衛隊以下輸送隊、そしてそちらの揚陸艦は明日にも陸路

封鎖を行う、これは予定通りですかな？」
佐竹は決まっている予定をそのまま進めるために確認する。
エドガーもそれでいいと判断したが、先にここで相手の船舶だけでも叩いておきたかった。
しかし、流石にこれは佐竹が反対する。
民間船舶か軍用船か判断できないからだ。
向かってくるなら警告の後に撃沈だが、いきなり民間船舶かもしれない船を沈めるのは流石に拙い。
下手したら民間人の印象が最悪になってしまいかねなかったからだ。
「民衆の支持を得られなくなることはできるだけ避けねば戦後に問題を残します」
佐竹の一言に、エドガーは以前に考えたことを思い起こす。
（なるほど、此方の作戦遂行に悪影響があると分かってても目標は選ぶか・・・）
軍人として指揮官として効率的かつ合理的判断を求められてきたエドガーには新鮮な感じがした。
逆にその程度の制約を乗り越えられなくては軍人としての能力の限界を示すようなものなのか、と・・・。
実際、佐竹は別にそう言う考えは無い（国民、マスコミの反発を恐れた）のだが、そこは良い食い違いというべきだろうか？
二人の思うところは別々であった。

明日の作戦開始時刻に備え各将兵が休息を取るなか、闇夜にまぎれて接近する船舶があった。
ディサント侯の保有する私掠船だ。
闇夜では確認するのも困難だが、それでも夜間航行などは何度もやってきている。
それに月明かりから見ることができるのだ。

そうやってその視掠船「ガウデント」号はゆっくりと一番大きな船、ジョージ・ワシントンへと向かっていく。
「よーし、いいぞ・・・進路このままだ」
船長の一言に甲板に集まった将兵が手柄を立てんと声鳴き闘志を燃やす。
しかし、その彼等にしても接近するに従い、余りにも巨大な威容に固唾を呑む。
信じられない大きさだった。
彼らの乗る船がせいぜい３０ｍなのに対して目標の船は１０倍以上もある。
そう、まさしく１０倍以上あるのだ。
ニミッツ級航空母艦の６番艦たるジョージ・ワシントンは全長３３３ｍ、全幅７６．８ｍ、喫水線の高さは１２．５ｍもあるのだ。
今彼等が乗るガウデント号が全長３０ｍ、全幅７ｍ、喫水線が２ｍなのを考えると明らかに大きさが異常なほど違いすぎた。
果たしてこんなのに乗り込めるのか？と不安を抱くのも無理は無い。
しかし、接弦しロープを投げ込み乗り込めば勇猛なる彼等に敵うものなどない。
彼等はそう信じていた。
だが、その彼等に不運が襲う。
突然彼らの前方に信じられない速度で割り込む船があったのだ。
それと同時に左右も塞がれ、後方も遮断されようとしていた。
日本の海上自衛隊第４護衛隊群所属、第８護衛隊だった。
一斉に明かりを燈し、ガウデント号を照らし出す。
いきなりの上、闇夜になれた目には痛いほどの明かりだった。
そして前方の船より声が響き渡る。
『此方は日本国海上自衛隊所属、護衛艦「きりしま」である。そこの船舶は直ちに停船せよ。停船せぬば撃沈する』
未だ距離があるにも関わらず、彼らの耳にハッキリと声が聞こえてくる。

「な、なんだと！？」
船長は驚きの声を、船員や乗り込んでいた将兵は動揺している。
しかし、それでも止まるわけには行かない。
「全速だ！全速で接近しろ！」
船長の命令により我に返った船員たちが静かに接近するために落としていた船足を上げるために帆を降ろしていく。
その様子は護衛艦「きりしま」からもハッキリと見えていたのだろう。
再び警告が発せられる。
『停船せよ、しからざれば撃沈す』
ハッキリとした威圧的な声が響くが彼等はとまる積もりなく、そのまま「きりしま」めがけて接近を開始した。
こうなったからには目の前の船に乗り込んでやろう。
そう考えたのだ。
確かに空母ジョージ・ワシントンに乗り込むよりも簡単に乗り込めるだろう。
そうなればこっちの思い通りに出来る。
なによりも明かりを照らして来ても海上で使える飛び道具は命中率が悪い。
簡単に此方を沈めることなど不可能だ。と・・・。
彼らの考えは間違いではなかっただろう。
しかし、それはあくまでも従来の、この世界での「今まで」でしかない。
そこに気付けなかった、知りえなかったのは誰の責任でもなく彼等自身の不幸としか言えなかった。
突然、警告を発した『きりしま』から更なる言葉が飛び出す。
これは彼等に聞こえるように敢えてスピーカー（この時使っていたのは指向性大音響発生装置）を使ったのだ。
『撃ちぃ方ぁ・・・始め！』
その号令と同時に、前方を塞ぐ船「きりしま」から一瞬だけ光が発

せられる、そして瞬きするほどの一瞬の後、彼らの乗るガウデント号の船首付近で轟音と共に何かが爆発した。
「きりしま」が放った１２７ｍｍ５４口径単装速射砲はガウデント号の船首に命中したのだ。
その瞬間、ガイデント号の船首は粉々に吹き飛び、その辺りにいた人員諸共バラバラにしてしまった。
爆発が収まり、爆音と衝撃から立ち直った誰もが目を疑った。
喫水線辺りは無事だが、船首付近が無くなっており、そこにいた何人もの船員と将兵の姿がなくなっていたのだ。
「何が・・・」
誰もがそう思っていた。
何がおきたのか全く把握できなかったのだ。
船首を吹き飛ばした爆発の影響で甲板は無くなり、下２階層までもが見えるほどの被害だ。
そして、不運にも生き残った負傷者が助けと痛みから来る呻き声をあげている。
負傷者の中には腹が破れ内臓が飛び出しそれを必死にかき集めるもの、目を失ったのかフラフラと両手を前に突き出して辺りを彷徨うもの、そして失った足や手を探し回るもの。
そんな光景が眼前にひろがっており、それまざまざと見せ付けられた将兵の中には戦意を失っている者もいる。
こんな無残な真似が人の所業なのか？
多くの者はただの一撃で引き起こされた事に驚くよりも先に、自分たちが相手にしようとしている存在が途轍もなく恐ろしいものに思えていた。
『此方は日本国海上自衛隊、護衛艦「きりしま」である。停船せよ、しからざれば撃沈す』
先程の声が三度彼らの耳に飛び込んでくる。
ただし、さっきと違い威圧的にではなく、まるで頼むから止まってくれ、と言う様な雰囲気が感じられた。

だが、そんな物はガウデント号の面々には分からなかった。
ただ恐ろしい何かが自分たちに向かっている、それだけが彼らの感じたものだった。
「怯むな！突撃しろ！」
船長は何とか鼓舞しようとするも自身も恐怖を感じていた。
何せ月明かりがあるとは言っても、その中で正確に攻撃してきたのだ。
しかもそれは魔法で起こせる爆発とは全然違い、かなり遠くから攻撃できる上に細かい破片を辺りに飛び散らせて被害を拡大している。
勿論そこまでは分かっていないのだが、ただの魔法攻撃ではないのは分かっていた。
にも関わらず、彼には攻撃するしかなかった。
退路も既に塞がれている。
捕虜になればどうなるか分かったものではない。
今まで彼は私掠船の船長として行動してきた。
それが彼が行ってきた捕虜に対する処置、すなわち奴隷化が自身に降りかかると思ったのだ。
だが、それが彼らの運命を決定付けたと言える。
尚も止まらぬガウデント号に、「きりしま」は決定的攻撃を加えることにした。
いや、自艦の防衛の為にもせざるを得なくなったのだ。
既に距離はかなり接近され６００ｍを切っている。
これ以上は危険だと判断した「きりしま」は１２７ｍｍ５４口径単装速射砲、オート・メラーラ１２７ｍｍ砲を撃った。
その一撃はガウデント号に吸い込まれるように艦首付近の穴に飛び込み内部で炸裂した。
結果、ガウデント号は竜骨（キールとも呼ばれ木造船舶の船首から船底を経由して船尾へと伸びている）をも粉砕し、風船のように内部から破裂するようにガウデント号を破壊しつくした。
当然、乗っていた乗員で内部にいたものはバラバラに吹き飛ばされ、

甲板にいたものも暗い海面に投げ出していく。
そして乗り込ん為に武装していた将兵は鎧を着たままであった為にそのまま沈んでいってしまう。
無事だったのは、ガウデント号の船尾付近におり、鎧を着込まない船員や、着ていても軽くて動きやすい革鎧の者だけだった。
それも海面に投げ出された者だけだ。
船内に居た者は大半があっと言う間に沈んでいくガイデント号に残されたまま暗い海中奥深くへと沈んでいってしまった。

結局、船員２１名、将兵４０名を持って行われた船舶による夜間奇襲攻撃は失敗し、生き残った船員１１名以外は海の藻屑と消えた。
しかし、ディサント侯の私掠船艦隊にとっての本当の不運はこれからだった。
なにせ生き残りは皆捕虜になってしまい、報告するものが居なかった為に結果を知るすべが無かったのだ。
唯一彼等にわかっていたのは、ガウデント号の物と思われる破片や積荷、そして死んだ者たちの身体やその一部が海岸に流れ着いたことから沈んだ。
ただそれだけだった。

第５９話「上陸作戦」

ーーホードラー南部沖

誰もが口を開かない。
いや開けなかった。
確かに相手の船は小さく木造船であった。
だが、たった2発（内1発は威嚇のはずだった）で沈んだのだ。
あっけない所ではない。
ありえない話であった。
「まさかここまでの差があるとは・・・」
こんごう型イージス護衛艦「きりしま」艦長、若林（わかばやし）　武光（たけみつ）中佐は唸る様に呟いた。
その表情は青い。
海上自衛隊創設以来、初めて人に向けて撃った攻撃は予想以上の結果をもたらしていたからだ。
「・・・まさか、近接信管が作動しないとは思いもしませんでした」
副艦長も表情を暗くして呟く。
たしかに１２７ｍｍ砲弾の近接信管が木造船に対して作動しない可能性はあった。
しかし、沈んでいった船の規模から大丈夫、という楽観的な見方があったのも事実だった。
それがこの結果だ。
既に生存者の救助は命じていたが、あっと言う間に沈んでいった船の様子には正直言って言葉がない。
「これならシウス（ＣＩＷＳ：近接防御火器システム）でも十分だったな」
結果論ではあるが過剰防衛とも言うべき結果には頭を抱えざるえな

い。
その思いから慢心ではなく、２０ｍｍバルカンファランクスとも言うべきＣＩＷＳ（自衛隊ではシウスと呼称）での攻撃が妥当に思えたのだ。
だが、従来から考えれば自艦の防衛も考え、警告射撃の後に船体射撃、のはずだった。
ところが、威嚇の為に放った１２７ｍｍ砲の近接信管が木造であった事や、正面に打ち込んだことによる近接信管の探知範囲を狭めた事により威嚇が威嚇ではなくなってしまった。
つまりはいきなり直撃弾を放ってしまったのだ。
もっとも、威嚇でも船体に向けたのだ。
被害は出るだろう。
しかし、わざと外して海面を撃っても銃火器さえないこの世界では威嚇にもならない。
下手すれば当たってない、当たらないと思われても支障があるので船首前方で近接信管による爆発を威嚇としたのだ。
「やはり狙うならマストを狙うべきだったでしょうか？」
発砲前にマストを狙った方がいいのではないか？と若林は言ったのだ。
だが、副艦長、及び砲術長は「マストでは近接信管が働かない可能性が高い」と提言したために船体を狙うことにした。
その結果がこれである。
「いや、許可し命じたのは私だ。私が責任を負うべき事柄である以上は君たちの責任ではない」
沈痛な面持ちのまま若林はそう言った。
そうだ、俺はこの艦の全責任を負うべきなのだ。
内心でそう思いながら、まだ暗い海面を艦橋から見続けていた。

翌朝、シルスは昨夜に送り出した私掠船の戦果を期待していた。
しかし、朝食の最中に聞いた報告に声を荒げてしまう。
「馬鹿な！では返り討ちにあったと言うのか！」
彼の怒鳴り声に報告に来ていた兵はただただ小さくなるばかりだ。
報告によると詳細は不明なれど船の残骸や兵の遺体が浜辺に打ち上げられたことで分かっていた。
それらから判断して返り討ちにあい全滅した、と判断されたのだ。
なにより生存者が一人もいないのだ。
全て憶測、推測でしか語れないがほぼ間違いないと判断された。
「・・・で、敵の損害は？」
全滅したのは疑いないが、それでも被害がある分、日本の海軍も少なからず打撃を受けている。
そう感じたのだ。
しかし、明確な戦果は誰も確認できていないのだ。
判断しようがない。
ここで報告を行っていた兵は「敵の船の大半が見当たらないのでかなりの戦果だと思われます」と答えた。
これはシルスの武官である部下たちはそう考えたのだが、その判断は大きく間違っていた。
空が明るくなる前に空母ジョージ・ワシントンと第４護衛隊の５隻を残して第８護衛隊（４隻）、おおすみ型輸送艦（２隻）、外人海軍部隊揚陸隊（５隻）の１１隻は陸上補給路社団の為に移送していたのだ。
そのため、大半を「沈めた」と考えたのだが、幾らなんでも１隻でそこまで戦果を挙げられるわけがない。
せいぜい１，２隻をやれればいいほうだろう。
故にシルスは激怒した。
「馬鹿者！希望的観測で物を考える奴がいるか！」
報告に上がった兵が悪いわけではないのだが、思わず装そう怒鳴りつけてしまう。

相手が5隻を残して沈んだのであれば常識的に考えても夜明けと共に撤退するだろう。
なによりも相手の損害を裏付けるものが何一つ見つかってないのだ。
当然、1隻も沈んでいない、と考えるのが妥当だった。
「・・・将共に伝えろ。ハッキリと分かる戦果以外は働きとは認められん、とな」
少しだけ冷静さを取り戻したシルスは兵に伝言を託すと下がってよい、と手で合図した。
その様子にほっと安堵を浮かべた兵は退室していった。
本来なら、後ほど自分の配下を叱責し、告げるべきなのだがそんな気分にはならなかった。
そして、シルスは朝食を切り上げ、自室に戻ると一人思案に耽る。
16隻の内、11隻は何処に行ったのか？
残った5隻は何のために留まっているのか？
そして、何故簡単に奇襲がバレ、しかも返り討ちにあったのかなど・・・。
奇襲がばれたのは運不運もあるだろう。
相手も愚かではない。
当然、奇襲には備えていただろう。
故に発見され、奇襲が不発に終わったとしても仕方ない。
しかし、船を沈めるには当然ながら相手の船を破壊しなければならない。
だが、船に積んであって船を壊せる武器、それは攻城槍（バリスタ）ぐらいなものだ。
後は火をかけるしかないのだが、それなら遠目でも分かったはずだ。
それが分からなかったとなれば攻城槍しか考えられない。
だが、揺れる船上から発射しても余程接近しなければ当たるものでもない。
如何にしてシルスの私掠船を沈めたのか？
これればかりは幾ら考えても分からない。

仕方なく、シルスは消えた船の行方を考える。
配下が姿が見えないから沈んだと判断していたが、素直にそれを信じるほど彼は凡庸ではない。
恐らく、何かしらの意図を持って姿を消したのだ。
その意図を読まねば彼等を出し抜くことは出来ない。
そんな彼がふと視線を上げたそこには海図が壁に掛けられていた。
数年前に大金を叩いて作った周辺の海図だ。
正確さは保障できる（この世界の中では、の話だが）ものだと彼は自負しているものだ。
「ふむ・・・」
その海図の前に来たシルスは、その海図を見ながら自分ならどうするか？をしきりに考える。
彼は日本は王国をいとも簡単に打ち破った国であることは分かっていた。
だが、決して勝てない相手ではないこともまた承知していたのだ。
しかし、その勝利を掴むには彼等日本を出し抜き、裏をかき、そして先手を取らねばならないと考えていたのだ。
そして、彼は海図を見ながら気付いた。
そう、恐らくこの世界で日本相手にその目的を正確に読みきった最初の一人になったのだ。
「そうか！目の前の船は海路を！そして消えた船はハウゼン男爵領が守る陸路を塞ぐつもりか！」
恐るべき智謀だった。
決して無能ではないシルスは遂に答えに辿り着いた。
それはまさに脅威と言えるだけのものがある。
この場に北野辺りが居れば部下に欲しがると言える物だった。
だが、そんな彼にも予想できないものがあった。
答えに辿り着いたシルスの下に部下が飛び込んでくる。
「報告します！ハウゼン男爵領に見たことのない兵団が上陸！街道を封鎖したとの伝令が！」

突然飛び込んできた凶報にシルスは、先手を取らねばならない相手を前に自身が後手に回ったことを悟る。
同時に、想像を遥かに越えた日本の動きの早さに、やられた！と感じていた。

ーーホードラー南部　ハウゼン領街道

夜明け前に陸路封鎖を目的とした１１隻は場所を移動し、尚且つクリーブランド級ドック型輸送揚陸艦「デンバー」とワスプ級強襲揚陸艦「エセックス」からＣＨ－４６「シーナイト」が、おおすみ型輸送艦「おおすみ」と同型「しもきた」からもＵＨ－６０Ｊ（本来搭載機ではないが今回の為に積載）が飛び立ち、ハウゼン領と他国との陸上通商路の出口を先行部隊が制札、封鎖していた。
そこに夜明けと同時に到着した各輸送艦、強襲揚陸艦からエアクッション揚陸艇が先行部隊の制圧した地域に車両とともに展開、急ごしらえとは言え陣地の形成を開始していた。
その陣地構築を知った領主レックスは手勢（約１００名）を差し向けてきたものの、数が違い過ぎた為に踵を返して慌てて撤収していった。
今では、遠くから此方の様子をうかがうことしか出来ないで居る。
恐らく、援軍を待っているのだろうが、この世界の軍の展開速度は余り速くないのを知っていた封鎖部隊は、比較的余裕を持って陣地を作っていた。
例え数千の兵を引き連れて来ても車両も使えば十分に守りきれる。
反対側の街道方面には幾つかの監視所を作るに留めて、ホードラー南部側を重点に防御するのだ。
数千程度では簡単には敗れまい。
そして、万が一隣国から軍が差し向けられ、交戦は必須となれば海

上から第８護衛隊４隻から街道に向けて艦砲射撃を行うことになっていた。
街道は切り立った崖に沿って作られているので直接射撃の必要はない。
崖を撃って、道を瓦礫で塞ぐだけで事足りるのだ。
最初からそれをしないのは、復旧などの面倒を考えての話なのだ。
その意味では本上陸作戦は比較的気軽な物であった。
ブルー・リッジ艦上でエドガーは作戦の進歩状況がほぼ予定通りに進んでいることを確認する。
中でも自衛隊の補給能力には正直言って驚かされる。
普通なら自衛隊の補給能力はお世辞にもいい、とは言えない。
ただし物量と言う意味では、だ。
それでも、自衛隊の補給の質の良さは米軍のそれを上回っているだろう。
何せ米軍と違い、自衛隊は予算が潤沢にはない。
むしろ何時も限られた予算を必死にやりくりして装備を整えたりしている。
故に同じ補給でも、限られた中でも十分な準備を行って出来うる限りの対策を施して補給するのだ。
ある意味で力任せで体力任せな米軍とは違うのだ。
これは実際にイラクやアフガニスタンを経験した米兵も驚くぐらいだ。
米軍の場合、量は十分でも弾薬ばかりで日用品が無かったり、日用品があっても偏ってたりする。
これは物量が豊富にあるが故に管理が難しいのも一因であるが、何よりも自分たちの能力そのものに絶対の自信を持っているからなのだ。
逆にそれで泣きを見ることもあるが、足りなかったらまた補給する。と言う本当に物量任せな考えがあるのだから改善されない。
自衛隊の場合、大量の物資を大量に輸送するのは難しいので、十分

な準備を事前に行い、何が消耗し不足しているのか、何が必要なのかを考えて補給する。
おかげで自衛隊は何でもあると勘違いされてしまっている。
ただし、弾薬は除く・・・という状態ではあるが・・・。

しかし、こう言った合同作戦時には非常にありがたい話だった。
おかげで大抵の物は自衛隊に任せればいい。
その自衛隊で補えない部分を彼等外人部隊が埋めればいいのだ。
とはいえ、一応展開する部隊や艦艇に対する日本からの補給は完全に自衛隊に任せることになるので、きちんと補給が届くかはやってみなければ分からない。
もっとも、エドガー自身はそれほど疑ってもいなかったが・・・。
「司令、陸地への物資の揚陸が終了しました」
部下の言葉に予定通りに事が進んでいることに安心する。
敵前上陸と言えるので神経質になっていたようだった。
だが、心配は杞憂に終わり、後は行動するだけとなっていた。
「うむ、各艦エアクッション艇を収容次第、各艦は割り当てられた地点にて待機だ」
エドガーはそう言うと陸地を見る。
陸地で何かしらの問題が起きても将兵を直ぐに収容できる大勢を維持する。
その上で作戦の指揮を取らねばならない。
その重責を負ったエドガーは問題など起こさせん、という気迫の篭った目を向けていた。

第６０話「化け物」

ー南部ホードラー、中央ホードラー境界線

南部において日本による上陸、海上封鎖が行われているのと同時刻、シバリア市の南に位置する南部との境界線では陸上自衛隊を中心とした南部攻略部隊が前進を開始していた。
この日本による突然の前進に南部貴族連合の軍は決戦を挑む愚は犯そうとはせずに即座に後退を開始した。
元から正面切って戦うよりも地の利を生かした戦いをすべきとされていたからだ。
これはシルスの師事が徹底していたためだったが、日本としては織り込み済みの話だった。
元から決戦ではなく持久戦、ゲリラ戦を挑まれる方が困るのだ。
当然、相手がその様な動きをした時のことは考えてあった。
南部貴族連合が後退を開始したのを確認した陸上自衛隊は、その退路を封じるべく多数のヘリを使った大規模ヘリボーン作戦を開始。
これによって貴族連合軍の退路を封じると共に一気に蹴りをつけるべく進軍を開始していた。
だが、その作戦は予想外の事態により失敗することになってしまった。

「隊長！奴ら次々とやってきます！」
自衛官の一人が谷垣（たにがき）　康人（やすと）中尉に叫びながら報告してくる。
谷垣の目の前で繰り広げられる戦いは、戦いではなく虐殺に見えただろう。
だが、間違いなく向かってくる常軌を逸した者たちにより、窮地に立たされているのは彼等自衛隊の側だった。
「クソ！こんなのが居るとは聞いてないぞ！」

悪態を吐きながらも谷垣もまた８９式小銃をフルオートで撃っていた。
普段なら単発、もしくは3点制限射撃をしていただろう。
だが、今目の前に迫っている脅威に対してはフルオートで撃たねば意味が無いのだ。
その脅威とは、一言で言うなれば化け物だ。
全長３ｍ近い巨体、そしてその体躯から発せられる木を軽々と粉砕する豪腕。
それは人が接近されたが最後、生き残るすべなどない程のものだ。
「撃ち続けろ！決して近寄らせるな！」
決死の思いで叫ぶものの、辺りは部下たちの発する銃声と怒鳴り声、そして化け物の断末魔と咆哮により狂騒を作り出している。
どれだけの者がそれを聞いているかなど確認しようが無い。
「左１０時方向！新たに７接近！距離３０！」
誰かが化け物の接近を必死に食い止めながら仲間に敵の存在を教える。
その声に気付いた2人がＭＩＮＩＭＩと小銃を向けて発砲を開始する。
だが、多数の命中弾があるにも関わらず中々前進を食い止められない。
「こんな豆鉄砲じゃダメだ！もっとデカいの無いのか！？」
ＭＩＮＩＭＩや８９式小銃から放たれる国産の５．５６ｍｍ普通弾は命中精度と貫通性はある。
だが、貫通する分だけストッピングパワーと言う銃弾による衝撃力は低いのだ。
鎧を着た相手には十分だったはずが、今目の前に迫る化け物には不十分な効果しかもたらさない。
「動きは鈍いんだ！頭を狙え！」
それを合図に凄まじい勢いで頭に銃弾が集中していく。
そして彼等は見た。

目の前の化け物の高い生命力を・・・。
頭が半分吹き飛んでいるにも関わらず、動きを止めないのだ。
「ば、ばけものめぇぇぇ！」
必死になって弾丸を叩き込み、漸く一体を沈黙させる。
だが、その後ろから次の一体が直ぐに姿を現す。
際限が無い。
そんな思いがしてくることだろう。
実際、頭が半分無くなれば致命傷なのだが、それでも直ぐに動きを止めない事が自衛官たちに恐怖を与えていた。
そう、シルスは南部にいるこの手の化け物、オーガ（食人鬼）の生息場所を利用して各地に足止めの場所を用意していたのだ。
この点は流石に地の利を持っているだけあるだろう。
そして貴族連合軍は多少時間はかかっても別の安全なルートを使って後退をしていく。
この方法で時間を稼ぎつつ日本に出血を強いて、頃合を見計らって講和へと持っていくのが彼の筋書きだった。

流石にある程度の情報はレオナルドを通して知らされているが、街道に沿って移動していた彼では街道から外れたところの情報までは分からない。
衛星写真で化け物らしき影はあったが、それも一部しか確認できなければ脅威とされない。
ここに来て日本に諜報を含めた事前情報収集能力の欠如が悪い形で発露されていたのだ。
後方の司令部で状況を見ていた安藤は逼迫した事態に顔面蒼白だった。
まさか初動から躓くとは思っても見なかったからだ。
だが、今も後方を遮断するために出た舞台は死に物狂いで戦っている。
呆然としている暇は無い。

「航空支援を出せ。ヘリボーンで展開した部隊を回収する支援をさせるんだ」

予想もしなかった事であるが、何より部下の命が最優先だ。

犠牲も報告されつつある中、これ以上の被害の拡大は防がねばならない。

安藤の支持で出された航空支援は即座に隊員たちが戦う上空へとやってくる。

それは普通化の隊員にとって心強い味方、ＡＨ－１Ｓコブラだった。

「味方の後退を支援する。化け物を味方に近寄らせるな！」

攻撃ヘリ１２機が一斉にその凶悪な火力を展開する。

ＡＨ－１コブラの機首直下にある２０ｍｍ　Ｍ１９７三砲身ガトリング砲が低い唸り声の様な音を発する。

その直後、化け物の身体がバラバラに引き裂かれていく。

流石に生命力が強いオーガと言えども２０ｍｍ機関砲弾を受けてはひとたまりも無い。

退避を開始する自衛隊に被害を出さないように細心の注意を持って航空支援が行われていた。

「展開部隊の回収が完了しました」

航空支援を開始してから１時間は経った頃、ようやく安藤の下に安心できる報告が届いた。

だが、負傷者が５名、死者１１名と言う報告には頭を抱えざる得なかった。

「・・・」

司令部内が沈黙に包まれる。

まさか、最初っから躓き、犠牲まで出るとは思わなかったのだ。

今まで犠牲がでなかったわけではない。

だが、緻密に立てたはずの作戦が失敗し、なおかつ圧倒できるはずの手はずを整えたにも関わらずにこの事態である。

誰もが重苦しい雰囲気を出していた。
だが、だからと言って南部平定を止めることは出来ない。
初動が失敗したからやめましょう、帰りましょう、とはいかないのだ。
「諸君、我々は進まねばならない」
安藤は立ち上がり装告げる。
「初動は失敗した。だが、これから挽回できる。いやせねばならん」
彼の言葉どおりだ。
ここで立ち止まっている場合ではない。
彼等が足踏みしているしている間に日本は亡国へと進んでいるのだ。
「ここは一気に殲滅、と言うのは諦めて一歩づつ着実に歩を進めよう」
彼の言葉に漸く司令部は動きだす。
幕僚たちも互いにどうすべきかを意見を出し始める。
誰もがわかっていた。
短期決戦に拘る余りに、確実な一手ではなく博打を打ってしまっていたことに・・・。
それはここまで勝ち続けた事による慢心ともいえる。
だが、最初の一歩の失敗が逆に彼等に引き締めを与えることになった。
これはシルスの失敗だろうか？
否、失敗ではないだろう。
安藤たちに、彼等に現実という教訓を与え、そして彼等がそれを学ぶことを知っていたに過ぎない。
「ようし！この汚名は絶対に返上し名誉挽回するぞ！」
安藤の一声が司令部に響き渡ると、司令部内はあわただしく動き始めた。

ーシバリア市特殊任務部隊駐屯地

日本が南部平定に動き、そして初動から躓いてしまった話は高橋たちの耳にも届いていた。
南部では海上封鎖部隊が順調に事を進めているにも関わらず、陸でその様な失敗をしたと言うのが信じられなかった。
しかし、現実は覆しようが無い。
失敗したのは事実だった。
だが、南部平定部隊もショックは受けていたものの、未だ士気旺盛なのは安藤が引き締めにかかったからだろう。
それは報告を聞くだけでも分かってくる。
ただ、高橋は気になる事があった。
「・・・これは、俺たちにも声がかかるかもしれんな」
予感めいた独り言を聞いた井上は悲鳴にも似た叫び声を上げる。
「冗談じゃねぇぞ!?こちとらベサリウスとここを行ったり来たりで忙しいっつーの!」
井上の言葉どおり、彼等特殊任務部隊は正規軍の大半を失ったベサリウスに代わり一時的に治安維持にあたる支援旅団への補給の手伝いに借り出されており、ここしばらく休みも無いほどに忙しかった。
この日とてベサリウスから帰還して次の出動の準備中だったのだ。
「全くです。使った燃料、糧食、資材の調達だって終わってませんよ」
流石に生真面目で知られた佐藤もたまったもんではないと声を上げる。
「たしかに俺たちは南部に行く予定は無かったけど、事情が変われば話も変わるだろう」
諦めろと言わんばかりの高橋に佐藤も井上も顔を見合わせるしかない。
「大体、初動に失敗したと言ってもそれからは順調なんだろう?」
井上の言葉どおり、初動に躓いたとはいえ自衛隊はそこまでやわで

はない。
即座に装甲車両を利用しての進軍、そして常時空中からの支援が行われており、その動向は順調と言えるものだった。
だが、それは南部貴族連合が抵抗らしい抵抗を見せないこと、そして急がずに地盤を確保しつつ進む故のことだった。
つまり、展開が予定より遅いのだ。
このままではその分の皺寄せが海上封鎖部隊に降りかかってしまう。
また、これは南部平定が長期化することを示しており、日本としては拙い事態なのだ。
「まあ、無いことは祈るが確実に声はかかると思って準備しておいてくれ」
高橋はそう言って電話を取る。
地の利どころか南部そのものには言ったことさえないのだ。
ましてや、話に聞く化け物の知識も無い。
なら、その知識のある3人に協力を求める必要があるのだ。
このとき、高橋は自分の予想通りであれば、先行偵察、及び調査に自分たちが使われる可能性があった。
現在の自衛隊で偵察（リコン）は専門の部隊がある。
南部平定にも当然参加しているものの、その絶対数は少ない上に装備は軽武装だ。
万が一のときは対処に困っているはずだと思ったのだ。
その点、高橋たちの特殊任務部隊は比較的重武装であり、しかも全自衛隊中最も豊富な実戦経験がある。
それらを勘案するとどうしてもお呼びがかかる可能性が高くなってしまうのだ。

一時間後。
高橋の前にはアイン、シャーリー、ミューリの3人とフェイの合計4人が居た。
正直言ってフェイは呼んでないのだが、今では自由の身になってい

たフェイはたまたま近くに来たから寄ったという。
丁度いいので彼女にも話を聞こうと思い、高橋は敢えてこの場に招きよせることにしたのだ。
「・・・と、言うわけで呼び出しがかかると思うんだ」
詳しく話ては居ないが、高橋は南部平定をより効果的に、効率よく進めるために呼び出されると言う形で説明する。
流石に現在の自衛隊の状況までは話す訳には行かない。
どんなに親しくても機密漏洩などと言う愚にも付かない真似をするわけにはいかない。
勿論、協力してもらえるようになり、なおかつ許可があれば詳しく説明できるのだが、現状ではお呼びがかかっていないのだ。
許可を取り付けるなど出来様はずも無い。
「なるほど、そりゃオーガだな」
南部に出没する化け物の特徴を聞かされたアインが即座に答える。
「オーガ？」
高橋はどう言った存在なのかを聞く。
「いや、力は強いし体力あるけど・・・そんなに苦労しないな」
簡単に言い放つアイン。
このアインの言葉に南部に展開する自衛隊が苦労してるとは絶対に言えない、と高橋は思った。
「基本的にバカなんだあいつらは」
だからちょっとした罠でも簡単に引っかかるという。
そんなアインに横からシャーリーが「あんたと同類よね」と言うが高橋はそれは聞かなかった事にした。
「集団で行動しますが本能優先ですね。なので餌でもちらつかせれば真っ直ぐ向かっていきますよ？」
ミューリもそう言ってより詳しい生態を教えてくれる。
つまり、棍棒などの簡単な道具を使う知能はあるものの、力と体力任せな生き物なので多少なりとも腕に覚えがあれば1対1でも戦えると言う。

ただし、その力は流石に凄まじいので一撃でも受ければ余程頑丈な鎧でも一撃で粉砕しかねないらしい。
「効率よく倒す弱点とかは？」
少し真剣なまなざしで高橋は質問する。
もしかすれば自分たちがあいてをしなければならないかもしれないのだ。
そうでなくとも情報として平定に出ている部隊に教えればよい。
「そうだなぁ・・・簡単に倒すなら首を切り落とすといいけど、後は身体でもかなり大きくて深い傷を与えれば転げまわって死ぬかな」
何度もそうやって戦ってきたとアインは答える。
オーガはなにもホードラー南部だけに生息する物ではない。
大陸全土に生息しているのだ。
ただ、平地ではなく森や巣窟などの直接日の光を浴びないところに好んで暮らしているようだった。
そして、オーガの好む食べ物は人だとも教えられた。
「そいつらは人を食うのか？」
高橋は流石に衝撃を受けた。
たしかに元の世界でも肉食獣は人でも食べてしまうものは幾らでも居た。
しかし、現代ではまずそんな話は聞かない上に、特別人だけを狙うなど聞いた事が無い。
「伝承によれば人食いをしていた人の一族が神の怒りに触れた成れの果て、とも言われています」
シャーリーが補足説明をする。
この辺りは伝説なので真実かは分からないという。
しかし、他の生き物を食らう事は食らうが、人を見つけると人だけを狙ってくるのが伝説の由来ではあると言う話だった。
「・・・完全に駆除できないものかね？」
横で聞いていた井上がつい口を挟んでしまう。
しかし、それにはフェイが答えた。

「奴らは繁殖力が強くて中々駆除は難しいのだ。だからバジルでも部隊を率いて間引きするのがやっとだったのだ」
フェイの言葉どおりで、大陸中の国々は完全な駆除は諦めていた。どうしても増えすぎて人里に現れるならばオーガを叩いて数を減らし、人の生息域から遠ざけるしかないのだ。
それはオーガに関わらず、他の生き物でも少なからず幾つか存在していた。
そうやってこの世界では人の生存域を確保してきたのだ。
「うーむ、ゴキブリみたいな奴だな」
ハッキリ言って相手したくないと井上がこぼしているが、相手をしなくてはならないときはいつか必ず来るのだ。
それが早いか遅いか?というだけの話でしかない。
「なるほどねぇ・・・」
高橋はひとしきり説明を聞いて頷いていた。
たしかに話を聞く限りでは厄介な生き物ではあるが、普通に相手できるレベルの存在ではあるようだった。
だが、森と言う視界が限定されたところで出会えば脅威になるのは確かであった。
「高橋よう、やるならキャリバー５０いるぞ?」
井上はそう言って「ウチの隊にはねぇぞ」とも付け加えた。
キャリバー５０とはブローニングＭ２重機関銃の弾薬のことで、１２．７ｍｍと言う大口径対物用の代物だ。
対物用と言うだけあって装甲目標にも、ちょっとしたコンクリートでも撃ち抜いてしまう。
ヘリなどの低空を行く航空機にも効果があり、人体に当たろう物ならば一発で吹き飛ばしてしまう。
それ故に元の世界では人体への射撃はハーグ陸戦協定に抵触する可能性が指摘されている代物だ。
そんな物は確かに特殊任務部隊には無い。
何せ「対人」しか経験してない上に、それ以外を相手にするなど想

定してないからだ。
「お呼びがかかったら配備を申請するよ」
高橋にはそう答えるしかなかった。
願わくば、お呼びがかかりませんように、との彼の祈りもむなしく、
その日の夕方に南部平定部隊司令部に呼ばれることになる。

第６１話「特殊任務部隊南部へ」

ーシバリア市南部攻略司令部

司令部に呼び出された高橋は安藤から直接南部の状況を聞かされていた。
どうやら、想定していたよりもずっと苦しい戦いを強いられていた様だった。
南部貴族連合軍は積極的な交戦を避けつつ、山奥へ山奥へと後退を続けており、途中に存在する村などの物資を根こそぎ奪いさると言う事をしていた。
所謂、焦土戦術である。
食料も何も現地調達する必要は日本には無い。
元から自前での物資を持ち運んでいる上に、足りなくなれば後方から輸送すれば良いからだ。
だが、現地の住民が飢えているならばどうしても後のことを考えて分け与えねばならない。
その分、日本の物資の消費量が跳ね上がってしまう。
また、山や森に生息する数多くのオーガ、そしてそれ以外の化け物により行く手を阻まれているのが現状だった。
敵が立てこもる陣地なりがあれば航空支援を持って叩けばいいのだが、分散した状態でやってくる化け物相手に航空支援は無駄が多すぎる。
かといって普通科の隊員だけで行けば犠牲を覚悟しなければならない。
では装甲を持った車両はどうか？と言うとやはり濃い森や山奥では持ち込むだけで一苦労だ。
一応制圧下にある地域では施設科などによる整備が行われたりして

いるものの、それは比較的安全が確保された後方側だからできることであり最前線ではない。
それでも元からある街道を使って進むことはできるが、集められた情報に寄れば、森や山奥のいたる所に拠点が点在していると言う。
これを放置すれば安全なはずの後方が脅かされるだけでなく、補給線の確保の観点からも無視できない。
その為に偵察を繰り出すものの、化け物だらけで満足に行えてないというのだ。
「それなりに装甲車両も前面に出しているものの、やはり前進は一苦労だ」
安藤のこの一言に、予定より大分遅れた状況なのだろう。
ある程度は遅延は想定されていたが、このままでは想定以上に遅れが出かねない。
遅れが拡大し続ければ戦いは長期化し、如何に海上封鎖していても一般民衆に犠牲が出かねない。
そしてその犠牲による恨みは日本にむくことになる。
これは絶対に感化できない問題だ。
後々の統治、南部の委任統治、自治を考えれば敵対されないように細心の注意を持って当たらねばならないからだ。

これらの事態に対処するためには情報が不可欠である、と言う結論が知り分で下されたのは何も不思議なことではないだろう。
まして、その為に高橋が呼ばれ、動く事になるのは自然な流れといえた。
「つまり、特殊任務部隊は先行して協力者と接触、周辺の情報を洗え、と言うことですね？」
高橋は安藤の目を見て命令を確認する。
この程度、とは言わないが、現在安藤が指揮する部隊でこれが出来ないはずが無い。

だが、やるからには相当量の戦力を割く必要がある。
何時、南部貴族連合軍と本格的な戦闘が起きるか分からない現状では一兵たりとも割きたくない、と言う司令部の意思が見て取れた。
恐らく、それだけでないだろう。
制圧下にある地域の防衛、補給路の確保、治安の維持を考えれば尚更部隊を割くわけに行かないのだ。
「大変な苦労を強いると思うが、これが最上の手段と思われる」
安藤は努めて表情を消しながら答える。
正直、自分たちの失態を特殊任務部隊に押し付ける形になるのだ。
しかも、彼等特殊任務部隊とて先行する以上は敵に補足、包囲、奇襲攻撃を受ける可能性もおおいにある。
それを考えれば彼とて断腸の思いであった。
だが、それ以上に有効な手段が無い以上は彼等に頼るしかない。
実はこの作戦は、ヘリで直接部隊を届けて接触、と言う方法も考えられていた。
しかし、上記の部隊を割けない事情と、進軍路の状況把握も必要であった。
そうなればヘリは支援に使うべきで進軍には使えないのだ。
何よりも情報が大事である、と言うことからも仕方ない話ではあったが、それをやらされる高橋からすればたまったものではない。
もっとも、幾ら嫌でもこれは北野だけでなく「防衛省」の許可の下に決まった事柄、つまりは「命令」であり「要請」ではないのだ。
当然拒否権などあろうはずがない。
その為、高橋は引き受けざるえない。
だが、だからと言って自前だけでどうにかできるものでもない。
未だかつて無い本格的な戦場に特殊任務部隊は臨むのだ。
綿密な事前準備だけでなく支援体制も確保せねば危険極まりないだろう。
「了解です。しかし、我々だけでは心もとないのは正直言って偽るところです」

ここで高橋は安藤に、やるからにはやるが、その為の条件を突きつけた。

「・・・しかし、それは・・・」

ここに来て安藤の表情が初めて崩れた。

予想もしない要求なのだ。

いや、長年自衛隊で働いてきた安藤であったが、前代未聞の話でもある。

「少なくとも、私たち特殊任務部隊は『何度も』そうしてきました。公式には認められないですがね・・・」

つまりは非公式であれば『出来る』程度要求なのだ。

だが、法的に考えるならば極めて危うい話でもある。

これが日本本国に伝わるだけならいざ兎も角、マスコミにバレた日には目も当てらない事になる。

自衛隊そのものが政治に関わることは許されないが、政治を完全に無視した行動もまた許されない。

日本のを、現政権を危うくすることは慎まねばならないのだ。

「少なくとも、既に何度もやっているならば幾ら同じ事をしようとやっていた事は事実です。今更無かった事にはできませんよ」

一度やったからには、やったことに変わりはない。

そう言っているのだ。

正直、安藤には受け入れられない話だった。

それが今までの常識であったからだ。

下手しなくても危ない橋ではある。

その意味では彼の判断では認められない。

「北野さんはこのことを知っているのか?」

思わず吐いて出た質問に、高橋は即答する。

「あの人が知らないはずないでしょう?」

この一言で安藤は北野と言う男に恐れを抱くことになる。

特殊任務部隊の駐屯地に帰ってきた高橋は即座に井上、佐藤、中田を呼び出す。
先程司令部で決定した南部への派遣の件を告げねばならないからだ。
集まった三人は「やはり」と言う感じであったが、特に反対は無かった。
井上や佐藤は前日のときはぼやいていたが、決まった以上は拒否など出来ないのを知っているからだ。
中田にしても、命令であるならば是非も無し、と言う人なので特に意見も無い。
「今回はほぼ全員で行くぞ。総員に明朝未明にはここを出ることを通達、準備を急がせろ」
高橋の命令に3人が敬礼で答える。
どの道やらねばならないのならやるだけのこと。
それがどんなに大変なことでもやる、それが彼等に課せられた任務だからだ。
「ああ、そうそう、井上！」
退室しようとする井上を高橋が呼び止める。
何か？と思った井上が振り向く。
「一応、司令部から装備の貸与があるから受け取っておいてくれ」
そう言って高梁は貸与されるであろう装備の一覧を手渡す。
それに目を通した井上の表情が一変した。
「・・・冗談だろ？」
ハッキリ言って特殊任務部隊のメンバーでそれらを扱った人員はいない。
居ないが物だけでもあれば任務の助けになるのは確かな品々であった。
「昨日のお前の一言のおかげだよ。あり難く使おうぜ」
楽しそうに笑う高橋に井上はなんとも言えない表情になる。

明らかに一部隊には過剰過ぎる装備だからだ。
だが、先日に聞かされた化け物の話から、これは最低限必要な装備であることは井上にも分かっていた。

ー特殊任務部隊駐屯地

「・・・こりゃ壮観ですね・・・」
佐藤が思わず呟く。
他の隊員たちも並ぶ装備の数々に思わず口をあけたまま呆然と立ちすくんでいる。
無理も無い話だろう。
今、彼らの目の前には銃火器、ではなく「重火器」と呼ばれるものがあるのだ。
ブローニングＭ２　１２．７ｍｍ重機関銃、バレットＭ８２　対物（アンチマテリアルライフル）狙撃銃、９６式４０ｍｍ自動てき弾銃、０６式小銃てき弾。
更には自衛隊では使われていないはずのＭ７２　ＬＡＷ、ＡＴ４、Ｍ４カービンとそれに付ける為のＭ２６　ＭＡＳＳ、ベネリ　Ｍ４　スーペル９０。
これら装備が並んでいるのだ。
Ｍ２はまだ分かるものの、対物狙撃銃で装甲目標を打ち抜くことも出来るバレットＭ８２や、てき弾、つまりグレネード弾をばら撒く事が出来る９６式４０ｍｍ自動てき弾銃や８９式に装着して使える０６式小銃てき弾は破壊力と言う意味では非常に高い。
更に恐らく外人部隊から調達したと思われるＭ７２　ＬＡＷ対装甲ロケットランチャーやＡＴ４対戦車弾のような使い捨て重火器は城でも攻めるのか？と思わせるに十分だ。
そして、わざわざＭ４カービンとそれに装着して使うショットガンであるＭ２６　ＭＡＳＳと、Ｍ１０１４として採用されたセミオー

トマチック機構のベネリＭ４スーベル９０ショットガンだ。
一体何を相手にするつもりなのかと問いたい気分になるのは確かであろう。
井上からすれば対化け物用なのは分かっている。
だが、それにしてもこれで最小限とは思えなかった。
幾ら化け物でもショットガンがあればストッピングパワーは十分に確保できるはずだ。
また、ショットガンでは接近しないと効果は低いと仮定してのＭ２やＭ８２はまだ分かる。
だが、０６式小銃てき弾は分かるとしても９６式４０ｍｍ自動てき弾銃は明らかに過剰な火力だ。
なおかつＭ７２やＡＴ４などは対装甲用であるために火力という意味ではグレネード弾を使うてき弾とは比べるべくも無い。
こんなのは対化け物と考えても過剰ではないかと思えた。
だが、高橋にはこれでも最小限の装備にしか見えなかった。
与えられた任務の事を考えるならば、軽装甲機動車や７３式中型トラックではなく、９６式装輪装甲車などのキッチリと装甲を施した装備を使いたかった。
だが、整備の問題もあれば配備数がそれほど余裕があるわけでもないことから認められなかったのだ。
代わりに貸与された車両がブローニングＭ２重機関銃を運用する為の新７３式小型トラックである。
これは簡単な防弾装備を施した三菱の市販車であり、装甲と言う意味では軽装甲機動車に劣ってしまう。
しかし、軽装甲機動車にはブローニングＭ２を乗せる銃架がなく、改造して付ける様にする暇も無いために貸与された。
一々おろして設置するよりも車上から撃てるのは強みになる。
そのことから高橋は納得するしかないのだ。
「総員、出発までに積み込みなどの準備を終えるように。尚、幾人かはこれら貸与装備のレクチャーを井上曹長に聞く様に」

そう告げると高橋は宿舎内に入っていく。
残された隊員たちは即座に行動を開始していく。
何よりも迅速な行動こそが重要だからだ。

翌日未明、まだ夜も空けきらぬ内に彼等特殊任務部隊は駐屯地で仕事をする警備、事務方を残して全員が車両に分乗し出発を開始した。
途中、司令部に寄って人員を拾う予定をこなしてから南部へと向かうのだ。
そしてこの時、まだ高橋は任務の内容を告げていない。
任務の内容は南部に到着してから通達する事になっているからだ。
誰もがどんな任務に就かされるのか知りたかったが、隊員全員が共通して分かっていたが事ある。
決して他の部隊と一緒に戦う訳ではない、と・・・。
それをするよりもずっと過酷な任務が彼等を待っていると言うことだけはいえたのだ。
「要請に応えて頂きありがとうございます」
高橋は安藤にお礼を伝える。
二人の背後ではアイン、シャーリー、ミューリ、フェイの４人が軽装甲機動車に乗り込んでいる。
そう、高橋の要請は装備だけでなく彼等のような協力者の同行だったのだ。
交戦規定からすれば彼等は民間人の扱いである。
その為万が一の死傷は大変な問題になってしまうのだ。
更に彼等が戦闘行為に参加することも重大な問題である。
自衛隊員と違い、戦闘行動による殺人に法的根拠を持たせて正当化することができないのだ。
下手をすれば殺人罪で逮捕、起訴されかねなくなる。
それ故に安藤は高橋の要請に難色を示したのだ。
しかし、北野が全責任を負う、との話も本人から聞かされていた安

藤はこの前代未聞の要請に応える他なくなっていた。
安藤からすれば苦渋の決断であるが背に腹は変えられないのが心境だったから、と言われてしまえばそれまでだろう。
また、まさか彼等が必要とするものを却下して任務に臨め、と言う真似は出来ないからだ。
それは司令部の失態を押し付けた形になった罪悪感があったのかもしれない。
「苦労をかけるがよろしく頼む。支援要請には即座に応えるから何かあれば連絡してくれ」
安藤はそう言うと、健闘を祈る、とだけ言った。
高橋がそれに敬礼で答えると安藤もまた敬礼で応えた。
「では・・・特殊任務部隊、出動！」
高橋の命令がまだ暗い中で響き渡り、そして彼等はシバリア市を出て一路南部を目指していく。
そんな彼等に任せたぞ、と呟く安藤の心境は複雑だった。
しかし、頼るべく存在は彼らしか居ない。
それを考えると彼もまた、最善の努力をする為に司令部へと向かっていった。

第６２話「未知との遭遇」

ーホードラ南部上空

「エクセルよりエポック１へ、レーダーが所属不明機（アンノウン）を捉えた。目標は高度２００（ｍ）、時速１８０（Ｋｍ）で北上中、これを視認し状況を確認せよ」

空中管制機Ｅ－７６７の代わりに大陸に派遣されているＥ－２Ｃホークアイから対地支援の為にホードラー南部上空を飛行していた新田原基地の第５航空団、第３０１飛行隊所属のＦ－４ＥＪ２機に咽んで連絡が入ったのは日本が南部へ本格的な行動を開始してから７日目のことであった。

当初は未知の生物の襲撃などで損がが発生したものの、彼等航空隊の活躍もあって何とか歩を進めることが出来ていた。

とは言え、やはり当初の躓きで作戦全体の遅延は免れない。

その遅延をこれ以上拡大させぬために彼等航空隊はそれぞれの分担空域を持って常時空中待機を続けていた。

始めこそ燃料の心配はあったが、日本石油連盟の支援もあるので十分に持つと考えられている。

問題は備蓄弾薬の類ではあったが、日本本土の備蓄文を廻してもらう形になっているのでその心配も杞憂になっていた。

そんな中で所属不明機の連絡だ。

この世界では彼等日本国以外に航空機などないはずなのに、所属不明機と言われてもピンとこない。

思わず佐々木（ささき）彰人（あきと）中尉は後ろに乗る梅原（うめはら）和利（かずとし）中尉を振り返った。

梅原もまた、佐々木と同じく「何の話だ？」と言う感じだ。

とはいえ、師事があるならば行かねばなるまい。

「こちらエポック1了解、直ちに確認に向かう」
梅原はそう応えると僚機であるアベル2にも連絡を居れ機首を返し指定された空域に向けた。
正直言って異常な事ばかりが続いているため、既に感覚が麻痺しているのかもしれない。
彼等は地上で陸自を苦しめる化け物が板ぐらいなのだ。
今更新たに化け物が出てもおかしくない、とすら考えていた。
しかし、それを実際に視認出来る距離に入るとやはり呆けずには居られなかった。

「・・・」
「・・・」
佐々木も梅原も実際に見ると言葉も出なかった。
まさか本当に化け物が空にも存在していた。
しかも、それの背には人らしきものさえある。
『エポック2よりエポック1へ、あれはなんでしょうか?』
僚機からの通信に佐々木は「俺にわかるわけないだろう」と答える。
後ろで梅原は「物理的にありえん」などと呟いているぐらいだ。
彼らの眼前には全長5mほどの羽の生えたトカゲモドキが存在していた。
「ゲームとかで言う竜騎士、と言うやつかねぇ?」
実際目の当りにするまでは漫画やゲームなどでしか存在しないもの、と考えていたのだが、最早そんな考えは吹き飛んでいた。
実際に化け物が出没しているのは彼らだって知っている。
しかし、彼等は実際に見たことがあるわけではないのだ。
深い森が広がるホードラー南部の山中においては地上からの支援要請にしたがって支援を行うのだ。
実際に目標を視認出来なくとも支援が出来る様になっていた。
だからこの時までは空想の世界の生き物など見る機会など全く無か

ったのだ。
それが彼等の眼前にいる。
ある意味で常識が音を立てて崩れた瞬間でもあった。
『エクセルよりエポック１、状況を報告せよ』
レーダー上で目標に接触したのを確認したのだろう。
無線からＥ－２Ｃからの連絡が入る。
しかし、それに何と答えたらいいのか、佐々木には分からなかった。
当然後ろの梅原も、僚機に乗る２人もだ。
「・・・あー、なんと言うか・・・」
言葉に詰まる梅原。
それに代わって佐々木が答えた。
「目標は、生物・・・だと思う」
明確な答えとは言えないが、それでもそうとしか言えない。
それだけ常識はずれなのだ。
全長５ｍはあろうかと思える巨体が空に浮かんでいるのだ。
生物でそれが出来る生き物など聞いた事が無い。
実際に元の世界にいた最大の鳥は翼を広げれば３ｍほどの大きさがあるワタリアホウドリだ。
飛べないが鳥類と言うなればダチョウが世界最大の鳥だった。
それから考えれば頭から尻尾まで５ｍ、翼を広げれば１０ｍを越える生き物など生物である、と断言できなかったのだ。
しかも人らしきものを乗せて飛んでいるのだ。
尚更断言できるものではない。
『・・・明確に答えよ』
不明瞭な発言に苛立った様子の声が聞こえてくるが、思わず佐々木は怒鳴りつけてしまった。
「明確も何も分かるわけないだろう！羽の生えた爬虫類だか鳥だか訳分からんものが飛んでるんだ！どうやって答えろってんだ！」
まさか怒鳴られるとは思わなかったのだろう。
思わずＥ－２Ｃの管制官は息を呑んでいた。

「少なくとも全長５ｍ、翼を入れると１０ｍにはなるだろうと思われる生き物らしきものが人を乗せて飛んでるとしか言えん」
佐々木は多少苛立ちを含めながら、先程とは違い努めて静かにそう言った。
実際に見て見やがれ、と悪態は吐いたが・・・。
何時もならそんな感情任せにものを言うことはないが、正直言って異常な事態に余裕を失っていたからかもしれない。
しかし、自分たちの知る世界とは違う世界に来て、全くの未知の存在を見れば誰だってこうなったであろう。
『・・・了解した。ＲＦ－４を派遣する。それまで目標から目を離すな』
Ｅ－２Ｃからの連絡に佐々木がガンカメラに撮れば良いのでは？とも思った。
しかし、より正確な映像、写真などが欲しいと考えたのだろう。
また、目標の速度が時速１８０Ｋｍ程度と低速なので、ガンカメラでは捉えるのも大変なのでは？という考えもあると考えられた。
対してＲＦ－４はＦ－４ＥＪと違い戦闘任務の機体ではない。
同じＦ－４が原型ではあるが改良して偵察任務を行う為に誕生した機体だ。
ガンカメラ以上に高精度な写真撮影、及び映像の取得が出来る。
また、基本的に対地偵察が主体ではあるが、空中目標への撮影も可能な装備がある。
そのことからも管制官がＲＦ－４を派遣する、と言った意味は分からなくもなかった。
だが、それは状況が許さなかったのだろう。
佐々木の眼前で化け物と人らしきものに動きがあった。
「エポック１了解、だが、どうも待っては居られないかも知れん」
佐々木はそう言うと向こうも驚いていたのかもしれない。
呆然と彼等を見る人影が慌てて踵を返すのが目に入っていた。
「目標は逃走に入った！南に方向転換している！」

待機速度の違いから空飛ぶ化け物を中心に旋回していた佐々木は横目に見ながら無線を入れた。
その姿から化け物の背に乗る人物は鎧を身に纏っている。
つまりは一般人ではない。
最悪、南部貴族連合の偵察なのかも知れなかった。
だが、それを南部貴族連合の偵察、とは断言できないのも事実だ。
事実そうであれば撃墜もありえるが、万が一違った場合は問題になりかねない。
『抑止は可能か？』
ＲＦ－４が間に合わないのは分かっている。
しかし、可能なら時間稼ぎをして欲しいところだった。
だが、佐々木は無理だと判断した。
相手は航空機と違い、滑走路を必要としない。
地上に降りて此方をやり過ごされたら佐々木たちには追尾しようがないのだ。
「無理、だな」
相手が高度を急速に下げて山中に向かう様子に、佐々木は不可能だと判断した。
低空域で無理をすれば貴重な航空機を山中に墜落させる事になりかねない。
その危険があるならば抑止するなら航空機関砲しかないが、万が一掠れば生き物である以上唯では済まない。
航空機関砲は２０ｍｍ砲弾を使うＭ６１Ａ１バルカン砲である。
その威力は絶大で対空機関砲にも使われ、装甲目標にも効果がある。
掠っただけで人の皮膚など簡単に引き裂くことになる。
それが化け物とはいえ翼を持つ生き物相手であれば、そのまま墜落してしまうだろう。
『こちらエクセル了解した。ならガンカメラでの撮影を行え』
ここに来て漸くガンカメラでの撮影が指示される。
ＲＦ－４が間に合わないなら、これしかないだろう。

「了解、直ちに行う」
佐々木は出来る限り撮影しようと僚機に目標の動きを監視させ、敢えて大きく旋回して一旦距離を開ける。
そして火器管制モードを変更し機関砲を選択すると、目標をヘッドアップディスプレイ（通称ＨＵＤ）に表示されたレティクル（照準）に収める。
後はそのままガンカメラでの撮影を操作し行うだけだ。
化け物は人を乗せたまま更に高度を下げる。
しかし、後方斜め上方からその姿を捉えることは出来た。
あとは速度と高度に注意しながら慎重に撮影する。
ある程度撮影した佐々木は、山中と言うこともあり無理せずに撮影を切り上げた。
元もとの高度が低かったのもあるが、撮影時には超低空と言える高度でしかなかった。
そのため撮影時間そのものは短くなるのは仕方がなかった。
「目標は山中に着陸したと思われる。撮影には成功したがここからではこれ以上の視認は出来ない」
梅原が慎重な操縦に集中していた佐々木の代わりにＥ－２Ｃに連絡を入れた。
見てるだけになったが、正直かなりスリルある飛行だったと梅原は思っていた。
高度１００ｍ以下の飛行なぞ早々やるものではない。
特に速度の高いジェット機にとってはき剣極まりない飛行であるからだ。
『了解。任務を終了し即時帰還せよ』
Ｅ－２Ｃからの帰還指示が出るとほっとする。
そう思いながら梅原は了解と答えた。
「結局、あれはなんだったんだろうな？」
僚機と合流した佐々木たちのＦ－４ＥＪは高度を３０００ｍまで上げながら、互いに見たあの生き物について話し合う。

しかし、佐々木や梅原、そして僚機に乗る2人もなんだったか？という答えは出せない。
ただ、現実離れした空想上の存在がこの世界にはあるのだろう、としか言えないのだ。
「アレが何だったのかは偉い学者さんに任せようや」
梅原はそう言って締めくくると、佐々木は違いない、と答えながらさっさと帰ろうと思った。

この時、まさか近い将来、彼等が今回であった「アレ」と空中戦をすることになろうとは思いもしなかっただろう。

第６３話「略奪阻止」

ーホードラー南部ハエン村

ホードラー南部上空で航空自衛隊と空飛ぶ化け物とそれを操る乗り手が接触していた同時期、特殊任務部隊が南部入りして２日が経った頃、ここ南部の協力者となった者が居る人口１２０人程度のハエン村に彼等は到着していた。
多数の怪物が生息する危険な森ではあったが高橋は敢えて少数の部隊を先行させ、僅かでも危険があると判断されたならこれを足止めしつつ後方から付いて来ている本隊が即時合流して制圧する方式をとっていた。
これは怪物が相手ならばその規模と戦力を先行部隊が確認、その脅威度を把握しながらの行動だからだ。
逆に脅威度が高いと考えられた場合は即時撤退し合流、全戦力を持って事にあたり、それでも不足と考えられるなら後方の司令部と連携して航空支援を要請するためだ。
その為、小隊規模で纏まって行動するよりは分隊規模で先行偵察、と言った形をとることにしたのだ。
もっとも、現在のところは不思議と怪物との遭遇は果たしておらず、一度も交戦する事無く進んでいたが・・・。
そうやって南部を進行する攻略、平定部隊よりずっと先まで進んでいる。
少数ゆえに出来る機動力、それを存分に生かした行動と言えるだろう。
そうやって進みながら得た道や森の状態、更には道から外れた森の中の状況を情報として司令部に送ってきた。
おかげで大きな損害を出す事無く後方の部隊は安全かつ速やかに地

域を制圧しつつ順調に遅れを取り戻しつつあった。
だが、同時に懸念も発生していた。
航空支援は問題ないのだが、後方から進む攻略、平定部隊との間に距離があるのだ。
万が一負傷者が発生しても移送が大変なのだ。
ヘリを呼べば早いのだがこの辺り一帯まで来ると森が濃く、ヘリが降りられる空間が限られてしまうのだ。
また、先行する分補給にも問題を来たす。
その為、途中にある幾つかの村や集落に到着すると一旦停止し、ヘリによる補給を受ける必要が出てくるのだ。
最悪、航空支援も即座に行えないときは自力で支援あるまで耐えねばならない。
小隊規模故に進行速度は速いが、その分危険も大きいのだ。
そしてその懸念がここハエン村で現実となっていた。

「つまり、この村に南部貴族連合軍がやってくると？」
村人たちから話を聞いていた部隊の面々からの報告に高橋は血の気が引く思いだった。
先行していただけあってこの村は未だ焦土戦術の為の略奪を受けていない。
その事から南部貴族連合の予想を越えた速度での進行でもあったのだ。
結果として略奪を行うための部隊がこの村にやってくるところだったのだ。
速さは戦術、戦略の基本の一つである。
だから展開が速ければその分相手の裏をかき易くなる。
だが、この場合は速すぎたのだ。
速すぎた故に相手の裏を突けたものの、代わりに交戦せねばならな

くなっていたのだった。
「どうする？相手の規模は不明だが、やるか？」
井上はそう言って高橋に提案するが、戦うにしても情報が少なすぎる。
しかも、ここで迎え撃つ形をとった方が支援を受け易く状況を把握している分有利ではある。
しかし、結果として村に損害を与えることになるだろう。
かといって先行して迎え撃つには相手の規模もそうだが行く先の情報が不足していると同時に、どこから来るのかが不明なのだ。
空振りする可能性が極めて高い。
相手の南部貴族連合も考えた物で、この村を通る時は毎回巡回ルートを変えている為に村人でも分からないのだ。
恐らく情報漏れを防ぐためと、森の怪物との遭遇を回避しながらの両面を考えた結果だろうと思われた。
かといって接触を回避すれば村は略奪の憂き目に会うだろう。
食料や動物、下手したら人員も含めて根こそぎ持っていってしまうのだ。
食料だけなら自衛隊が後方から輸送してくるので何とかなったかもしれない。
しかし、人も連れ去ってしまうのは見過ごすわけにも行かないだろう。
何より知ってしまった以上はこれを阻止するのが彼等の役目であると言える。
「どれくらいの時間がある？」
そう言って横にいる佐藤に確認するが、佐藤も分からない、としか答えられなかった。
それはそうだろう。
相手の規模によっては機動力が変わる上に、同じくルートを変えて来れば到着までの時間も変わる。
その意味では村人を後方に一時避難してもらうことさえ難しいだろ

う。
避難途中で襲撃を受ければ満足行く迎撃さえ難しくなるからだ。
一応、協力者となっていたこの村を領地としていた騎士ウルザ・ガシュタールは２０人余りの手勢を率いて手伝ってはくれるそうだが、それを考えれば相手の規模は倍、いや、村人の抵抗も考えれば少なく見積もっても１００人から２００人ほどいるだろう。
流石にその規模（恐らくそれ以上と思われるが）を相手に視界が利く平野なら十分に対抗できても、視界が限られる森が周囲にあるならば下手な対抗は逆に危険が大きい。
はっきり言えば、高橋たちに選択肢は与えられていないと言えた状況だ。
何故ならば、情報が不足しているならば先行迎撃は取れない。
入れ違いになったら意味はないからだ。
そして何時来るか分からない以上は避難誘導も難しい。
なら、この村の周囲に展開し南部貴族連合の動きに合わせて動くしかない。
はっきり言って無謀極まりない選択だ。
唯でさえ小隊規模で、内１個分隊は衛生隊、つまりは非戦闘員である。
銃を扱う訓練は受けているだろうが、普通科の自衛隊員と比べてもその錬度は低いだろう。
そもそも、傷付いた人を救う事が彼等の役割である以上、負傷者に対する手当ての必要から彼等に戦闘に参加すると言う選択肢はない。
むしろ彼等衛生班が戦う事態になっていることそのものが既に終わっている状況なのだ。
高橋はこの状況下において長々と考える事はせずに即断した。
迷ったり考える前に行動することが重要だからだ。
「よし、危険は承知でここで迎え撃つ」
高橋の決断に誰もが息を呑む。
最悪、村の住人に犠牲が出る矢も知れない。

だが、村人にはウルザの館や、比較的大人数が入れる村長宅に非難してもらう他ない。
それはウルザが即座に動いた。
「直ぐに避難を開始する」
そう言ってウルザは手勢を村中に放ち村人の退避を開始させる。
「相手が今まで使ってきたルートは４つ、それぞれを各分隊で固め敵の到着と同時に全隊が合流して迎え撃つぞ」
高橋はそう言ってそれぞれに車両と監視、防衛の割り当ては告げていく。
しかし、戦闘可能な分隊は３つしかない。
衛生隊は避難所となるウルザ邸、村長邸の二手に別れ、それぞれで救護所の役目も果たすからだ。
「第二分隊は南、第三分隊は南東、第一分隊は西だ」
そこまで高橋が指示を出したときに、南西のルートが空く事になると気付いた井上が指摘する。
だが、それも既に高橋は考えてあった。
「南西は新７３式小型トラックと他二名で俺が行く」
西の第一分隊とは距離が近いので、どちらかに来ても即時合流が出来るから問題ない。
と高橋は判断していた。
だが、いくら新７３式小型トラックにはＭ２があるとしても、たった３名で守るのは無理があるだろう。
危険度が高すぎる。
「おいおい！幾らなんでも無茶すぎる！」
「危険すぎます！他の人員に任せるべきです！」
井上だけでなく、佐藤もとてもではないが認めるわけにはいかなかった。
当然だろう。
小隊を指揮すべき高橋が一番危険な所にいるからだ。
はっきり言って何を考えてるのかさえ分からなかった。

どう考えても自殺行為としか言えない。
それとも他の理由でもあるのだろうか?とも考えてしまうだろう。
だが、高橋は予感めいた物があった。
ここには来ない様な、ただ漠然とした思いではあるが、何故かこの方角から来るとは思えなかったのだ。
「来る確立は4分の1だぞ?それでも心配ならもう1人2人連れて行くか」
高橋は猛烈な反対にあったので、井上と佐藤の分隊から1人づつ預かることにした。
でなければ絶対に認めてくれなかったであろう事は明白だった。
はっきり「命令だ」といえばいいのだが、そこで命令だと押し切るのはやり過ぎに感じたからだ。
それで何とか渋々二人は引き下がったのだが、ここで更に連れて来ている案内役の4人はどうするか?
と疑問が出された。
「私は参加するからな」
「俺もだ」
フェイとアインだ。
二人は剣を持って戦う人だ。
こう言う時であれば自分たちが安全な後方に引き下がっている程大人しいはずがない。
流石にミューリとシャインはこういった多数対多数の戦いには参加できないので大人しかったが・・・。
実は当初、この話が来たときにはミューリが偵察を買って出たのだが、1人で行かせるのは以前の城塞都市レノンでの一件が効いており、高橋は許可しなかった。
あの時ミューリのおかげで状況はつかめたが、同時に負傷させた原因が自分にある、と責任を感じていたのだ。
表ざたに出来ないことから無かった事にされてはいるものの、それ以来高橋は同行は許しても単独行動は絶対に認めなくなっていた。

シャーリーの場合、多数がぶつかり合う中での戦闘は苦手であっても魔術を使える以上は戦力になる（この世界での魔術師はある意味戦術兵器扱いだった）のだが、その為に身を乗り出すことになる。
つまりは相手への先制攻撃には不向きなのだ。
それら理由からも二人は今回に限っては後方に向かうしかなかった。
ただし、フェイとアインは違う。
1対多数で戦う訓練や経験がある。
故にこう行った戦いにはどうしても積極的になってくる。
はっきり言えば拒否したいのが高橋たちの思いだが、血の気がある二人なのでこっそり付いてこられても困る。
それぐらいやりかねないのだ。
ならば監督下においといた方がまだいい。
しかもアインに至っては治安警備隊に所属し、武装は最小限にも関わらず先のシバリア動乱において拡充された銃を扱う治安警備隊隷下武装警備隊に入っていた。
扱っていたのがニューナンブといわれる回転式弾倉拳銃（リボルバー）であったが、半自動装填式拳銃（セミオートマチック）の扱いの講習も受けていた。
その為、今回の同行に対し所持、携帯を認めている。
それがないフェイは、と言うとこれでも一軍の将と言える立場だったのだ。
銃は使えなくともその武勇は伊達ではない。
弓を扱わせればかなりの腕前だ。
「南部の連中になら短弓でも十分に威力は発揮できる」と言って居ただけあって、自前で持ち込んでいた。
つまり、一緒に戦える能力があったのだ。
「よし、フェイとアインは第2、第3各分隊に入ってくれ」
二人の参加を拒否した高橋はそう言うと即時行動を命じる。
今はまだいいが、何時来るか分からない以上は、悠長にしていられないのだ。

即断即決即実行。

それが必要なときが今だった。

第６４話「炸裂」

ーホードラー南部ハエン村近郊

日本軍が来る前に物資を根こそぎ奪い、兵糧攻め（効果がない事を知らない）にする為に周辺集落を回っていたヴェネト・ウクザールはハエン村まであと少しと言う距離まで来ていた。
物資確保を円滑にするためと集落での反抗を考慮し、補給路奇襲を考えて山の中に築かれた砦のほぼ全員である５００名をつれてきていた。
正直ヴェネトは乗り気ではない。
そもそも物資は南部から送られてきていた分を溜め込んでいたのだ。
そして日本の糧食などを含めた輸送隊からも奪えば尚更必要など無いからだ。
しかし、シルスの定めた対日本作戦は引き込んで日本の兵を飢えさせ、有利な条件で講和する事なのだ。
その為にも現地調達を出来なくしてやらねば、いくら輸送隊を襲っても意味は無い。
また、南部貴族連合の補給線が日本に押さえられたとの話から、今後は自分たちの食い扶持は自分たちで確保しなければならない。
それらを考えると、物資はあればあるほど困らないのだ。
心情的には集落の民には同情するが、それも勝つ、と言うよりは講和へ持っていくためには我慢してもらわねばならない。
そうせねば貴族という政治的、文化的支柱の無い民は退行して獣のように生きる（この世界の一般的貴族の考え方）より無くなる。
自身にそう言い聞かせてヴェネトは自身に与えられた役割をこなさんと心のうちを鼓舞していた。

「そろそろハエンに入ります」
従者の声に我に返ったヴェネトは、うむ、とだけ答えると兵達に隊列を組むように伝達する。
狭い道なので隊列、と言っても大したことはできない。
精々２列が４列に程度だが、それでも組ませずに入るよりはマシだと思った。
村人が抵抗してきても、訓練を積んだ兵であれば戦い方を知らぬ村人の防衛線を突破するのに申し分ない。
その意味から隊列を組ませると、ヴェネトは進軍を再度開始させた。

余り広いとは言えない曲がりくねったハエンに至る道。
視界も悪く、はっきりと先に何があるかなど分かるはずがない。
それは何処も大差ないのだが、井上が率いる第２分隊が守る南側で最初に異変に気付いたのはフェイだった。
村への道を塞ぐ形で７３式中型トラックを配置し、幌を一部開いて５．５６ｍｍ分隊支援火器ＭＩＮＩＭＩを置き、それ以外の隊員は木や７３式中型トラック
を遮蔽物として道の先に注意を向けていた。
中には井上のように蛸壺と呼ばれる穴を掘って身を潜めている。
そんな中、姿は見えないが何かが動く音を聞いたのだ。
「・・・？」
最初は何の音か分からなかったフェイだが、以前良く聞いた事のある音であったためそれがなんの音か直ぐに理解したのだ。
井上たちが身動きする装備が発する音ではなく、それは金属同士が擦れた時に発する音。
つまりは、鎧を着込んだ人々が動くときの音だった。
「井上」
フェイが身を屈めて駆け寄りながら井上を呼ぶ。

フェイが自分の下に来た事で何かしらの異変が起きたのを察知した井上が蛸壺から身を乗り出す。
「どうした？」
そう聞きながらＭ２４狙撃銃ではなく、Ｍ４カービンの安全装置を解除する。
これはＭ２６　ＭＡＳＳと呼ばれる装着型ショットガンを使うために配備されたものなのだが、森の中で、しかもこの様に視界が利かない時なら狙撃銃よりも小銃やショットガンの方がいいから、と言う判断で井上が使っていたのだ。
「何か、武装した者がこっちに来るぞ」
フェイにとって聞きなれた音であると同時に、森が多いバジル地域（王国が滅亡した為の呼称）で活動していたこともあり耳がいいのだ。
聞き間違いではないと言う確信がそこにはあった。
「おいおい、マジかよ・・・」
来るなら来い、と思っていても実際に来られると面倒だ、と言う意識が先に来てしまうのは井上の性格から言えば仕方ないといえる。
しかし、そんな井上の心境など知ったことでもない、と言うようにその一団は今も向かってきている。
「どうする？切り込むのか？」
普段から剣や槍で戦ってきていたフェイらしい考えだ。
フェイとしては少数で奇襲、そして即離脱を考えたのだが、流石に現代の自衛隊にそんな真似をさせることはできない。
確かに銃剣突撃は可能だろう。
しかし、接近戦が戦いの基本であるこの世界の軍はある意味で接近戦の専門家といえる。
更に相手の鎧などに自衛隊の銃剣が通用するとはとても思えない。
「いや、切り込むのはダメだ。ここで迎え撃つしかない」
切り込むのは逆に不利になるのだ。
井上の判断は間違ってはいないといえた。

「ふむ、しかし飛び道具はこの森では然程使えないと思うが？」
フェイの言うとおり濃い森の中ではどうしても接近戦になり易く、現代であっても至近距離で撃ち合う事になるだろう。
だが、相手が道なりにやってくるなら手は打てる。
「無線手、高橋と佐藤に連絡『敵は南より接近』てな」
井上はそう言うと全員を配置に付かせる。
間違いなく、味方が来る前に敵が押し寄せてくるだろう。
なら、それまでは先頭集団に一撃を加え動きを封じるしかない。
最初の一撃には奇襲効果が見込める。
それを如何に立ち直らせずに持続できるか？
それが今の井上に課せられた役割だった。

ヴェネト率いる一軍の先頭は漸くハエン村を視界に収めた所だった。
先頭集団はハエン村を見ると鬱蒼とする森からやっと出られる、と安堵のため息をもらす。
しかし、よく見ると村の入り口に自分たちの侵入を塞ぐように茶色い妙な馬車が置いてあるのが分かる。
「おい、あれはなんだ？」
兵の１人が嘲笑う感じで隣の兵に声をかける。
声をかけられた兵は声をかけてきた兵相手に顔を向けて答える。
「抵抗するつもりだろうな」
それはそれで面白い、と思ったのか兵たちは笑い声を上げながらその馬車に近寄ろうとする。
「馬鹿な奴らだ。精々楽しませてもらうとするか」
村が抵抗の意思を示すなら力付くでの略奪になる。
それはある意味で力による征服欲を満たすことが出来る瞬間だった。
大っぴらに自分たちの欲を満たせる、と胸を躍らせていたときにそれはおきた。

「ああ、反逆者には罰をあちゃ・・・」
何かが破裂した様な音が響くと同時に兵の１人が言葉を発し終える事無く言葉に詰まる。
周りの兵がどうしたのか？と思ったときには兵は側頭部から血と脳漿を噴出して崩れ落ちた。
誰もが何が起きたのかなど分からなかった。
ただ分かっているのは、その崩れ落ちた兵が既に事切れて居ることだけだった。
そして、彼等は自分たちの身に何が起きているのか？を把握する事無く、この世界に別れを告げていくことになる。
まるで兵が崩れ落ちるのが合図だったかの様に連続して破裂音が辺りに響き渡り、先頭にいた兵たちが次々に体中に穴を開けながら、そしてその穴から地を噴出させながら倒れていく。
それは彼等が馬車だと思っていたもの、７３式中型トラックの荷台に潜むＭＩＮＩＭＩの射撃だった。
ＭＩＮＩＭＩはベルギーのＦＮ社ファブリックナショナルが開発した機関銃だ。
軽量かつ、携行弾数を増やす事に成功したこのＭＩＮＩＭＩは５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を使用し、ベルト給弾なら毎分７２５発、マガジン使用なら毎分１０００発の弾幕を張る事が出来る。
現在井上たちが使っているのは２００発箱型マガジンであるが、ＳＴＡＮＡＧマガジン方式と呼ばれるマガジンであるならばどんな物でも使用できるため、当然同じ方式である８９式小銃のマガジンや井上が使っているＭ４カービンのマガジンも使える。
その汎用性から数多くの国で正式採用されており、優秀な性能と信頼性を各地の紛争地帯で発揮し実績も申し分ないものだ。
そのＭＩＮＩＭＩから吐き出された毎分１０００発もの５．５６ｍｍ弾を浴びせられた側からすれば賜ったものではない。
次々とその身に弾丸を受け、まさしく将棋倒しのように崩れ落ちて

いく。
狭い道であったのもあり、また密集していたのが仇になっていた。
中には、前の兵が倒れていくのを見て道の脇に隠れようとする者もいた。
だが、そうやって隊列から離れようとするものを優先的に井上たちが狙っていく。
奇襲効果もあり混乱は瞬く間に広がっていくが、ここで予想外にも即座に建て直しが図られていた。
「敵も優秀だな」
井上がぼやく。
そういわずには居られなかった。
本来ならもっと混乱させれていたはずだ。
しかし、相手も日本の戦い方を学んでいたのかも知れない。
金属製の盾を何枚か組み合わせて作られた物を前面に押し出し遮蔽物を作ったのだ。
一応、製鉄技術が日本と比べてもお粗末と言えたものの、金属製であるのには変わらない。
穴は開くようだが完全に貫通していないのか被害の拡大と混乱は治まりつつあるように見えた。
「分隊長！どうしますか！？」
辺りに響く射撃音の中、部下が次の指示を請う。
このまま撃っていても盾を抜く事は可能だろう。だが、混乱が完全に収まっては拙いのだ。
「ロケラン持ってこい！」
即座に井上は対装甲ロケットランチャーことＭ７２　ＬＡＷを使うことにした。
高橋はこの様な場合を想定していたわけでなく、あくまでも向かう先で砦などに立て篭もる相手に使うつもりで持ってきたものだったが、井上はそれをここで使うことにしたのだ。
井上はＭ７２を受け取ると即座にカバーを外し、射撃体勢へと展開

していく。
展開は直ぐに終わり、蛸壺より身を這い出させた井上は砲口を盾に向けると自身の周り、主に後方に向けて叫んだ。
「伏せろ！」
その叫びに合わせて皆が蛸壺に伏せていく。
当然フェイもその場に伏せた。
Ｍ７２　ＬＡＷはロケットランチャーである。
なので発射と同時に後方に向けて爆風の一部を噴出させるのだ。
その範囲内は危険地域とされる。
そのおかげでＭ７２は無反動砲の様に反動をほとんど発生させない（無反動砲と言っても実際には反動がある）。
代わりに、発射位置が遠くからでも丸見えになってしまうが、今回のような場合なら大きな問題はないだろう。
何せ相手は盾の向こうで視界は此方に向いてないのだ。
井上によって発射されたＭ７２は真っ直ぐ盾に向かっていく。
お互いそんなに離れていないのだ。
数十ｍも離れていない距離ならば、如何に不慣れな装備でも外す方が難しいだろう。
放たれたロケット弾は、目標を外す事無く盾に突き刺さり、そして炸裂した。

奇襲を受けた先頭集団の話は即座にヴェネトの下に届いていた。
届くよりも早くに異変に気付いていたが、報告を聞くことでどうも既に日本がハエンに到着している様に見受けられた。
「くそ、速いな」
ヴェネトは一言そう呟くが万が一の準備はしていた。
日本が飛び道具主体で戦うのは知っていた。
また、それが容易に鎧や盾を貫通し将兵を打ち倒すこともだ。

これらの情報は王国が滅亡した頃に南部に逃げ込んできた貴族や騎士、そして兵から知らされていたのだ。
それ故に対策も直ぐに練られていた。
盾はそれまで木材に薄い鉄板を貼り付けて出来ていたのだが、南部は鉱物資源が豊富なこともあり完全に鉄だけで作られていた。
しかし、流石にそれだけで防げるとは思っていなかったのもあり、複数枚重ね合わせて組み合わせた物を作った。
だが、そうなると個人が持ち運ぶことが難しいほど重量がかさみ、携行性は全くと言って良いほどなくなっていた。
そこで、馬に引かせて複数人で持ち運び、運用する事になっている。
クロスボウ（和訳なら洋弓銃、十字弓、機械弓）どころか、より大型で攻城兵器のバリスタでさえも止めれるのだ。
そのため、部隊の各所に盾を運用する部隊が配置されている。
「敵の規模は？」
先頭集団は最早どうにもならない、として切り捨てることにしたヴェネトは盾の準備をさせると共にハエンに居る日本軍の規模を知りたかった。
これが此方と同数、もしくは上回っているなら即座に撤退するしかない。
だが、逆に動きの早さから少数だけの可能性がある。
それならば盾を押し出して突入し、打ち倒すことも可能だと考えていた。
飛び道具を主体に戦うのならば、逆に接近戦は不利と言うことの裏返しである。
それが南部貴族連合の盟主シルスの考えだった。
そして、その考えは的を得ていた。
ただし、それは通常の普通科隊員だけであればの話だったが・・・。
「攻撃は凄まじいものの、その数は少ないかと思われます」
離れたところからの観測ではある物の、特有の破裂音の発生源が少ないことから偵察兵はそう判断していた。

その兵の言葉にこれなら盾で接近した後に、一気に突入できる。とヴェネトは笑みを浮かべた。
日本に最初に打撃を与えた将となれる。
彼の脳裏にそう思わせたそのとき、前方で大きな爆発音が響いた。
それは、ヴェネトの思惑を裏切らせ、彼の目論見を突き崩す破滅を告げる音になった。

第６５話「ハエン攻防戦～前編」

ーホードラー南部ハエン村入り口

井上の放ったＭ７２ＬＡＷの弾頭が盾に突き刺さりオレンジ色の光を放つと轟音と爆風が辺りを包み込んだ。
５．５６ｍｍ普通弾の攻撃は受け止めれた盾も、より強化装甲を持つ装甲車両を撃破するロケット弾の前には無力であった。
その一撃を前に盾は結合部を維持出来ずに爆風と共に四散すると同時に、爆発によって生じた熱風と破片とが周辺の兵たちを殺傷していく。
先程まで共に戦っていたはずの仲間の身体が引き千切られ、内容物を辺りに散乱させている光景は兵たちの思考を完全に止めてしまっていた。
それを呆然と見つめる兵士もまた傷付き、自身の手足を失っていたりする。
突然の出来事に脳が、感覚が追いついていないのだ。
自らその光景を生み出した井上とて、目を背けたくなる有様だろう。
だが、自分がやったことである以上、そこで吐いている場合ではない。
胃から逆流してくるものを必死に押さえ込み部隊に攻撃を行わせる為に叫んだ。
「なにやってる！攻撃を続けろ！」
井上の叱咤に部下も対応を開始する。
流石に銃撃以外の攻撃で人を殺傷した事がないのもあり、人の形を成さない程に損傷した亡骸を前に呆気に取られていたものも行動を起こす。
そこは今までの任務による経験が生きていた。

「分隊長！援護しますから後退を！」
1人がそう言って手榴弾を放り投げる。
未だ呆然とするヴェネトの先鋒に投げ込まれた手榴弾が先程のM72より小規模な爆発音を響かせる。
M72の後では爆竹みたいに感じる爆発ではあったが殺傷能力は十分にある。
再び破片で傷付き倒れる兵を前に先鋒部隊は森に逃げ込み始めた。
「このまま混乱しててくれ！」
井上は蛸壺に飛び込みながらそう祈った物の、徴兵されて訓練も程々程度でしか受けていない先鋒は兎も角、訓練の行き届いた中衛以降の部隊は隊列を組み再び盾を押し出して前進してくる。
一部部隊は森中から回り込もうとさえしているのが遠目でも確認できた辺り、今までの様にこっちを甘く見ていたりはしていないのが良く分かる。
「くそ！」
井上ではない誰かが毒づく。
だが、そう言いたいのは井上とてよく理解していた。

今までの敵とは違う。

そう思わせるだけの統率があり、彼等にとって初めて体験する未知の攻撃に対して未だ戦意を失っていないのだ。
如何に強力な装備を有し、有利に戦えるはずの銃火器を擁していても数の差がある。
このままでは押し切られてしまうだろう。
後退するべきか、踏みとどまるべきか井上は一瞬判断に悩んだ。
これが高橋なら即座に遅滞を試みながら後退と判断していたが、井上にそこまでの判断を下せる経験がなかったのだ。

その間にもヴェネトの軍勢は近距離といえるところまで近づいてきている。
M72は手元には無い。
あっても近すぎて使えない。
不味い！と井上が思ったその時だった。
「はぁ！」
フェイが蛸壺を飛び出しながら腰の剣を抜き放ち、ヴェネトの軍勢へと駆け出したのだ。
その光景に井上も、部下もフェイに当たる事を考えて射撃が出来なくなってしまうと同時に、無茶だ、と思った。
思っていたのだ。
だがそれはフェイを、白兵戦主体のこの世界を甘く見過ぎていた事を思い知らされることになる。

フェイの突出にヴェネトの兵が槍を構えるが、盾に隠れて北のもあり槍の密度が薄すぎた。
突き出される槍を掻い潜ってフェイは先頭に立つ兵の首に正確に剣を突き入れる。
剣が兵の首を貫いたと思ったら即座に引き抜き他なりの兵の槍を持つ二の腕を切り落とす。
そして更に隊列に入り込むと周りの兵士を鮮やかに切り伏して行く。
まるで舞い踊るかのように軽やかに剣を振るうフェイに見とれてしまうほどだ。
だが、その剣は無常にして非情でもある。
正確に鎧の隙間を狙い突き、振るわれる剣。
それが一閃する毎に兵の鮮血が地面を赤く染め上げていく。
アインの剣が力強く立ちふさがる者を斬り倒す剣に対してフェイの剣は速さと技を兼ね揃えた風のような剣だ。

どちらが上、と言うこともないが周りを兵に囲まれた状況にあっても彼女を阻む何者もそこにはいない。
「ヤスシ！今のうちに！」
思わず井上のことを名前で呼んだフェイに井上が我に返る。
フェイに見惚れていたのだ。
だがフェイの呼びかけに彼女が井上の迷いを感じ取り、建て直しを図る為の時間稼ぎに出た事を悟った。
「全体村の入り口まで後退！急げ！」
新たな命令に部隊がそれぞれの位置から７３式中型トラックまで後退を開始する。
森に侵入した敵兵もいる。
この状況で踏みとどまれば半包囲される上にそれこそ至近距離で白兵戦交えて戦わねばならなくなるのだ。
井上たちが体制を立て直している間もフェイは打ち寄せる波の如く向かってくる兵を相手に孤軍奮闘する。
自ら敵中に飛び込んだと思えば素早く敵中より離脱し剣を振るう。
かと思えば再び敵中に飛び込み・・・と繰り返す。
なまじ数が居て比較的密集していたこともあり兵は槍をまともに振るうことが出来ない。
しかし、それとて一時的な物でしかなかった。
部隊長と思われるものの命令で槍を捨て腰の剣を抜きフェイの動きに対応しだした。
この世界の一般の兵が持つ剣は安価で携行に便利な小剣（ショートソード）だ。
威力は鎧を着込んだ相手に対して不足している。
だが、比較的取り回しがしやすい小剣であれば密集状態でも扱うことが容易なのだ。
そうなればフェイとて何時までも無傷で、とは行かなくなる。
そして手傷を多少でも負えば白兵戦に置いては死に直結する可能性があった。
故にフェイは無理はせずに即座に距離を取って井上たちの元へと駆

け出した。
この辺りの判断は流石に一軍を率いてきたこともあり流石といえるだろう。
常に相手の裏をかき先手先手を、とやってきたフェイならではの行動だった。
それに対してヴェネトの兵は小剣を片手にフェイを追いかけだすが、そこには個人差があり動きにバラつきがあった。
井上たちに向かって駆け出したと思ったら即座に振り向き、陣形も何も無く追い縋り突出した兵を切り伏せる。
相手が一気に来れない、数の差を生かせない場所であるのもあるが、たった一人でフェイは遅滞行動を成功させていた。
「こっちはいいぞ！戻れフェイ！」
僅かな時間で建て直しを完了させた井上はフェイに向かって叫ぶと同時に射撃体勢を取る。
井上の声に素早く反応したフェイは井上の元に向かって全力で駆け出す。
兵たちと距離を開けねば井上たちが攻撃できないと分かっていたからだ。
ヴェネトの兵たちはフェイの巧みな動きを前にその場に踏みとどまってしまっている。
ようやく気付いたときにはフェイは井上の所に辿り着いていた。
そして、再び井上たちの銃撃が再開されてしまった。
折角の盾もフェイの突撃を前に横に追いやってしまっている。
中にはひっくり返っているものさえあった。
その為に対応が遅れてしまい銃撃をその身に受けてしまう。

「無茶しないでくれ・・・」
銃撃が再開された中で井上がフェイに声をかける。

そのフェイはフェイで多少の汗をかきながらもまだまだ余裕という感じであった。
「なに、準備運同程度さ」
息を弾ませながら額に浮いた汗をふき取る。
その様子はこの様な場所でこの様な時でなければちょっとスポーツをした様であるように見えた。
「だが、おかげで助かったよ」
そう言って井上は０６式小銃てき弾を発射する。
０６式小銃てき弾は８９式小銃の銃口につけて射撃する一種のライフルグレネードと呼ばれる代物だ。
現代においてはライフルグレネードと呼ばれる物はアドオン式グレネードランチャー、つまり小銃の銃身の下に装着する形のグレネードランチャーの発展と共に、銃身の寿命を縮めるとも言われており今では一部の国以外ではあまり使われなくなった代物だ。
しかし、自衛隊に置いては射手が固定、限定されるのを嫌い、普通化の隊員であれば誰でも使えるライフルグレネードを採用している。
もっとも、８９式小銃にはアドオン式のグレネードランチャーの開発予定がない為でもあるが・・・。
その０６式小銃てき弾は対軽装甲、対人に使われるだけあってヴェネトの兵士を軽々と吹き飛ばした。
「なに、気にするな」
井上の様子に微笑みながらフェイは答えた。

遅々として進まない隊列と前方より聞こえる幾度もの音にヴェネトは数の差を生かせない状況を打開する必要があった。
その為に少々危険ではあったが森の中を迂回する形で一部部隊を向かわせていた。

上手くいけば敵の側面を突ける、そう判断したのだ。
その代わり盾は使えなくなるが、森の中と言う空間であれば接近も容易で白兵戦に持ち込みやすくなる。
前方からは未だに激しい戦いが行われているのだ。
こんなところで立ち止まっては要られない。
その一部部隊が森を突破してハエンに辿り着こうとしていた。
「さあ、反撃だ！」
部隊長の声に兵たちが雄たけびをあげ村に突入を開始する。
村を囲む柵は簡易な作りで障害物足り得ない。
一気に突入して敵を包囲できるはず、だった。
運が良かったのか、それとも悪かったのか？
そこには丁度井上の支援に向かっていた佐藤の分隊が居たのだ。
突然の遭遇戦にお互いが立ち止まる。
「・・・」
「・・・」
何でここにいるのか？と問いたげな視線が交差するのは一瞬だけだった。
「攻撃開始！」
「突入せよ！」
お互いが号令を下すのはほぼ同時であった。
途端にあたりは騒々しくなる。
佐藤の分隊はトラック上から射撃しつつ、降りて伏せ撃ちする者もいる。
それは横への開きが無く、固まった形で防衛線としては非情に不完全なものだ。
しかし、突発的遭遇戦である以上は仕方ないともいえる。
対するヴェネトの別働隊も森の中を固まって動いていたのもあり一塊での突撃だ。
これでは数の差を生かすどころではない。
これも突発的遭遇戦なら仕方ないのだが、この場合は数が少ないも

のの銃を持つ佐藤の分隊の方が有利な形になってしまっていた。
「高橋隊長に連絡！我敵と遭遇せり！交戦に入る！」
佐藤は素早く車両から降りると分隊をならべく散開させるために各員に細かい指示を出していく。
その指示に従い匍匐移動で部隊が少しづつ広がっていく。
対するヴェネトの別働隊は密集していたのが災いし、即座に広がって数の差と言う利点を生かせない。
なにより森の中にいるものが大半なのだ。
指示が上手く伝達できないのもあり後手に回るざる得ない。
しかも唯一の防御策である盾がない。
森の中から飛び出しても蜂の巣にされて終わってしまうのだ。
仕方なく、多少の弓兵が応射するものの、弓では身体を木の陰から出さねば満足に撃てない。
おかげで応射しようにも遮蔽物である木から身を乗り出すことが出来ずに居た。
だが、同様に佐藤の分隊も森に隠れるヴェネトの別働隊相手に決定打を打てずに居た。
流石に木を貫通して打てる装備がないのもあるが、井上と違って人相手にＭ７２たる重火器を使うのは躊躇われたからだ。
おかげでお互いに決定打を打てない奇妙な膠着状態へと早くも陥っていた。

第６６話「ハエン攻防戦～後編」

ーホードラー南部ハエン村

井上と佐藤の各分隊が交戦している頃、高橋は自身の率いる分隊と合流して井上の元に向かっていた。
しかし、ここに来て佐藤の分隊が敵の別働隊と接触し交戦状態に入った琴で判断を迫られてた。
どちらか片方の元に駆けつけるか、部隊を分けて支援するか、それとも更なる別働隊に備えて待機するかだ。
航空支援は井上が敵と接触したことで既に出しているものの、その航空支援が来るまでの時間稼ぎをどうするかが問題なのだ。
だが、迷ってはいられない。
そこで高橋は即座に井上の分隊への支援に向かう判断を下した。
何故ならば距離的に近いと言うのと、そこの状況を見て佐藤の隊へ部隊を分けることも考えられたからだ。
もし、井上の分隊が危機的状況にあれば佐藤の隊には足止めさせつつ、全戦力で井上の隊を援護しなければならない。
逆に井上の隊が相手を完全に食い止められているならば横の圧力を防ぐ意味で佐藤の隊を支援すればいい。
更なる別働隊の事も考慮せねばならないが現状では戦力が足りていない。
ならば下手に分散させるより一箇所づつ対処し、戦力をならべく集中して敵を撃破する必要がある。
それに確実に井上の受け持ち区域に姿を現した敵が主力だろう。
ならば数の圧力を一番受けているのは井上の隊なのだ。
更なる別働隊が動く前に正面の主力を叩き、その戦意を挫けば敵も撤退するしかなくなる、と考えたのだ。

そして、高橋は井上の守る南側へと到着した。

「状況は？」

高橋が井上の姿を見つけると直ぐに声をかけた。

高橋の声に振り向き、姿を確認した井上はホッとした表情だ。

「取りあえずフェイのおかげで相手戦力を釘付けにすることに成功したよ」

そう言って井上はフェイの肩に手を置いた。

詳しく聞くのは後にしようと思った高橋は佐藤たちが別働隊と遭遇、交戦を始めたことを告げる。

それには建物の影で見え難いが佐藤の隊がいるはずの方向から発砲音がしていたので井上も気付いていたらしい。

取りあえず状況を確認する必要があると判断して高橋は無線を手に取った。

「こちら第一分隊、第二分隊と合流した。第三分隊の状況知らせ」

高橋が佐藤の分隊に無線をかけると即座に応答があった。

『こちら第三分隊、現在敵と膠着状態です』

膠着状態と聞かされたら高橋は状況が悪いのか？と思ったがそうではなかった。

決定打が打てない状況だったのだ。

井上は盾を使われていたので躊躇う事無くＭ７２を打ち込んだが、森に潜む敵とは言え人間相手に重火器を使うのは対化物用との意識もあり簡単に判断できなかったのだ。

手榴弾や０６式小銃てき弾を使うことも考えられたが、弾数が限られるので隠れた相手が何処に居るのかを把握できないと使うのが難しい。

まさか適当にばら撒くわけにもいかないからだ。

「あー、そりゃ手出し出来んわ」

自身で人間相手にＭ７２を使って後悔しているのもあって井上はそ

う言った。
とは言え、此方側に被害を出させるわけには行かない。
高橋は７３式小型トラック、つまりはジープの１２．７ｍｍブローニングＭ２重機関銃に目を向けた。
これも人体へ向けて打つのは躊躇われる代物だ。
だが、少なくとも重火器のＭ７２などを使うより遥かにマシな上、幸いにして弾数にも余裕がある。
そしてこれなら「多少の障害物や遮蔽物を気にしなくていい」のだ。
１２．７ｍｍと言う銃弾の大きさから考えても威力は十分に今までの歴史で証明されている。
装甲を持つものやコンクリートの壁だって撃ち抜くのだ。
木だから打ち抜けない道理は無い。
「そっちに援軍を向かわせるから使ってくれ」
高橋はそう言うとジープを隊員３名に任せて向かわせた。
これで少なくともよほどの変化が無ければ対応可能だろう。
後は正面の敵主力だ。
井上が体勢を整えて対応したときと違い、正面の主力も森の木々をたてにして体勢を整えつつある。
辺りの惨状から数十人に打撃を与えていると思われた。
これなら敵も引くかもしれない、と高橋は思ったが井上の言葉がその期待を砕くことになった。

「今までの連中とは違う」
井上が告げる彼等の戦意と統率の状況を聞かされた高橋は考え込む。
そして思い起こす。
今までの敵は闇雲に向かってきていたが、ここ南部の敵は正面からぶつかろうとしないで此方を引き摺り込む戦法を使っている。
それだけで異質なのだが、地の利を生かして上手く立ち回ると同時に焦土戦術を取っている。

そして今回の井上の言葉だ。
「なるほど、敵も優秀だな」
高橋は自身の甘い見通しを大きく修正する必要があると感じていた。
そうなのだ。
敵が無能であるはずがない。
向こうも人であることは変わらないのだ。
常に考え、対策を練ってきてもおかしくないのだ。
その認識の甘さが南部平定初期の躓きだ。
危うく高橋もその過ちに陥るところだったと言える。
その意味では今回の戦いは決して悪いものではない。
認識を改めるという意味においては・・・。
結局、人は自身が経験しなければ学ばないのだ。
それは高橋とて変わらない。
「そう言うことならば徹底的にやるつもりでないと足元を掬われるな」
そう呟くと高橋は出し惜しみはなしだ。
と判断した。
「もてる装備全てを使ってでも撃退しないとこっちが危ない。躊躇ってる場合じゃないな」
高橋の言葉に井上が「正直気はひけるがな」と答えつつ、カールグスタフを準備させる。
Ｍ７２は使い捨てだ。
たしかに携行に便利で使い易いが弾を選べて使い回しが可能なカールグスタフと比べると見劣りしてしまう。
カールグスタフの方が威力があるので余程の相手でなければＭ７２を使うつもりだったが、これからは積極的に使う必要が出て来るだろう。
「正確に狙う必要ない。いると思われる所に何発か着発信管で打ち込め」
高橋の指示で数人が射手として配置につく。

カールグスタフは無反動砲であるためにＭ７２と同様に後方に危険地帯が存在する。
その為射手は後方に注意しなければならない。
もちろん射手だけでなく周辺の人員もそれとなく注意して危険範囲にいるならば即座に移動する必要がある。
そして、配置が完了すると井上が射撃を号令する。
激しい射撃音と共に打ち出された榴弾、ＨＥ　４４１Ｂ　榴弾は勢いよく森の中に飛び込んでいき炸裂した。
ＨＥ　４４１Ｂ　榴弾は有効射程１０００ｍ、機械式時限信管及び着発信管を選択できる。
そして内部に鋼球８００発を内蔵し、爆発と同時にその鋼球８００発を周辺に飛び散らせる。
つまり、爆発そのもので相手を殺傷するのではなく、爆発によって生じた破片や飛び散った鋼球で殺傷するのだ。
これは基本的に手榴弾などと大差はないが、威力と言うもので考えれば圧倒的な違いがある。
手榴弾では木そのものを一発でどうにか出来る威力は無い。
だが、この榴弾であるならば多少の木ならへし折って被害を与えるだろう。
時にはへし折られた、削られた木片そのものが人体を殺傷する凶器に変えてしまう。
そんなものを使われた側からすれば不幸としかいえない。
反撃の機会を待つヴェネトの兵は比較的森の浅いところに居たものが多かったのもあり、そのまま爆発の衝撃で道まで吹き飛ばされるものさえいた。
それが数発も打ち込まれれば彼等のいる場所が安全地帯であるはずが無いのは一目瞭然だ。
もっと奥へ、もしくはもっと後方へ引くしかない。
如何に彼等が勇猛で統率が取れていてもたまったものではないだろう。

「第2射用意！」
そんな彼等に追い討ちをかけるべく井上の号令が響く。
井上の部下たちも先程の光景を忘れたわけではない。
自分たちのやり方一つで無残な姿に変わり果ててしまう人の姿を・・・。
だが、彼等自身が生き残る為にもためらっては要られない。
日ごろの訓練の賜物であるだろうが井上の号令の元、即座に次弾の装填を進めていく。
任務の為なら命を惜しまぬ自衛官とて人だ。
それに代わりはない。
故に自身の、仲間の命を守る為に彼等は迅速な動きを可能としていた。

「1番よし！」「2番よし！」「3番よし！」「4番よし！」「5番よし！」

次弾装填を完了した合図が帰ってくる。
既に彼等は射撃体勢にあり照準もつけている。
命令があり次第に打てる状態は整っていた。
その様子に井上は高橋に射撃体勢完了と報告する。
「・・・よし、撃て」
静かに告げる高橋の言葉に井上が即座に命令を飛ばす。
「撃て！」
たった一言の命令でヴェネトの軍勢に死の矢が再び放たれた。

かつて無いほどの爆音と悲鳴が、そして怒号がヴェネトの耳に届いた。
それは彼の率いる軍勢が多大な損害を受け、既に進軍が困難な状況

を示していた。
「よもやこれほどとは・・・」
正直、甘く見ていたわけでも油断していたわけでもない。
ただ彼等の想像以上の戦力が日本にあった。
それだけのことなのだ。
「閣下、この上はハエンを諦めて後退すべきです」
近習の言葉にヴェネトは頷く。
たしかに今彼等が取っている焦土戦術の観点から言えばハエンの略奪は必要なことである。
しかし、必須ではないのだ。
例えハエンをそのまま譲り渡したとしても、そのほかの地域での略奪は進んでいる。
ハエン一箇所が無傷で渡ったからとて全体には影響しない。
むしろこれ以上の損害はいざと言うときの戦力まで失いかねないのだ。
「些か残念ではあるが・・・」
そう言ってヴェネトはハエン略奪を断念し、引き上げの合図を鳴らさせた。
森に入っていった別働隊にも伝令を出して引き上げさせねばならない。
だが、彼は今回の戦いで敗れたとは思っていなかった。
日本の戦力は極少数なのだ。
このまま押し切ろうと思って押し切れないわけではないと考えていた。
ただ、損害の拡大を防ぐ意味での撤退であれば敗北とは思えないのだ。
「この借りは後日返すとしよう」
そう言って前衛の集結と中衛を部下に任せ、ヴェネトは光栄部隊をつれて一足先に戦線を離脱する。
山中の砦を開けっ放しにしている上、負傷兵などへの治療を行う体

勢を整える必要があるからだ。
それがヴェネト、いや彼の軍勢の運命を決めたと言える。
いや、それは本当に偶然の産物であり、彼がどう決断したとしても変わらないものである以上、そうなるのが運命だったと言えるかもしれない。
彼等が後退を開始したと同時に、空には無数の影が彼等の頭上へと迫っていた。

ハエンに向かっていた軍勢が後退を開始した姿を油断無く見据え構える高橋たちの耳に聞きなれた音が聞こえてくる。
それは北の空より一路ハエンに向かってきて居た。
支援要請を出した航空隊の音である。
バタバタと言う独特のローター音を響かせながらやってきたのはＵＨ－１ＪとＡＨ－１の混成部隊だった。
『こちらアタッカー隊及びハンター隊、航空支援にきた』
高橋の耳に無線の声が聞こえてくる。
その声に誰もが安堵のため息をついた。
どれだけいるか分からない敵勢力と後退は一時的な物として考えていた彼等にとって航空支援は非常にありがたいものであった。
「敵勢力は集落南方より接近してきたものの現在は一時後退中の模様。規模は不明」
高橋の報告にスリムな外観をしたＡＨ－１コブラが先行してくる。
あっという間に高橋たちの頭上にやってきたかと思うと空中で横一列に並ぶ。
スリムな外見とは裏腹にＡＨ－１は対戦車ヘリコプターとして凶悪な戦闘力を持っている。
２０ｍｍ　Ｍ１９７　ガトリング砲１門、ＴＯＷ対戦車ミサイルを最大８発、ＪＭ２６１ハイドラ７０ロケット弾ポッド（ロケット弾

１９発入り）を2基。
それら装備のほかに7．６２ｍｍミニガンポッド（Ｍ１３４ミニガン）を付けることも出来る。
この世界では今のところ装甲を持つ車両、即ち戦車がないのでこのミニガンポッドをＴＯＷ対戦車ミサイルの変わりにスタブウイングのパイロンに装備している。
はっきり言ってＵＨ－１Ｊだけでも対地支援は可能だったろう。
だが、ＡＨ－１Ｓコブラが来たことで支援ではなく「制圧」を前提にしていることが良く分かる。
『アタッカー了解。追撃に入るか？』
恐らくそのつもりであるのは一目瞭然だ。
なので折角来てくれた上、このまま残党となってこの辺り一帯の治安を脅かすよりは徹底的に叩いた方が良いと判断できた。
「そちらの自由にやってもらって構わない」
装答えると上空のＡＨ－１Ｓコブラから了解と言う返答と共に機体を前に傾けて前進を開始して。
意外なようだがヘリは飛行機と違って言う程自由気ままに空を飛べる代物ではない。
進みたい方向に向かって機体を傾けて初めてその方向に動けるのだ。
勿論ある程度はローターの調整で動けたりもするが、やはり基本は機体を傾けて移動する。
故に余り知られていないが飛行機より操縦が難しく、その操縦資格を得るのもかなり難しいのだ。
だが、逆に小回りが効いて空中で停止も出来るヘリを自在に操れるようになると言うことは、見方にとってこれほど頼もしく思えるものは無く、そして敵にとっては悪魔以外の何者でもないだろう。
しかもＡＨ－１Ｓは純粋な攻撃ヘリコプターとして作られている為に火力があり、生半可な火力では落とすのも難しい。
謂わば空飛ぶ戦車と言えるのだ。
そのコブラがゆっくりと前進を開始すると共に、スタブウイングの

パイロンに装備されたミニガンポッドが獰猛な肉食獣が放つ様な低い唸りを上げた。
７．６２ｍｍの銃弾が６砲身のＭ１３４ミニガンより絶え間なく放出される。
機首直下にある２０ｍｍ　Ｍ１９７　ガトリング砲でもいいのだが、装甲目標でも打ち抜く２０ｍｍ砲弾（自衛隊では２０ｍｍ以上は砲と呼ばれる）を使うのは対費用効果から考えても無駄なのだ。
簡単に言えば予算をどぶに捨てるようなものだ。
だが、７．６２ｍｍだからと言ってその火力は決して見劣りするものではない。
１発の威力や貫通性は２０ｍｍには及ばないものの、毎分３０００発もの連射速度がある。
毎分６５０発のＭ１９７と比べても圧倒的な連射能力を持っているのだ。
しかもそれを両翼、つまり2基装備しているのだ。
まさしく銃弾の雨を降らせることになる。
それが後退しつつあったヴェネトの軍勢を襲ったのだ。

はっきり言おう。
この狂気と言うべき火力の前では森の中に隠れようと意味は無い。
例え大木に身を隠しても、その大木毎人を引き裂いてしまうのだ。
流石に戦意と統率を誇ったヴェネトの軍勢もこれには恐怖するしかない。
果敢にも５．５６ｍｍ小銃弾を防いだたてを立て味方を守ろうとするも、毎分３０００発もの銃弾の嵐が盾を紙の様に隠れた物ごと引き裂いていく。
ここまでくれば虐殺と言われても仕方ない有様だ。
だが、例えそう言われ様とも彼等にとってはやるべきことをやっているに過ぎない。
これを非難する資格があるのものなの、この世界には1人も居ない

だろう。
コブラで構成されたアタッカー隊４機はある程度ミニガンポッドを撃つと追いついてきたＵＨ－１Ｊに後を任せる様に高度を上げた。
周辺の警戒に入ったのだ。
そしてコブラの代わりにＵＨ－１Ｊイロコイ（自衛隊名ヒューイ）が今度はドアガンとして装備されている１２．７ｍｍブローニングＭ２を向けて射撃を開始した。
完全に残敵掃討状態である。
ここまで来れば敵も逃げ惑うほかは無い。
何をしても殺されるのだ。
しかも彼等の手の届かない頭上より死をばら撒いてくる。
戦う所ではない。
武器を捨て、中には錘にしかならない鎧をも投げ捨て一目散に逃げていく。
傷付いた仲間を助ける余裕などとうに失せているのだろう。
倒れたまま手を差し向ける見方の手を振り払い、ただ生き残る為に逃げる姿は無残としかいえない。
その様子を眺める他は無い高橋の耳にアタッカー隊のコブラから連絡が入る。
『目標よりやや離れたところに別の一団を確認。後退中の模様』
この時アタッカー隊が発見した一団はヴェネト率いる後衛隊だった。
一足先に離脱していたこともあり一命を取り留めていたのだ。
だが、アタッカー隊の放った次の一言がそれも一時のことであると告げていた。
『追跡して拠点を確認する』

第６７話「後始末」

ーホードラー南部　ハウゼン領

南部貴族連合の陸上補給路を遮断する日本の封鎖部隊は、眼前に集結した貴族連合軍約９０００と対峙していた。
海路、陸路共に封鎖された貴族連合軍は何としてもこの封鎖部隊を撃破したいところではあったものの、日本と正面切って平野部で戦うことは不利であることを悟っていた。
それ故に積極的攻勢に出る事無く圧力を加えるしかない。
南部貴族連合の主だった者がこの事態に連日シルスに対策を求めるが、もしこの封鎖部隊を抜くと言うならばもっと多数をもってやらねば犠牲ばかりが大きくなる、と答え今は圧力を加えるのみに留めさせた。
そうすることで相手に絶え間ない緊張を強い、その疲労を待って仕掛ける。
そう考えていたのだ。
その間にもシルスは出来る限りの戦力を集めさせているが、北部から侵攻してくる日本軍の動向がまた悩みの種となっている。
当初は相手の動きをモンスターをも利用して押さえ込めたものの、一度体勢を整えた日本軍を前にそのモンスターも大した足止めにならなくなっているからだ。
それでも当初よりは遅くなっているのだが、十分に早い侵攻と言えるのもまた事実だった。
焦土戦術を持って現地調達をさせず、日本の戦力の士気を落とし、弱体化させる策も効果はあまり見込めていない。
何より、補給路を叩くべき潜伏させた部隊との連絡はおろか状況確認もできないのだ。

現状がどうなっているかの情報が殆どなければ動くタイミングの見極めが難しくなる。
先日偵察に出した数少ないワイバーンも日本の飛行竜と思わしき物との接触で偵察できずに逃げ帰るしかなかった。
おかげで北部の状況がつかめないのだ。
「忌々しい奴らだ」
日本の自衛隊を十分に苦しめているはずのシルス自身、同じ様に苦しんでいた。
南北双方の動きに目を向けねばならない状況で、しかも非協力的な諸侯も現れている南部貴族連合は実際のところ空中分解寸前である。
それを押し留め、食い止め、そして維持出来ているのはひとえにシルスの手腕によるところが大きい。
決定的な大きな敗戦や失策がなく、臆病とそしられようと確実な一手を撃つことで何とか盟主としての面目を保っているのだ。
とは言え、既に北部は3分の1が日本の手に落ちつつある。
ホードラー南部中央付近のバーバラ山岳まで来たならば恐らくそこで決戦、いや、立て篭もっての持久戦をする事になるだろう。
それ以南に進まれては南部貴族連合の崩壊は決定的になる可能性が高いのだ。
「ご指示通り山中に穴を掘り、半地下城砦化させてますが規模はそう大きくはありません」
部下の報告にそれで良い、とシルスは答えた。
下手に剥き出しの城砦よりはずっとマシであると判断していたのだ。
そしてその判断は自衛隊相手には正しいものでもある。
如何に圧倒的火力を持っている自衛隊でも、地中に攻撃を通すのは実際問題として難しいのだ。
全く不可能ではないが、通常の砲爆撃では直撃しない限り相手に出血を強いることは中々出来るものではない。
とは言え、やはりかつて無い半地下城砦と言う慣れぬ物の構築により規模自体はそれ程でもない。

おかげで多数の兵を詰めさせる為にやはり山中に通常の城砦も築く事になってしまっていた。
故に半地下城砦なのだ。
一応、城砦部分も大きな岩を切り出して組み合わせているのでそう簡単には抜けないはずであった。
「約２００００の兵が居りますので残りは陸路を封鎖する敵に差し向けましょうか？」
その大多数を持って陸路の確保をしようと言うのだ。
だが、シルスは首を振る。
「バーバラ山岳とて実際ふたを開けねばどうなるか分かったものではない。予備戦力を近辺に配置する必要がある」
そう言ってバーバラ山岳より南側にある比較的大きな城を見る。
この城、バーバラ城はかつてはホードラー王国の南部開拓時代に開拓の基点となり、その後の発展期には街道を守護する要衝となっていた。
その為このバーバラ城には約６０００もの兵が集結している。
更にこの城の兵は周辺の諸侯への睨みを効かせる役目もありむやみに動かせないのだ。
「むしろ諸侯にもっと兵を出させねばな。自領の守備との名目で兵を無駄に分散させては日本とは戦えない」
シルスはそう言って集まっているものに告げる。
この考えはある意味、現代の戦争の形である総力戦、つまり国の全てを戦争と言う行為に傾けさせる概念である。
日本がシスルの考えを知れば間違いなく民間人に被害が出るのを覚悟した上で中枢たるシルスのいるディサントを狙ったであろう。
それだけ先見の明があり、日本にとって危険な人物であるのだ。
「諸侯の中でもファーレン、ケッセルリンク、ホーウッドなどの動きが鈍いですな」
部下の将がそうシルスに告げる。
暗に裏切りを懸念しているのだ。

そしてその疑念は正しく、日本と通じているのだがその事実までは見抜けていない。
「たしかにな。だが、確証が持てん以上は排除も粛清も出来ん」
今までもシルスの要請と言う名目での命令に、幾度も理由を付けて拒否したり協力の規模を縮小させてきた3人は獅子身中の虫であった。
だが、寄せ集めの軍勢である南部貴族連合において明確な証拠無しに粛清できない。
断行すれば次は自分だ、となって日本に従うものが続くだろう。
そうなっては敗北云々以前の話だ。
最悪、シルス1人に責任を押し付け自分たちはさも巻き込まれたのだ、と言って日本にシルスを差し出す真似をするだろう。
それをさせぬ為にも総力戦の様相を持って諸侯を「共犯者」にしなくてはならない。
それだけにシルスは何としても日本の侵攻を抑えつつ、少しでも有利に講和を持ちたい。
南部を一つの国として認めさせる。
そうすれば彼自身の名誉と権益は確保できる。
それ以外は踏み台となって消えてもらうだけなのだ。
とは言うものの、言う程簡単ではない。
幾ら盟主でも一方的に命令出来ない上、拒否されたからと言って罰を与える権限も無い。
「せめてもう少しでも足止めでさせなければ・・・」
足止めがなればその間に南部を纏め上げることも出来る。
その為の時間が欲しいのだ。
「いっそ諸侯を一まとめにして日本にぶつけるか？」
シルスはそう口にする。
諸侯を日本を使って一掃すれば後のまとめがやりやすいだろう。
こう考えたシルスは実行できるかを思案しだした。
そんなシルスを眺める将達は彼の決断が下るのをただ待つしかなか

った。

ーホードラー南部ハエン村

ヴェネトの軍勢が後退したことによってハエンの防衛は成功したことになる。

とは言うが、ハッキリ言って高橋たちにとってはこれからが大変なのだ。

戦闘で死傷した敵の後始末や救護、更に未だ潜伏しているであろう敵兵の捜索、掃討、更には大量に発生した血の臭いに誘われてやってくるであろう化物にたいする警戒と排除。

とても高橋たちだけでは対処できない。

ハエンの領主であるウルザや村人も総出で手伝ってくれているが、後続の部隊が到着するまでは動くに動けなくなってしまったのだ。

当初の目的からすれば一旦補給を受けて即行動再開、と行きたい所ではある物の、まさか放置していくわけにも行かないだろう。

何より敗残兵や化物に対処するにはウルザの兵だけでは心もとないのだ。

「やれやれ、次から次へと・・・」

井上がぼやきながら生存者を担架に乗せる手伝いをしている。

幾ら敵でも負傷者や降伏してきた者を無碍にも出来ない。

その為に出来ることをやっているのだ。

だが、中には負傷していても降伏しないものがいたりしてかなり面倒な事になっている。

どうしても降伏勧告に従わない者や、生きていても助かる見込みの無い者などはどうにも出来ないので止めを刺すことになる。

ハッキリ言って後味が悪すぎる。

それでも、部下の安全やハエンの住人の安全を考えればやらないわ

けにもいかないだろう。
また、今回の戦いで高橋たちの部隊にも軽傷とは言えて傷を負ったものがいる。
例えばフェイは1人敵中に切り込んだこともあり、気付かない内にかすり傷程度でも怪我をしていた。
また、奇襲を仕掛けた井上の隊や後から来た高橋の隊は兎も角、遭遇戦となった佐藤の隊では数人が矢傷を負っていた。
どれも負傷の度合いを考えれば後方に送る事もない程度の怪我ではあるが、やはり近距離での戦闘になり易い山中や森の中では此方が常に有利ではないと言うのが良く分かるというものだ。
「今回は何とかなったが、次も上手くいくとは限らないな」
慎重に慎重を重ねてきた高橋は、それでも負傷者が出たことに気が重たくなっていた。
敵が木々に身を潜め奇襲してきたり、出会い頭の遭遇戦が起きた場合は如何に装備の面で有利でも如何ともし難いものがある。
最悪、負傷どころか戦死者だって出かねないのだ。
それが無かったのは運が良かったとしか思えない。
「少しでもその可能性を下げる努力をするしかありませんね」
中田が降伏した負傷者の治療をしながら答える。
中田だって医官と言う立場である医者なのだ。
負傷者もそうだが死者だってでて欲しくは無い。
それが見知った隊の中から出てくるなど考えたくも無いのだ。
それでも戦闘と言う物があり、そしてそれに向かう職務を負っている以上は避けては通れないものでもある。
「全員が９６とかＦＶとかに乗れればいいんだがな」
無い物ねだりしても仕方ないだろうに井上がそう言ってくる。
井上が言った９６は「９６式装輪装甲車」のことでＦＶは「８９式装甲戦闘車」の事だ。
どちらも今この場には無い。
機動力を優先しているのと、燃料の補給が簡単ではないこの地では

燃費の良い物が必要になるのだ。
これが後方の本隊であれば問題なく使えるだろうが、高橋たちには向いていないのだ。
「あれば助かりますけど逆にここじゃ制限が多すぎますよ」
井上のぼやきに佐藤が答える。
そんな佐藤に井上は「分かってるよ、んなこと」と言い返す。
「ふむ、制限と言ったがどんな制限がかかるのだ？」
井上と佐藤の会話が聞こえたのか、フェイが二人のところに近寄ってきた。
フェイは既に傷の手当ても終わっており腕に包帯を巻いていた。
怪我といっても槍か剣が掠った程度であったため、消毒して包帯を巻いただけの代物だ。
放って置いてもいいぐらいの怪我であったのだが念のために中田が処置したのだ。
「まず動きが限られますね」
疑問の言葉を向けてきたフェイに佐藤が答える。
森などの障害物が多い地形では機動力が発揮し難いこと、そして燃料を結構消耗してしまうことなどを挙げる。
「あとは火力だな」
井上もそう言って混じる。
８９式は９０口径３５ｍｍ機関砲ＫＤＥと呼ばれる装備があるので問題ない。
９６式も９６式４０ｍｍ自動てき弾銃や１２．７ｍｍＭ２を乗せれる。
それから考えれば十分なのだが、やはりそれだけでは状況によっては扱いが難しくなる。
なにより、８９式の３５ｍｍは木々が邪魔になって砲身の向きを変える事に制限がかかる上、９６式の４０ｍｍ自動てき弾銃も木々が邪魔になって威力を発揮できない。
１２．７ｍｍならまだ使えるだろうが、やはりこれだけでは火力と

しては少々心もとないのだ。
もっとも、井上の言う火力と言う面ではやり方次第なので一概にも問題とはなりえない。
「まあ、数で来られたら対処が難しいのは事実だな」
高橋は単純な威力よりも数を揃えられる方が良いと思っている。
それがこの答えに繋がっていた。
「ま、９６式は撃つとき射手がむき出しになるからどの道危ないわな」
井上の言うとおり９６式の場合、射手は車外に身を乗り出す必要が出てしまうので、安全性という面ではやはり低いだろう。
しかし、もっとも安全かつ有効な手段もあるにはある。
その方法は井上の次の言葉で説明しなくても分かるだろう。
「流石に轢き逃げアタックはしたくねぇしなぁ・・・」
井上の言葉に佐藤も嫌そうな顔をする。
高橋もそれは選択し足りえないと思っていた。
「そんな戦法取ったら俺は帰るぞ」
中田も同調して言う。
何のことか分からないフェイに井上が説明するが、騎兵を率いていたフェイからすれば普通の戦術のように思えて仕方が無い。
何がどう問題なのかをしつこく聞くフェイに井上が答えた。
「おまえなぁ・・・人が原型留めない形でしかも車体の隙間に肉片とか絡んだりしてみろよ・・・後始末の方が大変だぞ」
Ｍ７２や０６式ライフルグレネード、果てはカールグスタフまで投入し航空支援を受けた以上の酷い状況になる、という井上にフェイも自身が体験した砲撃の後を思い出して青くなってしまう。
しかもその後始末は人任せにできず、自分たちでやらねばならないのだ。
やる方もやられた方も地獄と言えた。
「う、うむ、やるべきではないな」
このやり取りのとき高橋も車輪や無限軌道に絡まった人体の破片を

想像して気分が悪くなっていたのは内緒である。
「まあ、幾ら戦争でもルールがある、と言うことだな」
この世界にはルールらしいルールもないが、最低限守らねば成らぬ物があると井上は言った。
実際、彼の言うとおり、その境界はルールと言う明確な基準など無い曖昧で漠然としたものだろう。
それでも最低限守らねば成らないルールを自分たちの内に持たなければ、それはもう戦争ではなくなるだろう。
勿論、現代装備を用いている時点でこの世界に置いては圧倒的戦力であり、戦いとか戦争等といえるものではないかもしれない。
一方的な虐殺と呼ぶべき結果がそれを証明している。
それでも彼等の中にある戦争に対する認識が、元の世界にあった国際条約と言う物が彼等を支えているともいえる。

井上たちの話を聞きながら高橋は考えていた。
何時になったら自分たちはこの神経をすり減らす状況から開放されるのだろうか?と・・・。
この世界に国土ごと転移して以来、日本は常に決断を迫られてきた。
その日本を守る為、国民を守る為に彼等自衛隊は文字通り最前線で戦ってきている。
アルトリアへの進出、難民の保護、そしてそれに伴うホードラー王国との開戦。
更に結果的にではあるが王国を滅ぼしたと思ったらファマティー教のテロ、そしてベサリウス領との交渉とバジル王国との開戦、滅亡・・・。
今では南部と戦っている始末だ。
何時までもこうやって戦い続けることは日本の将来を誤まらせる結果を生みはしないだろうか?
それが高橋の懸念だった。

今の総理は間違えるとは思えない。
だが国民は?
国民が望み、結果として戦争になった例は歴史上幾つもあった話だ。
日本がそうならねばならない理由や根拠はないのだ。
戦争に勝つ、いや勝ち続けると言うことはそう言った危険性もまたあるのだ。
とは言ったものの、流石にそんな先を見通すことは高橋には出来ない。
今のところ日本にその兆候はない。
だから多分大丈夫。
そう信じるしかないのだった。

第６８話「特殊作戦群～夜間の奇襲」

ーホードラー南部ハエン村

高橋たちは本隊より補給を受ける必要がある、とされ2日たった今も留まっていた。
実際は戦闘の後始末で動ける状態に無いことと、思いの外本隊との間に距離が開いてしまっていた事から、緊密な支援の為にも一旦留まらせて戦線を再構築したかったのもあった。
その間にＵＨ－１Ｊが負傷者を後方へと移送したり、ＡＨ－１Ｓが追跡した結果などから高橋たちは防衛も含めた対応をしている。
ＡＨ－１Ｓは撤退する敵本隊と思われる部隊を発見、追跡したのだが、ヘリであるＡＨ－１Ｓの欠点として音が大きいのがある。
これにより追跡が露呈しては相手の戦力が散ってしまう可能性があったことから追跡そのものは途中で切り上げていたのだ。
だが、その後に行われた夜間飛行による偵察などで拠点と思われる地点は確認している。
更に捕虜からの情報でほぼ間違いない、と上は判断していたのだ。

だが、同様にこの拠点について問題が発生していた。
今回高橋たち特殊任務部隊がハエン村にて貴族連合軍と一戦交えたことにより此方の動きが彼等の考えより速いことが分かっているはずである。
しかも多数の頬慮を得たと考えれば自分たちの隠れている拠点の情報も漏れていると判断しても可笑しくない。
そうなれば拠点を捨てて別の場所に潜伏されるのでは？と思われた。
その為の早期制圧目的で後方より幾つか部隊が捕虜の移送と共にハ

エンへと来ている。
おかげでハエンは空いている土地にテントを建てていたり、ＡＨ－１Ｓが駐機していたりする。
ＵＨ－１Ｊの離着陸は畑の一部を後に保障すると言う事で発着場として借りている。

高橋たちはその制圧隊の戦力が整う前に偵察を行う事を進言していたが、本隊からは必要なしとの回答が着ただけで待機を命じられている。
その理由がハッキリしないのが高橋には気になっていた。
「本隊が必要なしと言っているなら黙っているしかねぇよ」
井上は深く考えていないのか、コーヒーを飲みながら特殊任務部隊に宛がわれた指揮所（あくまで仮であるが）でのんびりしていた。
先日までは防衛の為に気が張っていたが、後方より多数の戦力が送られてきたことにより今は分担して行っており、休暇代わりに休みを取っている最中なのだ。
「そうは言うが・・・先行偵察が役目の俺たちがのんびりさせられている理由が気にならないか？」
高橋の言葉に井上は少し考えてみる。
たしかに普通なら情報の確定の為にも監視を含めた偵察は必要だと思われた。
それが要らない、と言うからには相応の理由があるのだろう。
「リコン（偵察）をもう出してるとか？」
高橋も井上の言うことは既に考えていた。
だが、そんな連絡は受け取っていない。
もし出されているなら宣言したときに連絡されているはずだ。
それを高橋が言うと井上は腕を組んで上を見ながらうめく。
「うーん、後はもう制圧しちゃったとか？」
ＡＨ－１Ｓコブラが先走って粉砕したのではないか？と井上は言っ

てみる。
だがそれも同じく連絡が入るだろう。
連絡、報告は自衛隊では重要な仕事の一つだ。
既に他の隊が偵察していたり、制圧してるなら当然連絡があってしかるべきだ。
でなければ高橋たちは行動を再開したときに其方への警戒を余儀なくされ、要らぬ苦労をする羽目になる。
「どれも連絡内理由にはならんなぁ」
高橋もお手上げ、と言う様子で両手を挙げた。
井上からすれば高橋が考えて分からないものが自分に分かるわけがない、と言った表情だ。
「後はあれだ」
そう言って井上は続ける。
それはほとんど冗談のつもりの一言だった。
「よっぽど見られては困るものでも動かすんじゃないか？」
この一言は高橋に直感めいたひらめきを与えた。
見られては困るもの。
例えば公に出来ないものが一番考えられる。
例えば化学兵器の使用や核兵器と言った大量破壊兵器だ。
後は航空戦力などによる実験的意味合いの空爆などだろう。
化学兵器は防護に対する研究用が少量あるだけで使用する量は無い。
核兵器にしてもこんなところで使う戦略、戦術的意味が無いので両者はありえないだろう。
では実験的攻撃はどうか？
相手の降伏を確認できない為に可能性としてあり得る。
だが、そんな実権をする余裕が展開している部隊にあるとは思えなかった。
多少の余裕を持って容易はしているだろうが、これから先に何があるか分からない状況で浪費とも言うべき真似をするとは思えない。
では、それら以外で見られては困るものは何かないだろうか？

そう考えていた。
そして、一つだけ思い至る物があった。
「・・・中央即応集団、特殊作戦群・・・」
高橋の呟きに井上の表情が固まった。
暫しの沈黙の後井上はありえねぇよ、と言ったが根拠は無い。
中央即応集団とは防衛大臣直轄の機動運用専門部隊であり、有事の際は真っ先に増援、緊急対応する部隊だ。
ある意味、緊急展開部隊と言える。
そして、その中央即応集団隷下に存在する特殊作戦群は陸上自衛隊初であり唯一の特殊部隊なのだ。
その為、その内情についての詳しい情報は装備や訓練内容共に一切公開されていない。
同じ自衛隊員であっても知らされていない部隊なのだ。
対テロ、対ゲリラ作戦が主任務とされているが他国における特殊偵察や直接行動、情報戦などの多様な任務を遂行出来る部隊とされている。
その性質から非合法活動も任務の内と推測、憶測されるが現状では一切が不明だ。
「第一、あいつらは日本国内にいるはずだろう?幾らなんでもこの為だけに出張ってきたとしても昨日今日で着く訳ねぇよ」
井上はありえないと主張したが、高橋には在り得ると思えた。
それは、シバリア動乱と呼ばれるファマティー教のテロがあったからだ。
あの市内各所で同時多発的に発生した一斉蜂起テロで自衛隊、外人部隊共に少なからず損害を出している。
一応の終息と制圧は完了していたが、また起こらないとも限らない。
全てを抑えるのは実際問題不可能だからだ。
拠点らしい拠点は全て潰したつもりでもまだあるかもしれないのだ。
それに対応する為にはどうするか?
簡単である。

それ専門の部隊を配置して行動させればよい。
高橋たち特殊任務部隊は元々普通科部隊の集まりであると同時に何でも屋の性質上、常に配置しておくことは出来ない。
では外人部隊は同だろうか？
元が在日米軍であるので特殊部隊も中にいるはずである。
だが、海兵隊はバジル王国へ、海軍、陸軍は南部の封鎖作戦に従事している。
当然それぞれがぞれぞれの部隊と共に動いているだろう。
空軍に至っては元々が在日米軍の部隊管理を請け負うだけの為に航空部隊以外の実戦部隊は警備程度でしかいなかった。
つまり、専門の部隊として動かせるのは彼等中央即応集団隷下の特殊作戦群しかないのだ。
レンジャー部隊は強力だが市街地における対テロ、対ゲリラでは些か不向きであろう。
それらを考えると自然と特殊作戦群ぐらいしかいないように考えられても可笑しくはない。
勿論、特殊作戦群全部隊が来ているとは思えないが、来ていてもそれを公表などしないだろう。
もしかすれば北野も知らないかも知れないのだ。
勿論確認を取ったわけではないので断言は出来ない。
知っていてもあの北野であれば沈黙を保っていてもおかしくないからだ。
だが、そう考えるとつじつまが合う。
特殊作戦群が秘密裏に制圧に動いたと考えれば、その性質上一般部隊には行動を極秘のままにしてしまうだろう。
その結果がどんなものであれ、誰が、どの部隊がやったか分からなければ何も言いようがないからだ。
案外、何食わぬ顔でこの村に居るのかもしれない。
とは言え、それ以上の詮索は出来ないだろう。
しても答えなどは出てくることはない。

そもそも特殊作戦群が実際に動く確証などないのだ。
あくまでも高橋が考えて導き出した高橋個人の「憶測」に過ぎないからだ。
どちらにしても高橋たちは命令通りハエンにて待機するしかなかった。

ーホードラー南部山中

ハエンでの戦いから2日目の夜。
ヴェネトは城の物資を後方へと送る準備を夜間を通して行っていた。
撤退を決断し一足先に撤退したのは良いのだが、先鋒を纏めて帰還するはずの中衛が敗残兵の有様で帰還してきたからだ。
これにより５００名の兵の内、約半数近くが消耗した事になる。
日本軍をやり過ごしてその後方を脅かそうにも、多くの将兵を失った今となっては難しいと言えるからだ。
兵の数だけならば兎も角、その兵を指揮する将足るものの多くが先の戦いで失われた以上はここに留まっての軍事行動は無理になっていたの。
その為ヴェネトは集積した物資と共に後方へ下がり別命を待つより無かった。
だが、その準備に追われるヴェネト軍へと近付く奇妙な音が聞こえて来た。
それは先のハエンから撤退するときにも聞いた何かが羽ばたいているような音であった。
「何だ？」
正体不明の音に将兵は作業していた手を止め音のする方向を見る。
しかし、月明かりも雲に隠れていてはその方向を見ても何も見えてこない。

それは恐らく空を飛んでいるのだろう。
自分たちの頭上にその音はやってきていた。
「総員警戒せよ！」
訓練が行き届いているヴェネト軍は万が一に備えて警戒態勢を取る。
それぞれが手近にある武器を手に取ろうとした、そのときだった。
突然砦から離れた夜空から流れ星の様な物が彼等に向かってくる、様に兵たちには見えた。
それは自分たちの周りに飛び込んでくると炎と轟音を響かせる。
その衝撃で兵たちは吹き飛び、血と肉を辺りにばら撒く。
陸上自衛隊の航空部隊であり、対戦車ヘリコプターＡＨ－１Ｓコブラによるロケット弾による攻撃だった。
幾つものロケット弾がハイドラ７０と呼ばれるロケット弾ポッドより放たれる。
その１発１発が十分な破壊力を持って砦を焼いていく。
辺りが爆発によって発生した炎で明るく照らされ、まるで昼間のようになる。
だが、この攻撃はあくまでも前段階に過ぎない。
この後にもっと恐ろしい攻撃が来るのだ。
兵が突然の攻撃に逃げ惑う中、砦の上層には別の攻撃が行われていたのだ。

「何事か！？」
砦の中にいた兵が騒ぎの起きている中庭を見下ろす。
明らかに敵襲ではある物の、その詳細を確かめようとしたのだ。
だが、中庭に発生する爆炎を確認したところでその兵の意識は永遠に刈取られてしまった。
叫び声を上げること敵わずに屋上にいた兵があっという間に沈黙する。
彼等が庭に気を取られている僅かな時間の間に上空にホバリング（

空中静止飛行）していたＵＨ－６０Ｊブラックホークからロープ降下してきていたのだ。
夜間にロープ降下は本来は行われるものではない。
何故ならばヘリコプターは有視界飛行が基本なのだ。
夜間飛行するための慣性航法装置やＧＰＳ、赤外線暗視装置などが無ければ極めて難しい。
更に如何に夜間飛行能力を持っていても、ホバリングしつつロープ降下（ラペリング）するなど余程の訓練を積まねば危険である。
しかし彼等はそれを行えるだけの技量を持っていた。
それが彼等「特殊作戦群」なのだ。
３機のブラックホークから合計３０名の特殊作戦群所属の自衛官が、迷彩柄のヘルメットや衣服に黒い覆面をした姿で屋上に降り立つ。
そして屋上を完全制圧すると身振り手振り砦の内部に侵入を開始した。
一言も話さずに屋上から進入すると一つ一つの部屋を確認しながら奥へと進み始める。
その動きは機敏でかつ正確であった。
途中に出会った兵は声を上げる間もなく即座に減音器（サプレッサーと言い消音器とはまた別のもの）のＭ４カービンで射殺していく。
外の騒ぎが続くうちに彼等は指揮官の居場所を探す。
何故ならば彼等の目的は唯一つ。

この砦の指揮官の身柄の確保だからだ。

第６９話「特殊作戦群～制圧」

ーホードラー南部山中

夜間に行われた特殊作戦群の奇襲に対しヴェネトは即座に身支度を整えると手勢を向かわせた。
このまま日本の攻撃を受ける訳にはいかないのだ。
反撃しても効果が如何ほどあるのかなど分からない。
だが、だからと言ってただでやられては彼自身の名誉に関わる。
この世界に普通にある名誉を重視した意識がヴェネトにそう判断させても不思議は無かった。
「上からの攻撃ならば上層の対飛竜装備を使わせろ！」
部下に指示を飛ばしつつヴェネトは赤く染まる空を窓から見上げる。
そこには堂々と姿を現して砦に銃撃を仕掛けるＡＨ－１Ｓがいた。
飛竜の様には見えないソレは口と思われるところから何度も小さな光を発する。
それだけで地上では兵が引き裂かれていく。
一体どう言った攻撃なのかは全く分からないものの、時折そこから光が一瞬だけ軌跡を描くことから、炎のブレスの一種ではないかと思われた。
ヴェネチがそう思った攻撃は２０ｍｍ　Ｍ１９７　ガトリング砲によるものであったものの、そんなことは彼にはわからない。
それが如何なる凶器であるかなどは味方が吹き飛ぶ姿から推し量るしかないのだ。
「物陰に潜ませろ！そうすればある程度は防げるはずだ！」
炎のブレスの一種であれば高温であっても遮蔽物で防げると思ったのだ。

だが、先ほどから命中した者達がどうなっていたかを考えれば余程強固な物に隠れねば防げないだろう。
そう思いながらも兵の動揺を押し留めるにはそう言うしかなかった。
実際、２０ｍｍガドリングから放たれる砲弾を前にしては相当強固な物でなければ防げない。
馬車や建物の陰にいても、木造の物ではそれ諸共撃ち抜かれて粉砕されてしまう。
井戸の陰に入っても積み重ねた石ごと吹き飛ばされる。
城壁も見るからにボロボロにされている。
それだけの威力があるのだ。
とてもではないが城内にでも逃げ込まねば持たないだろう。
ヴェネトはその様子を見ながら忌々しそうに舌打ちするしかない。
そこに場内の警備に当たっていた兵が飛び込んでくる。
「閣下！」
非常に慌てた様子の兵にヴェネトは何事かを聞く。
これだけ悲惨な有様なのだ。
これ以上に驚く内容の報告などない。
そう思っていた。
「城内に敵兵が侵入！上から入られました！」
これを聞いたヴェネトは唖然とした。

日本軍の兵士は空を飛ぶとでも言うのか？

彼の脳裏にありえない！と言う意識が浮かぶ。
如何に飛竜であっても完全武装の兵を運ぶには個体差があるにしても、多く見積もって騎手を含めて４人程度だ。
長距離の飛行を諦め、片道で良いならば６、７人いけるかどうかだろう。

「・・・何処まで侵入されている？」
一旦落ち着こうと努めて冷静に振舞う。
ここで指揮官が慌てふためくなど彼の沽券に関わるのだ。
「上層２階は完全に支配下に置かれています！」
兵は冷静に努めるヴェネトに自分も落ち着こうとするものの、その侵攻速度の速さを目のあたりにしている故に落ち着くことが出来ない。
なにより現在彼等は攻撃を受けている側なのだ。
とても落ち着くなど早々できるものではない。
「それでは・・・真上ではないか！」
４階建て構造の砦であるので上２階を制圧されては半分が取られた事になる。
つまり、彼等がいるここも危険になっているのだ。
「どうやって進入したのかは分からんが数は少数のはずだ！城内の兵を指し向けろ！」
ヴェネトの怒声に兵は慌てて室外に出て行く。
その足で上から来る敵に抗する兵に命令を伝達するはずだ。
いや「だった」と言うべきだろう。
ドアを開け放ったまま飛び出した兵はいきなり横殴りにされたように弾け飛んだ。
頭から脳漿を撒き散らしながら・・・。
それが目に入った瞬間、ヴェネトと同室にいた兵が即座に腰の剣に手を伸ばした。
そこに小さな筒がコロコロと室内に転がってくる。

アレは何だ？

と思い誰もが注視し、突発的事態に備えた。
だが、それこそが転がってきた物の効力をより発揮する事になる。
彼等の目の前に転がってきたものは「閃光発音筒」つまりスタング

レネードとかフラッシュバンと言われる物だった。
これは強力な光と音で相手の動きを一時的に封じる為の非致死性兵器である。
それを知っていればある程度の防御方法はあるのだが、彼等にはその知識も経験もない。
当然、凄まじい爆音（室内で近距離だった為）と放たれた閃光に彼等の目と耳は機能不全を起こしその役割を放棄してしまう。
当然ながら直後に室内への進入を開始した者達の姿や音は感知できる訳もない。
その為、ヴェネトたちは何ら対処が出来ぬまま自分の体に何かが押し当てられ、直後に何とも言えない衝撃を受け意識を失うのだった。

特殊作戦群は城内に侵入を開始すると即座に最上階を制圧していた。
建物最上階に居た兵士は上部への警戒の薄さから配置は少なく、廊下などに警備の為にいただけだからだ。
非戦闘員と思われる非武装の者は僅かばかり居たものの、当然対抗することも出来ずに拘束されていった。
一部の隊員を拘束に廻すと同時に残りが下層を目指して突き進む。
目標が何処にいるかなどは不明の為、手当たり次第に虱潰しにするしかない。
だが、それでも彼等の動きを阻害出来るものは城内の何処にも居なかった。
出くわしても抵抗すれば即座に射殺され、負傷しても戦闘を行おうとしていたものは捕虜にせずに同じく射殺される。
非情に徹した訓練を重ねただけあるだろう。
そうでなければ一瞬の躊躇で隊全体を危険に晒すからだ。
基本的に彼等は制圧や目標を拘束するだけでそれ以外の戦闘員に対しては捕虜にしない。
情報が欲しければするだろうが、それはここで働く非戦闘員からで

十分得られるのだ。

そしてあっという間に最上階を制圧した彼等特殊作戦群は階下、つまり3階へと進む。

3階は最上階である4階と違い兵が多く詰めていたものの、城内の兵は1階に集中していたこともありやはりその数は少ない方だった。

4階を制圧したように廊下に居た、出てきた兵を優先的に始末すると室内を制圧にかかる。

何処に誰がいるかなど実際に見なければ分からないからだ。

1人でも戦闘員を漏らせば背後からの奇襲や飛び出しての奇襲を受けかねない。

それだけは如何に訓練を積んでいても危険なのだ。

もっとも、それに対する訓練もつんでいるので早々遅れは取らない。

実際に飛び出した兵が小剣を突き出してくる場面もあったが、先頭に立っていた隊員は手に持っていたM4で受け止め突き出された小剣を逸らし、直ぐ背後にいた隊員に頭を撃ち抜かれている。

そうやって室内をクリアリングしつつ進んでいる最中に退路の確保と非戦闘員の監視に残っている隊員から無線連絡が入った。

「目標は2階の南側、階段を降りて3番目の部屋」

非戦闘員を尋問し、居場所を突き止めたらしい。

それだけを聞くと互いに目で頷くと更に階下を目指して侵入を続けていった。

やがて目標が居ると思われる階に到達すると兵士が慌てた様子で一室に飛び込むのが鏡越しに見えた。

通路の角などに置いては鏡を用いて様子を探るのは最早当たり前だろう。

そこは情報にあった部屋であることを確認したとき、中からざわめきが聞こえる。

恐らく何かしらの命令を出しているのだろう。

その隙に特殊作戦群の隊員は廊下に飛び出し警備の兵を始末する。

Ｍ４の銃口に付けられたサプレッサー（減音器）により銃声を小さくしているので室内の人間には銃声が聞こえずに済む。
即座に通路を確保するとドアの両側に隊員が訓練通りに配置すると同時に、他の部屋を制圧するものと同時に情報にあった部屋を制圧するものに分かれる。
今回彼等は指揮官と思われる者たちを生け捕りにする必要があったので、用意したスタンガンと共にスタングレネードを準備する。
室内には複数の人間のざわめきが聞こえるので、突入後は迅速に動かねばならない。
そのとき、ドアが開け放たれて先ほど飛び込んだ兵が今度は飛び出してきた。
ドアは部屋に向けて開く形だったので隊員にぶつかる事は無かったが、隠れることも出来ないので発見される事になるだろう。
その為即座に隊員たちを纏めていた指揮官が手にしていたＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＳＰで頭を撃ち抜いた。
これは特殊作戦群向けにだけ調達された拳銃で文字通りＨ＆ａｍｐ；Ｋ（ヘッケラー＆コッホ）社製の９ｍｍ×１９パラペラム弾と呼ばれる弾を使う。
一部パーツを変えることで４５ＡＵＴＯと呼ばれる弾も使える。
更にサプレッサーをつけることが可能なモデルである。
故に彼の手にあるＵＳＰはサプレッサーがあり、銃声は最小限に抑えられていた。

突然の銃撃に飛び出してきた兵は横殴りにされたように、部屋のあるのとは反対側の壁に上体を横に逸らしながらぶつかっていく。
それを見届ける事無く隊員は即座に室内にスタングレネードを放り込んだ。
スタングレネードは放物線を描きながらも、それほど強く投げ込まれたわけでもないので直ぐに床へと転がった。
数秒後、轟音と共に閃光を放つとそれを合図に隊員たちがスタンガ

ンを手に飛び込む。
同時に万が一に備えた後詰がドアを盾にするように住を室内へと向けた。
僅か４人ばかりが部屋に居たものの、スタングレネードにより戦闘力は喪失しており、制圧には時間はかからずに済んだ。
スタンガンを受けた４人は一瞬体を痙攣させると直ぐに意識を失い倒れこむ。
それを確認すると武装を解き、その身柄を拘束することに成功した。

ここまではいい。
この後が彼等特殊作戦群にとって大変なのだ。
手持ちの弾薬もそれなりに消耗しており、指揮官の奪還に動かれては対応が難しくなる。
故に捕らえた指揮官らしき４人を連れて脱出せねばならないからだ。
一応、外でＡＨ－１Ｓが騒ぎを起こし注意を引き付けているものの、グズグズしていると脱出に置いて追撃を受けてしまう。
勿論それに対処することは可能だが、余計な手間を取られたくない彼等は即座に脱出を開始した。
制圧済みなので要所に居る隊員を横目に４人を抱えた隊員たちがヘリが待つ屋上へ向けて走り出す。
最後尾で警戒に当たっていた隊員も要所に配置された隊員に警戒を任せて屋上へと後退していく。
そうやって交互に後方を警戒しつつ順次後退を開始していくことで追撃を防ぐのだ。
屋上に着いた彼等は即座に発炎筒で着陸できそうな場所に発炎筒を使い合図を送る。
すると上空で待機していたヘリが比較的広いところに降下してくる。
流石にヘリの重量に建物が耐えれるか分からなく着陸は危険なので、ギリギリ浮いている様な状態である。

それに捕らえた４人と隊員数人が乗り込むと直ぐに上昇、そして別の機が降下してきて回収に入った。
最後の１人が乗り込むとＡＨ－１Ｓも攻撃をやめ、高度を上げだす。
既に中庭で動く兵はなく、城内に留まっていた兵や運良く建物の陰に居て気付かれなかった兵だけがそこにいた。
反撃どころではない。
手の届かぬ上空からの攻撃で最早身動きも出来なかったのだから。
それでも城中の異変に気付かれ無い様に攻撃を続けていたこともあり、ＡＨ－１Ｓの残弾は殆ど残っていなかった。
そして、最後の１人を乗せたＵＨ－６０Ｊが予定高度まで上昇すると、機体を北に向けて全機が離脱していった。

彼等ヴェネトの将兵にとって悪夢のような一夜が漸く終わったのだ。
だが、これで全てが終わったわけではなかった。
負傷者の救護や被害状況の確認が進む中で指揮官の不在が発覚するのだ。
逃げたわけでもないのに忽然と姿を消した事に慌てふためくうちに夜が明け混乱は拡大していく中、今度はレンジャー部隊が城の周辺に姿を現す。
今度は制圧する為の部隊が砦に向けて現れたのだ。
ヴェネトやその腹心を含めた将の不在。
取り囲まれた現実に、彼等は戦意を喪失し降伏するしか出来なかった。

第７０話「謀略の完成」

ーホードラー南部山中

前夜に本隊から派遣された強襲部隊により制圧された砦では降伏してきたヴェネトの将兵の移送や治療が行われていた。
今も幾本もの煙を上げる砦（砦自体は見えない）がハエン村からでも遠目で良く分かる。
その現場には立ち寄らず高橋たちは再び行動を再開することになり、その準備の為に補給を受け取っている作業中に高橋は夜間に強襲したらしいとの話を聞いた。
前日井上と話をした「特殊作戦群」が動いたのだな、と思う。
だが確認はしようがない。
如何に活躍しようとも特殊任務部隊の指揮官である高橋は下っ端に過ぎないのだ。
以外に知られていないが、士官（尉官）は所詮は兵の立場に過ぎない。
会社で言うなれば精々課長だ。
偉い様に見えてそんなに権限が無い。
最低でも将校（佐官）でなければ扱いは一部隊のまとめ役でしかない。
その為、こう言った事態に置いては一切情報が入ってこないのだ。
もっとも、高橋にその辺りに対する不満はない。
己の分はわきまえているのだ。
彼は彼自身でやれることをやる。
それしかないのだ。
「補給の受け取り完了しました」
佐藤が報告の為に高橋の下に来る。

佐藤の報告を聞いて今後の予定を全員に伝えるべく高橋は動いた。
「全員を整列させてくれ」
そう言うとそのまま部隊が集待っているところへと足を向けた。

ーホードラー南部ディサント

高橋たちが行動を再開している同時期、南部のディサントにはバーバラ山岳以南の諸侯が集められていた。
バーバラ山岳以北の諸侯に限っては戦力を殆ど持たないことから私財を抱えてディサントに集まっているものの、供出できる戦力を持たないこともあり今回の集まりからは除外されている。
ただし、ファーレン、ケッセルリンク、ホーウッドと言ったバーバラ山岳以北の諸侯は一応混ざっている。
未だ日本からの攻撃を受けていない上に動員できる戦力が多いからだ。
そんな集まった諸侯を前にシルスは状況は此方の予測したとおりに移行しており、焦土戦術は着実に日本の体力を奪いつつあると宣言した。
実際は言う程の効果は無い上に、シルス自身確かめようが無い為にどれだけ意味があるのかはわからない。
しかし、失敗したかもしれない、と告げれば求心力を失いかねない。
それはシルス自身の首を絞める事になるのでとてもではないが本音で言うことは出来ないのだ。
作戦は着実に上手く行っている、という事にしてシルスは話を進めた。
「我らはバーバラ山岳で疲労の極みにある日本相手の決戦に挑むことになる」
壁に下がる大きな地図を前に諸侯に向けて演説するシルス。

諸侯の多くはバーバラ山岳以北が自分たちの抱えている領地ではないことであるためにシルスの作戦が順調であると言われて満足していた。
自分の領地がそこにあれば間違いなくこんな落ち着いた状態ではいられなかっただろう。
他人の家が火事でも自分の家が離れていれば特に騒がないのと同じだ。
そんな心境の諸侯を前にシルスは続けて今後の予定を告げていく。

現在、ホードラー南部は北からと海上を押さえられている上に陸路も封鎖されている状況にある。
しかしシルスは食料や武器装備は１０年分蓄えており問題ないとの主張をあげる。
海路と陸路を奪われたことにより諸侯に動揺はあったものの、シルスの蓄えがあるとの話に安心していた。
諸侯からすれば今の生活を保てればいいのだ。
自分の所が苦しくなってもシルスからの提供も約束されているならば、それほど慌てる必要も無い。
だが問題はここからだった。
シルスはここまで説明した後、海路と陸路を封鎖する日本軍に対しての攻勢を禁止したのだ。
これは小さいながらも平野部である為に、日本軍の方が有利になってしまうためだった。
この話には諸侯からもざわめきが起きるが、現状これを打ち破るには戦力が足りないと言うシルスの言葉に従うより無い。
相手に有利である状況で数を揃えても損害が大きくなるのだ。
流石にこれは彼等の懐も大きく痛む。
諸侯の多くは自分の腹さえ痛まなければ他はどうでもいいのだ。
ある意味「我関せず」だろう。
しかし、シルスにとってはそんなことは百も承知である。

だからこそ次の言葉が出たのだ。

「バーバラ山岳の防衛にも戦力が足りない。ついては諸侯の皆にも負担して頂く」

これを聞いた諸侯は、まさか、と言う思いだったろう。

ある程度の戦力をシルスに供出しているので後は彼に一任し、万が一のときは責任を押し付ける積りだった諸侯の多くは更なる要求は受け入れがたかったのだ。

途端に場は騒がしくなる。

これ以上の出費は誰もが避けたい、と言うのが本音だろう。

だからこそ中には「今ある戦力で十分だ！」などと声を荒げている。

バーバラ山岳と言う天然の要塞がある故の安心感が彼等にあり、これを突破されると言う事は南部の敗北であるのだ。

その時はシルスを身代わりにする積りなのだから、これ以上の協力は日本に睨まれかねない。

しかも軍を出すと言う事はその分出費も増えるのだ。

兵は無理やり領地から引っ張り出せばタダで済むが、その兵の装備、食料などには金がかかる。

唯でさえ日本との戦争で輸送路を押さえられており、物価の高騰が起きているのだ。

かなりの出費を覚悟せねばならないだろう。

だが、シルスは諸侯に対し協力の必要性を落ち着いた様子で説得、いや、説得という恫喝を行った。

「バーバラ山岳には我等南部貴族連合より集められた約１万の兵がいるだけであり、これでは此方に地の利があろうとも日本軍を前には防衛線として不十分だ」

シルスは集まっている兵を過少に告げて危機感を煽る。

実際には２万の兵力と６０００の後詰がいるのだが、この内訳はシルスの私兵が中心である。

諸侯の軍勢はハウゼン領にいる日本軍に向けているだけだ。
「私の持つ軍勢の多くは今も日本軍の補給路を脅かしており、その為に使っているのだ。防衛に廻すだけの戦力はない」
はっきりと断言することで自身に手持ちはもうない、と思わせようとする。
諸侯もバーバラ山岳の防衛がままならない現実に血の気がうせていく。
「日本が貴族と言う身分を認めずに領地を奪ったことは諸君の知っている通りだ。貴族という伝統ある身分を守る為にもバーバラ山岳は意地でも守らねば成らない！」
あえてここでバーバラ山岳の防衛を強調する。
しかもこの防衛線を抜かれれば領地は失うぞ、と言う脅し込みである。
諸侯はお互い顔を向けある。
実際に日本はホードラー王国滅亡時に貴族の領地を認めていない。
私有地として認められた者も居るには居たが、土地にかかる税金のことを考えれば貴族の領地と言う物は認めていないことになる。
ここに来て諸侯もようやく気付いたのだ。
如何に自らの土地、と言うのが認められても徴税権も奪われて、しかも土地に税金までかけられては自分たちが痩せ細るのみだと言うことに・・・。
シルスは早い段階でこれに気付いていた事もあり講和の道を探っていたのだ。
早くに気付くか後で気付くか、その差がシルスと他の諸侯の違いだろう。
「その為の負担要求がそんなに不満かね？」
シルスは止めとばかりに壇上より歩み出て1人の諸侯に告げる。
言われた諸侯は反論らしい反論も出来ずに口ごもっているしかない。
今まで考えもしなかった貴族と言う立場の喪失が目の前に突きつけられたのだ。

早々判断することなど出来ないのは当然だろう。
「まさか・・・とは思うが、そこまで負担するのが嫌なのは日本に通じているからかね？」
突然の裏切り者認定に諸侯は慌てふためいた。
周りにいた諸侯も一気に彼から離れる。
「ち、違う！我が領はそんなに豊かではない！だ、だからこれ以上は難しいのだ！」
必至に抗弁するもののシルスは冷ややかな目でその諸侯を見つめるだけだ。
「ほ、本当だ！」と言っても一言も発しないシルス。
その姿に諸侯は恐怖を抱いた。

粛清される！

それは裏切り者として処刑されることを意味する。
財産を惜しんで命を奪われるのは流石に彼も耐えがたかった。
だからだろう。
命乞いの積りで言ってしまった。
「わ、私が裏切り者ではない証拠にディサント侯の負担に応じる・・・」と・・・。
それを聞いたシルスは途端に笑顔を諸侯に向けた。
最初っから粛清する積りなどもって居ないのだ。
その意味でシルスは政戦両略である戦略家であり役者だった。
「そうですか、大変失礼な物言いをしたことを詫びますぞ」
そう言って彼の手を握る。
あわや命の危機にあった（彼が思い込んでいただけだが）諸侯は漸く落ち着くと再度の全面協力を申し出た。
そうしなければ彼自身で自分を裏切り者だ、とする証明になりかね

なかったからだ。
その彼の方を叩きながら辺りを見回すシルスに、次は自分か!?と気が気ではない諸侯。
その中から意外な人物が歩み出てきた。
「これはファーレン卿、ケッセルリンク卿、ホーウッド卿・・・なにか？」
シルスの前に歩み出てきたのはバーバラ山岳以北に領地を持つ3人の諸侯だった。
彼等は内密に日本への協力を約束しており、シルスも各章がなくとも内心で疑っていた3人だ。
やや警戒心を持ったシルスに意外な事を提案した。
「我々もディサント侯の提案に従いますぞ」
思っても見ない提案ではあるが、シルスにとっては助け舟になる言葉だった。
この場に来てもまた何だかんだ言って協力を拒否すると思っていたのだ。
「これは・・・バーバラ山岳以北は後に奪還するとしても一時的に放棄してもらうことになるのにですか？」
意外そうなシルスにジョナサンは続けた。
「私は自身の為に財を蓄えておりませぬ。全ては国の為です」
そう言ってジョナサンは両側に立つアルトとサド・ウィン・ホーウッド伯爵を見る。
両者とも頷いてシルスの提案に乗ることを告げた。
「我が領はバーバラ山岳遠いですが、全軍を持って防衛に協力します」
ホーウッドはそう言って頭を下げた。
今までは距離が離れていることもあり、また海に面していることから領地の防衛を理由にシルスには非協力的だった。
「我が領も全面協力します」
アルト・ケッセルリンク子爵もそう言って頭を下げた。

彼もまた、道の整備が行き届いておらず多くの協力は出来ないと言って協力的ではなかったのだ。
「これは有り難い！しかし、今になって突然どうなされたのか？」
暗に何故今まで協力しなかったのだ？と聞くシルスに3人は答えた。
「我々は侯からバーバラ山岳での防衛は聞かされておりません」
「あくまでも焦土戦術と敵補給路を遮断し、敵を飢えに追い込むものと思っておりました」
「それ故に我々もその様に動く積りでした」
今度は3人がシルスに「何も指示せずに兵を出せ」としか言っていない事を告げると共に、きちんとした戦略があるならそれに従うのは吝かではない、と答えた。
なるほど、バーバラ山岳以北を一時的に放棄（シルスは完全に放棄のつもりだった）する事で以北の諸侯の反発を恐れた。
その為に焦土戦術と補給路寸断しか伝えていなかったのだ。
シルスにとってはミスであるが、数ある諸侯を纏めている中での小さなミスであると言えた。
「いや、それは大変失礼しました。なにぶん一時的にも放棄では賛同が得られないと思いましたので・・・」
シルスはそう言って3人に自身の不明を詫びた。
この様子に他の諸侯も、提案を呑まねば「自分は裏切り者」と言うような状況に陥ってしまうと悟っていた。
幾ら懐が惜しくても、バーバラ山岳以北の諸侯さえ従うのに自分たちが従わないのであれば疑われても仕方なくなる。
疑われれば最後は粛清だろう。
そうなれば命を失うのは確実だった。
財と命を天秤にかけて財を取るものなど居ない。
最終的には命を優先する。
それが人間というものだ。
その心理を突いたシルスの手腕は見事な物である。
だが、同様に日本に通じているはずの3人がシルスへの協力を申し

出た事が追い風となっていたのも事実である。
シルスは次々に協力を申し出る諸侯に感謝の言葉を告げるのに忙しく、何故ここに来て非協力的だった3人が協力する気になったのか？と言う疑念について考える余裕をなくしていた。

ーホードラー南部ホーウッド領

3人は会合の後、一旦領地に戻って戦力を集めてくる、と言い残しディサントを去っていた。
その道中、やや遠回りになるのを承知でホーウッド領へと足を運んでいた。
今、3人はホーウッドの館で杯(さかずき)を交わしている。
「上手く行きましたな」
サド・ウィン・ホーウッド伯爵はそう言ってワインのビンを傾ける。
日本の「おたる」と書かれたワインだ。
サドはこのフルーティで軽やかな味わいが気に入っていた。
それ故に密かに買い集めていたのだ。
ある意味コレクションと言ってもいいそれを祝杯の為にあけたのだ。
どれだけうれしかったのかが良く分かるというものだ。
「これで諸侯はディサント侯に従い戦力を集める事になりますな」
ジョナサンはそう言ってサドに注がれた杯(さかずき)、ワイングラスを手に取る。
ここまで薄く透明度の高いガラスはそう簡単には作れない。
大陸にあるグラスと呼ばれるものはどうしても中に不純物が混じり濁ってしまうのだ。
このワイングラスもまた日本産のものだ。

どれだけの分野で此方を圧倒しているのだ？と思わずにはいられない。
「しかし、その分日本に負担をかけますね」
アルトはグラス片手にそう言って心配そうにする。
結果として言えば戦力をシルスの元に集めさせてしまったのだ。
これでは日本にとって逆に苦労させてしまうのではないか？という疑問がある。
だが、ジョナサンは逆であると考えていた。
これによって逆にシルスが苦しくなると判断していたのだ。
「これに関しては大丈夫でしょう。私が保証しますよ」
そう言うとジョナサンはグラスの中身を喉に通す。
焼ける様な酒も良いが、この豊かな味わいの酒もいい。
そう感じる味だった。
「如何にシルスが数を揃えれても動かせる人員が居なければ烏合の衆に過ぎませんからね」
ジョナサンの言葉にサドが頷く。
確かに数の上ではシルスは戦力を手に入れた。
しかし、それの運用ともなればそう簡単ではない。
しかも補給の面からも膨大な物資を必要とする上に輸送そのものだって困難だ。
よしんばソレを成し遂げたとしよう。
だが、そこにはある問題が発生する。
普通に考えれば南部貴族連合を一枚岩にし、戦力を強固に下かもしれない。
しかし逆に見れば一箇所に集められた戦力を一度に叩ける事になる。
そう、彼等が会えてシルスを助けたように見せた全面協力は「分散する戦力を一箇所に纏めさせる」為だったのだ。
更に各地の諸侯の力を削ぐことも出来る。
難点はやはり数が揃うことで完全に叩くのは大変になると共に、諸侯の領地に住む者たちを苦しめることになる。

だが、その恨みの矛先は日本ではなく諸侯に向かう事になるだろう。
恐らく有無を言わさずに無理やり引っ張ってくるのは確実だ。
それをやってしまえば、民の命が失われることになっても無理やり引っ張っていった事実が先に立ち、その恨みと憎しみはそれを行った諸侯に向くことは確実である。
勿論、日本側にも向かいかねないのだが、そこは日本側のそれに対するやり方で容易にかわせる。
例えばできる限り助ける、もしくは死傷した兵の家族に厚く遇するとかだ。
どちらにせよ、ホードラーやアルトリアで日本がやってきた来た事を考えれば難なくやってしまうだろう。
なにより、この謀略は北野発案のものなのだ。
その為の手はずは整っているはずである。
「しかし、われらは領地を失いますな」
サドはそう思っていた。
それにはアルトも同意した。
何故ならばジョナサンと違い二人は日本と確約を結んでいない。
確約が無ければ幾ら協力しても領地の安堵は無いだろうと思われたのだ。
しかし二人に後悔は無い。
領地を失っても命と財は認められる。
それは確かだろう。
ならばそれを元手に何かやればいいのだ。
「それには私も付き合いますよ」
ジョナサンにはそう声をかけるしかない。
だが、そう言いつつもジョナサンには勝算があった。
話に聞く限り日本の執政官たる北野という男は冷酷無比な人物と聞いている。
だが、それは忘却名人物などに対してであって、良識あるものに向けられるものではない。

ジョナサンはうわさで伝え聞く限りであったが、それでも北野の性分を正確に理解していた。

「まあ、とりあえず今は我等の成功を祝って・・・」

サドはそう言ってグラスを掲げる。

二人もそれに習い、そして一斉に言った。

「乾杯！」

第７１話「決起」

ーホードラー南部ファーレン領

先日のディサントでの会合より３日。
ジョナサンはホーウッド伯爵領を経由して自らの領地に帰還を果たした。
帰ってきて早々にジョナサンは館にて領内で戦えるものを集める為に動き出した。
これは一見するとバーバラ山岳に向けての援軍に見える。
だが、ジョナサンにはそんな積りは全く無い。
集めている兵は全てバーバラ山岳に最も近いケッセルリンク領に向けるだけのものだ。
今頃はサドも自身の兵を集めている頃だろう。
何の為か？
決まっている。
南部貴族連合が立て篭もるバーバラ山岳に対抗する為だ。
そう、元からその積りでシルスとの会合でああ言ったのだ。
それでも彼等が集めうる戦力は総勢で約３０００といったところだろう。
サドで１０００、アルトが１５００、そしてジョナサンが５００だ。
ジョナサンが５００しか動員できないのには理由がある。
バーバラ山岳以北に置いてはシルスの軍が分散配置されている上、日本に協力的ではない諸侯も居る。
そう言った者達から自領を守る為にはそれ以上は割けないのだ。
領地がそれなりに大きいサドでも１０００なのだからこれでも無理してるといえた。
そしてアルトに至っては自身の領地そのものなのだ。

一番動員が多くても可笑しくは無い。

だが、これはある意味で大きな賭けになる。
３０００と言えばかなりの戦力に聞こえるが、バーバラ山岳には山岳以南の諸侯の軍勢が集まってくることになる。
その総数は想像できない規模になるだろう。
そんな南部貴族連合軍が集まるバーバラ山岳の目と鼻の先にアルトのケッセルリンク領があるのだから相当な圧力であろう。
便りにすべき日本は彼等の領地に近付きつつあるものの、未だに到達していはいない。
このままでは後数日は見込まねばならないだろう。
もし、ケッセルリンク領を日本が来るまでに守りきれねば間違いなくホーウッド領、ファーレン領は各個撃破されることになる。
案外ケッセルリンク領を失っても日本が来るまでの時間稼ぎにはなるが、守りきれなかった時点で隣接する２つの領土になだれ込まれるのは必至だ。
それを防ぐ為に意地でもケッセルリンク領は守らねばならない要衝になっていた。
「日本に組すると決めた物の、些か分の悪いかけになるな」
老いて尚盛んと言われたジョナサンの目に強い光が宿る。
昔は無茶をしてきただけあってジョナサンは諸侯の１人であると同時に武人でもあったのだ。
若い頃の血が滾る重いがジョナサンに力を与えていた。

ーホードラー南部ケッセルリンク領

ホーウッド、ファーレン領から約束されていた兵力と物資が集まっ

たことにアルトは喜んでいた。
状況は決して楽観できるものではない。
だが、この状況に置いても約束を果たした両者は真に信じえると感じたからだ。
しかもジョナサン、サドの両者は自ら兵力を率いてきたのだ。
これ程うれしいことは無い。
「卿ら自ら来られるとは・・・」
アルトは感激の余りジョナサンとサドの元に駆け寄りその手を取っていた。
本来であればここの領主であるアルトが総指揮を取るはずだった。
だが、アルト自身は実戦経験は無い。
それが彼自身不安であった。
アルトは言ってしまえば凡人と評される程度の才能しかない。
だが、故に優秀な人物を集め、冒険は一切せずに実直に領地を上手く反映させていた。
言わば内政向き、後方支援向きなのだ。
だが、ここに来て実戦からは長く離れていたとは言えかつては武名を欲しい儘にしていたジョナサン。
そして現役で一軍を率いているサド。
この両者が来た事でアルトにかかる負担は大きく削られる事になたった。
「なに、ここで抜かれれば次は我等なだけのこと」
そう言ったジョナサンは黒い甲冑に身を包んでいた。
この鎧を着たのも今はずっと昔のことだ。
手入れだけは欠かさなかったものの、かつて我が子を死に追いやった内紛以来始めて身に着けた物だ。
（リント・・・今度は私がお前の変わりに民を守るぞ）
その決意を持って再び実につけた甲冑は老いたジョナサンに活力を

与えていた。
「そう、それに耐え切れば我等の勝ちですからな。相手も多くの戦力を割くわけにも行かないでしょうから勝機はあります」
サドもそう言ってアルトに笑顔を向けた。
こう言っているサドは元々は爵位を持っていたものの領地を持たぬ法衣貴族だった。
法衣貴族とは爵位を受け継いでも領地を待たない貴族で、王宮からの下寵金で生計を立てている。
そんな状況を変えるべくサドは貴族として、軍人として一軍を率いて賊の討伐を重ねていた。
しかし、ホードラー東部で起きた反乱に対して功績をあげ、その爵位にふさわしい規模の領地として今のホーウッド領を王から与えられていた。
そんなサドであるが故に領地経営と言う物の経験がなくかなり苦労していたのだが、地味にそれを助けたのがアルトであった。
だからこそアルトの求めに応じて日本に付くことにしたのだ。
いわば恩人であり友人関係なのだ。
根っからの貴族でありながらある意味腐らずに居られたのはそのお陰もあるだろう。
だから今回の救援に駆けつけてきたのだ。
「敵にはケッセルリンク領で休養した後に向かう、と告げてある。幾らか時間は稼げよう」
ジョナサンはそう言ってケッセルリンク領の防衛体制を見回してみる。
流石に対日本を理由に防衛力の強化を図っていただけに石造りでは無いものの、それなりの規模の城壁を作り上げている。
しかも食料や武具などの物資もかなり蓄えてあるようだった。
「取りあえず全軍を休ませた上でどう守るかを協議しよう」
サドはそう言ってアルトと共に館に向かう。
その後を付いて行きながらジョナサンは2人には内密にある決意を

持っていた。

万が一のときは2人を逃して自分が殿(しんがり)を持つ。

殿とは後退、撤退する軍の最後尾に立ち、敵の追撃を食い止める、もしくはっ時間を稼ぐ役割のことだ。

当然、戦に敗れ敗走していく中で行われるものなので味方の援護は望めない。

それ故に戦死する可能性が極めて高いのだ。

殿(しんがり)を受け持って生きて帰ってきたものは数少ない。

なにより味方の撤退を成功させた上で生還できたものは歴史に名を残した者だけだ。

だが、ジョナサンは歴史に名を残す気は更々ない。

死に場所をここに定めていた。

「どうかされましたか？」

不意にアルトの声が耳に入った。

考えに没頭する余りにやや遅れていたのだ。

ここでそんな悲壮な決意を悟られるわけには行かない。

老練なジョナサンはそんな内心を悟られるような真似をせず、落ち着いて答えた。

「ははは、ちょっと相手の出方を考えてましてな」

そう言って笑顔でジョナサンは二人に追いつこうと足を速めた。

ーホードラー南部ディサント領

抜かった。

その一言に尽きた。

シルスはケッセルリンク領に集まって数日経つのに動こうとしない3者を地図上で睨みつけていた。
おかしいと思うべきだった。
今まで非協力的だったものが会合の時にやけに協力的だった事に疑いを持つべきだったのだ。
だが、ホーウッド、ファーレン、ケッセルリンクの3人が協力的になった（形だけだった）時に他の諸侯の対応に追われ抜け落ちてしまっていたのだ。
その後も続々と集まる諸侯軍の統括や物資の手配で忙しく、疑う余地が無かったのだった。
上手くあの場を利用された、と考えるべきだろう。
シルスは今になって決戦を強要された事に気付いていたが、最早如何ともし難い状況になっていた。
元は諸侯の力を削ぎ、後の統治をやり易くする一手だったものが、今では本当に日本に対する防衛戦になってしまったのだ。
諸侯軍をバーバラ山岳の防衛に当て、元からいたシルスの兵の大半をハウゼン領に向けるはずが今では全く動かせない。
何故ならば先日送り込んだ催促の返事で他の諸侯の目にもこの三人の裏切りは確実になっているのだ。
目の前に裏切り者がいるにも関わらずここで自分の戦力を引き上げ、下げれば要らぬ疑念を諸侯に与えてしまう。
よくもやってくれた。
怒りの篭った目で三人から送られた返事の書状を見る。

「時勢の読めぬ阿呆め。己が身がそんなに可愛いか？」

それだけが書かれている。
しかもこの返事の書状はバーバラ山岳に集まる諸侯に開示されているのだ。
今更ごまかすことは出来ない。

諸侯からは「裏切り者討つべし！」の声が上がっている。
何時日本が姿を現すか分からぬ今、ケッセルリンク領に集まる3者を討つために全軍は動かせない。
出せて１００００程。
だが、この様な書状を出すのだから当然それだけの防備を構築しているはずだ。
相手の3倍以上の兵力があれば最終的な攻略は可能であっても時間がかかる。
短期に討つには大軍を動かさねばならない。
今はまだ諸侯が集まっている途中なので最終的な兵力は不明なものの、現在はまだ漸く３００００を越えたばかりである。
短期でけりをつけるなら２００００は欲しいところだ。
「忌々しい・・・」
シルスはそう呟くが今更どうにもならない。
いっそ後に集まる未確定兵力を当てにして２００００以上の兵力を送り込もうか？
とも思うが頭を横に振って早計は行かぬ！と時勢を利かせる。
この挑発的な書状を考えれば日本がかなり近付いているのだろう。
もしかすれば既に到着している可能性もある。
「情報が・・・欲しい・・・」
切実な呟きだった。
如何に優れた戦略家のシルスであっても情報が限られている現状では判断できる材料が無い。
ここで決断するのにリスクがありすぎるのだ。
だが、何としても情報を得なければ目の前の裏切者にも手を出せない。
このまま放置すれば盟主としての自分の地位が危うくなるのは明白だ。
今後を考えれば宇賀かぬわけにも行かない。

追い詰められつつあるシルスはそれゆえに決断を下した。
情報を得る為にだ。
情報を少しでも得られれば打つ手は大きく増える。
打つ手が増えればどうにかできる。
「パッカード」
シルスの言葉に1人の将が目の前に現れる。
緑色の甲冑を身にまとったパッカードと呼ばれた男はシルスにひざを付く。
「飛竜兵の全軍を使っても構わん。裏切者の様子と日本の所在を突き止めろ。手段は問わん」
シルスの命令にパッカードは御意、とだけ告げて退室していった。
最早、情報を得るにはパッカード率いるワイバーンしかいない。
こうしてパッカード率いる飛竜兵ことワイバーン隊は戦力の大半である４０騎を持って北上する事になった。

第７２話「南部の空」

ーホードラー南部上空

その日に限って航空自衛隊所属のＥ－２Ｃホークアイは空に無かった。
飛行中に故障が発生した為に基地に引き返していたからだ。
代わりの予備機も離陸準備に手間取っており、日本の空の警戒網に一時的な空白が生まれていた。
その隙間を期せずして突く事になったパッカード率いる４０騎のワイバーンは出来る限り北進して日本の状況を把握しようとする。
途中にあった３者連合とも言うべき裏切者の集結地点に日本の影は無く、未だその位置はつかめていない。
日本の本隊の位置を掴むことが出来ればシルスは裏切者を始末するか、それともバーバラ山岳に篭るかの選択が出来る。
また、接触までの時間的猶予を図ることで南部貴族連合で対日戦の準備を更に進められるだろう。
その為になけなしの、切り札とも言うべき飛竜隊を使ったのだ。
唯でさえ大食なワイバーンを養う為に維持費だけでも下手な騎兵１０騎分に相当する上、気性が荒い飛竜を育て、訓練し、使う人も育てるとなるととんでもない出費になってしまう。
それでもワイバーンは空を飛ぶだけあって強力な戦力足りえる。
ワイバーンはドラゴンの様に炎のブレスは吐けない。
強固な鱗があるわけでも強靭な牙や爪もない。
だが、鉄を切り裂くだけの力は持っている。
故にワイバーンは並みの騎兵数十騎に相当する戦力になる。
そして空を飛ぶことで騎兵を圧倒する機動力があり、その運用は極めて多岐に渡って行われる。

槍や剣、弓を使って地上の敵を叩いたり、今回の様な偵察、更には相手のワイバーンに対抗する為など、空を飛べると言うことが如何に戦術に幅を持たせるか？の生きた証明とも言えた。
だからこそシルスは来るべき時に備えて私掠船で財を集めつつ、飛竜隊を組織していたのだ。

その総数４６騎。

各地の伝令に使っていたりするので全飛竜の動員はできないが、４０騎を上げてきた事はほぼ全力出撃といっていいだろう。
それだけ追い詰められていたのだ。
だが、正直出したくないと言うのもシルスの本音だった。
日本にも空を飛ぶ物があることは知っていた。
しかし、詳細は未確認ながら偵察に出た飛竜隊の１人がとてつもない速度で飛ぶ謎の存在と遭遇しているからだ。
それは２騎だけの確認とは言え飛竜を圧倒する速度で飛び、しかも飛竜以上に軽快に動いていたと言う。
日本を示すと思われる赤丸をその身に記してあった事から日本の空中戦力の一つだとは思えるが、その実力は未知数だ。
だからシルスは無用な危険に晒したくない事から出したくなかったのだ。
だが、ここに至っては情報を得ない事には動きようがない。
ある意味で苦渋の決断だと言える。

「全騎へ、いつ日本と出会っても良い様にしろよ」
パッカードが魔法を使って全員に警戒を呼びかける。
魔法は対象となるものが視界内に居れば有効距離を越えない限りは効果を出すことが出来る。
今回パッカードが使った「連絡」の魔法は効果範囲内の任意の者に

伝えたい事を伝える魔法だ。
ある種の無線のようだが、伝えたい相手を視界内に収めなければならないので戦闘中は使えない。
だが、視界内に居れば伝えたい者全員に伝えられるのでこう言うときは便利な魔法である。
実はワイバーンに乗るものは基本的に魔獣使いと言う魔術師の一種であるとされている。
その理由として人の言葉が通じない生き物に自らの意思を伝える事ができるからだ。
また、本来人間よりも圧倒的な力を持つ魔獣を使役するには魔法の力が無ければ出来ない。
その事から飛竜隊の全員がそれなりに魔法を使うことが出来るのだった。
「しかし隊長、日本の飛竜と一戦交えたいものですな」
部下の1人から連絡の魔法による言葉がパッカードに届く。
その言葉にパッカードのみならず、全員が同意するように笑う。
彼等は魔術師であり魔獣使い、そして騎士でもあるのだ。
強者と戦う、と言う意思は少なからずある。
そして自分達飛竜隊が地べたを這い回る者に負けるわけがない、と言う思いもあった。
それだけ空を飛べると言うのは有利に働くのだ。
「だが、先日出遭ったと言う速い奴には注意しろ」
こんな状況でも油断だけはしない様に注意だけは促す。
ワイバーンでも出せそうにない圧倒的な速度で飛んできたと言われる日本の空中戦力。
その速度だけでもワイバーンに取っては厳しい戦いになる。
ワイバーンを使っての空中戦は騎兵のような槍での騎上槍（ランス）による突撃（チャージ）、そして弓や魔法による撃ち合いがある。
ただしどれも決定打にはなり難く、あくまでも騎乗者を狙っての戦いになってしまう。

しかし、敢えてワイバーン自体を打ち倒す決定的一撃がある。
ワイバーンの胴体左右に配置された「飛竜槍」である。
これは一種の機械弓（クィンクレイン）である。
細身とは言え、槍を機械弓の要領で打ち出すことが出来る。
射程は約３００ｍと決して短くない。
ただし、大型機械弓（アーバレスト）や攻城機械弓（バリスタ）と違い威力と言う意味では十字弓（クロスボウ）より上である程度だ。
だが、１００ｍ内で放てばワイバーンであれば串刺しに出来るだけの威力はある。
その飛竜槍を持ってすれば撃破自体は可能であるが、速さの差で当たるかどうか？が極めて怪しいのだ。
高速で動く物体に物を狙って当てるのには相当な技量を要求される。
それが自分達より遥かに速ければ尚更なのだ。
「出会ってしまったならば並べく低空を飛べ」
そうすれば速さが仇になって近付けないはずだとパッカードは連絡する。
下手に仕掛ければ地上に墜落してしまうからだ。
そこで速度を落として仕掛けてくるなら、飛竜槍を使う機会が得られる。
そう考えていたのだ。

Ｅ－２Ｃが空にない以上は空の警戒はＲＦ－４Ｅ任せである。
とは言え、ＲＦ－４Ｅはあくまでも偵察機であって警戒機ではない。
レーダー性能は殆ど普通のＦ－４ＥＪと大差ないものだ。
これがせめてＲＦ－４ＥＪであればレーダーが改修されて警戒能力も上がっているのだが、やはり基本的に空中警戒機とは比べ物にもならない。
また、Ｅ－２Ｃが上がっていないのであればその分通常戦力を警戒

の為に上げるべきであるのだが、空中戦力らしい戦力がこの世界にまずないこと、そしてあっても数は殆どないとされていた為に警戒していなかった。
そして何よりも幾ら余裕が出来たとは言え「燃料の消費」を抑える為にＲＦ－４Ｅを上げておけばそれで済む、と思われていたのである。
しかし、傲慢な認識だった。
甘く見ていた、油断していたと言うレベルの話ではない。
陸自側の安藤は以前遭遇した空飛ぶ化物の存在から常に警戒は怠るべきではない、と主張していたのだが、航空自衛隊の指揮官はまとまった戦力が確認されてない以上警戒するだけ燃料の無駄として反対していたのだ。
これは後に問題となったのだが、この時ばかりはそんなことを言ってられなかった。

ＲＦ－４Ｅは偵察機だったこともあり地上の偵察が主な任務であった。
その為地上の動向に注意を払っていたのだが、パイロットが何か複数の物体が見えた気がした。
ふと気になって視線を向ければ・・・空飛ぶ化物が群れを成して向かってきているではないか。
思わず推力を上げアフターバーナーを点火する。
急に機体が挙動を変え速度を上げたので後席から何があったのかを聞いてくるがパイロットはそれ所ではない。
距離にして５００ｍを切っているほど至近距離なのだ。
これが普通の空戦であればとっくに撃墜されていてもおかしくない距離まで接近を許していた事実に慌てていたのだ。
空飛ぶ化物が追い縋ってくるが、寸での所で何とか距離を取れたのは幸運だった。

「敵空中戦力多数確認」
この報告に空自の指揮官は手にしていたカップが手から落ちるほどに慌てた。
空中戦力らしい戦力などない。
そう思っていたからだ。
相手が幾ら魔法やら何やらを持っていても中世レベルの世界なのだ。
現代兵器で武装した自分達が遅れを取る事などない。
そう言った傲慢な意識があったのは否めないだろう。
なにより、空自自体は初の実戦と言うこともあり認識が甘くなっていた。
それが対処を遅らせてしまう。
そのツケは現場で対地支援のために待機していた隊員に廻されることになってしまった。
「冗談じゃない・・・」
エポック1こと佐々木梅原コンビは思わず呻いた。
現在彼等エポック1、2のF－4EJ改2機編成(エレメント)と偵察目的のRF－4Eが1機、そしてRF－4EJが1機あるだけだった。
総数こそ4機編成(フライト)だが、純粋な偵察機であるRF－4Eに戦闘力は無い。
RF－4EJはF－4EJを元に改修した偵察機なので武装はあるが、現在機関砲を幾らか積んでいるだけだ。
つまり、エポック1、2のF－4EJ改2機編成(エレメント)以外に戦える戦力は無い。
たった2機で多数の空中戦力を相手に戦うのは難しいだろう。
如何に強力な航空機であっても、対地支援を前提とした飛行であれば赤外線探知式の誘導弾(ミサイル)なんか積んでいない。
あっても使える保障はないとは言え、20mm航空機関砲だけで戦えと言うのは司令部が状況を把握できていないのではないか？
と思わずにはいられなかった。

「どうする？」
梅原の言葉に佐々木が悩む。
幾ら剣や槍が主体の相手でも、それが機体にぶつかった時のダメージは分からない。
航空機と言うものは、意外に落ちない様で実は簡単に落ちるのだ。
もし、エンジンにでもそんな異物が入り込めば当然損傷する。
バードストライクと呼ばれる吸気口（エアインテーク）に鳥が飛び込んで墜落した事例は過去に幾らでもあるからだ。
「やらないわけにはいかないだろうな」
相手の目的が此方を叩くことなのか、それとも偵察なのか、それが問題だった。
空自の管制からは迎撃としか言ってきていないが、相手が空戦を挑んで来ただけならまだいい。
戦って、不利なら後を後続に任せて退避するだけだからだ。
だが、偵察であれば話は違う。
相手はこっちの情報が欲しいから繰り出してきたのだ。
わざわざ情報をくれてやってしまうのは此方を不利に、相手を有利にしてしまう。
だから相手の偵察は何があろうと阻止するのが常識である。
だからこそ佐々木はやりあう他は無いと考えていた。
「相手がどう言う目的で来たにせよ、最悪を考えないとな」
そう言って僚機に自分達に続くように指示を出すと機首を敵空中戦力が居た方向に向ける。
此方の武装は２０ｍｍ航空機関砲たるＭ６１、Ｊ／ＬＡＵ－３（７０ｍｍロケット弾ポッド）だけだ。
無誘導５００ｋｇ爆弾は積んできていない。
「ロケット弾でも当てるかい？」
梅原の自嘲とも言うべき言葉が耳に入るが、佐々木は最悪それもありだな、と思っていた。
「とにかく連中の動きを食い止める必要がある。全速で向かうぞ」

そう言って佐々木は推力を上げて音速近くまで速度を上げる。
地上が近いこともあり、衝撃波（ソニックブーム）を発生させる音速では飛行できないのだ。
これが超音速ならマッハ2、つまり音速の2倍であるので地上近くでの飛行も可能だ。
だが、地上に被害を与えかねないのでやはりそんな速度では飛行できない、と言うか禁止されている。
緊急時でも規則に縛られて出来ないこと尽くしの自衛隊に果たして戦い抜く力があるのか？
この時ばかりは佐々木は不安を覚えてしまっていた。

第７３話「空対空～前編」

ーホードラー南部上空

佐々木の操縦するＦ－４ＥＪ改はＲＦ－４Ｅが空飛ぶ化物と遭遇したと言う空域を目指していた。
そして当然僚機であるエポック２も佐々木に追従して来ている。
初の空中戦に不安があるものの、佐々木の心中にはようやく自分の腕を振るえる事に対する歓喜もまたあった。
航空自衛隊には実戦の機会は今まで無かった。
陸上は今までに何度も経験し、海上も先日経験したばかりであるが、やはり実戦そのものに参加したと言うのはある意味で強みになる。
だが、航空自衛隊は南部戦初期の空中支援にさえ参加できていない。
いつでも地上に対する支援体制を整えていたにも拘らず、実際に行われる支援は陸上自衛隊の航空隊、つまりはヘリ部隊で行われていたからだ。
その意味ではこれが本当に初の実戦なのだ。
そのときだった。
『キューダス１よりエポックへ、まもなく合流する』
偵察機であるＲＦ－４ＥＪからの無線が入ってきた。
偵察機であるものの、ＲＦ－４ＥＪは支援戦闘機であるＦ－４ＥＪから改修された機体なだけあって機関砲を装備していた。
そのため今回の迎撃に参加することになったのだ。
「エポック１よりキューダスへ、やれるか？」
元が支援戦闘機とは言え偵察機であるのだ。
佐々木はパイロットがやれるかどうかに不安を持っていた。
『訓練は欠かしていない。やれると判断する』
キューダスからの返答に無理はしないように、と告げるとそのまま

正面を見る。
それからまもなくだった。

「レーダーが機影を捉えた！」
後席に座る梅原が声を上げる。
その声に反応して佐々木もレーダーを確認すると、幾つもの機影がレーダーに点となって映っているのが見えた。
「エポック１より２、キューダスへ、高度を上げて上から仕掛けるぞ」
佐々木はそう言うと操縦桿を引きＦ－４ＥＪ改の機首を上げる。
エポック１を先頭にしたままエポック２は右後方、キューダスは左後方に付き、エポック１に追従して機首を上げる。
高度計が直ぐに反応して高度が上がっていくのが表示される。
高度が６００ｍだった表示はあっという間に３０００ｍへと達する。
相手の空中戦力がどこまで上がれるのかは分からないが、上昇速度は生物である以上は絶対にジェット機には勝てないだろう。
その速度差を利用して上から一撃離脱に徹する。
それが佐々木の選択だった。
実際、現代の戦闘機での戦いも格闘戦（ドックファイト）はまずしない。
遠方よりミサイルを放つか速度を生かしての一撃離脱が基本だからだ。
もっとも、現代においてはまともな戦闘機同士の空中戦など発生してはいないが・・・。
とは言え、相手は生物で速度は出ない。
だが、代わりに小回りはかなり利くはずだ。
ならば格闘戦などよりも速度を使っての一撃離脱が一番現実的な判断になるのは当然の帰結だった。
「高度４０００」
梅原から現在の高度が告げられる。

これ以上上がる必要は現状無い、と判断すると操縦桿を戻して機首を水平に戻す。
Ｆ－４ＥＪ改は佐々木の操縦に素直に応えて機体を水平にする。
「目標との距離は？」
後方の２機が佐々木に付いて来ていることを確認しながら佐々木は梅原に聞いてみる。
「間もなく視認距離」
梅原の応えにそろそろ仕掛けるか？と佐々木は思う。
余りに急角度で仕掛けると相手の高度が低いこともあって引き起こしをしくじりかねない。
そのまま地面と接触する危険性があるのだ。
「よし、そろそろいくぞ！各機、無理はするな！」
佐々木はそう言って操縦桿を倒し、機体を半ロールさせつつ降下に入っていった。

シルスの命により日本の所在を確認する為に北上を続けるパッカード率いる飛竜隊は地上の様子に集中していた。
日本の軍勢は風景に溶け込む独特な色合いの衣服を身に着けているという。
それだけで発見が難しいのだ。
見落として所在が分かりませんでした、等と言う無様をシルスに報告など出来ない。
だからこそ自然と地上へと意識が向いてしまうのは仕方ないと言えた。
だが、彼等は日本の空中戦力の存在を忘れていたわけではない。
日本もまた空を行く事が出来るのは知っていたからだ。
その為、幾人かに上空への注意を指示していた。
しかし、幾ら注意を向けても、想像を越えた所からの攻撃には注意力が散漫になるのは仕方なかったのかもしれない。

突如として甲高い音が響きだし、何処から聞こえるのかと辺りを見回したときには、頭上より炎を噴出しながら槍の様な物が降り注いできたのだ。
まさか上から来るとは思っていなかったこともあり回避が遅れてしまい、そのツケは自らの身で支払う羽目になった。
何が起きたのか分からないまま、数騎の飛竜が槍の様な物が突き刺さった様に見えた次の瞬間、それは突如として爆発し一瞬にして飛竜と騎手をバラバラにしてしまう。
なまじ下手な装甲を持纏い、尚且つ自身の皮膚が強固である飛竜が故に、Ｆ－４ＥＪ改より放たれたＪ／ＬＡＵ－３（７０ｍｍロケット弾ポッド）は何の問題も無く信管を作動させていた。
不幸にも命中してしまった飛竜に助かる術は無く、一瞬にして爆炎が起きた後に肉片を空中にばら撒いていく。
当然、騎手も無事で済む訳はない。
ロケット弾の爆発に飛竜が耐えられないのに人が耐えれるわけも無く、飛竜と共に肉片と化していた。
命中した者の中で運の良かった者は飛竜の翼を貫かれた程度で済んでいたり、羽を折られた程度で済んでいるものの、当然飛行は不可能になり墜落していく。
この場合、飛竜は余程運が良くない限り助からないが、騎手は風の魔法を使って無事ですむ。
しかし、無事に降りたとしても飛竜を失った以上は戦力にはならなくなる。
替えが聞かない戦力である飛竜隊は、この一瞬で７騎もの飛竜を失う痛手を負ってしまったのだ。
「何処からだ！？」
パッカードはそう言って振り返ると、自分達より高い頭上を飛んでいく２機のＦ－４ＥＪ改が目に入る。
甲高い飛行音を響かせながら悠々と飛んでいるように見えたその姿は、未だかつて見たことの無いものだ。

竜とも鳥とも言い難いその姿はどこか洗練されたものがあると共に、美しく見えた。
とは言え、パッカードに見惚れている余裕は無い。
「高度を下げつつ散開！」
連絡の魔法を使いパッカードは部下に退避を命じる。
想像以上に速い日本の飛行隊を前に、まともに立ち向かうのは難しいと思ったのだ。
飛竜槍を命中させれば落とせるとは思う。
しかし、それこそ風のように速い日本の飛行隊相手に命中させるなどどう考えても無理だ。
相手が油断して真っ直ぐ接近でもしてくれれば可能性は無くも無い。
だが、そんな甘い相手なら彼等の主たるシルスは今まで苦労はしていないだろう。
早々に出血を強く目的を果たして講和なり何なりの道筋を作り上げていたはずだ。
それが未だに果たせず、尚且つ自身が追い詰められつつある現状を考えれば日本が甘い存在ではないと直ぐに分かる。
もっとも、日本とて国内に問題が少なくなく、全力での戦いは実質不可能なので付け入る隙は少なくない。
現状、彼等にそう思わせているのは自衛隊の戦力が決して低くなく、元の世界でも有数の軍事大国でもあったからだ。
それだけこの世界の軍と日本の自衛隊の戦力には差があるのだ。
とは言えそんなことはパッカードには分からない以上、彼は自身の目に映る現実から判断し行動せざる得ない。
「固まるな！」
飛竜隊の一部が慌てていたのもあったのだろう。
散開を命じられていたにも関わらず、高度を下げることに夢中になって纏まっていたのが目に入った。
その為パッカードは再度散開を命じたのだが、僅かに遅かった。
先ほどの飛行隊とは違う、単騎だけの飛行隊がブレスのようなもの

を高度を下げつつあった彼等に向かって吹き付けていた。
光を持った矢より速いそれが降り注ぐと、固まっていた3騎があっという間に引き裂かれてしまった。

（恐るべき威力だ！）

そう思いつつ舌を巻く。
飛竜は空を飛ぶ事の出来る生き物の中でも、硬い皮膚を持つことで知られている。
飛竜の様な竜の亜種とは違う純粋な竜には敵わないとは言え、熟練の戦士であっても危うい程の力を持っている。
しかも飛竜用の鎧までつけているのだ。
めったなことでは傷付けることも難しいはずだ。
その飛竜を一瞬でバラバラに吹き飛ばしたり、引き裂くなど在り得ないとさえ思える。
パッカードは飛竜を容易く討ち取れることから、日本の飛行隊は竜を使っているのではないか?と考えていた。
彼の眼前で飛竜を打ち倒しているソレが、まさか純粋に人の手で生み出された、造られた物である等とは梅雨ほどにも思っていなかった。

「まさか当たるとは・・・」
佐々木はＦ－４ＥＪ改を上昇しつつ旋回し再び攻撃態勢を取ろうとしている途中で思わず呟いていた。
相手に幾ら油断があったと考えても、弾速が遅く、命中精度もお世辞にも良いとは言えない空対地ロケット弾が空飛ぶ化物、飛竜に命中するとは思ってなかったのだ。
牽制になればいい、程度のつもりで放ったロケット弾は、飛竜がそ

れほど速度を持っていなかったこともあり数騎を吹き飛ばしたのだ。
幸先が良いのか悪いのか、そこは判断に悩むところである。
当たったのはいいが乗っている人間が吹き飛ぶ所を見てしまったのだ。
必ずしも良かった、とは言えない。
だが、だからと言って手心は加えない。
そんな余裕は無いのだ。
佐々木たちエポック1、2がロケット弾を使っての先制攻撃の後、敵は散開しつつ高度を下げて言っている。
そこにキューダスの機関砲で更に損害を与えているものの、散らばったまま高度を下げられては取り残しが出てくるだろう。
彼等の目的が何であるかは分からない。
だが、残せば後々の脅威になると考えられる以上は逃がすつもりは無い。
この機に落とせるだけ落としたいと言う本音が彼にはあった。
いや、むしろ初めての空戦であることから戦果を出来る限り挙げたい、そう言う欲が心の内にあった。
「ここは無理する所じゃないよ」
長年、佐々木とコンビを組んできた梅原は、そんな佐々木の内心を見透かしたのだろう。
彼の欲を打ち消すかのように声をかけた。
「・・・そうだな」
この一言に自分が思い上がっていたのを自覚することが出来た佐々木は、旋回を完了させる。
自身に芽生えた慢心を戒める為に佐々木は油断無く飛竜の動きを見る。
そうすると戦果を求める余りに焦っていた時よりも、彼等飛竜隊の動きが掴め手来る。
飛竜隊は散らばって高度を下げてはいるが、着陸する様子を見せていない。

そのまま散開したまま、尚も北上しているのだ。
高度が低いので、余り突っ込んだ角度や速度での攻撃は出来ないが、まだまだ攻撃の機会はあるように思える。
「よし、エポック2、キューダスへ。速度、高度、距離に注意機関砲で攻撃を続行せよ」
佐々木は時間がかかっても良いから安全策を取った。
元々彼等の任務は殲滅ではない。
あくまでも相手の行動の阻止なのだ。
それを思うなら無理な攻撃は不要と理解した故の支持だった。
だが、そんな佐々木の目の前で信じられないことが起きた。

キューダスが佐々木の指示を無視したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7992l/

新しき世界で～日本の針路

2011年11月10日08時16分発行